

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	張 志凌
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 179 号
学位授与の日付	2014 年 2 月 12 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	複合動詞「～こむ」の意味体系 ——中国語との対照的視点から

Name	Zhang Zhiling
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 179
Date	February 12, 2014
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A Study on Compound Verb s “~komu” —from the viewpoint of a contrastive study with Chinese

複合動詞「～こむ」の意味体系
——中国語との対照的視点から

張 志凌

目 次

序 章.....	1
1.1 研究目的.....	1
1.1.1 「～こむ」における内部移動の意味概念について	1
1.1.2 「～こむ」における副詞的意味について	2
1.2 研究方法.....	3
1.3 論文の構成	4
第一部 「～こむ」の意味研究.....	6
第一章 「～こむ」に関する先行研究及びデータによる検証	6
1.1. 複合動詞「～こむ」に関する先行研究及び本稿の立場	6
1.1.1 日本語教育の立場から	6
1.1.2 認知言語学の観点から	9
1.1.3 語構成の立場から	13
1.1.3.1 「～こむ」に関する影山(1993)の考察	14
1.1.3.2 「～こむ」に関する松本(2009)の考察	15
1.1.4 諸研究の共通点と相違点	16
1.1.5. 本稿の立場	18
1.2. データによる検証.....	23
第二章 「～こむ」における内部移動の意味概念について	28
2.0 問題提起.....	28
2.1 内部移動表現と「存在」との繋がり	29
2.1.1 「入る」の意味考察	29
2.1.1.1 主語名詞句と二格名詞句の対照による考察方法	29
2.1.1.2 「入る」と結びつくガ格名詞句と二格名詞句による考察.....	31
2.1.2 内部移動を表す複合動詞「～こむ/入る」との繋がり	34
2.2 「～こむ」における<内部への移動→存在→固着>という意味連続体	35
2.2.1 V1 が移動動詞の場合.....	35
2.2.1.1 「～こむ」と結合する移動動詞のパターン	36
2.2.1.2 V1 における「付着・固定」の意味について	38
2.2.1.3 「～こむ」との複合による「付着・固定」の焦点化.....	41
2.2.2 V1 が非移動動詞の場合	44
2.2.2.1 「～こむ」と結合する非移動動詞のタイプ	44
2.2.2.2 作成動詞	44

2.2.2.3 姿勢動詞	46
2.2.2.4 心理・生理を表す動詞	51
2.2.2.5 思考活動を表す動詞	53
2.3 まとめ	54
2.3.1 「～こむ」における内部移動の意味概念について	54
2.3.2 「一こむ」と結合する前項動詞について	54
2.3.3 後項動詞「一こむ」の意味について	55
第三章 「一こむ」の副詞的意味について	57
-----形容詞・副詞の評価性との接点から	57
3.0. 問題提起	57
3.1. 先行研究及び本稿の立場	57
3.1.1 先行研究	57
3.1.2 本稿の立場	59
3.2 形容詞と副詞の評価的意味	62
3.2.1 「評価」の定義について	62
3.2.1.1 モダリティの研究における「評価」について	63
3.2.1.2 形容詞の研究における「評価」について	63
3.2.1.3 副詞の研究における「評価」について	64
3.2.1.4 「評価」の意味範囲のまとめ	65
3.2.2 形容詞の評価性と「～こむ」の接点	66
3.2.3 副詞の評価的意味と「～こむ」の接点	69
3.3. 複合動詞「～こむ」の意味およびそれと形容詞・副詞の評価性との接点 70	70
3.3.1 「深部移動」	70
3.3.2 「固定感」	75
3.3.2.1 「固定感」の分類と表現形式	75
3.3.2.2 「固定感」の相対性について	79
3.3.3 「多量性」	80
3.3.4 「密集感」	83
3.3.5 「目的性」	85
3.3.6 「異質性」	86
3.3.6.1 「異質性」の意味について	86
3.3.6.2 「異質性」を含意する動詞と敬意表現・命令文との共起度	90
3.3.7 「～こむ」の「資格づけ的评价」と「価値づけ的评价」の抽出	91
3.3.8 姫野(1997)及び松田(2004)との比較	94
3.4 評価の対象による「～こむ」の意味体系の再整理	96
3.4.1 資格づけ的评价の意味について	96

3.4.2 価値づけの評価的意味について	98
3.5. 「～こむ」の評価的意味と前項動詞との繋がり	99
3.5.1 「資格づけの評価」について	100
3.5.2 「価値づけの評価」について	102
3.6. まとめ	103
第二部 「～こむ」に対応する中国語表現について	107
第四章 「～こむ」に対応する中国語表現の全体像	107
4.1 中国語との対照研究の必要性	107
4.2 データ収集	107
4.3 「～こむ」に対応する中国語表現の全体像	109
第五章 「～こむ」と方向補語との対照研究	112
5.1 「～こむ」と<～進>について	112
5.1.1 <～進>と「～こむ」の共通点	112
5.1.2 「～こむ」と<～進>との相違点	113
5.1.2.1 右側主要部の「～こむ」と<～進>	113
5.1.2.2 左側主要部の「～こむ」と<～進>	118
5.1.2.3 内部空間における移動の最終的な位置の指定機能について	119
5.1.3 「～こむ」と<～進>との対照研究のまとめ	120
5.2 「～こむ」と<～上>について	121
5.2.1 移動を表す<～上>と「～こむ」	123
5.2.2 接触・付着を表す<～上>と「～こむ」	124
5.2.2.1 <着こむ>タイプ	125
5.2.2.2 <包みこむ>タイプ	126
5.2.2.3 <抱えこむ>タイプ	127
5.2.3 固着を表す<～上>と「～こむ」	128
5.2.4 「達成」を表わす<～上>と「～こむ」	130
5.2.5 <～上>と「～こむ」のほかの共通点	132
5.2.6 <～上>と「～こむ」の対照研究のまとめ	133
5.3 「～こむ」と<～下>について	134
5.3.1 下方向への移動	134
5.3.2 姿勢動詞	135
5.3.3 作成動詞	136
5.3.4 「獲得」を表す動詞	137
5.3.5 その他	138
5.3.6 <～下>と「～こむ」の対照研究のまとめ	138
5.4 「～こむ」と<V+到>について	139

5.5 「～こむ」と＜V+在+L＞について.....	142
5.5.1 姿勢動詞.....	143
5.5.2 作成動詞.....	146
5.6 ＜V+有/着＞と「～こむ」	147
5.7 まとめ	148
第六章 「～こむ」の副詞的意味と中国語表現との対照研究.....	151
6.1 資格付け的評価について	151
6.1.1 深部移動.....	151
6.1.2 固定感	153
6.1.3 多量性	156
6.1.4 目的性	156
6.1.5 密集感	158
6.2 価値づけ的評価について	159
6.3 「～こむ」と結びつく単純動詞の副詞的意味について	160
6.4 まとめ	162
第七章 結論	165
7.1 「～こむ」における内部移動の意味概念について	165
7.1.1 内部移動から存在・固着までの意味連続体	165
7.1.2 内向移動	166
7.1.3 中国語との対照研究	167
7.2 「～こむ」の副詞的意味について.....	169
7.2.1 評価性による分類.....	169
7.2.2 評価の対象について	171
7.2.3 前項動詞との繋がり	172
7.2.4 中国語での表現形式.....	172
7.3 結び.....	172
参 考 文 献.....	174
【日本語文献】	174
【中国語文献】	176
【英語文献】	177
辞書類	177
使用コーパス	177
付録	178

序 章

1.1 研究目的

日本語には複合動詞が多くあり、その中でも「～こむ」は数が多い上に、意味が複雑である。森田(1990)は雑誌、新聞、文学作品から複合動詞の例文を 2644 例収集し、動詞の複合化に対する造語力を調査した。その結果、「～こむ」が 135 語で、結合する動詞の数が最も多い複合動詞であった。また、その意味は多義的で、日本語学習の難点であるとされている。特に、V1(前項動詞)との共起で様々な意味が生じることにより、理解が難しくなっていると言われている。松田(2004)は日本語母語話者 30 名と日本語学習者 60 名を対象に、90 文を提示し、受容度を判断させているが、その結果、比較的大きな差が見られた。

(1)a. 押入れの奥にしまいこんでおいた古着を出して着る。

b. ぐっすり眠りこんでいるので、このままにしておこう。

c. 父の形見はこのよく使い込まれた万年筆だけだ。

(松田 2004 : 123(34)、129(62)、133(79))

上記の 3 文に対して、母語話者には全員一致で受容されたが、学習者の受容率はそれぞれ 45%、50%、58%であった。このように、母語話者と学習者で「～こむ」についての認知的差異が見られる。このことから、学習者において「～こむ」の習得が困難であることが予想される。

一方、複合動詞「～こむ」についての日中対照研究により、「～こむ」の意味を明確にすることは、中国語母語話者を対象とする日本語教育に役立つが、そのための対照研究はあまりなされていない。中国語との対照的視点から「～こむ」の意味研究について以下に示す 2 つの問題点を明らかにする必要がある。

1.1.1 「～こむ」における内部移動の意味概念について

データの観察により、「～こむ」における内部移動の意味概念の特徴は少なくとも二つある。一つ目は移動の様態・手段を表す動詞だけでなく、付着・状態変化を表す動詞とも結合できることである。日本語の観察によってだけでも、わかることではあるが、中国語との対照によっても違いが確認できる。「～こむ」に対応する中国語の表現は複合動詞の代わりに、方向補語の形を取った例が多い。また、方向補語のなかで、＜～進＞は内部移動を表すので、「～こむ」を表すのにはよく使われる。

(2) 偶然、吸い上げた水を蒸発させ、ちょうど桶の中に流しこむような関係にあったのだろう。(『中日』『砂の女』¹⁾)

¹コーパスを三つ使っているいるので、コーパス名と書名を両方とも表示する。

訳文：偶然吸上来的水没有蒸发掉，正好流进桶里。（《中日》《砂女》）

上記の例における「流しこむ」は中国語では＜流进桶里＞で表現される。一方、下記の例のように、ほかの形式で「～こむ」を表す用例がある。

(3)a. モニターを壁に嵌めこむ

訳文：把监视器装在墙上

b. 木に名前を刻みこむ

訳文：在树上刻上名字

c. 余白に電話番号を書きこむ

訳文：在空白处写下电话号码

上記の例における「はめこむ」は固着を表し、「刻みこむ/書き込む」は結果物の作成と付着を表すが、中国語においては、＜～进＞ではなく、＜V在L上＞と方向補語＜～上/下＞を用いて表現する。このように「～こむ」は内部移動から固着まで表現されるが、中国語では、内部移動を表す＜～进＞と付着を表す＜～在＞などの複数の表現からなる。このことから、少なくとも二つの問題点が指摘できる。一つ目は「～こむ」は移動から固着まで表現できるのは、「～こむ」自身の特徴なのか、それとも、ほかの内部移動表現も同じ性質を有するののかという点である。これについて第二章で考察を行う。二つ目は中国語の＜～进/上/下/在＞は具体的に「～こむ」にどのように対応しているかということである。第四章では「～こむ」に対応する中国語表現の全体像を描き出し、第五章では方向補語と「～こむ」との対照研究を行う。

1.1.2 「～こむ」における副詞的意味について

後項動詞「～こむ」は「飛ぶ」、「打つ」のような移動の様態・手段を表す動詞と結合する場合、内部移動をあらわすが、「入る」、「考える」などと結合する場合、副詞的意味を表す。この副詞的意味について、姫野(1999)はニュアンスとして扱い、「～こむ」は「全体がすっかり奥深く入るという感じ」、「いったん入ったら動かないという固定感」、「予期せぬものが入るという抵抗感」、「人の行動を表す場合、意志性や目的意識が強いという感じ」があると述べている。一方、松田(2004)はV1が内部移動を含意する「～こむ」は固定感が焦点化されるとしている。両氏の議論の相違点は、姫野(1999)は四つのニュアンスを平行的なものとしているが、松田(2004)は「固定感」を中心的な意味とし、「深入り感」などを周辺的な意味としている点である。しかし、姫野(1999)と同じように、松田(2004)は、この「固定感」などがどのように生じるのかについて議論していない。先行研究においては、「～こむ」の意味の記述は一致していない点があり、「～こむ」を多義性の体系的に示すこともできていない。このため、「～こむ」の多義性については、再整理とさらなる考察が必

要になる。第三章では「～こむ」に含意される副詞的意味を「評価」の枠組みで整理して、前項動詞との繋がりを考察する。

一方、下記の例に示されるように、「～こむ」の副詞的意味は中国語では複合動詞レベルではなく、補語の形で表現される。

- (4) 曾根と三門けい子の二人は、周囲のことなどには全く無関心な風に、席にすわって話し込んでいた。(『中日』『あした来る人』)

訳文：曾根和三门敬子两人仍在座位上说得津津有味，全然不把周围的变化放在眼里。
(《中日》《情系明天》)

辞典によれば、「話し込む」とは「時間のたつのを忘れて話に夢中になる」(『日本国語大辞典』)、「腰を落ちつけて、じっくりと話をする」(『大辞泉』)という意味であるが、中国語表現は<说得津津有味>になる。<津津有味>とは「興味尽きないさま」という意味で、補語になっている。さらに、「～こむ」は中国語で表現しにくい場合もあり、下記の例のようにV2(後項動詞)の意味を表すことができず、V1に対応する中国語表現と区別しにくいことがある。

- (5) だんだん腐って溶けて最後には緑色のとろっとした液体だけになってね、地底に吸い込まれていくのそしてあとには服だけが残るの。そんな気がするわね、一日じっと待つてると。(中日『ノルウェイの森』)

訳文：渐渐腐烂、融化，最后变成一洼粘糊糊的绿色液体，再被吸进地底下去，剩下来的只是衣服——就是这种感觉，在干等一天的时间里。(中日《挪威的森林》)

上記の例のように、「吸いこむ」と「吸う」との中国語表現は同様であるため、訳語から両者を区別するのはできない。「吸いこむ」の方は固定感があり、(5)においては、外へ出さないイメージがある。したがって、「吸う」と言い換えられない。しかし、このようなイメージは中国語では表現しにくく、両語の区別は中国語の表現に見られない。このため、「～こむ」の副詞的意味は中国語でどのように、どの程度表現されるかを明確にする必要がある。詳しくは第六章で考察する。

1.2 研究方法

まず、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して、「～こむ」の用例収集を行う。収集したデータを観察し、先行研究を検証した上で、「～こむ」と結合する前項動詞を考察することにより、「～こむ」の意味特徴を明らかにする。

次に、対照研究の立場から「～こむ」の多義性を把握するため、また、方向補語の機能を解明し、新しい知見が得られるように、日中対照用例集を作成する。主に北京日本学研

究中心が作成した『中日対訳コーパス(第一版)』を利用し、「～こむ」と＜～進＞などの用例を収集する。

1.3 論文の構成

論文は二部から成る。第一章から第三章までを第一部の内容とし、「～こむ」の意味を考察する。第二部は第四章から第六章までで、中国語との対照研究により、「～こむ」をさらに研究する。

第一章では複合動詞「～こむ」に関する先行研究をまとめ、本稿の立場を明確にする。また、『日本語書き言葉均衡コーパス』を利用し、「～こむ」の用例を収集し、データによる検証を行う。収集の結果、「～こむ」を 226 語、64361 例収集できた。これらの用例を言語資料として研究を行う。

第二章では、複合動詞「～こむ」における内部移動の意味概念の特徴について考察を行う。中国語の表現と対照して観察すると、「～こむ」は内部移動を表す方向補語＜～進＞のほかに、固着・付着を表す＜V 上＞などでも表現される。これにより、「～こむ」は内部移動から存在・固着まで表現できるのではないかと推測できる。しかし、日本語における内部移動表現が存在・固着まで表現できるという現象は、「～こむ」に限らず、単純動詞「入る」などにも見られる。2.1 節では単純動詞「入る」を中心に、日本語における内部移動表現と存在との繋がりを考察する。2.2.1 節では移動を表す V1 を考察することにより、「～こむ」における＜内部移動→存在→固着＞という意味連続体を検証する。さらに、「～こむ」は具体的な移動だけでなく、「座る」などと結合し、状態変化を表現できる。状態変化を表す場合、変化後の状態への固着を表現できる。また、＜内向移動²＞を内部移動として表現する傾向も見える。これについては、2.2.2 節で考察する。2.3 節では二章の議論をまとめる。

第一章の研究では、「～こむ」は内部移動から存在・固着まで表現できることがわかるが、この考察だけでは、説明できない現象が数多くある。例えば、「泥棒が家に入り込む」が言えるのに、「私が自分の部屋に入り込む」が不自然な表現になるのはなぜであろうかという問題に答えることはできない。即ち、V1 が V2 の「～こむ」と結合すると、いくつかの新しい意味が生じる。この新しい意味を説明するには、さらなる分析が必要になる。この分析は第三章で行う。

第三章では「～こむ」の副詞的意味について議論を行う。すでに、諸先行研究に議論されるように、「～こむ」の多義性は大きなテーマであるが、体系的な研究ができたとは言えない。本稿においては、「～こむ」の副詞的意味に注目して研究を進める。3.1 節では先行研究における問題点を指摘し、本稿の立場を明確にする。3.2 節では「評価」の枠組みを導入し、評価性と「～こむ」との接点を説明する。3.3 節では「～こむ」に含意される副詞的

² 「内向移動」は本稿における呼称で、定義は 2.2.2.3.1 を参照。

意味を抽出することにより、その評価的意味を明確にする。3.4 節では評価の対象により「～こむ」の意味体系を再整理する。また、一部の V1 も副詞的意味があるので、それと複合動詞との繋がりについては、3.5 節で議論する。3.6 節では、上記 3.1～3.5 節の内容をまとめる。

第三章までは第一部の内容であり、日本語を中心に研究を進めるが、複合動詞の日本語教育を支援する立場から、第二部においては、「～こむ」と中国語表現との対照により、中国語を母語とする日本語学習者の使用回避及び誤用の原因を探る。

第四章では、『中日対訳コーパス』を利用して、「～こむ」の用例を収集し、「～こむ」に対応する中国語表現全体像を描き出す。中国語では移動を表す場合、方向補語が用いられる。データの観察により、「～こむ」を表現するには、内部移動を表す方向補語＜～進＞のほかに、＜～上/下/到＞表現も使われる。さらに、作成動詞と姿勢動詞の場合は、付着と存在を表す＜～在/有/着＞表現が出てくる。

第五章では、「～こむ」とそれを表現する中国語の方向補語を観察する。5.1～5.3 節では方向補語＜～進＞と＜～上＞、＜～下＞と「～こむ」との対応関係について考察を行い、「～こむ」と同じような意味拡張を有するのは＜～進＞ではなく、＜～上/下＞になっていることがわかる。5.4～5.6 節では「～こむ」を表す＜～到/在/有/着＞について議論する。

第六章では「～こむ」の副詞的意味は中国語でどのように、どの程度表現できるかについて考察を行う。考察により複合動詞＜沉/深+V＞、＜時間副詞+V＞、＜V+着+補足説明＞、動補構造＜V 得～＞などの表現形式があるとわかる。また、「～こむ」は深部移動と固定感と目的性と異質性・被害性を含意する文脈を指定するが、この機能を有する中国語表現はほぼないと言える。このため、中国語を母語とする日本語学習者にとって、「～こむ」の習得の困難さと誤用が予測できる。

第一部 「～こむ」の意味研究

第一章「～こむ」に関する先行研究及びデータによる検証

1.1. 複合動詞「～こむ」に関する先行研究及び本稿の立場

「～こむ」についての研究は主に三つの立場から行われている。一つ目は日本語教育の立場からであり、姫野(1999)はその代表である。二つ目は認知意味論の立場からで、松田(2004)がイメージスキーマを利用し、複合動詞全体の意味と、V1 と V2 の意味関係における日本語母語話者と学習者の認知的差異を考察している。三つ目は動詞の持つ語彙意味論的観点であるが、影山(1993)と松本(2009)が語彙概念構造を利用して、V2 の意味と、V1 と V2 の意味関係を考察している。上記の研究はそれぞれの立場を取っているが、その研究結果からみると、相違点がある一方で、共通点もある。そこで、1.1.1～1.1.3 では「～こむ」の多義性についての先行研究を紹介し、1.1.4 では諸研究の共通点と相違点をまとめる。

1.1.1 日本語教育の立場から

姫野(1999 : 60)は「こむ」(籠む、込む)の語義について、「自動詞として、内部へ物事が入り組んで密度が高まること」であり、「他動詞として、周りを固く囲んだ中に、何かを入れて動かさないようにすること」であると、広辞苑第四版の記述を引用し、後項動詞「～こむ」には「籠む」と「込む」と二つの意味を根底的に持っている述べている。

姫野(1999 : 62-73)は「～こむ」を内部移動と程度進行の二つのタイプに分けている。内部移動は、主体或いは対象がある領域の中へ移動することを表しているが、程度進行は動作・作用の程度が進行することを表している。また、前者を移動先の領域の形態的特徴により、「閉じた空間への移動」、「固体への移動」、「流動体の中への移動」、「隙間のある集合体または組織体への移動」、「動く取り囲み体への移動」、「自己の内部(自己凝縮体)への移動」、「その他への移動」の七グループに分けた。一方後者はその進行様態に従って、三つのグループ、即ち、「固着化」、「濃密化」、「累積化」に分けた。この十グループの意味を下記のように説明している。

(6)姫野(1999)による「～こむ」の分類

I. 内部移動

- a. 閉じた空間への移動：外部と一線を画す境界線によって生じる領域である。(家、茂み、海)
主体の移動：上りこむ 落ちこむ 駆けこむ 転がりこむ 転げこむ など
対象の移動：担ぎこむ 運びこむ かりこむ はたりこむ ほうりこむ など
- b. 固体の中への移動：固体とは中身の詰まったものである。主体あるいは対象がその

内部に侵入したり表面に付着したりして、固体の形態に変化を及ぼす。

主体の移動：食いこむ のめりこむ めりこむ

対象の移動：こすりこむ 擦りこむ なすりこむ 塗りこむ まぶしこむ など

c. 流動体の中への移動：液体、泥など液体に準じるもの、気体などを言う。

主体の移動：浸かりこむ 溶けこむ ひたりこむ 沈みこむ もぐりこむ

対象の移動：漬けこむ 溶かしこむ 溶きこむ ひたしこむ 沈めこむ

d. 隙間のある集合体または組織体への移動：布地や畳の目など隙間のあるもの、砂や米など粒状のものの集まり、部分や部品の集合体、人の群れなどの間に入り込んでいくことを表す。

主体の移動：しみこむ まじりこむ 紛れこむ うまりこむ うもれこむ

対象の移動：まぜこむ 編みこむ 織りこむ 縫いこむ 組みこむ など

e. 動く取り囲み体への移動：枠組みそのものが動き、結果的に対象を内部に取り込んだ領域を形成すること。

(1)[対象] を [取り囲み体] {に/で} ～こむ

握りこむ 丸めこむ 包みこむ 抱きこむ 抱えこむ くるみこむ など

(2)[対象] に [取り囲み体] を ～こむ

着こむ かぶりこむ 履きこむ 背負いこむ しょいこむ 着せこむ かぶせこむ

f. 自己の内部(自己凝縮体)への移動：主体あるいは対象の一部の陥没、沈下、削除などによって凝縮という形態変化を起こすものである。

(1) 主体の一部が自己の内部に向かって陥没する³。

くぼみこむ ひっこむ くびれこむ めりこむ へこむ

(2) 主体 あるいは対象の一部が基底部に向かって沈下する。

落ちこむ 崩れこむ 沈みこむ かがみこむ へたりこむ 押さえこむ など

(3) 主体あるいは対象の一部同士が重なりあい 形態が縮小する。

まくれこむ めくれこむ 折れこむ まくりこむ めくりこむ など

(4) 対象の全体が中心に向かって凝縮する。

畳みこむ (ピントを)絞りこむ

(5) 主体あるいは対象の一部の削除によって形態や量が縮小する。

はげこむ 切れこむ 刈りこむ 切りこむ すきこむ 剃りこむ など

g. その他：移動先の領域は表面に現れないが、潜在的な枠組みが設定できる。

のぞきこむ 見こむ あてこむ (金を)張りこむ (数量を)割りこむ (相手チーム)を打ちこむ

II. 程度進行

³ ①に挙げられている「～こむ」は「へこむ」を除いて、『均衡』ではほぼ用例が観察できなかった。本稿においては考察しないことにする。「へこむ」は用例が 544 例収集できたが、複合動詞ではなく、一語になっていると判断し、考察の対象としない。

h. 固着化：次の段階の状態変化を前提としつつも、依然として前項動詞のままにいる
ということを表す。

眠りこむ 寝こむ 黙りこむ ふさぎこむ しょげこむ しおれこむ など

i. 濃密化：前項動詞は状態変化を表し、「こむ」はその変化の程度が進むことを表す。
生理的な変化や自然現象の変化を表すものが多いが、その変化の程度が進むことに
対して、マイナス評価の感を伴う。

老いこむ 老いぼれこむ 老けこむ ぼけこむ やつれこむ へばりこむ など

j. 累積化：前項動詞は繰り返しのきく、人間の意志的行為を表し、「こむ」は行為の累
積で、事柄の質を向上させることを表す。

歌いこむ 泳ぎこむ さらいこむ 使いこむ 磨きこむ 拭きこむ 練りこむ など

(姫野 1999 : 64-72)

さらに、この十グループの例文を下記のように提示している。

- (6) a'. 医師は聴診器を耳に差込んで心臓の鼓動を調べた。(大佛次郎「風船」)
b'. 爪は鷹匠の左腕に食い込んだ。(戸川幸夫「爪王」)
c'. マナガツオは酒としょう油に四時間つけこむ。(新聞)
d'. 梶は今度こそ本当に改札口の人混みの中へまぎれ込んでいった。(井上靖「あした来
る人」)
e'. 下着は一度着こむともう脱げなくなるので、上着で調節する。(新聞)
f'. 勝呂は膝の力が全く抜けてしまったように床にしゃがみこんだ。(遠藤周作「海と毒
薬」)
g'. ウチの打線なら、阪急の投手陣を軽く打ち込めるさ。(新聞)
h'. 弟はむっとしたようだ。それきり黙りこんだ。(源氏鶏太「御身」)
i'. 画家は三年も見ぬまにすっかり老い込んで、頬骨は一層尖っていた。(大岡昇平「黒
髪」)
j'. 大会参加に備え二ヶ月ほど前から毎朝 15 キロほど走りこんでいた。(新聞)

(姫野 1999 : 64-72)

上記の(6a'~g')は内部移動タイプの例である。「耳」は閉じた空間、「左腕」は固体、「油」
は流動体、「人混み」は集合体とみなされる。「着こむ」は人体を衣服等で囲むという意味
で、動く取り囲み体への移動を表す。「打ちこむ」の例には「に」格が表れていないが、「投
手を打ち負かし、チームの中に攻めこむ」と解釈できる。(6h'~j')は程度進行を表す。こ
のような固着化の状況に対してはマイナスの評価が伴うと指摘している。「老いこむ」は「老
いる」という変化の程度が進むことを表し、「走りこむ」は「走る」の行為が重ねられ、「こ
む」ことにより練達していくという意味を表すと、姫野(1999)は議論している。

さらに、V2「込む」のニュアンスについて、「全体がすっかり奥深く入るという感じ」、「いったん入ったら動かないという固定感」、「予期せぬものが入るという抵抗感」、「人の行動を表す場合、意志性や目的意識が強いという感じ」があると述べている。下記のような例文が挙げられている。上記のニュアンスがない場合、「～こむ」が用いられない例もあがっている。

(7) 全体がすっかり奥深く入るという感じがある

* (ちょっと、半分、少しだけ、先だけ) 入りこむ、浸かしこむ、上がりこむ

* (端に、ふちに、浅く) 落としこむ、入れこむ、つけこむ

(8) いったん入ったら動かないという固定感がある

* 箸で豆をはさみ込んで食べる (豆はすぐ箸から離れ、口に入る)

* その辺のおもちゃをしまいこみなさい (明日も出して使うならおかしい)

(9) 予期せぬものが入るという抵抗感がある

泥棒が教室に入りこむ * 先生が (授業のため) 教室に入りこむ

他人の家に住みこむ * 自分の家に住みこむ

(10) 人の行動を表す場合、意志性や目的意識が強いという感じがある

心覚えに品名を書きこむ * 手なぐさみに無意味な線を書きこむ

役立つ情報を聞きこむ * 物音を聞きこむ

(姫野 1999 : 79–81)

姫野が挙げている用例を観察すると、上記のニュアンスを含んだ用例と用語はほぼ前項動詞が内部移動を含意するものである。

上記の内容をまとめると、姫野(1999)は「～こむ」を意味により内部移動と程度進行に二分している。前者は、移動先となる領域が格助詞「に」で示され、その形態的特徴から七グループに分けており、後者を進行の様態にしたがって三グループに分けている。さらに、「～こむ」は内部移動と程度進行のほかに、四つのニュアンスがあると述べている。姫野の研究はこれ以降の研究に大きな影響を与えているが、その分類については、内部移動と程度進行との繋がりに詳しく言及せず、なぜ上記の(7)～(10)のニュアンスが生じるのか説明していない。

1.1.2 認知言語学の観点から

まず、後項動詞「～こむ」についてであるが、影山(1993)は「～こむ」を自動詞として捉え、「他動性調和の原則」⁴を逸脱しているという主張した。これに対し松田(2004 : 22)は、広辞苑第四版の解釈を引用し(姫野(1999)と同じ)、「後項動詞「こむ」の意味は、現代語の本体動詞「こむ」の意味とは乖離しているが、その根底に自動詞用法と他動詞用法がある

⁴ 「他動性調和の原則」についての説明は 1.1.3.1 節で行う。

と捉えると、「～こむ」も他動性調和の原則の枠内で説明できるのではないかと述べている。松田(2004)は姫野(1999)の研究成果を踏まえた上で、認知意味論の立場から「～こむ」を表 1 のように四分類した。

表 1 「～こむ」の用法の分類 松田(2004 : 76)

二格を伴う「～こむ」		二格を伴わない「～こむ」	
A タイプ	B タイプ	C タイプ	D タイプ
V1 は「内部移動」 を含意しない	V1 自体は「内部移動」 を含意する	V1 は示す状態への変 化とその状態への固 着	V1 の反復行為により 生じる状態変化(目標 に向けて)
例) 飛び込む 呼び込む	例) 入り込む 植え込む	例) 冷え込む 眠り込む	例)十分に走り込む

A タイプは「～こむ」と結合して初めて内部移動の意味が生じる。B タイプは「しっかりタイプきちんと/奥深く」というイメージがある。その焦点というと、前者は「内部への移動」であるが、後者は「その場への固着」であり、姫野(1999)が述べた V2 「込む」のニュアンスと一致する。それに、C タイプは「固着化」と「濃密化」に対応しており、D タイプは「累積化」に対応している。松田(2004 : 63-82)は「～こむ」のコア図式を図 1 のように表している。

図 1 「～こむ」のコア図式 松田(2004 : 75)

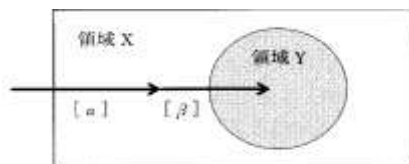


図 1 における四角はある領域 X を表す。領域 Y は領域 X 内での「難可逆的な領域」(主観的に領域 X の外に出るのが困難だと感じられる領域であり、物理的に存在するわけでない)。また、矢印 [α] は領域 X に入ることの意味的イメージを、[β] は領域 Y に入ることの意味的イメージを表している。即ち、[α] は「内部への移動」、[β] は「その場への固着」という意味的イメージである。「～こむ」は「内部移動」と「その場への固着」と二つの意味的イメージをその根底に併せ持っている松田(2004 : 75)は論じている。[α] と [β] のどちらかが焦点化されるは、前項動詞の性質によるのである。A～D タイプのイメージ図式は以下のように提示されている。(用例は表 2 を参照)

図 2 A タイプの「～こむ」のイメージ図式(松田 2004 : 77)

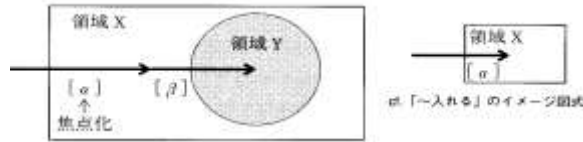


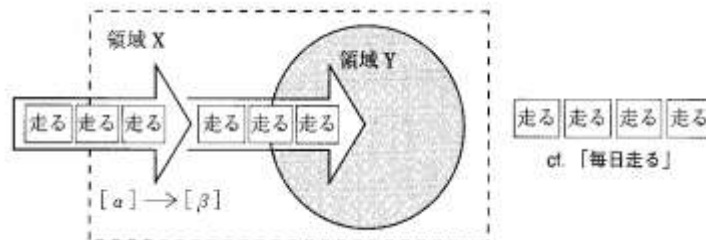
図 3 B タイプの「～こむ」のイメージ図式(松田 2004 : 82)



図 4 C タイプの「～こむ」のイメージ図式(松田 2004 : 85)



図 5 D タイプの「～こむ」のイメージ図式(松田 2004 : 87)



上記の図に示されるように、A タイプは、V1 が内部移動を含意しないので、 $[\alpha]$ が焦点化されるが、B タイプは V1 が内部移動を含意するので、 $[\beta]$ が焦点化され、さらに、 $[\beta]$ の意味的イメージが「しっかり、きちんと、奥深く」V1 した行為の結果が状態への固着を表す。B タイプの方は、移動先が物理的な場所であるが、C タイプの方は移動先が「眠い」状態のような抽象化された場所なので、二格が省略されている。このタイプの動詞は、B タイプの物理的な場所へ「しっかり、きちんと、奥深く」行為を行うというイメージが抽象レベルに拡張した用法であると考えられている。D タイプは累積化用法で、「時間をかけてその行為を重ね、人の技や対象とする事柄を向上させること」を表す用法である。松田の議論によると、D タイプも C タイプと同様に、二格が省略されており、A タイプの内部移動と B タイプの「しっかり、きちんと、奥深く」行為を行うという二つのイメージが合わさって、抽象レベルへ拡張した用法である。また、松田(2004)は表 2 のように、各タイ

プの用例を提示している。

表 2 「～こむ」の四タイプの用例(松田 2004 : 163～184)

タイプ別	用例
A タイプ	飛びこむ、逃げこむ、駆けこむ、運びこむ、投げこむ、流しこむ (プロトタイプ) →どなりこむ、暴れこむ、殴りこむ、踏みこむ ↑ →呼びこむ、誘いこむ、引きこむ、引っぱりこむ ↑ →編みこむ、書きこむ、織りこむ、組みこむ、詠みこむ ↑ →擦りこむ、塗りこむ ↑ →折りこむ etc. (非プロトタイプ例)
B タイプ	入りこむ 乗りこむ もぐりこむ(A タイプから意味シフトし、B タイプに繋がっていく) → 植えこむ つめこむ しまいこむ 埋めこむ (プロトタイプ例) → 包みこむ くるみこむ ↑ → 住みこむ とまりこむ etc. (非プロトタイプ例)
C タイプ	考えこむ、眠りこむ、寝こむ、話しこむ、座りこむ(意志動詞から無意志動詞化) 冷えこむ、老けこむ、更けこむ、めかしこむ etc.(状態変化動詞)
D タイプ	走りこむ、泳ぎこむ、聞きこむ、練りこむ、煮こむ etc.

しかし、松田(2004)は「内部移動」について詳しく説明していない。さらに、複合動詞全体の意味を考えてみれば、「飛びこむ」、「入り込む」の基本義が着点内部への移動であり、典型的な移動動詞であるが、「植えこむ」、「しまいこむ」及びそれらの前項動詞はもともと典型的な移動動詞であるとはいいにくい。また、「彫る」などもそうであるが、移動動詞の範囲から離れている動詞でありながら、内部移動を表す「ーこむ」と結合できるのは複合動詞「～こむ」の大きな特徴である。この点に関して、さらなる分類と分析が必要であると考えられる。

また、松田(2004)は第二言語習得という視点から学習者と母語話者の「～こむ」についての認知的差異を考察した。まず、学習者と母語話者の認知差異を明確にするように調査を行った。学習者の意味知識を探る方法として、複合動詞「～こむ」を 54 語提示し、それらを用いて短文を作るように求めた。そしてそれらの文に関して母語話者三名が受容度を判定したが、その結果、低い受容度の文が多いと観察された。また、学習者が「～こむ」の意味とそれぞれの結合タイプとの対応関係について認識が不十分であるということが明らかになった。学習者と母語話者で同じ例文に対する受容度の判断も違う。提示した刺激文は 90 文で、母語話者三名と学習者四名に判断させた結果を表 3 に示す。

表 3 松田(2004 : 113)

		期待される回答	母語話者	学習者
(+) 二格	A タイプ (30 文)	○	95%	76%
		×	90%	51%
	B タイプ (30 文)	○	92%	79%
		×	92%	52%
(−) 二格	C タイプ (18 文)	○	96%	68%
		×	89%	58%
	D タイプ (12 文)	○	96%	60%
		×	95%	68%

これらの結果から導き出される結論は、学習者は「～込む」が「外部から何らかの内部への移動」を意味するということが十分に理解できていないということと、「V1」と「V1+込む」の意味的差異が明確につかひ分けられていないということである。

松田(2004)の研究成果により、「～こむ」の根底には内部移動と「その場にとどまる」と二つの意味があり、V1 が内部移動を含意するかどうかは語全体の意味に大きな影響を与えていることがわかる。また、A タイプ (V1 が内部移動を含意しない場合) より、B タイプ (V1 が内部移動を含意する) と C タイプのほうが「その場にとどまる」イメージが強い。学習者が「～こむ」の意味について認識が不十分であるということが明確である。

松田(2004)の分析は姫野(1999)と通じるところが多いが、前者の考察はさらに詳細になっている。両氏の研究結果を観察すると、前項動詞が内部移動を含意する「～こむ」は多義的意味が生じやすいことがわかる。両氏の研究方法としては、内省によるデータに基づいて結論を出す傾向が強く、「～こむ」の多義性について、データによる検証はほとんど行われていない。両氏は用例の一部を小説と新聞から引用しているが、そのデータについての詳しい説明を行っていない。また、多義性の記述は十分とは言えない。このため、本稿では、先ず、コーパスよりデータ収集を行い、前項動詞が内部移動を含意する「～こむ」のデータを中心に観察した上で、両氏の結論を検証し、「～こむ」の多義性の研究をさらに進める。

また、松田氏の研究には残された問題点が指摘できる。先ず、なぜ「～こむ」の根底は「内部への移動」と「その場への固着」を合わせ持つのであろうか。これは日本語独特の特徴なのか、それとも、他の言語にもあるのだろうか。これについて、中国語との対照研究で考察を行う。

1.1.3 語構成の立場から

影山(1993)は語彙的複合動詞の殆どが他動性調和の原則に従うが、「～こむ」は位置変化

を表し、様々な動詞と結合できるので、他動性調和の原則に違反していると議論している。これは「同一義説」と呼ばれている。これに対して、松本(2009)などは移動動詞としての意味と使役移動動詞としての意味の両方があるとし、「別義説」を主張している。1.1.1 と 1.1.2 で述べたように、姫野(1999)と松田(2004)も別義説の立場を取っている。

1.1.3.1 「～こむ」に関する影山(1993)の考察

影山(1993)は、語彙的複合動詞は項構造のレベルにおいて複合が起こり、他動性調和の原則に従うという。項構造というのは述語が取る名詞句を記述したもので、その表記の仕方については様々な提案がある。動作主(Agent)、対象(Theme)といった意味役割を明示するかどうかの一つの論点となっている。例えば、「飲む」の項構造は以下のように記述できる。

(11) 飲む : (Agent <Theme>)

(影山 1993:31)

<>の中の要素を内項、その外側を外項と呼ぶ。一方、従来、動詞は他動詞と自動詞に二分されているが、Perlmutter(1978)などの研究においては、自動詞をさらに、非能格自動詞⁵と非対格自動詞に分類することができることが議論されている。他動詞と非能格自動詞、非対格自動詞について項構造は下記のように示すことができる。

⁵ 自動詞を非能格自動詞と非対格自動詞とに二分する試みは Perlmutter(1978)に詳しい。また、非能格自動詞と非対格自動詞について、Perlmutter & Postal(1984)は以下のように分類している。

(1) 非能格自動詞

1) 意図的ないし意志的な行為

work, play, speak, smile, skate, swim, dance, jump, walk, fight, cry, whisper, shout, shouti, bark, roar

2) 生理的な現象

cough, sneeze, hiccough, belch, vomit, sleep

(2) 非対格自動詞

1) 形容詞ないしそれに相当する状態動詞

2) 対象物を主語に取る動詞

burn, fall, drop, sink, float, slide, slip, glide, flow, tremble, boil, darken, freeze, melt, evaporate, open, close, break, explode

3) 存在ないし出現を表す動詞

appear, happen, exist, occur, disappear, last, remain, survive

4) 五感に作用する非意図的な現象

shine, sparkle, glitter, smell, stink, jingle, click

5) アスペクト動詞

begin, start, stop, cease, continue, end

6) 継続

last, remain, stay, survive, etc.

非能格動詞は、主語の意図的な動詞・行為を意味する動詞と、人間の生理的な活動を意味する動詞である。他方、非対格動詞は主として状態や位置が変化するものを主語に取る動詞である。

(12)a. 他動詞 : (Agent <Theme>)

b. 非能格自動詞 : (Agent < >)

c. 非対格自動詞 : (<Theme>)

(影山 1993:47)

V-V 型の複合動詞において、上記の項構造が重要である。影山(1993)は下記のように述べている。

他動詞と非能格自動詞の項構造は同じタイプとみなすことができるから、他動詞＋他動詞、非能格自動詞＋非能格自動詞だけでなく、他動詞と非能格自動詞が混在した複合動詞も可能である。他方、非対格自動詞の項構造はこれら二者とは形式が異なるから、基本的には非対格自動詞は非対格自動詞としか結合しない。これを他動性調和の原則と呼んでおこう。(影山 1993:117)

しかし、「～こむ」は非対格構造をなしながら、他動詞と非能格自動詞と非対格自動詞とも結合できるので、他動性調和の原則と一致せず、意味構造のレベルにおいて複合が起こるとする。

影山(1993)の議論によると、V1 が位置変化を表さない場合、「～こむ」はある場所の内部への移動という方向性のみを表すが、V1 が目的語の位置変化を意味する場合は(植える、しまう、注ぐ、詰める)、V1 を強調するような意味合いになる。即ち、「～こむ」は内部移動の意味と、それを強調する意味があり、LCS⁶で次のように表される。

(13) 「込む」 : [_{Event} BECOME [y BE IN z]]

(13)に示されるように、影山(1993)は後項動詞「～こむ」を、内部移動を表す自動詞とみなしている。また、V1 と V2 の意味関係を補文関係に解釈できる場合もある。この場合は、V2 は「V1 の動作、状態に没入する、すっかりする」と解釈される(思い込む、冷え込む、使い込むなど)。

1.1.3.2 「～こむ」に関する松本(2009)の考察

影山と異なり、松本(2009)は後項動詞「～こむ」には移動と使役移動と二つの意味があると主張する。使役移動の場合は下記のような例がある。

⁶ LCS とは語彙概念構造であり、語彙概念構造は、動詞が表す語彙的情報を形式化する。CAUSE、BECOME、BE、ACT、AT といった大文字の部分と、[]_x のような空欄の部分とがある。大文字の英単語で表したのは、<使役>や<変化>といった意味の概念で、意味述語或いは意味関数と呼ぶ。これに対し、x や y の空欄の部分は変項と呼び、具体的な文においては項がそちらの位置に対応する。

(14)「込む」が使役移動を表す場合

織り込む 縫い込む 擦り込む 磨き込む 鋤き込む 吹き込む

(松本 2009 : 181)

また、松本(1999)によると、「～込む」は基本的に右側主要部⁷であるが、一部は左側主要部である。左側主要部の「込む」は前項動詞の表す状態変化の意味を補強し、その結果状態に制約を加えている。まとめてみると、次のようになる。

(15)左側主要部の「～込む」

- a. <固着化>と呼ぶタイプの「～込む」 黙り込む 眠り込むなど
- b. 取り囲みを表す「～込む」 包み込む くるみこむ
- c. 内部への物体輪郭の移動を表す「～込む」 縮みこむ しゃがみ込む など
- d. 覗き込む

(松本 2009:182-185 参照)

1.1.3 節の内容をまとめてみると、影山(1993)の主張では「～込む」には三つの意味がある。V1 が位置変化を表さない場合、V2 はある場所の内部への移動という方向性を表すが、V1 が目的語の位置変化を意味する場合は、V2 はV1 を強調する。また、「～込む」は「V1 の動作、状態に没入する；すっかりする」と解釈される。松本(2004)は「～込む」には移動と使役移動と二つの意味があり、一部の複合動詞は左側主要部であると主張する。

1.1.1～1.1.3 で紹介した先行研究はそれぞれ異なる立場を取っているが、その研究結果を見れば、相違点と同時に共通点も見ることができる。1.1.4 では、その相違点と共通点をまとめてみる。

1.1.4 諸研究の共通点と相違点

「～込む」の多義性について、四者の研究の共通点と相違点をまとめると、下記のようなになる。

(16)「～込む」の多義性についての諸研究の共通点

- ① 内部移動が「～込む」の基本的な意味である
- ② V1 が内部移動を含意するかどうか「～込む」全体の意味に深く関わっている。
(ただし、姫野(1999)はこの点に詳しくふれていない)

⁷ 影山(1993:101)によると、日本語における V-V 複合動詞の場合、右側主要部の規則が広く行き渡っている。右側主要部の規則とは、右側の要素が主要部で語全体の品詞を決定する能力を持ち、語の意味の中心をなす要素であると規定されることが多い。複合動詞の場合は、右側主要部により、複合語全体の格構造と項構造が決定される。

(16)の①については説明するまでもないことだが、②については、V1 が内部移動を含意する場合、松田(2009)は複合動詞全体が「その場にとどまる」イメージが強いと指摘し、影山(2003)は V2 が V1 を強調すると述べている。また、松本(2009)が指摘した左側主要部の「～こむ」はこのタイプの複合動詞である。次は、「～こむ」の多義性についての四者の研究の相違点である。

(17) 「～こむ」の多義性についての諸研究の相違点

① 分類の基準

姫野(1999)は V1 が内部移動を含意しない場合と含意する場合を分けていないが、他の三氏は分類している。

② V1 が内部移動を含意しない場合、語全体の意味

語全体の意味でいうと、松田(2004)は「～こむ」の根底に内部移動と「その場にとどまる」(前者が焦点)と二つの意味的イメージがあると述べているが、影山(1993)と松本(2009)は内部移動と主張している。

③ 後項動詞「こむ」の意味

姫野(1999)/ 松田(2004) /松本(2009) 移動動詞と使役移動動詞→別義説
影山(1993) 移動動詞→同義説

(17)の内容を表 4 にまとめるとよりわかりやすくなる。

表 4 先行研究の共通点と相違点のまとめ

研究者	V1 が内部移動を含意する場合と含意しない場合の分類	V1 が内部移動を含意しない場合、語全体の意味	後項動詞「～こむ」の意味
姫野(1999)	分類しない	-----	別義説
松田(2004)	分類する	内部移動と「その場にとどまる」(前者が焦点)	別義説
影山(1993)	分類する	内部移動	同一義説
松本(2004)	分類する	内部移動	別義説

一方、下記の 3 点においては、研究の立場が異なるため、姫野(1999)と松田(2004)は語の意味について、影山(1993)と松本(2009)は語構造について結論を出している。お互いに矛盾してはいないと考えられるが、内部移動表現の日中対照研究に役立つので、それぞれの観点を下記のようにまとめる。

(18)お互いに補足するところ

① V1 が内部移動を含意する場合、語全体の意味

松田(2004)：語全体の意味：内部移動と「その場にとどまる」(後者が焦点化)

影山(1993)：V2 は V1 を強調する

松本(2009)：V2 は V1 を補強し、語全体は左側主要部となる。

(姫野(1999)は V1 が内部移動を含意しない場合と含意する場合を分けていないが、「～こむ」の「全体がすっかり奥深く入るという感じ」、「いったん入ったら動かないという固定感」、「予期せぬものが入るという抵抗感」を含んだ用例と用語はほぼ前項動詞が内部移動を含意するものである。)

② V1 が状態変化を表す場合、語全体の意味

姫野(1999)：次の段階の状態変化を前提としつつも、依然として前項動詞のままでいるということを表す。固定感が強い

松田(2004)：語全体の意味：抽象的内部移動とその状態への固着(後者が焦点化)

影山(1993)：V2 は「V1 の動作、状態に没入する；すっかりする」という意味を表し、両者は補文関係となっている。

松本(2009)：V2 は V1 を補強し、語全体は左側主要部となる。

③ 反復行為を表す「～こむ」について、姫野(1999)は累積化と名づけ、松田(2004)は D タイプと分類しているが、影山(1993)と松本(2009)は触れていない。このタイプの複合動詞の意味は V1 の自他性などから判断するのは難しい。

本稿の立場は、姫野と松田、松本と同じく、後項動詞「こむ」の意味は移動と使役移動の二つの意味があると捉える。また、V1 が内部移動を含意するかどうかという分け方が必要であり、基本的には松田(2004)の分類を取るが、対照研究の立場から中国語の表現の考察を通して、「～こむ」の全体像を提示し、上記の(17)と(18)について考察していく。

1.1.5. 本稿の立場

本研究において、「～こむ」の意味分類について、基本的に松田(2004)の意味分類を取る。そして、松田(2004)が提示したように、前項動詞が内部移動を含意する「～こむ」と含意しない「～こむ」を分ける必要があることは支持するが、その分類には以下のような問題点があると考えられる。

(19)松田(2004)の分類方法の問題点について

① 内部移動を含意するとは具体的にどういう意味かについて説明していないので、A タイプと B タイプとの区別が明確にされていない。

② A タイプの用例を観察すると、「書き込む」のような作成動詞が入っているが、「飛

び込む」のような移動動詞と同じように扱うのはよいだろうか。

- ③ B タイプの「植えこむ」と「入りこむ」の前項動詞の意味を同じように扱っているが、「木をしっかりと植えている」と「*彼はしっかりと部屋に入っている」のように、両者には大きな相違があるので、同様に扱うと、その相違を見逃す。さらに、「こむ」は存在の様態を表わすが、存在の様態は「固着」だけではない。（「こむ」の基本義を設定したが、それは「～こむ」の意味分類にどのような影響を与えているかはまだよくわからない）
- ④ C タイプの「座り込む」のような姿勢動詞は、「床に座り込む」のように、二格と結合できるので、C タイプに入れるのは適當ではなく、A タイプと B タイプとのどちらかに入れるべきである。

まず、(19)の①における内部移動の意味規定についてであるが、内部移動の意味がある場合、到着の意味が規定されているので、場所を表わす二格と結合できるが、動詞自身が到着の意味を含意していない場合、場所を表わす二格と結合しにくい。

(20)二格との共起

- a. *プールに飛んだ。→プールの中に飛びこんだ。
- b. 部屋に入った。

上記のように、着点を含意するかどうかは、「飛ぶ」と「入る」との大きな相違である。着点を含意する場合は、二格が取れるが、含意しない場合、二格を取りにくい。また、或る動詞は二格と共起する例が観察できるが、着点の内部空間を指定する「～の中に」と、内部空間を指定しない「～の外」と両方とも共起できる。これに対して、「入る」は「～の中に」とは共起しやすいが、「～の外に」との共起が難しい。したがって、「中」と「外」との共起度が一つの基準になると考えられる。以下のようなテストにより、「逃げる」と「入る」との違いを明らかにすることができる。

(21)「中」と「外」との共起

- a. ?窓から部屋の中に逃げた。→部屋の中に逃げこんだ。
- a'. 窓から部屋の外に逃げた。
- b. 窓から部屋の中に入った。
- b'. *窓から部屋の外に入った。

上記の例に示されるように、「逃げる」は、着点は「内」と「外」という制限を受けていないが、「入る」の方は普通容器の内部を着点としており、容器の外部に注ぐのは特別な条件がないと、不自然な表現になる。そうすると、「中」と「外」と両方とも共起できるなら、

内部へという移動の方向が規定されていないが、「外」と共起しにくく、「中」と共起する
なら、内部への移動方向がすでに規定されているとみることができる。

また、下記の「逃げる」のような、内部移動を規定していない動詞は「-こむ」と結合
できる一方、内部から外部や表面への移動を表す「-だす」とも結合できるが、(22)の
ように、「入る/注ぐ」のような内部移動を含意する動詞は結合しにくい。

(22) 外部・表面への移動を表す「-だす」との結合能力

- a. 飛びだす 逃げだす 運びだす 打ちだす 投げだす 持ちだす
追いだす 踏みだす 引きだす 突きだす 押しだす 連れだす
- b. *注ぎだす *入りでる *植えだす *詰めだす *住みだす *沈みだす
*飲みだす *入れだす *教えだす *貯めだす *包みだす *抱きだす
*抱えだす *握りだす *挿しだす *紛れだす *食いだす *泊まりだす

上記の例に示されるように、「飛ぶ」のような二格と共起しにくい動詞と、「逃げる」の
ような「中」と「外」と両方とも共起可能な動詞は、内部への移動という規定性がない、
或いは、弱いため、「-こむ」と「-出す」と両方とも結合できる。が、「入る」のような動
詞は「-こむ」と結合しやすく、「-出す」と結合しにくい⁸。このような単純動詞は内部へ
の移動という意味が読み取れると言える。

次に、(19)の②における「書きこむ」のような作成動詞についてであるが、これは移動と
して捉えにくい。松田(2004)は他の作成動詞を扱っていないが、「書きこむ」のほかに、「彫
り込む」などがある。前項動詞が内部移動を含意しない動詞とされてきた(松田 2004:163)
が、このタイプの動詞は、二格が必要なので、A タイプの「飛ぶ/逃げる」などとは性質が
異なっている。また、新しいものを作り出す意味では、移動という基準で判断するのは妥
当ではないと言える。一方、「書く/彫る」などは区切られた領域に向けて動作を実行し、
漢字や絵などの新しいものが生成されてその領域内に残っていくという意味がある。「領域
内」という意味では、内部的制限を受けていると見なすことができる。このため、「彫りこ
む」、「書きこむ」、「建てこむ」などは、V1 が内部移動を含意する「～こむ」の周縁的なも
のとする。

また、(19)の③についてであるが、松田(2004)はBタイプの「植えこむ」と「入りこむ」
の前項動詞の意味を同じように扱っているが、適当ではないと思う。「入る」は固着性を含
意していないので、「彼はしっかり部屋に入っている」とは言いにくい。これに対して、「植
える」の方は固着の意味が強い。「木を植える」の場合は、木の根と土壌と固着が想像でき
る。また、「ブラシに毛を植える」の場合は、毛がブラシにしっかりとどまってほしいとい

⁸ 「吸う」が例外であり、「-出す」と結合可能である。例として、「ストローで卵の中身を吸い出す」
などがあるが、卵の中身がストローの中に移動されてから、外へ出されると理解できるので、内部移動が
ないとは言えない。このため、前項動詞の「吸う」は「-出す」と結合しても内部移動の意味が成立する
と考えられる。

う目的性が強い。「理念を植える」の場合も同様である。このように、「入る」などは内部移動だけを表すが、「植える」などはすでに固着性を含意しているため、松田(2004)のように、「入る」と「植える」と同様に扱うのは適当ではないと考えられる。

最後に、(19)の④における「座りこむ」の分類についてであるが、その意味を考えると、「床/ソファに座る」と同様に、複合動詞も「床/ソファに」のような場所への移動と、元の状態から「座る」状態への変化と二つの意味がある。「座り込む」のような姿勢動詞は二格を取れるので、「考えこむ」などと異なり、Cタイプに入れるより、Bタイプに入れるのは妥当である。一方、「座る」のような前項動詞自身が、状態変化という意味で、Bタイプにおける「入りこむ/植えこむ」などとも性質が異なる点があるので、BタイプとCタイプとの間にあると位置づけ、Bタイプの周辺のなものとする。「座りこむ」のような姿勢動詞は、ほかに「倒れこむ」、「かがみこむ」などがある。

松田(2004)の分類方法を踏まえて、二格を取る複合動詞「～こむ」を再分類したものを表5のようにまとめておく。

表 5 二格を取る「～こむ」の再分類

二格を取る「～こむ」の分類		用例
A(V1 が二格を取らない、或いは二格を取るが、「中」と「外」と両方共起でき、外部移動を表す「一だす」と共起しやすい)		飛びこむ 逃げこむ
B(V1 が二格を取る) (存在の様態が焦点化される)	① V1 は「しっかり」と共起しにくい、固着性を含意しない(「中」と共起しやすいが、「外」と共起しにくい。)	入りこむ 注ぎこむ
	② V1 は固着性を含意する	植えこむ
	③ 姿勢動詞	座りこむ
	④ 作成動詞	書きこむ

表 5 で提示した B タイプの再分類は中国語との対照研究にも必要である。

(23) a. どこかから中庭に入りこんできた気弱そうな顔つきのやせた茶色い犬が、花壇の花を片端からくんと嗅きまわっていた。(『中日』『ノルウェイの森』)

訳文：一匹有气无力的褐毛瘦狗不知从哪里跑进/*跑在院子，团团围着花坛粗声大气逐个嗅着花瓣。(『中日』『挪威的森林』)

b. 池の形ができれば、斜面に植物を植えこむ。(『均衡』『ドゥーパ!』)

訳文：池子的形状做出来以后，在斜面上种上植物/*把植物种进斜面。

c. 三百人の青年たちが息を殺し、ほとんど物音も立てず、机にかがみ込んで、必死に答案を書いていた。(『中日』『青春の蹉跎』)

訳文：三百个青年都屏柱呼吸，一点声音也不出，趴在/*趴进桌上拚命地写答案。(《中

日》《青春的蹉跎》)

d. 買ったものの金額をノートに書き込んでるだけだけど。(『均衡』『Yahoo!ブログ』)

訳文: 只是把买东西的金额写在/*写进病笔记本上。

中国語では、＜～進＞は典型的な内部移動表現であるが、上記の例に示されるように、「入りこむ」は＜跑進＞で表され、＜跑在＞は非文になる。一方、「植えこむ」の方は＜種進＞は不自然で、＜種上＞で表現される。或いは、＜在＞を用いて、＜把植物種在斜面上＞も言える。しかし、作成動詞「書きこむ」と姿勢動詞「かがみこむ」は＜進＞ではなく＜在＞で表現されている。このように、中国語との対照を観察すると、「入り込む」のような移動動詞は、作成動詞と姿勢動詞、非典型的な移動動詞と相違しているので、同じ二格を取る動詞であっても、分けて考察する必要がある。

以上は松田(2004)の研究を踏まえたうえで、二格を取る「～こむ」の再分類を考えてみた。二格を取らない C と D タイプについてはほぼ松田(2004)と同じ分類になるので、本稿における「～こむ」の分類の全体は以下のように示すことができる。

表 6 本稿における「～こむ」の分類

二格を取る「～こむ」の分類			用例
場所を表わす 二格を取る	A (V1 が二格を取らない、或いは二格を取るが、「中」と「外」と両方共起でき、外部移動を表す「一だす」と共起しやすい)		飛びこむ 逃げこむ
	B (V1 が二格を取る)	① V1 は「しっかり」と共起しにくい、固着性を含意しない。また、「中」と共起しやすいが、「外」と共起しにくい。	入りこむ 注ぎこむ
		② V1 は「しっかり」と共起しやすく、固着性を含意する	植えこむ
		③ 姿勢動詞	座りこむ
		④ 作成動詞	書きこむ
場所を表わす 二格を取らない	C タイプ	V1 は示す状態への変化とその状態への固着	冷えこむ
	D タイプ	V1 の反復行為により生じる状態変化(目標に向けて)	走り込む

一方、松本(2009)の、「～こむ」には左側主要部と右側主要部と二種類があるという指摘は、「～こむ」の意味研究に重要である。A タイプの方は、「一こむ」が内部移動を表し、前項動詞が移動の様態、手段などを表すので、明らかに右側主要部になるが、B タイプの方は、前項動詞の格と項構造が決定的であり、左側主要部になる。また、松本(2009)が議論したよ

うに、固着化を表す「～こむ」は基本的には左側主要部になる。

このように、左側主要部と右側主要部に分けるのは、「～こむ」の意味研究と対照研究に役立つ。まず、右側主要部の「～こむ」は意味が相対的に単純であるが、左側主要部の「～こむ」は意味が複雑で、主な研究対象となる。さらに、中国語における方向補語<～進>は右側主要部しかない。日本語の「～こむ」は、左側主要部が発達しているのに対して、中国語の<～進>は左側主要部の例は全くない。このため、左側主要部の「～こむ」は中国語でどのように表現するについて考察する必要がある。

さらに状態変化動詞は、中国語では、内部移動表現と共起できないのである。

(24) いや、我輩なぞが老込む筈だよ、君等がずんずん進歩するんだもの。(『中日』『破戒』)

訳文：难怪像我这样的人已经老朽了，你们是不断地进步。(《中日》《破戒》)

上記の例に示されるように、中国語では、「老込む」のような状態変化動詞に対応する中国語は完全に<～進>のような内部移動表現から離れている。このように、なぜ日本語において、内部移動を表す「～こむ」は作成動詞、状態変化動詞などと結合できるのかという問題点が指摘できる。本稿では、日本語における内部移動の概念が移動だけではなく、<移動/発生/状態変化→存在→固着>という連続体を成しているので、内部移動を表す「～こむ」は姿勢動詞や作成動詞までと結合できると考える。本稿においては内部移動を表す単純動詞「入る」などの意味と「～こむ」結合する前項動詞の意味上の繋がりについての考察、そして、中国語の方向補語などとの対照研究により、「～こむ」の意味をさらに研究する。

また、「～こむ」の多義性について、姫野(1999)はもっとも詳しく、「～こむ」は「目的性」、「抵抗感」などのニュアンスがあると議論している。本稿では、これらのニュアンスを「副詞的意味」として扱い、「資格付けの評価」と「価値づけの評価」という枠組みで研究を進めるが、「～こむ」の評価的意味は前項動詞とも繋がっているので、一部の前項動詞も研究範囲に入れる。

1.2. データによる検証

国立国語研究所が公開した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下は『均衡』と呼ぶ)を利用して、検索ツール「中納言」で、「～こむ」の用例収集を行う。『均衡』は「書籍」、「白書」、「国会会議録」、「Yahoo!知恵袋」から構成されている。コーパス全体を用例収集の対象とし、前後文脈 50 文字までという設定で、収集を行った。用例を整理した結果、複合動詞「～こむ」は異なり語数 226 語、64361 例が収集できた。

まず、9 例以下の「～こむ」は以下の通りで、研究の対象から外す。

(25)9 例以下の「～こむ」(51 語)

射こむ 歌いこむ 蹴こむ 遣りこむ 締めこむ 立ちこむ 踊りこむ 回しこむ
 噛みこむ すっこむ 漉きこむ 暴れこむ 崩れこむ 汲みこむ 触れこむ
 騙しこむ 招きこむ 曲がりこむ 垂らしこむ 跳ねこむ 談じこむ 澄ましこむ
 隠しこむ 縮こむ 浸りこむ 噎せこむ 語りこむ 鋤きこむ 悄気こむ 折れこむ
 掛けこむ 老いこむ 倒しこむ 挟りこむ 手繰りこむ 化けこむ 構えこむ
 いせこむ 足しこむ 溜まりこむ 狩りこむ へしこむ 記しこむ 導きこむ
 焚きこむ 防ぎこむ 泣きこむ 成りこむ 食らいこむ 移しこむ 祭りこむ

考察の対象は収集された用例が 10 例以上の「～こむ」にするが、「申しこむ」、「振りこむ」、「見こむ」、「取りこむ」、「仕こむ」、「付けこむ」、「あてこむ」の 7 語は、語彙化が進んで、一語化しているので、考察の対象としない。

このように、語彙化した項目と収集された用例が 9 例以下の項目を除くと、考察範囲内の「～こむ」は 165 語で、用例数は 57104 になる。具体的なデータは表 7 に示した通りである。

表 7 『均衡』における 10 例以上の「～こむ」

NO.	「～こむ」	用例数	NO.	「～こむ」	用例数	NO.	「～こむ」	例数	NO.	「～こむ」	例数
1	持ちこむ	2136	43	滑りこむ	388	85	話しこむ	156	127	編みこむ	42
2	突きこむ	2125	44	運びこむ	379	86	雪崩れこむ	153	128	作りこむ	41
3	飛びこむ	2023	45	黙りこむ	376	87	炊きこむ	146	129	溶かしこむ	39
4	巻きこむ	1760	46	叩きこむ	360	88	惚れこむ	145	130	銜えこむ	38
5	乗りこむ	1657	47	押さえこむ	359	89	練りこむ	128	131	焼きこむ	37
6	飲みこむ	1655	48	絞りこむ	345	90	挟みこむ	125	132	畳みこむ	36
7	入りこむ	1653	49	流しこむ	344	91	減りこむ	124	133	拭きこむ	35
8	書きこむ	1554	50	織りこむ	335	92	張りこむ	123	134	転げこむ	33
9	落ちこむ	1536	51	しゃがみこむ	312	93	へたりこむ	118	135	垂れこむ	28
10	思いこむ	1521	52	嵌めこむ	301	94	払いこむ	113	136	縛れこむ	28
11	打ちこむ	1447	53	のめりこむ	297	95	振じこむ	113	137	縫いこむ	27
12	覗きこむ	1440	54	売りこむ	290	96	上がりこむ	109	138	釣りこむ	26
13	追いこむ	1227	55	倒れこむ	283	97	描きこむ	107	139	蹴りこむ	26
14	差しこむ	1207	56	刻みこむ	272	98	落としこむ	104	140	磨きこむ	26
15	組みこむ	1200	57	回りこむ	267	99	入れこむ	103	141	綴じこむ	24
16	吸いこむ	1147	58	呼びこむ	262	100	嵌まりこむ	96	142	掻きこむ	24
17	踏みこむ	1113	59	溜めこむ	259	101	住みこむ	89	143	握りこむ	24

18	盛りこむ	1090	60	咳きこむ	257	102	誘いこむ	87	144	鋳こむ	24
19	引きこむ	993	61	寝こむ	255	103	植えこむ	86	145	擦りこむ	23
20	押しこむ	963	62	紛れこむ	242	104	折りこむ	82	146	建てこむ	22
21	考えこむ	754	63	積みこむ	241	105	聞きこむ	81	147	掘りこむ	20
22	送りこむ	737	64	買いこむ	239	106	泊まりこむ	81	148	封じこむ	20
23	流れこむ	662	65	着こむ	237	107	混ぜこむ	79	149	たくしこむ	20
24	潜りこむ	649	66	冷えこむ	236	108	担ぎこむ	76	150	急きこむ	19
25	煮こむ	646	67	切りこむ	235	109	抱きこむ	75	151	誑しこむ	18
26	座りこむ	646	68	決めこむ	233	110	刈りこむ	75	152	降りこむ	18
27	詰めこむ	643	69	仕舞いこむ	225	111	背負いこむ	73	153	写しこむ	17
28	染みこむ	606	70	連れこむ	217	112	彫りこむ	71	154	殴りこむ	16
29	吹きこむ	603	71	屈みこむ	210	113	勢いこむ	70	155	削りこむ	16
30	駆けこむ	598	72	教えこむ	210	114	囲いこむ	70	156	梳きこむ	15
31	読みこむ	582	73	信じこむ	209	115	丸めこむ	69	157	洒落こむ	15
32	包みこむ	578	74	沈みこむ	201	116	揉みこむ	66	158	躍りこむ	14
33	割りこむ	567	75	漬けこむ	195	117	ずれこむ	61	159	しけこむ	14
34	注ぎこむ	550	76	刷りこむ	192	118	老けこむ	60	160	敷きこむ	13
35	放りこむ	532	77	攻めこむ	190	119	塞ぎこむ	56	161	這いこむ	13
36	埋めこむ	524	78	頼みこむ	176	120	覚えこむ	54	162	粧しこむ	12
37	溶けこむ	493	79	舞いこむ	175	121	立てこむ	50	163	写りこむ	11
38	抱えこむ	485	80	走りこむ	169	122	切れこむ	48	164	滲みこむ	10
39	投げこむ	434	81	眠りこむ	168	123	塗りこむ	45	165	啜りこむ	10
40	食いこむ	410	82	転がりこむ	168	124	繰りこむ	45	合 計		57104
41	逃げこむ	397	83	使いこむ	164	125	怒鳴りこむ	43			
42	忍びこむ	394	84	迷いこむ	162	126	詠みこむ	43			

これらの項目を本稿が提案する(表 6 を参照)によって整理すると以下ようになる。

(26) 『均衡』における「～こむ」の用例分類

a. A タイプ V1 が内部移動を含意しない

持ちこむ 飛びこむ 取りこむ 落ちこむ 打ちこむ 追いこむ 押しこむ
流れこむ 吹きこむ 駆けこむ 引きこむ⁹ 割りこむ 放りこむ 投げこむ
逃げこむ 忍びこむ 滑りこむ 運びこむ 叩きこむ 絞りこむ 流しこむ

⁹ 「引きこむ」の場合、「引く」が「物の端を持って手近の所に寄らせる」と「元の状態に戻る」といくつかの意味がある。動作の様態、手段を表す場合、A タイプに入るが、元の状態や位置に戻るのを表す場合、B タイプに入るので、A、B タイプの両方に入るとする。

織りこむ 回りこむ 呼びこむ 切りこむ 連れこむ 刷りこむ 攻めこむ
 舞いこむ 走りこむ 転がりこむ 雪崩れこむ 練りこむ¹⁰ 減りこむ
 落としこむ 折りこむ 担ぎこむ 丸めこむ 揉みこむ ずれこむ 切れこむ
 繰りこむ 怒鳴りこむ 詠みこむ 編みこむ 焼きこむ 畳みこむ 転げこむ
 縛りこむ 垂れこむ 縫いこむ 釣りこむ 蹴りこむ 擦りこむ 降りこむ
 殴りこむ 削りこむ 梳きこむ 躍りこむ 這いこむ 啜りこむ 迷いこむ
 突きこむ 誘いこむ 振じこむ

b. Bタイプ V1が内部移動を含意する

① V1が固着性を含意しない

乗りこむ 飲みこむ¹¹ 入りこむ 差しこむ 吸いこむ 潜りこむ
 詰めこむ 注ぎこむ 食いこむ 引きこむ のめりこむ 売りこむ 溜めこむ
 紛れこむ 積みこむ 挟みこむ 上がりこむ 入れこむ 住みこむ 聞きこむ
 混ぜこむ 泊まりこむ 囲いこむ 銜えこむ 搔きこむ 鑄こむ 掘りこむ
 写しこむ 敷きこむ 写りこむ 買いこむ 着こむ 教えこむ 沈みこむ
 滲みこむ 漬けこむ 張りこむ 払いこむ 絞りこむ 刈りこむ 覗きこむ
 巻きこむ 組みこむ 踏みこむ 送りこむ 読みこむ 盛りこむ
 包みこむ 抱えこむ 抱きこむ 背負いこむ 誑しこむ

② V1が固着性を含意する

染みこむ 埋めこむ 溶けこむ 嵌めこむ 嵌まりこむ 覚えこむ 塗りこむ
 溶かしこむ 仕舞いこむ 植えこむ 綴じこむ 貼りこむ 封じこむ 握りこむ
 押さえこむ

③ V1が姿勢変化を表す

座りこむ しゃがみこむ 倒れこむ 屈みこむ へたりこむ

④ V1が作成を表す

書きこむ 刻みこむ 描きこむ 彫りこむ

c. Cタイプ V1は示す状態への変化とその状態への固着

思いこむ 考えこむ 煮こむ 黙りこむ 寝こむ 冷えこむ 決めこむ
 信じこむ 眠りこむ 話しこむ 炊きこむ 惚れこむ 老けこむ 塞ぎこむ
 急きこむ 防ぎこむ

d. Dタイプ V1の反復行為により生じる状態変化(目標に向けて)

頼みこむ¹² 使いこむ 練りこむ 聞きこむ 作りこむ 拭きこむ 磨きこむ

¹⁰ 「練りこむ」は「ーこむ」が内部移動を表し、「練る」が様態・手段を表す場合、Aタイプに入るが、「水餃子の生地を丹念に練りこむ」の場合、Dタイプに入る。「歌いこむ/踊りこむ」などもそうである。

¹¹ 「飲みこむ」は二格を取らない例が多くある。しかし、内部移動が含意されるが、二格が現れないだけである。「水を飲み込む」を例にして説明すると、「水」が体の内部に移動するのは当然であるが、「水を体の内部に飲みこむ」は普通言わない。

¹² 「頼みこむ」は二格と共起しうるが、場所ではなく、対象を表わす二格名詞句と共起するの

洒落こむ 粧しこむ

しかし、すべての「～こむ」は上記のタイプに入るわけではない。「立てこむ」、「建てこむ」、「立ちこむ」は内部移動ではなく、着点領域に注目するので、上記のタイプに入らない。さらに、「しけこむ」は V2 が内部移動より、内部にいるまま外に出ないという意味なので、上記の動詞と同じように、特別な例として扱う。これらの動詞は「～こむ」の意味考察に役立つので、考察の対象とする。

データを観察すると、上記のように、B タイプ、即ち、V1 が内部移動を含意する「～こむ」が最も多く、その次は A タイプである。しかし、同じ B タイプに入る動詞でありながらも、他の言語との対照により、以下のような問題点が浮上する。

I.すでに 1.1.5 で提示したように、日本語では固着を含意する「植える」タイプ動詞は「～こむ」と結合できるのに対して、中国語では、＜種：植える＞は内部移動を表す方向補語＜～進＞ではなく、＜～上/在＞で表現される。ほかに、作成動詞などにおいても同様な現象が見られる。これは日本語における内部移動の概念はそもそも「存在・固着」の概念と繋がりやすいからであろう。このような概念上の繋がりが内部移動を表す複合動詞「～こむ」だけでなく、「～入る/入れる」の意味にも反映される。これについて、二章で単純動詞と複合動詞との繋がり及び「～こむ」の前項動詞の意味上の繋がりを考察する。

II.姿勢動詞の場合、下方向への移動を表す「座る」などは「～こむ」と結合できるが、上方向への移動「立つ」などはできない。この下方向への移動は生理心理表現にも繋がっている。これは日本語における内部移動概念の特徴の一つである。詳しく、二章で非移動動詞の V1 について考察する。

上記の 2 点のほかに、先行研究において「～こむ」の多義性についての考察も不十分なので、三章で副詞的意味として考察を行う。

で、A と B タイプの「～こむ」とは性質が異なる。

第二章 「～こむ」における内部移動の意味概念について

2.0 問題提起

複合動詞「～こむ」の基本義は内部移動を表すが、前項動詞との結合により、内部移動から存在・固着まで表せる。また、動作の移動様態を表さず、姿勢変化などを表す前項動詞は、中国語において内部移動を表す<～進>と結合できないが、日本語では「一こむ」と結合できる。これはなぜだろうかという疑問が生じる。さらに、後項動詞「一こむ」は内部移動から意味拡張して、「しっかり/深く」などの副詞的意味を含意する用例も数多く観察できる。以下に用例を挙げる。

- (27)a. 事務室に殴りこむ。
b. 木に模様を刻みこむ。
c. 庭に木を植えこむ。
d. 彼は信じこんでいる。

上記の例において、「殴りこむ」の前項動詞は移動の様態を表し、後項動詞「一こむ」は内部移動を表す。「刻みこむ」の場合は、「一こむ」は内部移動より、結果物の存在・固着を表す。さらに、「植えこむ」と「信じこむ」の場合、後項動詞は「しっかり/深く」のような副詞的意味を表す。一方、既に第1章で議論したように、中国語の場合は、内部移動を表す<～進>は内部移動しか表さず、固着性を含意する動詞と作成を表す動詞とは共起しにくい。このため、日本語における内部移動の意味概念が中国語と比べて、移動から固着までの広い範囲をカバーできるのではないかと推測され、「～こむ」を研究することによって、この推測を検証できると考えられる。さらに、なぜ「一こむ」はさまざまな動詞と結合できるのか、これらの前項動詞は意味上どのように繋がっているのかという問題点が浮上し、考察が必要である。

しかし、上記に挙げた諸現象について、先行研究においては用例を挙げるだけで終わることが多い。また、複合動詞全体の意味について考察を行っているが、前項動詞についてほとんど議論していない。このため、本稿においては、日本語における内部移動の意味概念を考察するには、「～こむ」だけを考察するのは不十分なので、まず、単純動詞「入る」について考察する。この考察により、日本語においては、内部移動の意味概念と存在が強く繋がっていることがわかる。さらに、「～こむ」の前項動詞の意味上の繋がりを研究することにより、「～こむ」における内部移動概念は<内部移動→存在→固着>になっていることがわかる。また、なぜ日本語において姿勢動詞などが「一こむ」と結合できるのかという問題点について考察を行ったが、簡単に言うと、日本語の方は「内向移動」を内部移動として捉える傾向が強いからであろうと推測できる。さらに、「一こむ」が副詞的意味を表

す用例が多いが、考察により、これは日本語に限られる現象ではなく、英語においては前置詞 “in”、“down” が「十分に/堅固に」のような副詞的意味を表す例があることがわかる。

2.1 節では、単純動詞「入る」を考察し、内部移動の意味概念と存在との繋がりを明らかにする。2.2.1 節では、移動を表す前項動詞を考察し、「～こむ」における＜内部移動→存在→固着＞という連続体について議論するが、2.2.2 節では、移動を表さない前項動詞を考察し、「内向移動」という概念について議論する。

2.1 内部移動表現と「存在」との繋がり

松田(2004)は「こむ」が「内部移動」と「その場への固着」の二つの意味的イメージをその根底に併せ持っている」と主張している。もし、この主張が正しいとすれば、なぜ「～こむ」はこのような性質を有しているのだろうか。一方、日本語における内部移動表現は「～こむ」のほかに、単純動詞「入る」の使用頻度も非常に高い。両表現における内部移動の意味概念が繋がっているので、本稿は先ず、単純動詞「入る」と後項名詞「～入り」の意味、さらに「入る」と「～入る/こむ」との繋がりを考察することにより日本語における内部移動表現と「存在」との繋がりを研究する。

2.1.1 「入る」の意味考察

2.1.1.1 主語名詞句と二格名詞句の対照による考察方法

本稿では、主に主語の位置にくる名詞句と着点を表す二格と結びつく名詞句を分類して考察する。先ず、影山(1999 : 99)は名詞の意味内容によって、以下のように二分類している(森山(1988)も参照)。

(28)a. モノ名詞(具体或いは抽象的個物)

鉛筆、医者、ライオン、学校、空気、水、言語学、愛情、知識

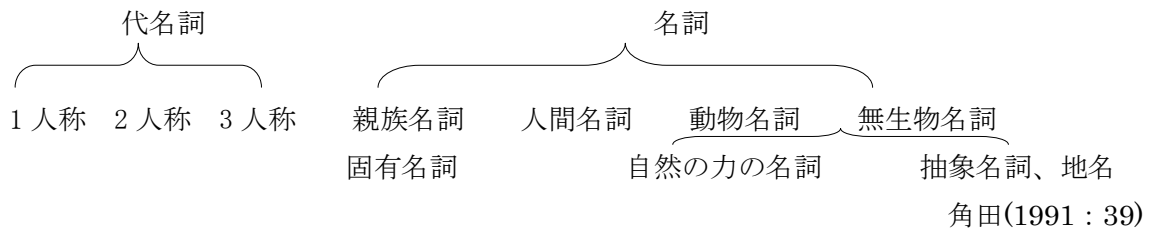
b. デキゴト名詞(行為や出来事)

遠足、会議、事故、オリンピック、音楽会、結婚式、選挙、身体検査、雪崩

影山(1999 : 99)

モノ名詞は個物名詞とも呼ばれ、結果・産物を表す名詞と場所を表す名詞などがあげられる。具象、抽象を問わずモノを表す名詞で、「ある場所に X がある/いる」や「机の上の鉛筆/琵琶湖の水/彼の知識」のような構文に見られるように、その存在は何等かの場所との関係で捉えられる。他方、デキゴト名詞は出来事、行為、活動などを表し、「4 時に教授会がある/さきほど地震があった」などのように、第一義的には場所より時間軸において認識されるものと考えられる(Jackendoff1983)。一方、角田(1991)は、Silverstein(1976)が提示した名詞句階層の上に、自身の考察を加え、名詞句階層を次の図 6 の様に表している。図における固有名詞は人間を指す固有名詞である。

図 6 シルバースティーンの名詞句階層



シルバースティーン自身は、この階層は動作者になりやすさの度合い及び動作の対象になりやすさの度合いを表すという。即ち階層で高い、左側に位置する名詞句は動作者になりやすいという。本稿では、「入る/入り込む」を考察するが、主語の位置にくる名詞は人間名詞、動物名詞、自然の力を表す名詞の他に、抽象名詞や結果・産物を表す結果名詞¹³などもあり、述語の意味が異なることもある。このため、上記の名詞階層と影山(1999)が提示した名詞分類を参考にして下記のように整理する。

(29)主語になる名詞句の分類

a. モノ名詞

- ①有生物（人称代名詞、親族名詞、人間を指す固有名詞、人間名詞、動物名詞）
- ②無生物（自然の力の名詞、抽象名詞、地名、結果・産物名詞など）

b. デキゴト名詞

また、「入る/入り込む」の基本義は内部移動を表すものであるため、二格と結びつく名詞は場所名詞が多いと考えられる。実質的な場所名詞は「場所」「位置」など空間のある一点を指すといえるが、それを規定するのは難しい。森山(1988)は、名詞の場所性を以下のように分類する。

(30)名詞の場所性のレベル

a. 絶対的な場所名詞（地名、集団、組織など）

b. 一定の空間を有する実質名詞であり、相対的に場所性が決定されるもの

車は *正門/正門のところ にある。

彼は 正門/正門のところ にいる。

c. 絶対的に非場所名詞（「青さ」、「正義」のような非実質名詞など）

¹³結果名詞(Result nominal)はプロセスの結果を表す(the output of process)。影山は「虫刺され、虫食い、haircut(髪型)、wallpainting(壁画)」などの例を挙げている。「haircut(髪型)とwallpainting(壁画)」は英語では動詞が名詞化されたものである。（Grimshaw1990:49、影山1999 : 119 を参考）

この絵のトーンの青さには、一種の悲壮感がある。→性質・関係を表す存在的な表現

(森山 1988 : 176-177)

(30)における「正門のところ」のように、名詞に、「上、下」のような空間名詞がつくと、場所性を獲得することがある。「前、近く」などは場所性の他に、「時」の性質を付与することができる。森田(1996 : 130) は、先行語をトコロ性(即ち場所性)に変える語彙として、「上、下、中、右、左、前、手前、後ろ、横、東、西、南、北」を、トキ性に変える語彙として、「前、あと、のち、次、時、折り、際、節、日、月、年、」を挙げている。場所名詞句の他に、「時」を表す名詞やデキゴト名詞も二格と結びつくので、本稿では着点を表わす二格名詞句を以下のように分ける。

(31)二格名詞句

a. モノ名詞

①「トコロ」名詞(絶対的な場所名詞、相対的な場所名詞、空間名詞と結合した名詞句)

②「トキ」名詞

③「トコロ・トキ」以外の名詞

b. デキゴト名詞

以上は主語の位置にくる名詞句と二格名詞句の分類を試みたが、次節では、「入る」と結びつく名詞句を考察する。

2.1.1.2 「入る」と結びつくガ格名詞句と二格名詞句による考察

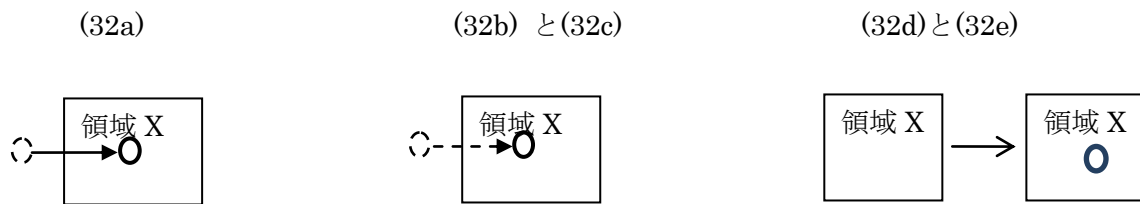
まず、「入る」の意味について、無生物と有生物が主語になる例を以下に挙げる。

- (32)a. 女は着物の裾を軽やかに翻しながら、さらに道の奥へと入っていく。(『均衡』『ニコライ盗撮』)
- b. そいつらの中には、こいつを追っかけてた警官も入っているんだ。(『均衡』『魔界都市ブルース』)
- c. 使いたいカードが入っているカテゴリのボタンをクリックします。(『均衡』『ウォレスとグルミットポストカード book』)
- d. 板塔婆の上部には刻みが五カ所入っていますが、これは、空・風・火・水・地という宇宙の元素を表しています。(『均衡』『臨済宗』)
- e. 基礎に構造クラック(ひび割れ)が入っていた。(『均衡』『地震でも安心な家』に住みたい』)

上記の(32)では「女」が有生物で、「入る」は道の奥への移動を表すが、(32)では主語「警官」も有生物であるが、「入る」は「～ている」形を取り、動作のニュアンスが薄くなり、存在の意味が顕在化する。即ち、この例においては、数人の中に、警官もいるという意味が読み取れるが、逆に警官がわざわざこの数人の中に移動する意味があるとは言い難い。

一方、(32)～(32)の主語が無生物である。(32)の「カード」が自ら移動先となる「カテゴリ」に移動するのは不可能であり、だれかがカードをカテゴリの中に入れるのは想像できる。即ち、動作主が存在するが、文中には直接明示されてない。「入る」の意味は存在だと考えられる。このように対象物が主語の位置に現れる例が多く、「瓢箪にワインが入っている」などがあげられる。この場合、「入る」の意味は、移動より、存在のイメージが強い。さらに「刻み/クラックが入っている」の場合は、対象物が「板塔婆」と「基礎」という領域内へ移動するという意味ではなく、「刻み」の作成、また、「クラック」の発生を表現するので、内部移動ではなく、状態変化を表すと考えられる¹⁴。上記の例における「入る」の意味を以下のように表示する。

図 7 「入る」の意味概念



上記のように、点線の○は移動前の位置を表し、実線の○は移動後の位置、或いは作成・発生の結果物を表す。また、→は内部への移動、あるいは状態変化を表すが、点線の場合は、内部移動の意味が背景化することを表す。このように、「入る」の中心的意味は内部への移動であるが、移動物の存在、或いは結果物の存在まで表現できる。この意味上の連続は以下のようにまとめられる。

(33) 「入る」の意味的連続体

内部移動 → (内部移動・)移動物の存在 → (作成・発生・)結果物の存在

「入れる」と結びつくヲ格名詞句を考察してみると、「入る」とほぼ同様な傾向が見える。

¹⁴ 「クラック」と「裂け目」がニ格名詞になる場合は、「内に向かってくぼむ」とも解釈されているが、考えてみれば、物体の表面の一部がその内部への方に向かって移動すると理解できる。この場合、物体の表面の一部が移動物になり、表面が発点になり、着点が移動物の内部になるので、通常の意味上の内部移動と同一視できず、内部移動より内向移動の方が適当かもしれない。これについて後節で詳しく議論する。

ただ、「入れる」は他動詞なので、内部への使役移動を表す。

(34)「入れる」

a. 使役内部移動

ボールに塩・胡椒を入れる。

b. 使役内部移動・移動物の存在

このポーチに翌日 1 日分の薬を入れています。

c. (作成・発生)結果物の存在

靴下は上部に一箇所ハサミで切り込みを入れました。

さらに考えてみれば、「部屋に入る」など具体的な内部移動を表す場合、「部屋の外」と「部屋の中」という対立が存在するが、上記の「カードがあるカテゴリに入っている」のような例の場合、「カテゴリ」は内部空間を有しているが、この文において移動が背景化しているため、外部と内部という対立が曖昧になってくる。また、「刻み/クラックが入っている」のような、内部移動の意味がほとんどなく、存在だけを表す場合、移動先が内部空間ではなく、物体の表面である。

(35)a. 板塔婆の上部の表面/?中には刻みが五カ所入っていますが、これは、空・風・火・水・地という宇宙の元素を表しています。((32)を参照)

b. 基礎の表面/?中に構造クラック (ひび割れ) が入っていた。((32)を参照)

このように、「刻み」など結果物の存在だけを表す場合は、「外部」という概念がもともとないので、「内部」との対立が存在せず、着点が内部空間ではなく、物体の表面になることは否定できない。このように、内部移動を表す動詞が内部空間ではなく、物体の表面を表す名詞と結びつく例は「入れる」にもみられる。

(36)シャネルのベージュ系ピンクのチークをニコッと笑った時に一番高い頬に丸くいれる。
(『均衡』『Yahoo!ブログ』)

次に、「入る」と共起する二格名詞句に関して、以下のような例が挙げられる。

(37)「入る」と共起する二格名詞句

a. 洋品店に入って、マリアさんがこのあたりにレストランはないか、とご主人に尋ねる。<トコロ>(『均衡』『交錯する文明』)

b. 七月に入って、迫り来る夏休みに向けて、私は対策を講じることになった。<トキ>(『均衡』『ガールミーツボーイ』)

- c. 彼女の唯一のグランド・ナショナルへの出場を果たし、一位に入った。＜他のモノ名詞＞（『均衡』『失われた革命』）
- d. 今日になって、三度目の休戦状態に入ったため、…＜抽象的な名詞＞（『均衡』『ゴーレムは証言せず』）
- e. 酔いのせいで、眠りに入るのは早い、寝ている間中、夢を見る。＜抽象的な名詞＞（『均衡』『ぐっすり眠る！37の方法』）
- f. 牛肉・オレンジ問題について、いつから日本政府との交渉に入るのか。＜デキゴト名詞＞（『均衡』『ルポルタージュ農業改革』）

上記の文を見ると、「入る」は場所への移動を表すほかに、「一位に入る」のような使い方もあり、「(一位に)なる」という意味がある。「一位」は位置の意味が何とか読み取れるが、抽象的な名詞の場合、「入る」は状態変化を表す。例えば、「休戦状態/眠りに入る」の場合は、完全に状態変化の意味になる。ほかには、「シュートの体勢/瞑想/独走状態に入る」がある。また、状態変化のほかに、「養子に入る」のように身分の変化を表す例もある。

「交渉に入る」は内部移動の意味が薄くなり、ある行動を取る、或いは、ある出来事を行うという意味を表す。ほかに、「調査/勘定/飼育準備/作業/換羽/仕事/支援/反省/検討/強制捜査/小走りに入る」などの例がある。このように、「入る」と組み合わさる二格名詞句を観察すると、「入る」の意味が内部への意味だけではなく、(37)と(37)のように変化を表す「～になる」と、(37)のように「する」の意味もある。

(38)二格名詞句から見た「入る」の意味

(空間、時間など) 内部への移動 → 状態への変化 → 動作の実行

さらに、他動詞「入れる」も内部への使役移動のほかに、動作の実行まで表現できて、「報告/連絡/コメント/予約を入れる」などが挙げられる。

上記の内容をまとめると、主語名詞句から見れば、「入る」は内部への移動だけではなく、内部における存在をも表せる。また、内部移動の意味がさらに弱くなり、作成された結果物の存在まで表現できる。また、二格名詞句を観察すると、「入る」は物理的空間、時間的空間、心理的空間への移動から、状態への変化、動作の実行まで表現できる。一方、他動詞「入れる」もほぼ同様な傾向が見える。

2.1.2 内部移動を表す複合動詞「～こむ/入る」との繋がり

「入る」の意味構造は内部移動を表す複合動詞「～こむ」、「～入る」にも反映されている。以下では「～こむ」を例にして説明する。

(39) 「～こむ」と「入る」の意味上の繋がり

- a. 前項動詞が動詞様態・手段を表し、動詞全体が内部移動を表す
流れこむ、駆けこむ、殴りこむ、押しこむ、打ちこむ、忍びこむ、攻めこむ
- b. 前項動詞が内部移動を含意し、移動後の状況が焦点化される
入りこむ、植えこむ、埋めこむ
- c. 前項動詞が状態変化、或いは、作成を表す
眠りこむ、座りこむ、倒れこむ、信じこむ、老けこむ、冷えこむ、
膨りこむ 刻みこむ 書きこむ 作りこむ
- d. 前項が名詞で、複合語全体が「～をする」という意味になる
咳こむ

複合動詞「～入る」の方も、「流れ入る」、「駆け入る」、「寝入る」、「咳き入る」などの例が観察できる。このように、「入る」の意味構造は内部移動を表す複合動詞にも反映されているのである。

このように、基本的には日本語における内部移動表現には、共通的な部分があると考えられる。この共通的な部分とは、内部移動の概念が移動から（内部移動・）移動物の存在、（働きかけ・）結果の存在までを含意し、着点が空間から状態への抽象化ということである。さらに、存在だけに注目する場合、場所の内部空間を要求しなくなり、二格名詞句が物体の「表面」を表す用例もある。一方、「～こむ」などは「入る」と重なりあいながら、その独特の意味拡張が行われている。これについて、2.2 節で議論する。

2.2 「～こむ」における＜内部への移動→存在→固着＞という意味連続体

2.1 節で述べたように、「～こむ」と結合する動詞は様態・手段・付帯状況を表すものだけでなく、姿勢動詞と作成動詞、状態変化を表す動詞とも結合できる。これらの動詞との結合により、複合動詞「～こむ」は、物理的空間および状態という抽象的な空間への内部移動から移動後の存在状況まで表現できて、＜内部への移動→存在→固着＞という意味的連続体をなしている。以下では、先ず、「～こむ」と結合する前項動詞についてさらに詳しく考察する。「～こむ」と結合する動詞を移動動詞と非移動動詞に分けられるが、次節では、先ず、移動動詞について考察を行う。

2.2.1 V1 が移動動詞の場合

「～こむ」の中心的な意味は内部移動を表すが、移動の視点から考察を行った研究が少ない。移動を表す前項動詞の語彙化のパターンを考察することにより、「～こむ」と結合する前項動詞の意味上の関連性を明確にすることが可能であり、また、この意味上の関連性は「～こむ」の意味拡張に関連しているので、先ず、「～こむ」と結合する移動動詞の語彙化のパターンを考察する必要がある。

2.2.1.1 「一こむ」と結合する移動動詞のパターン

移動を構成する諸要素については、松本(1997: 128、129)によると、移動物、移動の経路、そして移動の継続時間が移動を規定する必須要素である。ここで経路とは、移動の開始地点から終了地点まで移動物を通る地点のすべてを結んだものである。したがって、経路には起点、通過点、着点があるほかに、方向性が表現されることがあり、一般に方向関係と基準位置から定義される。

このほか、移動に付随して起こるいくつかの出来事があり、様態、附帯状況、附帯変化、原因があると述べている。様態は移動に伴う手足の動き、速度、手段(乗り物など)のように、移動と直接関わる付随的な要素であるのに対して、歌いながら歩く場合の「歌う」とは移動から独立した出来事を附帯状況という。また、しばしば移動に伴って状態変化が起こる場合もある。着点にある事物に移動物が付着する場合などである。これを附帯変化という。さらに、移動を生じさせる外的な要因を原因とするが、これには意志や手足の動きなど、移動体自体に内在する要因は含まない。

移動の動詞は移動の事実を表現するが、そのほかに、様態や経路関係などが移動の事実とともに、1つの動詞に包入されている、或いは語彙化されているという(Talmy1985などを参照)。日本語の移動動詞の語彙化のパターンについて、松本(1997)は以下のように提示している。

(40) 日本語の移動動詞の語彙化のパターン

a. 方向性、経路位置関係の包入

方向性：行く、来る、登る、下る、下がる、上がる、降りる、落ちる、沈む、戻る

経路位置関係：越える、渡る、通る、過ぎる、抜ける、くぐる、入る、着く、出る

b. 様態と附帯状況の包入

様態：歩く、走る、駆ける、這う、滑る、転がる、跳ねる、舞う、泳ぐ、飛ぶ

(日本語においては附帯状況を単一形態素の移動動詞に包入することはできない。)

c. 附帯変化と原因の包入

取れる、ちぎれる、はがれる、付く、くつつく、刺さる、はまる、付着する

(松本 1997: 141-144)

上記は自動詞の場合についてであるが、用例を観察すればわかるように、「一こむ」と結合する自動詞は以下のようなである。

(41) 「一こむ」と結合する自動詞のパターン

a. 方向性、経路位置関係の包入

落ちる、沈む、入る、回る

b. 様態と附帯状況の包入

走る、駆ける、這う、滑る、転がる、跳ねる、舞う、泳ぐ、飛ぶ、潜る、流れる、
急ぐ

c. 附帯変化と原因の包入

刺さる、はまる

上記のように、「ーこむ」と結合するのは様態を表す自動詞は 12 語、経路と附帯変化を表す動詞は 2 語ある。そして、「ーこむ」と結合して附帯変化を表す動詞は付着を表す。一方、使役移動動詞の場合もほぼ同じ傾向が見えるが、先ず、松本(1997)が提示した使役移動動詞におけるパターンを以下のようにまとめる。

(42) 日本語の使役移動動詞の語彙化のパターン

a. 経路位置関係の包入

上げる、下げる、降ろす、落とす、帰す、戻す、進める、入れる、出す、抜く

b. 使役の手段の包入

投げる、ほうる、蹴る、打つ、送る、運ぶ、押す、引く、引っ張る、取る、誘う

c. 様態の包入

飛ばす、転がす、滑らす、流す、浮かす、歩かす、走らす、泳がす

d. 附帯変化の包入

取る、除く、付ける、くっつける、はめる、貼る、積む、詰める、塗る、刺す

(松本 1997 : 169-172)

上記の枠組みを参考にして、「ーこむ」と結合する他動詞のパターンを以下のように提示する。

(43) 「ーこむ」と結合する他動詞のパターン

a. 経路位置関係の包入

落とす、入れる

b. 使役の手段の包入

投げる、ほうる、蹴る、打つ、送る、運ぶ、押す、引く、引っ張る、取る、誘う、
取る

c. 様態の包入

流す

d. 附帯変化の包入

付ける、はめる、貼る、積む、詰める、塗る、刺す

このように、「一こむ」と結合する他動詞においては、使役の手段を表す動詞がもっとも多い。ほかに、経路位置関係と様態、附帯変化を表す用例もあるが、附帯変化を表す他動詞は自動詞と同じように、いずれも離脱ではなく、全部付着を表すものである。

このように、松本(1997)が提示したパターンに基づいて、先ず、「一こむ」と結合する前項動詞のパターンを考察したが、実は「～こむ」と結合する動詞は心理・生理を表す、移動動詞以外の動詞がある。このため、「～こむ」の前項動詞を以下のように分ける。

(44) 「一こむ」と結合する前項動詞

I 移動動詞

- a. 経路位置関係の包入
- b. 様態・附帯状況・手段の包入
- c. 附帯変化(付着)の包入

II 非移動動詞

「一こむ」が経路、様態などを表す動詞のほかに、付着を表す附帯変化動詞とも結合するため、その前項動詞が＜移動→固着＞という連続体をなすと言える。以上は移動の諸要素による分類であるが、様態・附帯状況・手段及び経路を表す動詞が前項動詞になる場合、後項動詞「一こむ」が内部への移動を表し、動詞と結びつく二格名詞句が基本的に内部空間を要求するのに対して、「入れる」のような内部への移動という経路が語彙化された場合、また、附帯変化が語彙化される場合、内部空間を要求しない用例が観察できる。この場合、後項動詞「一こむ」が着点における位置を焦点化し、或いは、その焦点化を強める働きをする。また、同じ二格を取るとしても、移動ではなく、作成を表す動詞まで「～こむ」の前項動詞になれる。この場合、移動物がないので、移動動詞の枠組みには入らない。この場合の「～こむ」は結果状態を焦点化させると考えられる。次節では、二格名詞句による考察を行い、「～こむ」と結合する前項動詞の連続体をさらに明確にする。

2.2.1.2 V1における「付着・固定」の意味について

前述のように、「～こむ」の前項動詞と共起する二格名詞句が場所を表す場合、内部空間を要求するのは一般的であるが、「付着・固定」の焦点化に従い、内部空間を要求せず、物体の表面を表す用例も観察できる。さらに、「付着・固定」が焦点化される場合、移動の枠組みを超えて、二格名詞句が着点を意味しない用例も収集できた。以下は、前項動詞の「入れる」、「植える」、「塗る」、「綴じる」、「刻む」を例として説明する。

(45)a. 彼がペンを鞆に入れた。

b. 彼は庭に木を植えた。

c. 彼は壁にペンキを塗る。

- d. 彼はファイルを綴じる。
- e. 彼は壁に漢字を刻んだ。

先ず、「ペンを鞆に入れる」という例についてであるが、対象物「ペン」が鞆の外から、「鞆」の中に移動されて、移動先が鞆の内部空間である。ペンが鞆の中に存在することがいうまでもないが、そこに固着する意味は、前後の文脈がないと、読み取りにくい。次に、「庭に木を植える」の例であるが、対象物の「木」の一部が土の中に埋められ、そこで固着させ、成長するという意味がある。このため、「植える」の意味は移動だけではなく、固着を指定している。

「塗る」は「植える」と同じように固定の意味が強い。着点の「壁」の内部に移動するのではなく、その表面にくっつけて、固定させるのが動作主の目的である。「植える」の方は着点に三次元的な内部空間を要求しているが、「塗る」はそれを要求していない。

「入れる」、「植える」、「塗る」の三例は着点が存在しているが、「綴じる」の場合は、着点が予め存在していないのである。「ファイルを綴じる」はファイルを一つにまとめるという意味であり、綴じる前には、着点があるとはいえない。また、「綴じる」の場合は、移動の意味が弱く、固定の意味が強い。

さらに、「刻む」の方は移動の意味がないと言える。壁を対象物として働きをかけて、壁に漢字を作成し、その結果、漢字が壁の表面に残る。漢字が作成の産物なので、移動事象が成立しないのは疑いがない。

また、固定の程度を考えると、「入れる」はもっとも弱く、移動の意味が中心になっており、ペンを鞆の外に移動させるのはできるが、「刻む」はもっとも強く、結果物の漢字をほかの場所に移動させることはありえない。しかし、取り除くことが可能である。「植える」、「塗る」、「綴じる」はその間にあり、それぞれの反対的な意味は、「抜く」、「剥がす」、「外す」になっている。「植える」と「抜く」は「土の中に入れる」と「土の外へ引っ張って取る」という意味上の、「中」と「外」との対立が成立しているうえに、「つけている状態」と「離脱している状態」という対立関係をもなしている。「塗る」と「剥がす」、「綴じる」と「はずす」は後者の対立関係しかない。これらの固定を含意する動詞は「こむ」のほかに、付着を表す「つける」とも結合できる。「植えつける」、「貼りつける」、「綴じつける」、「刻みつける」のような複合動詞も存在し、「～こむ」の意味に近い。本稿では、事象のタイプを移動事象とほかの事象に分けるが、移動事象を[+MOVE]、ほかの事象を[-MOVE]とする。また、対象物と着点との関係を、内部空間[IN]、表面[ON]に分ける。さらに、付着・固定の意味を[FIXED]として捉えるが、上記五語の意味を以下のように示す。

表 8 「一こむ」と結合する二格をとる前項動詞の意味の連続体

前項動詞	事象のタイプ	着点の特徴	付着・固定
入れる	[+MOVE]	[+IN]	[−FIXED]
植える	[+MOVE]	[+IN]	[+FIXED]
塗る	[+MOVE]	[+ON]	[+FIXED]
綴じる	[+MOVE]	着点が予め存在しない	[+FIXED]
刻む	[−MOVE](作成)	[+ON]	[+FIXED]

このように、「～こむ」の前項動詞自身が移動から固着までの意味上の連続体をなしていると言える。さらに、固着の意味が強くなるに従って、移動動詞の場合は、着点の内部空間を要求しなくなる。「刻む」のような移動動詞の枠組みに入らない動詞は、その結果物が物体の表面に存在する意味を表し、固着の意味から「一こむ」と結合できるようになると推測できる。「固着」が焦点化される用例として、作成動詞「刻む/彫る」などのほかに、「押さえる」と「張る」の例がある。

(46) 「固着」だけを表す用例

- a. 犬を押さえる。
- b. 敵の活動を張る。

「押さえる」は物が動かないように、押しつけて力を加えるという意味であり、「一こむ」と結合しても、その意味を受け継ぎ、動かない状態を維持するという意味を表す。この場合、状態への固着を表す。一方、「張る」は見張りをする、注意深く監視する、即ち、動作主の視線、注意力が対象物に固着するという意味を表す。この二語は、二格名詞句がなくて成立し、「一つける」とも結合できる。このように、「一こむ」は二格を要求せず、状態への固着を表す動詞とも結合する。このため、「～こむ」の前項動詞の連続体を以下のように整理できる。

表 9 「ーこむ」と結合する V!は移動動詞から非移動動詞への連続

意味上の連続	<div> <div>内部移動</div> <div>←</div> <div>→</div> <div>付着・固定</div> </div> (ニ格が内部空間を要求する) (ニ格が内部空間を要求しない、或いはニ格がない) (「～つける」と重なり合う)					
	典型的な移動動詞	非典型的な移動動詞(着点への付着)			非移動動詞	
	<入れる>	<植える>	<塗る>	<綴じる>	作成動詞	ほか
	吸う、注ぐ	埋める	貼る	綴じる	刻む、彫る	押さえる、張る
表現の焦点	使役移動	使役移動・固着			働きかけ・作成物の存在	状態変化・動作の実施

2.2.1.3 「ーこむ」との複合による「付着・固定」の焦点化

前節の考察により、「ーこむ」と結合する移動動詞は、内部移動の意味が弱くなるかわりに、「付着・固定」の意味が強くなる用例が観察できる。これらの動詞が「ーこむ」と複合すると、新しい意味が生じると考えられる。

まず、単純動詞<入れる>の場合は、代表的な用法として、空間内部への使役移動を表すが、「ーこむ」と結合すると、内部への移動に注目する例もあれば、移動後の状態に注目する例がないとは言えない。

(47)<入れこむ>

- 以下のところに順番で写真を入れ込んで、眺めてください。(『均衡』『Yahoo!ブログ』)
- 粉をバターに入れ込むようにして混ぜ合わせます。(『均衡』『お菓子作り入門』)
- 二世帯分離型 ひとつの建物の中にふたつの住宅を入れ込んだパターン。(『均衡』『私、親の介護はできそうもありません。』)

上記の例を見ると、「写真を入れ込む」の場合は、内部への移動を表すが、「粉をバターに入れ込む」の場合は、「粉とバターを混ぜて、バターが粉の深くところに入る」という意識が強い。また、「建物に住宅を入れ込む」の場合は、内部への移動ではなくて、「設置、設ける」の意味があり、存在の意味が強いといえる。「入れ込む」と比べて、<植えこむ>などは単純動詞より着点への固着のニュアンスが強くなる。

(48)＜植えこむ＞

- a. 池の形ができれば、斜面に植物を植え込む。(『均衡』『ドゥーパ!』)
- b. ところがこの珍種のランは植えこんでみると、非常に頑丈だった。(『均衡』『ザ・ベスト・オブ・ジョン・コリア』)
- c. そこは周囲をシンダーブロックの高い塀に囲まれていて、塀の上にはガラスの破片が植え込まれていた。(『均衡』『銃を持つ男』)

上記の例における「植え込む」はほぼ「植える」および「植え付ける」と互換できるが、「植え込む」と「植え付ける」の方は「しっかり」のニュアンスが強い。このようなニュアンスがあるからこそ文脈によって不自然になる場合がある。松田(2004)は以下のような例を出している。

(49)*花壇が整地されるまでの間、チューリップを鉢に植えこんでおいた。

→花壇が整地されるまでの間、チューリップを鉢に植えておいた。

(松田 2004 : 178)

松田(2004)の議論によると、「植えこむ」はしっかりすぐ掘り出されないように植えるという意味である。上記の例は借り植えを表すので、「植え込む」は使えないということである。

ほかに＜刻み込む＞は「深く/しっかり」を含意して、＜押さえ込む＞などは「しっかり」を含意している。

(50)＜刻み込む/押さえ込む＞

- a. その後、学問をしなればいけないということを、魂に深く刻み込みました。(『均衡』『愛、無限』)
- b. 二十年の歳月をかけて一人の少女の生を見つめてきた長倉の視線が、しっかりと刻み込まれている。(『均衡』『アサヒカメラ』)
- c. 私は胃からこみあげてくる脂肪の塊を必死で押さえ込んだ。(『均衡』『玩具館』)
- d. しかし、がっしりと押さえ込まれて動けない。(『均衡』『フリージア』)

上記の例のように、「刻み込む/押さえ込む」は単純動詞より固着性が強いが、文脈において、「深く/しっかり/がっしり」などの副詞句と共に起して、固着性を強調する例が多く観察できる。これらの複合動詞は、単純動詞との言い換えられるもの多い。言い換えても、文全体が自然に成立するが、ただ「深く/しっかり」というニュアンスがなくなる。

上記の内容を以下の表のようにまとめられる。

表 10 V1 の意味と「ーこむ」と複合後の意味変化について

単 純 動 詞	内部移動 ←————→ 付着・固定				
	典型的な移動動詞	非典型的な移動動詞(着点への付着)			非移動動詞
	<入れる>	<植える>	<塗る>	<綴じる>	<刻む> <押さえる>
	移動の動作 —————→ 移動の動作・移動後の状態に注目 —————→ 結果に注目				
複 合 動 詞	移動の動作 —————→ 移動の動作より移動後の状態に注目 —————→ 結果に注目				
	移動後の状態				
	<入れこむ>	<植えこむ、塗りこむ、綴じこむ>			<刻み込む、押さえこむ>
「 ～ こ む」	移動の動作に注目するが、着点への深部移動など、移動後対象物が着点における位置関係に注目する例が観察できる。	しっかり動作を行うという意味がある。移動後、対象物がしっかり着点に存在するという意味を含意する。			作成動詞の場合、「深く、しっかり」の意味がある。「押さえる/張る」の場合は、「対象物を見張る」という動作、または「相手が動けない状態」を維持するという意味が読み取れる。

しかし、すべての移動動詞が「ーこむ」と結合後、結果状態に注目するというわけではない。「乗り込む」を例にすると、以下の例が挙げられる。

(51) 急いで、車に乗り込み、その場を立ち去った。(『均衡』『21 世紀の花咲爺』)

このように、「乗る」は、「入れる」と同じように、着点が内部空間を要求するが、「ーこむ」と結合しても、「深く」または「しっかり」の意味がでないのである。このため、後項動詞「ーこむ」の意味は以下のようにまとめられる。

(52) 後項動詞「ーこむ」の意味について

- 前項動詞は移動の様態、手段などを表し、「ーこむ」は内部移動を表す。
- 前項動詞が内部へという経路が語彙化される場合
単純動詞に固着の意味がない場合、内部への移動動作を強調する、或いは、「深く」「しっかり」の意味が生じる。固着の意味がある場合、固着の意味が強調される。
しかし、「乗る」などは「ーこむ」と結合しても動作に注目する例もある。(「深く

「/しっかり」などの副詞的意味については三章で議論する。)

- c. 「刻む」、「押さえる」のような非移動動詞の場合、「深く/しっかり」の意味が生じる。

物理的な移動を表す「入れこむ/植えこむ」などの場合は、典型的な着点が基本的に物理的な空間を表すが、「信じこむ」などの場合は、抽象的な着点を取ると考えられる。このような心理・生理を表す動詞を非移動動詞とするが、これらの動詞が後項動詞「～こむ」と複合すると、結果状態が焦点化されると推測される。

2.2.2 V1が非移動動詞の場合

2.2.2.1 「一こむ」と結合する非移動動詞のタイプ

前節では、「一こむ」と結合する動詞は「存在・固着」の意味概念により、移動動詞から非移動動詞まで連続していると議論したが、この非移動動詞はさらに詳しく分類できる。まず、前節で作成を表す「刻む」タイプについて議論したが、ほかに、姿勢変化を表す動詞と、心理・生理への移動を表す動詞がある。前者は「座る/倒れる」などがあり、後者は「信じる」、「黙る」、「老ける」などが挙げられる。また、このほかに、「考える」、「冷える」などがある。以上をまとめると、「一こむ」と結合する非移動動詞のパターンは以下のようになる。

(53) 「一こむ」と結合する非移動動詞

- a. 作成動詞
- b. 姿勢動詞
- c. 心理・生理を表す動詞
- d. 思考活動を表す動詞
- e. その他(「冷える」など)

次節においては、なぜこれらの非移動動詞が「一こむ」と結合できるのか、また「一こむ」と複合すると、どのような意味変化が生じるのかについて議論する。辞書から取った英語の用例も用いて、日本語と対照的に研究を進める。

2.2.2.2 作成動詞

前述のように、作成動詞が「一こむ」と結合できるのは、日本語において、内部移動表現が存在と繋がっているからで、存在・固着の意味が顕在化すると、内部空間を要求しなくなる。これは、IN と ON との限界が曖昧になることにも関係する。このような現象は日本語に限らない。たとえば、英語の“carve”も“in”と“on”と両方とも結びつく。

(54)a. Carve a design in wood. (木に模様を彫る)

b. Carve one's name on [in] a tree. (木に名前を刻む)

(『e プログレッシブ英和中辞典』)

上記の例のように、木の表面を捉えるか、内部空間を捉えるかは言語によって異なると考えられる。英語・日本語とは対照的に、中国語では<在 L 刻上：刻み込む/carve on>で表現する。

(55)在树上刻上/*把图案刻进树上。(木に模様を彫る)

上記の例に示されるように、中国語では<刻：彫る>は内部移動表現<～进>とは共起せず、結果物の残存を表す<～上>と共起する。

一方、「彫る/刻む」の場合、石などの素材において、彫られた部分はほかの部分より素材の内部に向かってくぼんだという解釈も成立する。「彫る/彫り込む」の用例を観察すると、以下のような差がある。

(56)a. (ケースの)裏蓋にロゴを深く彫る/彫り込む。

b. 石で馬の石像を彫る/*彫り込む。

上記の例に示されるように、「裏蓋」が二格名詞になる場合、「彫る」と「彫り込む」は両方とも使えるが、二格名詞がない場合、即ち、物体の表面へ働きかけるという意味がない場合、「彫る」が用いられるが、「彫り込む」は不自然になる。このため、「彫る」の場合は、「一こむ」と結合する場合、二格を要求し、内部移動の意味が受け継がれる。これは「彫る」と「彫り込む」の相違と言える。このように、日本語では、「彫る/刻む」の場合、「内部に向かってくぼむ」という理解も成立するが、中国語では、内部移動より、表面と固着の認識が強い。さらに、「彫り込む/刻み込む」の場合は、「深く」、「しっかり」という副詞的意味が生じると、母語話者が判断している。

しかし、全ての「一こむ」と結合する作成動詞は内部移動を含意するわけではない。内部移動を含意しない動詞は「一こむ」と結合すると、意味が変化し、<達成>の意味が生じる例がある。以下は「作りこむ」と「書きこむ」を例にして説明する。

(57)a. 車体各部はよく作り込まれている。(『均衡』『Yahoo!ブログ』)

b. 舞台を作り込むことによって、演出が強化され、より面白いアクションが作られる好例である。(『均衡』『名探偵コナン全映画パーフェクトガイド』)

c. 文章は書き込んでいくことでひかってくるものでしょう。(姫野 1997 : 72)

上記の例における「作り込む」は、「念入りに作る」という意味になり、理想的な目標への達成を含意し、通常の意味の内部移動とは言えない。また、「書き込む」も「文章/論文を書き込む」のような例があり、達成を含意すると理解できる。

上記の議論をまとめてみると、作成動詞が「一こむ」と結合できるのは、二つの理由があると考えられる。一つは前述のように、日本語における内部移動の意味概念が存在・固着に繋がっていることであり、もう一つは、「彫る」は物体の表面(<SURFACE>)が内部にくぼむと理解されることがあるので、内部移動として捉えうることである。ただし、すべての作成動詞は内部移動を含意するわけではない。「作る」などは「一こむ」と複合すると、内部移動を表さず、達成を含意するようになる。

2.2.2.3 姿勢動詞

姿勢動詞には「座る」、「倒れる」、「かがむ」、「立つ」などがあるが、「一こむ」と結合できるのは、「立つ」のような上方向への移動を表す動詞ではなくて、下の方向、或いは体の内部への移動を表す動詞であり、「座る/倒れる」などが挙げられる。このような動詞を英語で解釈すると、その方向性が明らかになる。「座る」は“sit down”、「倒れる」は“fall down/come down”、「かがむ」は“bend down”、「しゃがむ」は“squat down”になり、いずれも“down”と共起する。中国語では、<坐下>、<躺下/倒下>、<弯下>、<蹲下>になり、英語と同じように、下への移動を表す<～下>と共起する。これは、日本語の内部移動表現の特徴の一つとなる。このような下方向への移動を、姫野(1999)は「自己の内部への移動」とするが、本稿においては、内向移動とし、姫野(1999)の議論を踏まえて分析を深める。

2.2.2.3.1 姿勢動詞と内向移動

すでに触れたように、英語と中国語においては、姿勢動詞は下方向への移動を表す前置詞と方向補語をとることが多い。これに対して、日本語では内部移動を表す「一こむ」と結合する。なぜ日本語では、姿勢変化が内部移動表現に繋がっているのかという疑問が浮上するが、先行研究を調べてみると、日本語母語話者は下方向への姿勢変化を内部移動として理解していると言える。例えば、姫野(1997)は内部移動を七グループに分けており、「自己の内部への移動(自己凝縮体)」というグループで、「かがみこむ」などの「姿勢動詞+こむ」の例を出している。このグループは、凝縮の方向とそれに伴う形態変化の様相によって次の五つに分けられている。

(58) 自己の内部への移動(自己凝縮体)

- ① 主体の一部が自己の内部に向かって陥没する¹⁵。

¹⁵ ①に上がっている「～こむ」は「へこむ」のほかに、『均衡』でほとんど用例が観察できなかったため、本稿においては考察しないことにする。「へこむ」は用例が 544 例収集できたが、複合動詞ではなく、次

- くぼみこむ、ひっこむ、くびれこむ、めりこむ、へこむ
- ② 主体、あるいは対象の一部が基底部に向かって沈下する。
落ちこむ、崩れこむ、沈みこむ、かがみこむ、へたりこむ、押さえこむ
- ③ 主体あるいは対象の一部同士が重なりあい、形態が縮小する。
まくれこむ、折れこむ、まくりこむ、折りこむ
- ④ 対象の全体が中心に向かって凝縮する。
畳みこむ 絞りこむ
- ⑤ 主体あるいは対象の一部の削除によって形態や量が縮小する。
はげこむ、きれこむ、刈りこむ、切りこむ

(姫野 1997 : 67-68(一部の例を省略した))

上記のように、姫野(1997)の議論においては、「かがみこむ」などを「基底部に向かって沈下する」と解釈し、自己の内部への移動とする。本稿においては、このような移動を通常の意味上の内部移動と区別し、「内向移動」と名付ける。内部移動は移動物が外部から着点の内部への移動、或いは、使役移動であり、外と内との対立がはっきりしており、移動物と着点が通常二つの存在物である。が、内向移動の場合は、移動物と着点が同じ存在物であり、内と外との対立が相対的であり、日本語における内部移動概念の大きな特徴であると考えられる。また、「かがみこむ/しゃがみ込む」は、ほかの姿勢変化動詞「たおれこむ/すわりこむ」と同じく、中国語や英語で下方向への移動として捉えられているため、このような内向移動を、内部の下方向への移動とも言えよう。

(58)に示されるように、姫野(1997)は内向移動をいくつかの現象に分類しているが、これらの現象がお互いにどのように繋がっているかについて議論していない。「一こむ」と結びつく姿勢動詞はいずれも、元の姿勢より基底部に近づき、高さが減少する。このような基底部への移動・変化は姿勢動詞に限らない。(58)の⑤で挙げられた複合動詞の「刈り込む」、「禿こむ」を考えると、姿勢動詞と「一こむ」との結合に反映される内部移動の捉え方と同質であり、以下のような例が挙げられる。また、「割りこむ」、「冷え込む」は「自己の内部への移動(自己凝縮体)」に挙げられていないが、内向移動として理解できるので、この2語についても用例を出して説明する。

- (59)a. 枝を幹まで刈り込んだ老木のように、ときには茎のほうが傘より幅が広いという分厚いものまである。(『均衡』『シベリア横断鉄道の旅』)
- b. そら赭顔(あからがほ)の額の深く禿げ込んだ、正直さうな老人さ。(『日本国語大辞典』2013-11-17)
- c. 昨日の日経平均の終わり値は一万三千円を割り込んでしまいました。(『均衡』『国会会議録』)

語になっていると判断しているので、考察の対象としない。

d. 気温が一時冷え込んだこともある。(『均衡』『Yahoo!ブログ』)

先ず、「刈り込む」の例についてであるが、「枝を幹まで刈り込む」の場合は、人間の「座り込む/かがみこむ」とはほぼ同じイメージである。「座り込む/かがみこむ」は下の方向へ移動により、身体の高さが減り、自分の内部に向かって移動するとすれば、「木を刈り込む」も全く同様に、木の枝の部分、即ち、高い部分が刈り込まれて、高さが幹まで低くなると理解できる。ほかに、「髪を刈り込む」もよく使われているが、髪の長さが減り、その内部に向かって長さが増えたとはいえない。このように、姿勢動詞の場合は、内部移動の意味は「高さが減る・身体の下の方へ移動する」と解釈すれば、「刈り込む」の場合は「高さ/長さが減る・物体(木と髪など)の下の方へ移動する」と解釈できる。

このような高さ、長さの減少は「禿こむ」にも反映されている。「額が禿こむ」の場合は、髪の量の減少である。一方、「割り込む」は、取引相場で相場がある値段より安くなるという意味であり、値段の減少を表す。「終わり値が一万三千円を割り込む」は、値段が安くなり、一万三千円以下になる意味なので、「値段の高さが減る・値段の下の方へ移動する」と解釈できる。値段が「高い」位置から「安い」位置になり、下の方向への変化と認められる。一方、単純動詞「割る」は「一定数に達しないで下回る。ある水準以下になる」という意味があり、「水準の下に位置付けられる」を含意し、「一こむ」と同じ意味項があると言える。「割る」が「一こむ」と結合することにより、「値段が安くなる」という意味が生じるのは偶然ではなく、「割る」の＜水準の低落＞という意味を受け継いだからであると考えられる。このような共通点があるからこそ、「割る」と「一こむ」と結合できるのではないと考えられる。

ほかに「冷えこむ」もこのグループの動詞に入ると考えられる。「冷えこむ」は「高い→低い」という温度変化を表し、ほかに、「景気/消費が冷え込む」などの例がある。この四つの動詞に共通する意味特徴は「(高さ/量の)減少・低い方向への移動/変化」である。以下では＜減少・低落＞と記す。

さらに、このような「減少・低落」の意味は高さや値段と量以外に、心理表現にも表れる。例えば、「落ち込む」は「落ちて中の方へ入る(fall in/into)」と、量や価格の減少、さらに、「気持ちがめいる(feel down)」と二つの意味がある。英語の方は、内部移動を前置詞“in”、情緒の低落を“down”で表し、中国語の方は内部移動を＜V+进＞、量や価格の減少を＜減少：減少する＞、気持ちの低落を＜消沈：意気消沈/低落：気持ちがめいる/沉重：重い＞で表すのに対して、日本語の方はいずれも「～こむ」で表現する。

(60)a. 深い窪地に落ち込み、地下の暗闇よりももっと不吉な、純白の雪に囲まれていたにちがいない。(『均衡』『モーパッサン短篇選』)

訳文：(他) 跌进深谷，被纯白的雪包围，这雪比那底下的黑暗更为不吉。

b. ところが、バブル崩壊を境に売上が落ち込み、業績は急速に悪化した。(『均衡』『戦

略的事业撤退』)

訳文：但是，经济泡沫幻灭，之后销售额锐减，业绩急速恶化。

c. 敗者は落ち込み、自分を弱く感じ混乱してしまいます。(『均衡』『聖なる予言』)

訳文：失败者心情低落，觉得自己没有实力，头脑一片混乱。

上記の用例を見ると、「窪地に落ち込む」は、内部への移動であり、「売上が落ち込む」は量の減少を表し、「敗者は落ち込む」は気持ちがめいるという意味になる。このように、「おちこむ」は内部における下方向への移動から量の減少・気持ちの低落まで表現できる。ほかに、「沈み込む」なども同じ意味拡張のプロセスを有し、「海底が地球内部に沈み込む/愁いに沈み込む」などの例がある。「落ち込む」と同じような表現は、他に、「ふさぎこむ/しおれこむ/しずみこむ/しょげこむ」などがある。これらの動詞を＜情緒の零落(FEEL DOWN)>グループとして扱うことができるが、詳しくは、2.2.2.4節で議論する。

一方、姫野が提示した③、④タイプについてどう考えればよいだろうか。この二タイプの複合動詞に現れる内向移動表現は姿勢動詞などと異なり、下へという方向が規定されていない。また、③タイプの「まくりこむ/折り込む」は、対象物が周辺に位置する部分が内部に向けて移動すると理解できるが、④タイプの「絞りこむ」は、「多くの中から条件を定めて数や範囲を小さくしていく」という意味で、周辺となる部分が外されて、中心の部分しか残らないと理解できる。したがって、この二タイプの複合動詞は、＜周辺から中心への移動＞を表すと言える。しかし、④タイプの「絞りこむ」は対象物の減少を含意するが、③、④タイプのほかの複合動詞は＜周辺→中心＞への移動に伴い、形態の縮小を含意する。このような区別は以下の用例で明らかになる。

(61)a. 動脈候補領域 Ra の範囲を絞り込む。

英語訳： Narrow down the scope of candidate artery region Ra.

中国語訳： 缩小动脉候选领域 Ra 的范围。

b. (折り紙で)立方体を作るにはまず紙の角を内側に折り込む。

英語訳： To make a cube you first turn the corners of the paper in.

中国語訳： 要折一个立方体，先把纸的四个角折进去。

(『weblio 英和・和英辞典』2013.7.16(中国語訳は筆者による))

上記の例のように、「絞り込む」は「範囲減少」を含意して、英語では“narrow down”で、中国語では＜縮小：縮小する＞で表現される。これに対して、「折り込む」の場合は、内部移動表現“turn in”と＜折進＞で表現されている。

上記の内向移動及び内向移動に関する議論は以下のようにまとめられる

(62)内向移動

a. 物体の内部における高い位置→低い位置への移動(姫野 1997 の①、②、⑤)

① 姿勢動詞 (高さの減少)

かがみこむ、かがめこむ、しゃがみこむ、倒れこむ、座りこむ、
へたりこむ、倒しこむ

② 値段・量・温度などの減少

刈りこむ、落ちこむ、割りこむ、冷えこむ

③ 情緒の低落(詳しくは後節で議論する)

落ちこむ、沈みこむ、ふさぎこむ、しょげこむ、

b. 周辺から中心部への移動(姫野 1997 の③)

折れこむ、折りこむ、畳みこむ、絞りこむ、縮こむ

しかし、内向移動を表す「～こむ」は特殊性がある。具体的に言うと、これらの前項動詞は「一こむ」以外の内部移動を表す後項動詞と結合する例がほとんど観察できず、「倒れ入る/座り入る」などは成立しないと判断されている。

(63)a. *倒れ入る、*座り入る、*かがみ入る、*しゃがみ入る、*禿入る、刈り入れる¹⁶

b. *おれ入る、*縮入る、*折り入れる、*たたみ入れる、*絞り入れる

2.2.2.3.2 複合による意味変化

さらに、姿勢動詞は「一こむ」と複合すると、新しい意味が生じる。「座る/倒れる」は「一こむ」と結合すると二つの意味変化がある。一つは人間を表す名詞が主語となることで、もう一つは状態の維持と目的の達成が付加されることである。以下では、先ず、「座る」の例を上げて説明する。

(64)「座る」

a. 赤ちゃんの首が座っている/*座りこんでいる。

b. 彼はソファに座っている/座り込んでいる。

c. デモ隊は広場に座り込んでいる/#座っている。

上記の例に示されるように、人間を表さない名詞「首」は「座る」の主語にもなれるが、「座り込む」の方は「彼」など人間を表す名詞しかない。一方、「座りこむ」は目的を遂げるために座って動かないという意味を表す場合、目的の達成と状態への固着と二つの意味がある。「倒れる」もほぼ同じである。

¹⁶ 「刈り入れる」は成熟した稲、麦などの農作物を刈って取り入れる、収穫するという意味で、「入れる」は内部移動を表し、内向移動を表さない。「枝を幹まで刈り込む」は言えるが、「枝を幹まで刈り入れる」のような使い方は観察できなかった。

(65) 「倒れる」

- a. 暴風で木が倒れた/*倒れこんだ。
- b. 彼は床に倒れた/倒れこんだ。
- c. 彼は病気で倒れた/倒れこんだ。

「倒れる」の主語名詞句が「木/会社」でもよいが、「倒れこむ」は人間を表す主語名詞句としか結合しない。また、「倒れこむ」は体の不具合で起きられない意味を表す場合、状態への固着を表す。しかし、「倒れこむ」と「座りこむ」が示す固着性はその前項動詞に深く関連している。「座る」は「一か所に定まって動かなくなる」という意味があるし、「倒れる」は「病気で床につく」意味がある。即ち、「座る」と「倒れる」自身は姿勢の変化だけではなく、変化後の状態に固着する意味まで表せる。しかし、ほかの姿勢変化を表す「～こむ」は変化の意味しかなく、固着の意味があるとは言いにくい。

一方、値段・量・温度などの減少を表す場合、「～こむ」は「十分、ずいぶん、すっかり」という副詞的な意味になる。例えば、「禿こむ」は「頭の上の方までずっとはげる」、「削りこむ」は「十分に削る」、「冷えこむ」は「急に気温が下がる」という意味であり、この場合の「～こむ」は、前項動詞の意味を補足説明すると言える。

2.2.2.4 心理・生理を表す動詞

まずは、心理を表す「～こむ」について議論する。前節で提示した「落ち込む」の例に示されるように、内向移動を表す「～こむ」は心理変化、即ち、情緒の低落を表すことができる。このような複合動詞は「落ち込む」のほかに、「ふさぎこむ/しおれこむ/しずみこむ/しょげこむ」などがあり、以下のような例が挙げられる。

- (66)a. 抑うつ気分に支配されると、気分が重く沈み込み、喜びがなく、わびしさ、悲しみ、不安が心を占めるようになります。(『均衡』『ケアを受ける人の心を理解するために』)
- b. むっつりとふさぎこんだ捕虜はもうどこにもいなかった。(『均衡』『デルフィニア戦記』)
- c. 苦しい闘病生活の末、医者からは手術を告げられ、なんの心の準備もなかった張先生は、すっかりしょげこんでしまった。(『均衡』『お笑い超大国中国的真実』)

上記の例に示されるように、「しずみこむ/ふさぎこむ/しょげこむ」はいずれも情緒の低落を表す。心理を表す「～こむ」は前節で議論した「物体の内部における高い位置→低い位置への移動」の拡張であると考えられる。姿勢動詞などの場合は、上方向への移動を表す「立つ」は「～こむ」の前項動詞にならない。また、値段、量の場合は、増加を表す動詞は「～こむ」と結合せず、「増え込む」などの用例は見受けられない。同様に、精神的に

高まった活動を表す「～こむ」はほとんどなく、「喜び込む」などは成立しない。英語での表現を観察すると、「落ちこむ」などは“feel down”で表現される。

一方、生理を表す動詞を考えてみると、「老い込む/老け込む/寝込む/眠り込む/倒れ込む¹⁷」があるが、認知言語学におけるイメージスキーマ<UP/DOWN>の拡張を考えると、<CONSCIOUS IS UP; UNCONSCIOUS IS DOWN(意識は上; 無意識は下)>と<HEALTH AND LIFE ARE UP; SICKNESS AND DEATH ARE DOWN(健康と生は上; 病気と死は下)>という概念メタファーがあるが、明らかに、生理現象を表す「～こむ」は以下のように、<DOWN>に対応している。

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| (67)a. <CONSCIOUS IS UP> | <UNCONSCIOUS IS DOWN> |
| *目覚めこむ、*蘇りこむ | 寝こむ、眠りこむ |
| b. <HEALTH AND LIFE ARE UP> | <SICKNESS AND DEATH ARE DOWN> |
| *若返りこむ、 | 老いこむ、老けこむ、倒れこむ、咳きこむ |

上記のように、「寝る/眠る」の場合は、眠って無意識になる意味であり、「一こむ」と結合できるが、「目覚める/蘇る」などは意識を呼び戻す意味で、「一こむ」と結合できない。一方、「老いこむ/老けこむ/倒れこむ/咳きこむ」は身体の老化、或いは病気を表し、<DOWN>の概念メタファーと一致する。これに対して、「若返る」など、<UP>と一致する動詞は「～こむ」の前項動詞にならない。

心理・生理を表す場合、姫野(1999)が議論したように、後項動詞「一こむ」は程度を強調し、「ぎっしり/めっきり/すっかり」などの修飾語を伴う例が多い。ここでは例を省略するが、議論したいのは英語の前置詞“down”も方向を表さず、程度を表す例があるということである。例えば、以下のような例がある。

- (68)a. Wash down a car. (車を十分に洗う。)
b. Fix a thing down. (物をしっかりと固定する。)
c. Boil down soup stock. (スープストックを煮詰める。)
(『weblilio 英和・和英辞典』2013/10/20)

まず、“wash down”の場合は、“down”は「十分に」という意味で、“fix down”の場合は、「しっかりと」、「boil down」の場合は「量が少なくなるまで、濃くなるまで」という意味であるが、それぞれは、「洗い込む/はめ込む/煮込む」の意味に非常に近い。このため、移動の方向から副詞的意味まで意味拡張が行われるのは日本語だけに限った現象ではないと言える。

¹⁷ ここで挙げた「倒れ込む」は姿勢の変化より、病気で床につくという意味である。

2.2.2.5 思考活動を表す動詞

思考活動を表す「信じこむ」、「思いこむ」、「考えこむ」、「黙りこむ」、「決めこむ」などの複合動詞の場合、V1 で表される状態を着点領域として考えられる。例えば、「考えこむ」は“go into deep thought”、「黙りこむ」は“lapse into silence”、「話しこむ」は“be deep in conversation”で表現できて、“thought”、“silence”、“talking”は抽象的な着点領域として理解できる。

これらの複合動詞において、後項動詞「ーこむ」は「深く」（「考えこむ」）、「長い間」（「話しこむ」）、「すっかり/しっかり」（「信じこむ/思いこむ/決めこむ」）のような副詞的意味になり、前項動詞に表わされる状態からの離脱が難しい意味を含意する例が多い。「入れる」などの場合は、物理的な空間への移動として、「思う」、「信じる」などの場合は、着点が抽象的な領域となる。固着性を考えると、「考える/話す」は「入れる」タイプで、固着の意味がないが、「信じる」は「信用する、本当と思う」の意味があるので、固着の意味がないとは言えない。「ーこむ」と結合すると、「考えこむ」の方は「深く考える」の意味が生じるので、動作に注目する意味が強い。一方、「信じこむ」などの場合、「深く信じる」は「しっかり信じる」という意味になり、「信じる」状態に固着する意味が強い。このように、物理的な内部移動の場合は、「～こむ」は着点領域への深部移動を含意するが、着点領域が「信じる状態」のような抽象的なものになる場合、「程度の徹底・固着」の意味になる。「固着」の意味が強い場合、マイナスのイメージが強い。

(69)a. 病気ではないのに、自分は病気だと信じこんで煩悶する。（『均衡』『ドクター・ショッピング』）

b. 自分はいい男だと思い込み、過去の彼女にすがり、現在がみえず、つきあったらその日にHしようとするバカ。（『均衡』『Yahoo!知恵袋』）

上記の例における「病気だと信じ込む」の場合は、動作主が客観的な証拠がなく、自分が勝手に強く信じていると理解できる。「思い込む」も同じニュアンスである。

一方、「信じ込む」の英訳を観察すると、“believe”と前置詞“in”との組み合わせで表現する例があった。

(70) わけもわからず信じ込む。（『weblio 英和・和英辞典』2013/10/20）

英訳：To believe in something blindly.

“believe in”は「信じ込む」に対応しており、“believe firmly”の意味になる。このように、日本語において、基本義が内部移動である後項動詞「ーこむ」は「固着」を表せるが、英語において、もともと内部の存在、内部という移動方向を表す前置詞“in”は強い程度を表す例が観察できるので、内部移動表現が意味拡張され、副詞的表現になるのは日本

語だけではないと言えよう。

2.3 まとめ

2.1 節と 2.2 節においては、日本語における内部移動の意味概念と、前項動詞が「一こむ」と複合するとどのような意味変化が生じるのかについて考察を行った。次は、「一こむ」と結合する前項移動の意味ネットワーク、また、後項動詞「一こむ」の意味、日本語における内部移動の意味をまとめる。

2.3.1 「～こむ」における内部移動の意味概念について

松田(2004)は「固着」の焦点化について議論したが、なぜ「～こむ」が内部移動から固着まで表現できるのかについてほとんど議論していない。本稿においては、日本語における内部移動の意味概念がそもそも存在の概念に繋がっているであろうと考えられる。このような繋がりがあるからこそ、「～こむ」は、内部移動から固着まで拡張できると推測される。この議論は中国語との対照によりさらに明らかになるが、詳しくは第五章で議論する。

姫野(1997)は着点領域の性質により内部移動を七グループに分けている。この分け方は「～こむ」における内部移動の意味概念の研究に大きなヒントを与える。特に、「自己の内部への移動(自己凝縮体)」グループについての議論は重要であるが、外国語との対照が行われていないため、普通の内部移動現象と同じように扱っていた。2.2 節の研究により、下方向への姿勢変化を内向移動として捉えるのは日本語の内部移動表現の大きな特徴の一つである。これに対して、英語と中国語では内部移動として捉えるのは難しい。

2.3.2 「一こむ」と結合する前項動詞について

2.1 と 2.2 の議論により、「一こむ」と結合する前項移動の意味の繋がりには以下のようにまとめられる。

(71) 「一こむ」と結合する前項動詞について

- ① 日本語において内部移動の意味概念が移動から存在までカバーできる。「～こむ」の場合は、＜内部移動→存在→固着＞という連続体が存在し、このため、「一こむ」は「植える/はめる」のような移動・固着を表す動詞とも結合できる。さらに、内部移動の意味がほとんどない作成動詞とも結びつく。「固着」の意味が強い動詞が V1 になると、「固着」の意味が焦点化する。
- ② 「座る/倒れる」など下方向への姿勢変化を表す動詞も V1 になるのに対して、「立つ」のような上方向への姿勢動詞は V1 にならない。これは、日本語において、内部の下方向への移動・変化を内部移動として捉えるからである。本稿において、このような移動を内向移動とする。内向移動は下方向への姿勢変化から値段・量の減少、情緒の低落まで意味拡張される。このタイプの内向移動

は英語では前置詞“down”で、中国語では方向補語<～下>で表現されることが多い。さらに、着点領域において、周辺から中心までの移動或いは形態の縮小も内向移動の一種とみられる。このタイプの内部移動は英語では“in”、中国語では<～進>で表現可能である。

一方、前項動詞が内部移動か内向移動を表さず、後項動詞「一こむ」が完全に副詞的意味になる場合、心理・生理などを表す動詞の他に、以下のようなものがある。

- (72) a. この店の看板メニューは5時間煮込んだハヤシライスです。(『均衡』『Yahoo!ブログ』)
b. 生地を丹念に練り込むことでコシを出し、また熟成時間を設けて風味を高めているそうだ。(『均衡』『dancyu』)

上記の例において、「煮込む」は「長時間煮る」という意味で、「練り込む」の場合、入念に練るという意味である。この2例における「一こむ」は副詞的意味を表しているが、なぜこれらの動詞が「一こむ」と結合できるのかについて説明するのは難しい。

2.3.3 後項動詞「一こむ」の意味について

2.2 節では、「一こむ」は内部移動から「固着」まで表現できて、また、内部移動だけではなく、内向移動も表せると議論した。さらに、内部移動から、「深く/しつかり」のような副詞的意味まで意味拡張される。また、姫野(1997)と松田(2004)の議論によると、「～こむ」は内部移動から、意味拡張により「繰り返し・目標の達成」¹⁸を表せるが、以下は「走りこむ/歌いこむ」の例である。

- (73)a. 多い日は、ダウン走を含めて三十五キロを走り込んでいる。弥彦駅伝に向けて徐々にスピード練習を加えており、本番に備える。(『均衡』『新潟日報』)
b. とにかく、歌詞の代わりにドレミで暗唱できるまで歌い込んでください。(『均衡』『やさしい楽譜の読み方』)

上記の「走り込む」の方は、前後の文脈で「本番の試合のために」という目標があり、「歌い込む」の方は「暗唱できるまで」という目的がある。先行研究を踏まえた前節の考察により、後項動詞「一こむ」の意味は以下のようにまとめられる。

¹⁸ 金(2010)の議論によると、「歩き込む」などは「目標達成」の意味がなく、「繰り返し」の意味しかないが、「歩き込む」などは、『均衡』において用例が収集できなかったため、本稿においては、扱わないことにする。

(74) 「一こむ」の意味

a. 内部移動→固着

- ① 着点(三次元的物理空間、二次元的な領域、所有領域などの抽象的な着点)の内部への移動

彼は部屋に入りこむ。

空欄に名前を書きこむ

- ② 着点への移動および固着（「植えこむ」「はめこむ」）
③ 結果物の存在(内部移動ではない)（「刻みこむ」「彫りこむ」）
④ 状態の維持（「押さえこむ」）

b. 内向移動

- ⑤ 量・高さなどの減少により、物自身の基底部に陥没する。

姿勢動詞

刈りこむ

- ⑥ 気持ちの低落

落ちこむ

- ⑦ <周辺→中心への移動>

絞りこむ

c. 繰り返し・理想状態への達成

論文を書きこむ

試合のため、毎日 5 キロ走りこむ

d. 副詞的意味(詳しくは第三章で議論する)

「一こむ」の副詞的意味は「深く、しっかり」などがあるが、これについて、第三章で詳しく分析する。ただ、英語では、“wash down”と“believe in”のように、前置詞が「十分/深く」のような副詞的意味を表現できるので、移動の方向から副詞まで文法されるのは日本語に限った現象ではないと言えよう。しかし、中国語ではこのような傾向は見られない。このため、中国語において、「一こむ」の副詞的意味をどのように表現できるのかを考察する必要がある。

第三章 「一こむ」の副詞的意味について

-----形容詞・副詞の評価性との接点から

3.0. 問題提起

複合動詞「～こむ」の意味について、姫野(1999)、松田(2004)などの研究においては、「～こむ」は内部移動を表す他に、「固定感」などの多義性をも表しているとされている。しかし、その多義性に関する議論はニュアンスだけに留まり、体系的に整理していない。また、このような多義性がどのように生じたのかについて、ほとんど触れていない。

本稿の立場は、まず、複合動詞「～こむ」、特に左側主要部の「～こむ」の全体的意味は内部移動・状態変化と、副詞的な意味から成り立っていると考える。副詞的な意味は付加的で、認識・評価の意味を表す。この認識・評価の意味は、先行研究における多義性に対応しているが、それがどのように生じたのかというと、全てが前項動詞と「一こむ」と結合してから生じたわけではなく、前項動詞から受け継いだ可能性もあると推測される。

まず、「～こむ」に含意されている副詞的意味について、以下のような例が提示できる。

- (75)a. 池の形ができれば、斜面に植物を植え込む。(『均衡』『ドゥーパ!』)
b. 車体各部はよく作り込まれている。(=(57)a)(『均衡』『Yahoo!ブログ』)
c. 病気ではないのに、自分は病気だと信じこんで煩悶する。(=(69)a)(『均衡』『ドクター・ショッピング』)

すでに二章で議論したように、「植えこむ」は「しっかり」、「作りこむ」は「入念に」、「信じこむ」は「深く」を含意している。このような「しっかり」と「入念に」、「深く」などを含意する「～こむ」が多く観察できる。一方、前項動詞を調査することにより、前項動詞が単純動詞として使われる場合、「深く」、「しっかり」を含意する例が見受けられるので、「～こむ」に含意される副詞的意味は前項動詞から受け継がれる可能性があると考えられる。本稿においては、「～こむ」の認識・評価的な意味を細分類することにより、「～こむ」の意味と、内部移動動詞における日本語と中国語との相違点をさらに研究する。

3.1. 先行研究及び本稿の立場

3.1.1 先行研究

複合動詞「～こむ」の分類と意味について、姫野(1999)と松田(2004)の研究が代表的である。まず姫野(1999: 62-73)はV2「込む」の意味を内部移動と程度進行の二つのタイプに分けた。内部移動は、主体或いは対象がある領域の中へ移動することを表しているが、程度進行は動作・作用の程度が進行することを表している。さらに、姫野(1999: 64-72)は「～

こむ」は以下のようなニュアンスを含意していると議論している。

(76)V2「ーこむ」のニュアンス

- a. 「全体がすっかり奥深く入るという感じ」
- b. 「いったん入ったら動かないという固定感」
- c. 「予期せぬものが入るという抵抗感」
- d. 「人の行動を表す場合、意志性や目的意識が強いという感じ」

(姫野 1999 : 64-72)

上記の四つのニュアンスを以下では、「深入り感」、「固定感」、「抵抗感」、「目的性」と略称する。しかし、「～こむ」を観察すればわかるが、全ての複合動詞「～こむ」は上記のニュアンスを含意するわけではない。また、一部の複合動詞が、一つか二つのニュアンスを含意することもある。このように、個々の複合動詞がそれぞれのニュアンスとの対応関係は曖昧で、明確にするのは困難である。姫野(1999)は、なぜ複合動詞「～こむ」が上記のニュアンスを含意するか、という問題点に触れていないが、「ーこむ」と結合する V1 の一部には評価的な意味があり、「～こむ」の上記の多義性と繋がっていることがわかる。個々の複合動詞がそれぞれのニュアンスとの対応関係は曖昧であるのは、このような繋がりにも関係していると推測されるが、これについては、4 節で議論する。

一方、松田(2004)は姫野(1999)の研究を踏まえて、「～こむ」を再分類したが、それは以下にまとめられる。

表 11 姫野(1999)と松田(2004)との意味分類の比較

研究者	「～こむ」の分類				
姫野(1999)	内部移動		程度進行		
	移動先の領域の形態的特徴による分類(省略)		固着化	濃密化	累積化
松田(2004)	二格を伴う「～こむ」		二格を伴わない「～こむ」		
	A タイプ	B タイプ	C タイプ		D タイプ
	V1 が内部移動を含意しない	V1 が内部移動を含意する	V1 は示す状態への変化とその状態への固着		V1 の反復行為により生じる状態変化(目標に向けて)
	飛び込む	入り込む	黙り込む	冷え込む	十分に走りこむ

松田(2004 : 77、82、83)は A タイプの場合、「領域への移動」が焦点化されるが、B、C タイプ場合は「難可逆領域への移動」、即ち、「固定感」が焦点化され、「しっかり/きちんと/奥深く」というイメージがあると述べており、「抵抗感」は「難可逆領域の境界(心理的境界)

を突破して、難可逆領域に入る」ことから生じるものであると主張している。

姫野(1999)は四つのニュアンスを平行的なものとしているが、松田(2004)は「固定感」を中心的な意味とし、「深入り感」などを周辺の意味としている。しかし、姫野(1999)と同じように、松田(2004)は、この「固定感」などがどのように生じるのかについて議論していない。このように、先行研究においては、「～こむ」の意味の記述は一致していない点があり、「～こむ」の多義性の体系的な整理もできていない。さらに、この多義性が生じた原因にはほとんど触れていない。従って、本稿では、「～こむ」の意味体系を再整理した上で、前項動詞との意味上の繋がりを考察し、その多義性の形成プロセスを提示する。

3.1.2 本稿の立場

3.1.1 節でも触れたが、先ず、複合動詞「～こむ」の意味は内部移動だけではなく、副詞的な意味もある。

(77) 「～こむ」の意味

- ① 内部移動・状態変化
- ② 同時に、副詞的な意味(この副詞的な意味は内部移動、或いは、状態変化についての認識・評価¹⁹を表す。)

「～こむ」に含意される内部移動及び状態変化についての認識・評価は「しっかり」、「深く」のような副詞的表現で表現されることが多いので、本稿においては「副詞の意味」とする。どの複合動詞がどのような評価性を伴うかは、V1の意味と深くかかわっていると考えられる。即ち、V1がある評価的意味を有するならば、複合動詞になると、この評価性が受け継がれて、複合動詞全体の意味の一部になるという考え方である。

(78)抱える

- a. 物を囲むように腕を回して持つ。胸にだくようにして持つ。「ひざを一・えて座る」
「包みを小脇に一・える」
- b. 自分の負担になるものをもつ。厄介なもの、世話をしなければならないものを自分の身に引き受ける。「多くの負債を一・えて倒産する」「妻子を一・えて路頭に迷う」
- c. 人を雇う。雇って使う。「運転手を一・える」
- d. その範囲の内にもつ。また、まわりを囲む。「湾を一・えた地勢」
- e. かばう。保護する。
- f. 今の状態を保ちつづける。維持する。

(『大辞泉』)

¹⁹ ここの評価とは「深入り感」、「固定感」、「抵抗感」などをさすが、なぜこれらを「評価」と呼ぶかは、3.2 節で議論する。

(79)抱え込む

- a. 物をだきかかえるようにして両腕の中に入れる。「大きな荷物を一・む」
- b. 他人にふれさせないように自分の領域内に持ち込む。「極秘の情報を一・む」
- c. 自分の負担になるものを引き受ける。手に余る多くの物事や厄介なことを、自分の身に受け持つ。しよい込む。「難問を一・む」

(『大辞泉』)

上記の例を見ればわかるように、単純動詞と複合動詞の意味が対応する部分がある。先ず、(78a)と(79a)は「両腕の中に入れる」という内部移動の意味を表し、(78b)と(79c)は「負担になる物を引き受ける」という共通的な意味がある。この「負担になるもの」はマイナスの評価であり、本稿では副詞的な意味として捉える。この二つの意味項は「抱え込む」が「抱える」から受け継いだものであると言える。

さらに、ほかの辞書を調べてみたところ、以下のような(80)a~b)のような内部移動の意味について、以下のように解釈している。

- (80)a. 抱える：腕でかこむようにして支え持つ。両腕でかこみ持つ場合にも、片腕でわきの下に持つ場合にもいう。また、病人などをだくようにして看護する。
- b. 抱え込む：腕で囲むようにして、体につけてしっかり支え持つ。両腕で持つ場合も、片腕で脇の下に持つ場合にもいい、また比喩的に地形についてもいう。

(『日本国語大辞典』 2013-05-09)

上記の例のように、この二語の意味は色々な相違があるが、本稿は副詞の意味に注目しているので、これだけを議論することにする。上記の辞書の記述を読んで気がつくことは、単純動詞の場合は、内部移動の意味しかないが、複合動詞の場合、「しっかり」という意味が生じることである。このように、「しっかり」のような意味成分はV1が「一こむ」と結合する後、生じたものであると推測できる。「抱えこむ」の意味を以下のようにまとめられる。

(81)「抱えこむ」

- ① 内部移動
- ② 副詞的な意味
 - a. 移動物の性質に対する発話者、或いは動作主のマイナスの評価：「負担/厄介」
→ V1 も同じ意味があるので、V1 からの受け継ぎか、複合後生じたのは判断しにくい。
 - b. 移動物が移動後の状態に対する評価・判断：「しっかり(支え持つ)」

→ V1 が「一こむ」と結合する後、生じた可能性が高い

一方、移動物の性質と移動後の状態だけではなく、移動物の数量を評価する用例もある。
以下では「買う/買いこむ」を例として説明する。

(82) 買う

- a. 代金を払って自分の所有とする。「欲しい物を一・う」「権利を一・う」
- b. 自分のしたことがもとになって、好ましくないことを身に負う。招く。「人の恨みを一・う」「反感を一・う」
- c. 進んで引き受ける。「売られた喧嘩(けんか)を一・う」
- d. 価値を認める。「努力を一・う」
- e. 金銭を払って売春婦などと遊興する。「女を一・う」

(『大辞泉』)

(83) 買いこむ

物をたくさん買い入れる。特に、品物の値上がりや欠乏を見越して、多く買い入れる。
「値上がりを見越して一・む」

(『大辞泉』)

「買いこむ」の意味を下記のように記述できるが、「数量」に対する評価は「買う」には含意されていない。

(84) 「買いこむ」

- ① 内部移動(自分の所有領域への移動)
- ② 「多量」という数量上の評価

この「多量」という評価的意味は「買う」に含意されていないので、「買う」から受け継がれたものではなく、「一こむ」と結合してから生じたものであると推測できる。データを観察すると、「沢山/大量/うんと/いっぱい」などと共起する例が多いが、詳しくは 3.3 節で議論する。上記 2 語の他に、「詰めこむ」などについても調査を行ったが、「～こむ」に係する副詞的意味を以下のように提示できる。

(85) 「～こむ」に含意される副詞的意味

- a. 移動物の量が多い(「買いこむ、詰めこむ」)
- b. 着点領域の内部に入るのは深い(「入りこむ」)
- c. 着点領域に入ってからしっかりとどまる(「植えこむ」)

- d. 着点領域に入り、留まる時間が長い（「座りこむ、倒れこむ」）
- e. 動作主の目的・意志が強い（「座りこむ」）
- f. 移動物が自分に所属しない領域へ移動し、不快感が生じる（「野良猫が庭に入りこむ」）

上記の評価は形容詞と副詞の評価性に関係しているので、3 節では、評価についての先行研究、及び、それと複合動詞「～こむ」との接点について議論する。「評価」の意味の枠組みを設定することにより、上記の数種類の評価的意味を類別し、どれが単純動詞レベルに現れ、どれが複合動詞レベルで生じるかという問題点を解決したいと考えている。

(86) 「～こむ」の評価的意味の形式

- a. 評価的意味は「～こむ」自身に含意されており、用例において、評価的意味を表す副詞修飾句がなくてもよい。例えば、「買いこむ」のように、「多量」という意味を含意しており、「多量」を表す副詞修飾句がなくても、その文から「多量」の意味が読み取れる。この場合、「買いこむ」の意味は少なくとも、「多量」という評価的意味と、前項動詞「買う」の意味からなる。
- b. 評価的意味は「～こむ」自身に含意されているが、用例においては、それを表す副詞句と共起することが多い。例えば、「深く」、「しっかり」などの副詞句と「～こむ」とが共起する用例が見受けられる。

(86a)の場合、「～こむ」の意味の考察に辞書での解釈がある程度参考になるが、「～こむ」と結びつく名詞句の考察も役立つ。(86b)の場合は、評価的意味を表す副詞修飾句の考察が重要である。しかし、副詞句といっても範囲が広いので、本稿における考察対象を以下のようにまとめる。

(87)本稿で考察する副詞句の範囲

- a. 形容詞のク形 （「深く」、「多く」など）
- b. 副詞 （「しっかり」、「たくさん」、「深々と」など）
- c. 名詞＋に （「深部に」、「奥に」など）

3.2 形容詞と副詞の評価的意味

3.2.1 「評価」の定義について

一言で言えば、「評価」は狭義には「いい・悪い」という価値判断であり、広義には程度の評価などを含む。

「評価性」について、議論が最も多いのは形容詞を研究した論文で、その次は、副詞とモダリティに関するものである。

3.2.1.1 モダリティの研究における「評価」について

森山他(2000)によると、認識タイプの基本叙法、即ち、無標叙法と「だろう」には、さらにモーダルな意味を表す形式群を付加することができ、「価値判断的な事態選択形式群」、「推量表示形式群」が取り上げられている。この「価値判断的な事態選択形式群」は「～方がいい」などがあり、まだ実現していないことについて、どのような事態を選ぶのかを取り上げる付加的な形式である。選ぶ以上、いい・悪いといった価値判断が問題になっている。

一方、宮崎他(2002)はモダリティを<実行>、<叙述>、<疑問>に分けているが、<叙述>のモダリティは、命題内容に対する評価的なとらえ方を示しながらの叙述である<評価>と命題内容に対する認識的な捉え方を示しながらの叙述である<認識>からなる。この<評価のモダリティ>は 森山他(2000)が提示した「価値判断形式群」に対応しており、形式としては、「～てはいけない」、「～といい」、「～ばいい」などがあげられ、いずれも必要だ、必要でない、許容される、許容されないといった評価を表す。

実は、モダリティにおける「評価」の概念は、形容詞の研究におけるそれと共通したところがあるが、これについて次節で議論する。

3.2.1.2 形容詞の研究における「評価」について

樋口(2001)が「形容詞の評価的な意味」で、「評価」について以下のように述べている。

形容詞や人や物の特性をさししめるとき、さししめされる特性はそれらに客観的にそなわっている特徴としてさしだされる一方で、なんらかの基準との比較のなかでとらえられてもいる。この基準と比較することによって、物が他の物との関係のなかでもつ意義があきらかにされたり、それが人間の欲求、利害、目的とかかわってもつ意義があきらかにされたりするのだが、このような物の意義をあきらかにする、人間の意識的な活動のことを《評価》と呼ぶことにする。

(樋口 2001 : 43、(下線は筆者による))

さらに、樋口(2001 : 48)によると、《資格づけ的评价》は、物の意義が同種の他の物との関係のなかでもつ意味あいをあきらかにするもので、一方、あるものが同種の他のものとの関係のなかでもつ意味あいがある人間の欲求、利害、目的にかかわってくるとすれば、物は、その観点からおこなわれる、人間の側からの意味づけ(《いいわるい》)もうけとることになる。これが《価値づけ的评价》である。ここの<いい・悪い>という《価値づけ的评价の意味づけ》は、森山他(2000)が提示した「価値判断」、宮崎他(2002)が提示した「評価」とは共通している。これをわかりやすくまとめると以下のような。

(88) モダリティと形容詞の研究における「評価」

- a. 森山他(2000)が提示した「価値判断のモダリティ」は宮崎他(2002)が提示した「評価のモダリティ」と共通している。このようなモダリティの形式に含意される「評価」の意味は「いい・悪い」といった価値判断である。
- b. 樋口(2001)は評価の意味を《資格づけ的评价》と《価値づけ的な評価》に分けており、後者は森山他(2000)と宮崎他(2002)が提示した「いい・悪い」という価値判断に対応している。

(88)を見れば分かるように、樋口(2001)が提示した評価の意味領域は森山他(2000)などより広義的である。本稿としては、「評価」の定義について、樋口(2001)の立場を取る。

3.2.1.3 副詞の研究における「評価」について

副詞の研究においても、「評価」という言葉がしばしば出てくる。まず、副詞論の研究は山田(1936)から始まるとされているが、山田(1936 : 374)によると、語の副詞²⁰は以下のよう

(89) 副詞の分類

- a. 情態副詞²¹ わざわざ、ゆっくり(と)、すぐ(に)
- b. 程度副詞 やや、もっと、非常に、すごく
- c. 陳述副詞 けっして、おそらく(は)、もし(も)

(山田 1936 : 164)

また、多くの研究者がさらに副詞を細分化している。市川(1976)は山田(1936)の枠組みに準じて、副詞を「状態の副詞」、「程度の副詞」、「陳述の副詞」、「評価の副詞」、「限定の副詞」に分けている。「評価の副詞」としては、「あいにく」などが挙げられていて、表現者の評価や注釈を表す。このタイプの副詞は、多くの研究者の分類に収められているが、呼び名が異なっている。例えば、中右(1980)が副詞を命題の内側にあるものと、命題の外側にあるものに二分し、また、Bellert(1977)に倣い、後者を「価値判断の副詞」、「真偽判断の副詞」、「発話行為の副詞」、「領域指定の副詞」に分けている。この「価値判断の副詞」はBellertが提示した「評価の副詞」に相当し、「発話時という瞬間的現在時における話者の心的態度を示している」(中右 1980 : 169)。用例としては、「あいにく」、「幸いに」などがある。ほかに、工藤(1982 : 46)が、「評価副詞」を「文の叙述内容に対する話し手の評価・感情的態度にかかわるもの」と規定しているが、挙げている用例と評価の定義は市川(1976)

²⁰ 山田(1936)が議論した副詞は広範囲で、現代の「副用語」に相当する。本稿で引用した副詞の分類は、山田(1936)が提示した語の副詞の分類である。

²¹ 現在では、「情態副詞」ではなく、「状態副詞」と呼ばれることが多い。

と中右(1980)とほぼ同じである。

一方、工藤(2000)によると、評価副詞は、命令文や勧誘文に用いることはない。さらに、工藤(2000)は「その他の副詞と文の陳述的なタイプ」という節で、「評価的な程度副詞」を提示し、これらの程度副詞は評価副詞と同じような共起制限を受けていると議論している。工藤(1983:196)は「いわゆる程度副詞は基本的にはサマに対する評価副詞なのだと。そして、サマについての程度性は、多くの場合に持たされる二次的なのだと、とらえなおしてみるのである。」と述べている。この記述から工藤(1983)が程度副詞の基本的な性質を評価性と捉えていることが伺われる。

(90) 評価副詞と評価的な程度副詞の共起制限

- a. *さいわい君が来てくれ。
- b. *あいにく外出しないでください。
- c. *だいぶたくさん作ってください。
- d. *なかなか上手に書こう。

(工藤 2000 : 222)

(工藤 2000 : 226)

しかし、「さいわい、あいにく」などは、前述のように、価値判断という評価的意味があるので、評価副詞と名付けるのはわかりやすいが、程度副詞が含意する「評価」の意味はどうであろう。これについて工藤(2000)は詳しく議論していないが、「評価的な程度副詞」の例として、「非常に、とても、だいぶ、なかなか」などが挙げられている。一方、「もう少し」のような「累加」の程度副詞と「少し、ちょっと」などは評価性が薄く数量性の濃い(量副詞に隣接する)程度副詞は命令や決意や勧誘の叙法に用いられる。ただ、ここの評価性の意味は曖昧なままである。

上記のように、副詞における評価性について、少なくとも以下のような意味がある。

(91) 副詞における「評価」の意味

- ① 評価副詞に表される価値判断 運悪く、あいにく、幸いにも、不幸にして
- ② 評価的な程度副詞 非常に、とても、だいぶ、なかなか

3.2.1.4 「評価」の意味範囲のまとめ

これまでの分析により、モダリティ、形容詞、副詞の研究における「評価」の意味は共通点もあるが、一致しないところもあることが明らかになった。それを以下のようにまとめた上で、一致しないところを再検討し、本稿の立場を明確にしてみる。

表 12 各研究における「評価」の定義

研究領域	「評価」の定義	
モダリティ	いい・悪いといった価値判断	
形容詞	価値づけ的评价	資格づけ的评价
副詞	価値判断(評価副詞)	程度への評価(評価的な程度副詞)

上記の表を見てわかるように、「いい・悪い」という価値への評価は共通的であるが、「資格づけ的评价」と「程度への評価」をどのように捉えればよいかという問題が出てくる。よく考えてみれば、両者はある程度、意味上繋がっているのである。以下では、「非常に」と「わずか」と二つの方向、即ち、極大と極小への評価を表す副詞を例として、形容詞との意味上の繋がりを説明してみる。

(92) 評価的程度副詞の形容詞での言い換え

- a. 「非常に」：程度がはなはだしく高い
- b. 「わずか」：数量が少ない

上記のように、「形容詞」に言い換えると、特性形容詞「高い」、「低い」が現れてくるが、これらの形容詞は《資格づけ的评价》を含意していると考えられる。ここでは、「程度への評価」を意味的には、「資格づけ的评价」の下位範疇に位置付ける。このため、本稿において、形容詞と同様な「評価」の枠組みを使うが、「資格づけ的评价」も色々な種類に分かれているので、以下では、これについて詳しく議論することにより、「～こむ」と関係する評価の意味内容をさらに明確にする。

3.2.2 形容詞の評価性と「～こむ」の接点

形容詞の評価性について、樋口(2001)は詳しく議論している。まず、形容詞を意味的な観点から特性形容詞と状態形容詞を分けている。

(93)形容詞の分類

- a. 《特性》をさししめす形容詞
《特性》は人や物に恒常的に備わっていく特徴であって、時間の流れの中での、一定の時間帯に生じる現象ではなく、時間外的である。
- b. 《状態》をさししめす形容詞
《状態》は一定の時間帯に生じる現象であって、それはつねに具体的な時間にしばられている。形容詞はこのように、異なる現実の断片をその意味にうつし出している。

また、樋口(2001)によると、特性形容詞では、人間による評価は、ある基準にてらして、それとの比較のなかで物を意味づけるが、状態形容詞では、それは人間に生じる感情をもとにして、その感情をひきおこす原因としての対象を意味づけている。前者は二つのグループに分けられる。

(94)特性形容詞の下位分類

I. 資格づけ的评价

形	まるい、しかくい
色	あかい、あおい
平さ	たいらな、へいたんな
透明さ	とうめいな、にごった
量的な特徴	たかい、ひくい、はやい、おそい、わかい、年とった
構造	ふくぎつな、たんじゅんな
抽象性	ぐたいてきな、ちゅうしょうてきな
活動の仕方	いそがしい、ひまな
可能性	かのうな、ふかのうな
必然性	とうぜんな、もつともな、あたりまえな
予想と現実との不一致	ふしぎな、みょうな、きみょうな、へんか、いがいな

II. 資格づけ的な評価+価値づけ的な評価 (《いいわるい》)

性格	まじめな、やさしい、がんこな
知性	りこうな、かしこい、ばかな、まぬけな
現象の様子	じみな、はでな
生理的な特徴	げんきな、けんこうな、びょうじやくな
美	げひんな、じょうひんな、みつともない、はしたない
功利	べんりな、ふべんな、ひつような、ふひつような

前にも述べたように、《資格づけ的评价》は、物の意義が同種の他の物との関係のなかでもつ意味あいをあきらかにするもので、《価値づけ的な評価》は《いいわるい》という人間側の意味付けである。また、樋口(2001)は状態形容詞を以下のように分類した。

(95)状態形容詞の下位分類

I. 人間の状態をとらえているもの

① 直接的な反応 (快/不快)

生理的な状態 いたい、かゆい、まぶしい、ねむい

② 直接的な反応 (快/不快) + 価値づけ的な評価 (いい/わるい)

心理的な状態 うれしい、かなしい、さみしい、つらい、もったいない、うらやましい、ねたましい、しんぱいな、ふあんな、じれったい、なさけない、ざんねんな

Ⅱ. 物の状態をとらえているもの (状態形容詞と特性形容詞との中間に位置している)

あかるい/くらい、にぎやかな/しずかな

Ⅲ. 物の状態も人間の状態もとらえているもの (状態形容詞と特性形容詞との中間に位置している)

あつい、ぬるい、つめたい

(樋口 2001 : 52-60)

以上のように、形容詞は特性形容詞と状態形容詞に分けられているが、「～こむ」の評価の意味は、特性形容詞の量的な特徴のグループに入る形容詞に関係していると考えられる。前述のように、「～こむ」は「着点領域における位置が深い」、「領域内部に留まる時間が長い」、「領域内部に定着の程度が強い」、「領域の内部に移動する物の数量が多い」と四つの評価的意味があるが、この「深い/長い/強い/多い」はいずれも量的特徴を表す。

また、樋口(2001 : 60)は形容詞の意味のなかにうつしだされている評価性は《評価的な構造》のなかで発揮されると述べている。この《評価的な構造》について、以下のように述べている。

その構造は、《評価の主体》《評価の客体》《評価の根拠》《形容詞がさしだす評価そのもの》というすくなくともよっつの構成要素からなりたっている。《評価の主体》は評価する人間のことであり、…(中略)…《評価の客体》は評価される客体のことであり、人や物、それらが引き起こす出来事などがその対象となる。《評価の根拠》は物の特徴を意味づけるための基準である。人間が物とのたえまない接触のなかでつくりあげてきた、物についての平均的な表象や人間が体験する、その場かぎりの感情がその基準となる。《形容詞がさしだす評価そのもの》は形容詞がもっているところの評価的な意味である。(樋口 2001 : 60-61)

このような「評価的構造」を利用することによって、「～こむ」の評価性を抽出するのに役立つ。即ち、誰が、どのような評価の対象を、どういう基準で、どのように評価するかという構造を利用して、「～こむ」の評価性を今までの曖昧な状態から脱して、体系的に明確にすることができるということである。形容詞の評価性に関する結論を利用して、本稿の詳しい考察内容は以下のようにまとめられる。

(96) 形容詞の評価性と「～こむ」との繋がり

- a. 「～こむ」の意味は、どのタイプの形容詞と、どのように繋がっているかという考察により、「～こむ」の意味をいくつかのタイプに分けられる。
- b. 「評価的構造」を利用することにより、「～こむ」の評価性を体系的に明確すること。

3.2.3 副詞の評価的意味と「～こむ」の接点

3.1 で述べたように、副詞における「評価」の意味は二つあり、「価値判断」と「程度への評価（評価的程度副詞）」である。前者は「いい・悪い」という判断で、意味が明確であるが、後者については、「非常に/とても/だいぶ」という用例が挙がっており、詳しい議論が見当らない。一方、程度副詞はいくつかの種類に分けられるが、西原(1991)は程度・尺度を含む副詞を次のように挙げている。

(97) a. 数量

[数量・100%] すっかり、すべて、ぜんぶ、そっくり、みんな、のこらず、なにもかも、一切、あらいだらい、

[多量] いっぱい、たくさん、たっぷり、うんと、めいっぱい、少なくとも、どっさり、しこたま

[少量] すこし、ちょっと、ちょっぴり

[限定] すこしずつ、ちょびちょび、ちびちび

b. 人数

[多数] おおぜい、総出で

[少数] 三々五々、ちらほら、ごくわずか、ひとりで

c. 達成度

[完全] 完ぺきに、完全に、全部

↑ ほぼ、おおむね、たいがい、じゅうぶん、そうとう

↑ 割合、わりと、いちおう、まあまあ

↑ 少し、少々

[不完全] 少しだけ、ちょっぴり

d. 努力度

[最大] いっしょうけんめい、めいっぱい、できるかぎり

↑ できるだけ、おおいに

↑ だいぶ、ずいぶん、たいへん、そうとう、じゅうぶん

↑ なるべく、まあまあ、わりあい、わりに、わりと

[最小] 少し、少しばかり、ちょっぴり、少々

上記の四タイプの程度・尺度を含意する副詞と形容詞との繋がりを考えると、以下のようになる。

(98) 程度・尺度を含意する副詞と形容詞との繋がり

- a. 人数・数量への評価：少ない ⇔ おおい
- b. 達成度：不完全だ ⇔ 完全だ
- c. 努力度：低い ⇔ 高い

「～こむ」の意味を考えれば、いずれも「多い/完全だ/高い」という程度が高いという意味を含意している例が多く、逆に、「少ない」など、低い程度を含意する例はあまり見当たらない。例えば、(83)の「買いこむ」のように、「多量性」を含意する複合動詞がある。さらに、これらの形容詞は、いずれも、程度の量への評価であり、特性形容詞の＜量的な特徴＞を表すグループに入る。

一方、(85)に提示したように、一部の「～こむ」は「しっかり留まる」を含意する。「しっかり」の意味を考えれば、「堅固だ」、「揺るがない」という意味になっている。その逆は、日本語において一語でその反対義を表すのは難しいが、英語に訳すと、“*weakly/softly* ⇔ *firmly*”という反対語の関係が成り立ち、「多い/完全だ/高い」と同じように、＜程度が高い＞という方向を示している。

このように、「～こむ」に含意される「量/程度」への評価は、いずれも高い方向を取っており、さらに形容詞で言い換えると、特性形容詞の「量的な特徴」に入っていく。

3.3. 複合動詞「～こむ」の意味およびそれと形容詞・副詞の評価性との接点

3.2 節では、評価の意味は「資格づけの評価」と「価値づけの評価」の二つの意味があることを示した。そこで、3.3 節ではまず、「～こむ」はこの二つの意味をどのように含意するかについて考察を行うことにより、「～こむ」の意味体系を整理する。さらに、＜評価的構造＞を利用し、発話者が何を評価するか、即ち、評価の対象により「～こむ」の意味の体系をさらに明確にする。

まず、先行研究によると、「～こむ」は内部移動の意味の他に、「深部移動」、「固定感」、「抵抗感」、「目的性」があるが、「抵抗感」については本稿は「異質性」として捉える。また、用例の考察により、上記四つのほかに、「密集感」と「多量性」があることを示す。「～こむ」はこの四つの意味をどのように含意しているかについて、以下では詳しく議論する。

3.3.1 「深部移動」

「深部移動」とは着点領域の内部に深く移動すること、或いは、移動後、着点の

内部に深い位置に存在することを意味する。この評価性を表すには、形容詞「深い」が必要であり、「深く+V1+こむ」の形式で現れる。他に、「(着点領域の)奥に/深々と V1 こむ」という表現も用いられる。以下では「沈みこむ」を例として、「深部移動」を表す諸表現を提示する。

(99)「深部移動」を表す副詞修飾句

- a. また、低温であるため、密度の大きな海水になって海洋の深部に沈み込み、赤道方向に向かう。(『均衡』『高等学校地学 I』)
- b. かつて温泉観光などで繁栄した隣接の花巻は深く沈み込んでいたのである。(『均衡』『地域産業の未来』)
- c. その言葉を心の奥底に沈み込ませた自分は、ただのバカ女だということになる。(『均衡』『Body & money』)
- d. 腰かけている椅子の底へ沈み込んでゆくような感覚に襲われた。(『均衡』『マンティス』)
- e. 無力感は底知れず深まって、僕は湿っぽい気分の深みにぐったり沈み込んだままだ。(『均衡』『万延元年のフットボール』)

このような着点の奥深いところ或いは下の方を表す名詞句はほかにもあり、「奥深くにしまいこむ/髓まで・身体の芯・心の深層にしみこむ/煙をふかぶかと吸いこむ/肺の奥の奥まで深く吸いこむ/」などが観察できる。

以上のように、「～の深部/底/奥底/深みに」のような場所名詞句と、「かなり、深く」のような表現で、「深部移動」を表すことができる。ほかに、「しみこむ」の方は、「心の深層に/骨に/芯まで」などと共起する例も観察できる。これに対して「少し/ちょっと/浅く」のような表現はほとんどないのである。一方、「深く+～こむ」だけでなく、「奥に/奥まで+～こむ」の用例を調べてみたが、共起頻度が高い上位 10 語は以下のとおりである。

表 13 「～こむ」と「深く」、「奥に/まで」との共起調査

NO.	複合動詞	「深く」	「奥」	合計
1	吸いこむ	78	4	82
2	入りこむ	36	11	47
3	引っこむ	3	32	35
4	覗きこむ	0	22	22
5	刻みこむ	22	0	22
6	踏みこむ	11	3	14
7	潜りこむ	7	5	12
8	染みこむ	10	2	12
9	切りこむ	12	0	12
10	食いこむ	12	0	12

上記の表のように、「深く」と「奥に」と共起頻度が高いのは、「吸いこむ」をはじめ、全ての複合動詞の V1 が内部移動を含意する「～こむ」である。これは、「深部移動」は V1 が内部移動を含意する「～こむ」に生じやすいことを提示している。一方、一部の複合動詞は副詞修飾語に依存せず、「深入り感」の意味が読み取れる。

(100)副詞修飾句なしで「深入り感」を表せる「入り込む」

- a. 彼らは山に入りこんで、方向がわからなくなった。
 - a'. 彼らは山に入って、方向がわからなくなった。
 - b. 彼らは山に入りこんだから、方向がわからなくなった。
 - b'. ?彼らは山に入ったから、方向がわからなくなった。
- 彼らは山の奥に/山に深く入ったから、方向がわからなくなった。

(100)は作例であるが、「山に入りこむ」の場合、文脈全体の意味を考えると、着点領域の内部に深く入ったと理解できる。逆に、そこに少し入った場合、後続の文が成立しにくいと考えられている。さらに、「山に入りこむ」とは異なり、「山に入る」の方は、事実を叙述し、山の奥に入るかどうかは関心がないと理解してよいのであろう。条件節に入ると、「山に入りこむ」の方が自然であるが、単純動詞「入る」の方が不自然になり、「深く」或いは「奥に」を挿入すると、自然な表現になる。

また、「かなり」と共起する場合、一部の「～こむ」は「深入り感」が出やすいが、前項動詞だけが、「かなり」と共起する場合、量の意味が出やすい。まず、「物理的移動」を表す用例を見る。

(101)「かなり」との共起

- a. 学生はかなり山に入った。
→ 山に入った学生がかなりいる。
?学生が山にかなり深く入った。
- a'. 学生はかなり山に入りこんだ。
→ ??山に入った学生がかなりいる。
学生が山にかなり深く入った。
- b. 船が海にかなり沈んだ。
→ 海に沈んだ船の数が多い。
船が海の深くに沈んだ。
- b'. 船がかなり沈みこんだ
→ *海に沈んだ船の数が多い。
船が海の深くに沈んだ。

上記の「かなり山に入った」において、「山に深く入った」という意味はないとは言い切れないが、山に入った学生の数が多いという意味が強い。これに対して、「かなり山に入り込んだ」は、逆になり、学生の数量ではなく、山に入った程度が深いという意味にしか読み取れない。一方、「沈む」のような動詞は「かなり」と共起すると、量と程度と両方の意味が出るが、「沈みこむ」の場合は、程度の意味が出やすい。

また、一部の動詞は結合する名詞句の意味により、「深入り感」が出てくる用例と出てこない用例がある。

(102)a. 彼はブレーキをかなり踏みこんだ。→回数・程度

a'. 彼はあの問題にかなり踏みこんだ。→程度

b. 彼は税金をかなり使いこんだ。→数量

b'. このペンはかなり使いこんだ。→「愛着」の程度が深い

上記の例のように、結合する名詞句は、「ブレーキ/税金」場合、「踏みこむ/使いこむ」などは、「かなり」と共起すると、回数や数量が多いという意味になる。また、「ブレーキを踏みこむ」は一回の動作なら、「深く/強く」の意味も読み取れる。しかし、「問題/ペン」になると、「踏みこむ」は「議論/研究」のような抽象的な意味を表し、「深く研究/議論する」と理解できる。ほかの用例としては、「細部に突っこむ（議論などが内面に深く入りこむ）/小説に入れこむ（夢中になる）」などがある。一方、「使いこむ」は、「愛着」という抽象的な意味が生じて、「愛着の程度が深い」と理解できる。このほかに「このテープは聞き込んだ」もそうであり、「愛着」の意味が生じるのである。

さらに、「深入り感」は、辞書における解釈によっても確認できる。

(103) 「～こむ」に関する辞書の解釈

- a. 「入りこむ」：中へ入る。奥深く入る。
- b. 「しみこむ」：液体や気体、色などが物の中まで徐々に深くしみる。
- c. 「沈みこむ」：下側に深く入る。

一方、前項動詞が具体的な移動ではなく、状態変化を表わす場合、着点領域が物理的な空間ではなく、V1 で表わされる状態になり、「深部移動」が、完全にある状態に入るという意味になる。例えば、「眠りこむ」の場合、人間が深い睡眠状態に入るという意味であり、これも「深入り感」の表現と見なす。「冷えこむ」などもそうである。「眠りこむ」の場合は、「ぐっすり」と共起しやすいが、「冷えこむ」は、「一層」、「ぐっと」、「けっこう」、「さらに」などと共起しやすい。「信じこむ」の場合は、すっかり信じるという意味になる。ほかに、「とても/がっかり/かなり落ちこむ」のような表現も観察できる。「かなり」の場合は、割に強い程度を表わし、105 例あった。ほかに、「弱りこむ」は全くよわる、非常にこまるという意味で、「急きこむ」はひどく急ぐという意味であり、後項動詞「一こむ」は高い程度を表し、工藤(2000)が議論した「評価的な程度副詞(非常に、とてもなど)」と同じ働きをする。

このように、「一こむ」は物理的な深部移動から抽象的な程度深化まで拡張されるが、さらに、「深入り感」が複合名詞「V1 の連用形+こみ」にも表れている。

(104) 「深入り感」を含意する「～こむ」とその複合名詞の用例

- a. 「突っこむ」：内面に深くまで入り込むこと。→「突っ込み」
- b. 「思いこむ」：深く心に思う。固く心に決める。→「思い込み」
- c. 「冷えこむ」：気温がひどく下がる。寒さが厳しくなる。→「冷え込み」

「冷え込み」を例にすると、収集した用例は 112 例で、「厳しい」と共起したのは 40 例、ほかに「強い/著しい/すさまじい/すごい/ひどい/きつい/一番」共起したのは 34 例もあり、用例数の半分以上である。「思い込み」もそうであり、「激しい/強い」と共通する用例が見受けられるが、その反対となる「弱い」などと共起する例が観察できなかった。また、「思いこむ」、「信じこむ」などの場合は、「V1 に現れる状態に深く入り、そこから離れるのは難しい」という意味になるので、「固定感」も含意すると言える。

上記の議論をまとめてみると、以下のようになる。

(105) 「～こむ」に含意される「深入り感」について

- ① 「～こむ」が「深く」と共起する用例は観察できるが、「浅く/少し」との共起例は

ほとんど観察できない。このため、「～こむ」は「深入り感」を含意すると言える。データから見れば、姫野(1997)の議論が正しいと検証できた。一方、本稿の考察により、「深部移動」を含意する「～こむ」はほぼ左側主要部である。「深部移動」は抽象的な内部移動を表す場合、完全にある状態に入るという意味になり、「すっかり/ぐっすり/一層/とても」のような副詞的意味になる。

- ② 一方、「入りこむ」のように、副詞修飾句がなくても、文脈全体の意味を考えて、「深部移動」が読み取れる例も観察できる。さらに、一部の複合名詞「V1 の連用形+こみ」はこのような意味を受け継いでいる。

さらに、「深部移動」はほぼ V1 の程度性を表すもので、V1 は移動の程度或いは状態の程度を含意する場合、「深部移動」がありうるが、程度性を含意しない場合は「深部移動」の意味は生じにくい。

程度性のあるものとしては、「はいりこむ/しんじこむ/おもいこむ/ひえこむ」などの V1 である。物理的移動の場合、着点に入る程度を表す距離副詞句と共起可能である。状態変化の場合は、程度副詞と共起しうる。程度性がない例としては、「黙りこむ」などがあげられ、程度副詞と共起しにくく、時間副詞句と共起する。

(106)a. 30 メートル入る

- b. 少し/かなり/ずいぶん信じている。
c. しばらく/?かなり黙っていた。

上記の例では、「入る」は物理的移動を表し、距離を表す副詞句は着点領域の内部にどの程度移動したのかを表す。「信じる」の場合は、程度を表す副詞「少し/かなり」などと共起する。しかし、「黙る」の場合は、時間を表す副詞句を伴い、「だまる」という状態の持続を表すが、程度を表す副詞「かなり」と共起しにくい。「深部移動」の意味があるかどうかは、V1 の程度性が大きな指標になると考えられる。

3.3.2 「固定感」

姫野(1997)によると、「～こむ」は「いったん入ったら動かない」というニュアンスがある。一方、松田(2004)は V1 が内部移動を含意する場合、「固定感」が焦点化されると議論している。本稿において、両氏の考察を踏まえて、「固定感」を「しっかり」タイプと「長い間」タイプに分類して、「～こむ」の意味をさらに研究する。

3.3.2.1 「固定感」の分類と表現形式

従来の研究で、「固定感」がよく議論されているが、それについての詳しい論述は行われていない。本稿では、「～こむ」と共起する副詞により、「固定感」を以下のように分類し、

表現形式を以下のようにまとめる。

(107)「固定感」の意味

a. 移動物が着点領域における一点に固定して、動かすことができない。即ち、固着の程度が強い。→「しっかり」タイプ

植えこむ、綴じこむ、はめこむ、嵌まりこむ、しみこむ、刻みこむ、貼りこむ
惚れこむ、信じこむ、思いこむ、覚えこむ

b. 移動物が着点領域に長い間とどまって、離れない。即ち、とどまる時間が長い。
→「長い間」タイプ

倒れこむ、座りこむ

なぜ上記のように分類できるかという点、まず、「しっかり」タイプの複合動詞の方は、移動物が場所或いは状態に固定され、そこから離れられないという意味であり、固着を表す「一つく/つける」と共起しうるが、「長い間」タイプの方は状態の一時的維持で、次の状態への変化は予測できて、「しっかり」と共起する例があまりなく、「一つく/つける」と結合する例も見受けられないからである。以下ではまず、「しっかり」タイプについて議論する。

用例を観察すれば、「固定程度の強さ」は前項動詞の結果性に関係していることがわかる。即ち、「植えこむ/はめこむ/はまりこむ」などのように、前項動詞の結果性が強いなら、複合動詞全体の「固定程度の強さ」も強くなる。このグループの動詞の一つの大きな特徴は、「しっかりその場に固着する」を表す後項動詞「～つく/つける」と結びつくことである。

(108)a. チューリップの間にバンジーを1株ずつ植え付ける。(『均衡』『ランダでも楽しめる季節の寄せ植え』)

b. この呪文は石に綺麗に刻み付けたり、旗に染め付けられているだけでなく、…。(『均衡』『ミニヤコンカ初登頂』)

c. 骨を積み上げた地下墓地の壁には死臭が染みついていて、蠟燭の光の届かない奥の暗闇からは湿気を含んだ冷気が漂ってきた。(『均衡』『パリ、殺人区』)

上記の例において、「植えつける/刻みつける」はいずれも「しっかり」を含意し、「～こむ」に意味に近い。「しみつく」はすっかり染み込んで離れられないという意味になる。さらに、「植え付ける」は579例収集できたのに対して、「植え込む」は86例しか収集できず、「植える」は固着性を有する動詞で、「～こむ」より、「～つく/つける」と結合しやすいと言える。このように、「しっかり」という意味を表す「～こむ」は複合動詞「～つく/つける」と重なり合っている。これは「～こむ」の「固着性」を裏付けると考えられる。

また、物理的移動の場合は、移動物が着点と一体化し、分離が難しいのに対して、「信じ

込む/惚れ込む/(不信感が)しみこんでいる」などのように、V1 が心理状態を表す場合は、その状態を変えるのが難しいという意味が生じる。状態変化(抽象的な移動)を伴う動詞は「ある状態に深く入り、そこから抜けることができない」という意味を表し、例えば、以下のような「信じ込む」の用例がある。

(109)それまでの私はといえば、吃りであることを無視されることは、それがそのまま、私という存在を抹殺されることだ、と奇妙に信じ込んでいたのだから。(『中日』『金閣寺』)

訳文：而过去我却一直抱一种奇怪的想法，深信我与口吃是不可分的，故而无视我的口吃，就等于抹杀了我的存在。(《中日》《金阁寺》)

上記の例のように、「信じこむ」の場合は、「固着性」が「深部移動」と繋がっており、あることを深く、すっかり信じているため、その状態から抜けるのは容易ではないという意味が含意される。それに対応する中国語の表現は＜深信＞になり、「深く信じる」という意味である。しかし、「信じこむ」タイプは固着を表す「一つく/つける」と結びつく例は少ない。「思いつく」は言えるが、「いいアイディアに(辿り)つく」(姫野 1999 : 110)という意味で、この場合、後項動詞は固着の意味がない。

また、「信じこむ」タイプは「長い間」を表す副詞「長いこと/ずっと」とも共起できる。

(110)「信じこむ/思いこむ」

- a. だからスタインの読者は、千九百九年に出た『三人の女』こそ、彼女の最初の作品だと、長いこと信じ込んでいたのだ。(『均衡』『現代芸術のエポック・エロイク』)
- b. ぼくはずっと、ディズニーの歌と信じこんでいました。(『均衡』『人生を肯定するもの、それが音楽』)
- c. 共犯者たちは「中川が注射して死なせた」と、長いあいだ思い込んでいた。(『均衡』『Yomiuri Weekly』)
- d. 私の場合、何度か転職していますが、自腹を切った覚えはありませんので、その会社の保険組合とかが、採用の経費として処理している物だと、ずっと思い込んでいます。(『均衡』『』)(『均衡』『Yahoo!知恵袋』)

このように、上記で提示した二種類の「固定感」が意味上繋がっており、「信じこむ」タイプの複合動詞は両者の間に位置すると言える。

一方、「座りこむ/倒れこむ」のような姿勢変化動詞は時間の長さが特徴になるが、このグループの動詞は「しっかり」より、「長時間」と共起しやすい。例えば、「しっかり座り込んだ/倒れこんだ」は言いにくい、「長時間座り込んだ/倒れ込んで、動かない」は自然である。「座りこむ」タイプの動詞は、前項動詞に表された状態が長い間維持されているとい

う意味を含意する。後続の文としては、「長い間動こうとしない」のようなもの、或いは、そのような意味を表すものが多い。例えば、「座りこむ」は以下のような例がある。

(111)「座りこむ」

- a. いったん座りこんでしまった男たちは、長いこと動かない。(『均衡』『地下鉄に乗って』)
- b. 彼女は床にぺたりと座り込んだまま動かない。(『均衡』『ママと少年』)
- c. 広場には、あいかわらず学生がいっぱい座りこんでいて、中には布団を敷いて寝ころがっている人もたくさんいて、じっさいは難民キャンプのような光景です。(『均衡』『紺碧要塞の国際論』)

さらに、「座りこむ」の方は、語の意味が拡張し、その状態への固着性が生じる。「座る」は物に腰掛ける動作だけを表すが、「ーこむ」と結合すると、「抗議などのため座って動かない」という意味まで拡張されている。「倒れこむ」もある場所に倒れる動作のほかに、病気で、或いは意識を失って、起きることができないという意味まで表せるが、前項動詞「倒れる」も「病気になって床につく」という意味があるので、V1からの意味の受け継ぎだと考えられる。また、「植える」などは固着を表す「～つく/つける」と結びつくが、「すわる」などは「～つく/つける」と結合する例が観察できなかった。

「座りこむ」タイプの動詞は、前項動詞に表された状態が一時的なもの、次の状態への変化が予測できる。「シバラク」などと共起できる。これに対して、「しっかり」タイプの「信じこむ」と「思いこむ」などは「シバラク」と共起しにくい。

(112)「シバラク」との共起

- a. 彼はしばらく座り込んだ/倒れ込んだ。
- b. ?彼はしばらく、自分は罪人なのだと信じ込んだ/思い込んだ。

「座りこむ/倒れこむ」の方は、動作主が「座る/倒れる」という状態をしばらく維持していたと理解できるが、「信じこむ/思いこむ」の方は、「自分が罪人なのだ」という考え方からとらわれて、そこから離脱するのは難しいという意味で、「シバラク」と共起しにくいであろう。このように、副詞との共起により、「固着性」を「しっかり」タイプと「長い間」タイプに細分類できて、「～こむ」の意味がさらに明確になると考えられる。

一方、「固定感」は文全体の意味で判断することが多いが、文脈によらないで判断できる例もある。松田(2004)は以下のような例を出している。

(113)*花壇が整地されるまでの間、チューリップを鉢に植え込んだ

→(花壇が整地されるまでの間、チューリップを鉢に植えておいた)

松田(2004)の研究によると、「植えこむ」は「所定の場所にしっかりきちんと植え込む」という意味があり、すぐ掘り出されないように植えることである。このため、(113)は非文になるということである。このように、「植えこむ」のような複合動詞は文脈に依存せず、「固定感」を表現するのが可能である。一方、「～こむ」と共起する副詞をさらに調べてみたが、上記の「しっかり」タイプの場合、共起する副詞は「しっかり」が 54 例、「がっしり/がっちり」が 8 例しか収集できなかった。「長い間」タイプの場合、共起する副詞は、「じっと」が 61 例、「ずっと」23 例、「長時間」が 20 例収集された。これらの表現の他に、「一か月間寝こむ」、「一時間以上/一晩話しこむ」などの例がある。しかし、用例の全体と比べれば、このような例が少ない。このため、「固定感」は副詞により表現されることが少ないと言える。上記をまとめてみると、固定感を含意する「～こむ」は「長い間」、「しっかり」のような副詞句表現と共起する例は観察できるが、殆どの場合は、動詞自身が固定感を表わし、副詞修飾語に依存せず、前後の文脈により、「固定感」が明確になる。以下のような例が挙げられる。

- (114)a. 雪の中に長いこと座りこんでいたためか、身体がずいぶん冷えている。(『均衡』『殺意のアバランシュ』)
- b. 意識が薄れ、その場に倒れ込んでしまった。(『均衡』『十四年十回のがん手術を生き抜いて』)
- c. どうしたことか牛が座り込んで、動こうとしません。(『均衡』『広報なかがわ』)

上記(114)a) の例は「長いこと」という時間副詞句があるが、(114)b) における「倒れ込む」は、意識を失い、その場に倒れて、直ぐには起きられないという意味を含意している。また、(114)c) は後続の否定文により、「座る」という状態がしばらく続いていくと理解できる。このように、「固定感」の場合は、副詞を用いない場合が多く、文脈に深くかかわっているため、学習者にとって、使用の際、文脈について判断しなければならないので、習得が困難であることは予測できる。

3.3.2.2 「固定感」の相対性について

従来の研究では、「固定感」が強調されてきたが、「固定感」を有する同時に、動作だけに注目する用法もあるという点はほとんど注目されてこなかった。先ず「はめこむ」の例を見ると、明確になる。

(115) 「はめ込む」

- a. 黒革の柔らかな気に入りの手袋をはめ込み、背を前倒しに七段切り替えの自転車を

操っていた。(『均衡』『いじめへの逆襲』)

b. 浴場の壁に、丸い時計がはめ込まれている。(『均衡』『アイドルと三冠王の裏側』)

上記の例のように、手袋をはめ込む場合、それを必ずいつか脱ぐが、「壁に時計をはめ込む」場合は、時計がそこに固着して動かないのが普通であろう。このため、「植えこむ」、「はめこむ」など物理的移動を伴う動詞は、固着性が強いといっても、動作だけに注目する性質を否定することはできない。しかし、心理・思考を表す動詞「信じこむ」タイプはこのような揺れがなく、いずれも固定感が強く、動作にだけ注目する性質がないのである。

「信じこむ」の例を観察すると、「すっかり/固く」など固着性を表す副詞的表現とと共起する例が観察できるが、「少し/ちょっと」と共起する例が見受けられなかった。また、前者の表現が豊富で、「すっかり/固く/ずっと/ひたすら/本当に/根底で/長いこと/確実に/心底から/過剰に/頭から/本気で/何の疑いもなく/熱狂的に」などがあつた。「思いこむ」も同様に、「とばかり/てっきり/まったく/強く/固く/頑固に/本気で/すっかり/一途に/頭から/疑うことなく」などと共起する例が観察できる。

上記のような動詞はほぼ前項動詞が内部移動・状態変化を含意するが、V1が内部移動・状態変化を含意するからといって、固定感が強いわけではない。例えば、「考えこむ/黙りこむ」など動詞はかなり揺れており、「考えこむ」に関しては以下のようなデータが収集できた。

表 14 「考え込む」と共起する時間を表す副詞

副詞	データ数
しばらく	52
じっと	29
ちょっと	19
少し	13
一瞬	8
ずっと	3

上記のデータを、西原(1991)を参考し、以下のように整理できる。

(116) 時間の長さ：長い	じっと/ずっと	32
↑	しばらく	52
↑	少し/ちょっと	16
短い	一瞬	8

このように、「考えこむ」は短時間を表す副詞「一瞬/少し/ちょっと」とも共起できる。

この意味では、「考えこむ」タイプは「信じこむ」タイプより、かなり固定感が弱い。

上記の議論により、「～こむ」は固定感を含意するかどうかは、前項動詞の意味、または、複合動詞と共起するヲ格名詞句の意味で判断する必要があることがわかる。

3.3.3 「多量性」

多量性とは移動物の数量に注目するが、従来の議論ではあまり触れられていない。まず、「買い込む」と「溜めこむ」を取り上げて説明する。

(117)a. 金製品を買い込む。（『講談社日中辞典』）

訳文：大量购进黄金制品。

b. 息子はバイトで稼いだ金をせつせとため込んでいるが何に使う気だろう。（『講談社日中辞典』）

訳文：儿子把打工挣到的钱都存起来了，不知想派什么用场。

「買いこむ」は「買って、自分のものとする。特に、将来を見越して多量に買う」という意味であり、「溜めこむ」は「ためて、多量に所有する」という意味である。両方とも数量についての評価を含意する。中国語になると、「買いこむ」は＜大量购进(多量に買う)＞で、動詞の前に修飾語＜大量(多量)＞を挿入する。『均衡』では「買いこむ」を 238 例収集できたが、「買いこむ」と共起する副詞的表現は以下のようなものである。

(118)「買い込む」と共起する副詞的表現

a. 1 例しかないもの

あらゆる、あれこれ、多く、ぎょうさん、ごっそり、さかんに、続々と、
たっぷり、めちやくくちや、めっちゃに、余分に、ヒステリックに、
なんやかんや、ばかに、

b. 2～10 例

多目に、かなり、しこたま、ずいぶん、いろいろ、うんと、ついつい、どっさり、
どんどん、たくさん、いっぱい、こんなに、～ほど(両手に持ちきれいほど)

c. 10 例以上

大量、数量表現(雑誌を何冊も買いこむ、カードを 1 万枚買いこむ)

さらに、前後の文脈で多量性があると判断する例もある。

(119)a. 軍のお店でチョコレート菓子やクッキーや缶詰を買い込んで地元の商店に売りに行く。（『均衡』『アフガン帰還兵の証言』）

b. 半導体を始め、衣類に至るまでモノの大半を、外国から買い込んでいるからである。

(『均衡』『アメリカの保守本流』)

- c. せっかく買い込んできた家具や洋服は、狭いアパートじゃロクに置くスペースもな
い。 (『均衡』『お金が「殖えて貯まる」³⁰の大法則』)

上記の例において、前後の文脈に「売りに行く/モノの大半/置くスペースがない」が現れてくるので、大量のものを買うというニュアンスが読み取れる。多量性を含意すると判断される「買いこむ」の用例は 112 例ある。多量性を含意する「～こむ」は、「買いこむ」のほかに、「着こむ」などがある。

- (120)寒いと思って、着こんできたのは間違いで、かんじきをはいて雪道を歩くと、汗が出てくる。(『均衡』『十年目の訪問』)

「着こむ」は服をたくさん重ねて着るという意味であり、数量を表す副詞「たくさん」の意味が融合されている。上記三語は数量を表す副詞が文に現れない例が多いが、「繰り込む/乗り込む」などの場合、数量表現が出てくる例が多く観察できる。

- (121)a. ……当代家茂の生母実成院に二十三人、そして先代公方の御台所であつた天璋院には八十人の御附女中がいたところへ、宮様は宰相典侍以下七十七名を率いて乗りこ
まれたのだから、全部で四百名を越す女の集団が、朝から夜の夜中まで、京方と江戸の御風違いで末は女嬬やお端下まで、揉めごとに明け暮れるという騒ぎであつた。(『均衡』『和宮様御留』)

- b. 「佐賀兵、鬼怒川渡し船に我れ先きに六十余人も乗り込み、舟の分量に過ぎたため途中で沈み、大半が溺死し、死体が川下に流れた。」(『均衡』『会津将軍山川浩』)

- c. とんだお荷物をしょい込んだんだから、ゲイブは素っ気なく答えたが、同じ不安はすでに彼の心にも芽生えはじめていた。(『均衡』『プリンセスにお手上げ』)

- d. 住宅購入者の住宅ローン返済能力の2倍もの借金を背負い込ませて、ローン返済不能事故が多発し、それが財政支出の重要な原因となった住宅金融公庫の廃止が5年後に実現する。(『均衡』『3年後・5年後のビジネスチャンス』)

上記の例における「乗り込む」は大勢の者が乗る、一団の者がある場所へ繰りこむという意味があり、「繰り込む」は大勢の者がある場所に入るという意味があり、数量表現の「数人/七十七名/六十余人」が文に出てくるが、このような数量的評価は前項動詞と「一こむ」との複合により、生じたものである。「背負い込む」も同様で、多くの荷物或いは債務、責任を背負うという意味になっている。一方、「張りこむ」のような、内部移動表現から離れた例も観察できた。「張る」は賭け事などの金を使うという意味があるが、「一こむ」と結合すると、「思い切って大金を使う」という意味になり、多量の意味が生じる。

次に右側主要部の「繰り込む」と「押し込む」の例である。

- (122)a. 薬師寺が手を叩くと、丸山の遊女たちが、嬌声をあげて数人繰り込んできて、伸樹たちをとり囲んだ。(『均衡』『漂民』)
- b. そして、このように経済が縮小すれば、国内の生産能力が過剰になり、その結果、余剰製品が押し込み、輸出されるという形で、輸出が必ず増える。(『均衡』『日本は悪くない』)

「繰る」は「送り動かして移動させる」という意味であるが、「一こむ」と結びつくと、大勢でそろって入り込むという意味が生じる。「押しこむ」の場合、前項動詞「押す」は「圧力を加える」などの意味があるが、「一こむ」と複合すると、自動詞になり、「大勢のものが入り込む、びっしり詰まる」という意味になる。このように、多量性の意味は左側主要部だけでなく、右側主要部の「～こむ」にも含意されている。

3.3.4 「密集感」

姫野(1999)と松田(2004)が指摘した「～こむ」の多義性以外に、「密集感」という評価の意味もあると考えられる。「密集感」は着点領域に注目し、移動物が大量的に目標領域に移動した結果、目標領域が移動物に埋め尽くされるということである。例えば、「詰め込む」であるが、容器などにぎっしり物を入れるという意味で、着点領域がどうなっているかが焦点化される。しかし、「詰める」自身が既に「ぎっしり」という意味を含意しているので、「一こむ」の意味が曖昧になる。一方、「書き込む」、「建てこむ」及び「立て込む」の例文をみると、後項動詞「こむ」の意味が異なっている。その例は下記のようなものである。

- (123)a. しかし、出発前のスケジュールをぎっしりと書き込んだ克平の日記帳の中で、一晩だけが空白にされていた。克平はこの夜を杏子と自分のためにとっておいたのである。(『中日』『あした来る人』)
- 中国語訳：尽管如此，克平那满满排列着出发前日程安排的手册中，还是留出一晚空闲时间——那是为杏子和他自己挤出的一个晚上。(《中日》《情系明天》)
- b. 川のこちらの、駅側の方は、川岸に人家がたて込んでいて、それに妨げられて見ることができない。(『中日』『あした来るひと』)
- 中国語訳：而河这边的车站一侧，沿岸人家鳞次栉比，挡住了视线。(《中日》《情系明天》)
- c. 店は大分立て込んでいた。(『均衡』『浮橋』)
- 中国語訳：店里颇为拥挤。

(123)a)では、「～ぎっしり」という副詞が付いているが、(123)b)には「たてこむ」だけで

密集感を表わすことができる。即ち、「建てこむ」という語そのものが「家などがぎっしりと立ち並ぶ」という意味になり、この「こむ」は内部移動の意味から離れていると考えられる。また、この三語の場合は、内部移動より、場所の変化が焦点となっており、存在と所有の概念が繋がっている。特に、「建てこむ」と(123)cの「立て込む」の方は内部移動の意味が文に現れていないが、文全体は一定の範囲を指定し、場所の内部の変化に焦点を当てている。このため、内部移動とはいいいくいが、内部変化に関心を寄せているとは言える。また、現代語としての「こむ」には「多量」の意味が入っており、密集感を含意する。このため、後項動詞「こむ」の意味と現代語としての「こむ」の意味が繋がっていると言える。これは「書きこむ」と「建てこむ/立てこむ」の差は語彙概念構造で表すと明らかになる。先ず、後項動詞「こむ」の意味を(124)a~bのように、現代語としての「こむ」の意味を(124)c~dのように表示する。

(124)こむ

- a. [BECOME [y BE-AT- z]]
- b. [z BECOME [z BE-WITH y]]
- c. BECOME [A LOT of y BE-AT- z] (車が込んでいる。)
- d. [z BECOME [z BE-WITH A LOT of y]] (道路が (車で) 込んでいる。)

こうすると、「書き込む」の意味は次のように表わせる。

(125)書きこむ

①書く

[x ACT] CAUSE [BECOME [y BE-AT-z]]

②書きこむ (①+ b)

[x ACT] CAUSE [BECOME [y BE-AT-z]]

& [z BECOME [z BE-WITH y]]

③「ぎっしり」と共起する「書きこむ」

[x ACT] CAUSE [BECOME [A LOT of y BE-AT-z]]

& [z BECOME [z BE-WITH y]]

④構造 [Agent, Theme, Location] ([克平, スケジュール, 日記帳])

よく考えれば、「建てこむ」と「立てこむ」における後項動詞「こむ」は「書きこむ」とは異なっている。前者の例には「ぎっしり」など、密集感を表わす修飾語がついていないからである。このため、密集感という意味は複合動詞自身に入っていると言える。しかし、例文から明らかになるように、「建てこむ」の場合は、項構造は対象物と場所しかない。上記の語彙概念構造に示すように、「こむ」の意味がお互いに異なっている。

(126)①建てる

[x ACT] CAUSE [BECOME [y BE- AT-z]

②建てこむ (①+ c) ①の方は背景化する

[x ACT] CAUSE [BECOME [y BE- AT-z]]→脱焦点化する

&[z BECOME [A LOT of y BE- AT-z]]

③構造 [Theme, Location] ([人家, 川岸])

「立てこむ」の場合は前項動詞の意味が不明であるが、例文「火葬場が立てこむ」から見ると、明らかに場所が焦点化され、後項動詞「こむ」は「多量」を含意し、その意味表示は(124d)になる。

上記の意味表示に示すように、「建てこむ」と「立てこむ」に現れた密集感も「～こむ」の一つの意味であると考えられる。さらに、この密集感は現代語の「こむ」と意味と同様である。「建てこむ」と「立てこむ」に対応する中国語は四字熟語で、＜鱗次栉比(魚のうろこやくしの歯のようにびっしり並んでいる)＞と＜拥挤(込み合っている)＞となっている。姫野(1999)は「たてこむ」を「累積化」グループに入れているが、「書きこむ」と「立てこむ」を同じように見て、その区別に言及していない。本稿では LCS でその相違点を明確することにより、V1 が内部移動を含意しないグループに入れている。

3.3.5 「目的性」

姫野(1999)は「～こむ」の「目的性」にも触れ、以下の用例を挙げている。

(127)a. 心覚えに品名を書きこむ *手なぐさみに無意味な線を書きこむ

b. びびりし教え込む *中途半ばな気持ちで教え込む

(姫野 1997 : 81(波線は筆者による))

姫野の議論によると、「～こむ」の方は人が強い意志を持ってことを行う感じを伴い、いたずら半分のいい加減な気持ち行うという意味では用いられない場合がでてくるといふ。用例を観察したところ、この議論を否定することができないが、本稿においては、前項動詞が「～こむ」との結合により、「目的」が付加されるケースについて議論する。「目的」の付加について、先ず、松田(2004)などが指摘したように、「走りこむ/歌いこむ」などは練習を繰り返して、理想状態に達成するという意味があり、この「理想状態」が目的領域になる。さらに、「座りこむ」にも目的が規定されているが、以下の用例が挙げられる。

(128)a. 試合のために毎日5キロ走りこむ。

b. 抗議のために広場に座りこむ。

「走りこむ」の場合は、試合などのために、くりかえして練習して、理想状態に達成するという意味であり、ほかに、「歌いこむ」などがある。「座りこむ」の方は目的を遂げるために座って動かないという意味で、「一こむ」との複合により、単語自身に目的性が規定されている。さらに、英語の表現においても、前置詞“in”で同じよう表現が成り立つ。

(129)In relation to the above, approximately 1,500 members of Shinrankai held a sit-in protest at the Goei-do Hall of the Nishi Hongan-ji Temple because they felt the so-called Kobai faction had not responded sincerely. (『weblbio 英和・和英辞典』2013/10/20)

日本語訳：上記に関し、紅媒側が誠意を持って答えていないとして、親鸞会会員約 1500 人が西本願寺の御影堂に座り込み抗議を行う。

“sit”は「座る」という動作を表すが、“in”と結びつくと、日本語の複合名詞「座り込み」と同じような意味になり、「抗議のために」のような目的性が規定される。“sit-in”と「座り込み」のように、日本語と英語の方は姿勢変化動詞が内部という移動方向を表す動詞や前置詞との結合により、目的性が生じるのは偶然の現象であるかどうかは判断できないが、中国語の方は<静坐：座りこむ>で表現して、方向補語<～進>で表現できず、<*坐進>は成り立たない。

以上をまとめると、「～こむ」に含意される「目的性」には三つの意味がある。一つ目は強い意志を持って行動する意味で、二つ目は繰り返して練習して、理想状態に達成する意味である。目標に達成するために十分に練習する、或いは、動作を繰り返す必要があるので、「一こむ」は「繰り返し/十分に」のような副詞的意味をも含意する。三つ目は「座りこむ」のように、「抗議」などの目的のために、行動をとる意味である。

3.3.6 「異質性」

姫野(1999)によると、予期せぬものが入る場合、抵抗感が生じると提示しているが、詳しく議論していない。本稿においては、「抵抗感」の本質は、移動物がほかの主体に属す領域への移動を表すという発話主体の認識を表すと考えている。また、許可を得ずに侵入する意味があるので、被害を表す文が後続することが多いのである。このような意味特徴は、単純動詞と複合動詞の意味の比較により明らかになる。

3.3.6.1. 「異質性」の意味について

「異質性」について、単純動詞と複合動詞の意味比較により分析を行うが、以下は「入る」と「入りこむ」の意味の相違を考察する。まず、「入り込む」の方は1人称での使用頻度が低く、わずか 11 例しかないことがわかったが、「入る」と互換できない例は以下のよ

うに提示できる。

(130) 「入る」と「入りこむ」

a. そして**ぼく**が2階の自分の部屋にランドセルを置こうとして自分の部屋に入ったら、ぼくの部屋がものすごくきたなくなっていたので、「ウワァー！」とさげんでしまった。(『話を聞いてよ、お父さん！比べないでね、お母さん！』)

a'. ?そして**ぼく**が2階の自分の部屋に ランドセルを置こうとして自分の部屋に入込んだら、ぼくの部屋がものすごくきたなくなっていたので、「ウワァー！」とさげんでしまった。

先ず、(130)a)は「ぼく」が「自分の部屋」の中に移動したということを表し、よく使われる表現であるが、(130)a')は不自然な表現だとされている。均衡コーパスで収集した「入りこむ」の例を見ると、1人称と「(自分の) 部屋/家」という組み合わせは観察できなかった。着点が自宅や自分の部屋である場合、主格名詞句は、「私/家族」の代わりに、「兵士・ビジネスマン・妖怪・近所の子供」の例が現れうる。また、着点は自宅ではない場合、「吾輩/人の邸内²²、皆/一番部屋をきれいにしている子のところ、君/彼女の宅、警察官/私人の住居」のような組み合わせが多い。

さらに、着点が「家/宅」ではないが、自分が所属していない場所や組織への移動を表す例も数多くあり、「地下組織“パラドス”/日本、永倉新八/山南が監禁された所、宿泊客でもない僧衣姿の男/『緑庭』の庭、あやしい他国者/京の町、二三男の余分の労力/別村の岡方、農民たち/旧い園、「われわれ/～と～との間、(修行者でない人)/修行の仲間、恐ろしい魔物や怨霊たち/強固な結界」などの組み合わせが挙げられる。このように、主語名詞句に表される移動主体が他人の領域へ移動するという意味は、人間を表す主語名詞句に限らず、動物や無生物を表す主語名詞句の例にも表れるが、次に、以下のような作例を見る。

(131) 主語が「有生物」である場合

a. 猫が庭に入った。

a'. 猫が庭に入りこんだ。

(131)a)についてであるが、「猫が庭の中に移動した」という事実を客観的に表しており、猫がうちのペットであってもなくてもよいが、(131)a')の場合は「この猫はうちの猫ではない」というような情報が読み取れる。その上、「この猫が庭に入るのは望ましい事態ではない」という気持ちがあることも推測できる。「入りこむ」の例を見ると、ペット、或いは家で飼っているペットではないが親しい動物、或いは好きな動物が主語になる例はあまり見られない。逆に、「蝮・イタチ・ネズミ」などの例が観察できる。

²² “/” の前は移動物或いは移動主体、後ろの名詞句は着点を表す。

- (132)a. 翌年の夏、別邸に滞在中の長兄が夜中に蚊帳に入り込んだ虻に噛まれて身罷りました。(『均衡』『極意』)
- b. イタチならそういった所へも入り込みますよ。特に天井裏。(『均衡』『Yahoo!知恵袋』)
- c. そこに迷い込んだ「蛾(ガ)」が回路の中に入り込み、…コンピューターを誤動作させる。(『均衡』『Yahoo!知恵袋』)

上記の例に示されたように、主語名詞句が有生物である場合、「入りこむ」が用いられるかどうかは、移動主体と着点との意味関係に関わっている。移動主体が、他人の領域へ移動する場合は、「入りこむ」が多用されるが、逆の場合、文が成立しないか、或いは、不自然な表現と判断される。また、主語名詞句に表された参加者が「人間」の場合は、許可を得ずに移動することが多い。

上記の性質は有生物が主語になる場合だけではなく、無生物の場合も例がしばしばみられる。

- (133) a. インフルエンザウイルスが人間の細胞に入り込んで自分自身をふやしていく。(『均衡』『世の中以外に科学的』)
- b. 網膜剥離とは、網膜に小さな穴(裂孔)が開き、そこから眼球内の水が網膜の下に入り込んで網膜がはがれる(剥離する)病気である。(『均衡』『看護学入門』)
- c. これら冬の山々の静寂と冷氣と孤独と死が、体のなかに入り込み、血を凍らせてその流れをとめ、手足をこわばらせ、自分を凍りついた動かない存在にしてしまうのではないか。(『均衡』『モーパッサン短篇選』)

他に、「病原菌/植物、細菌/傷口、異物/生きた細胞、泥水/要塞の内部、歯石/歯と歯茎の間、癌細胞/リンパ管や血管、水虫菌/生体、煙やガス/室内、換気水蒸気/部屋のどこにでも、耳垢/耳の奥、」などの例もある。ほとんどの場合、その後に被害性を表す文が続く。このように、無生物が主語になる場合、移動物が着点領域に移動すると、被害が発生する、或いは不愉快な感じになるという判断が成立する。

上記の主語になる名詞と二格名詞句との組み合わせのパターンをまとめると、以下のようになる。

(134) 「入りこむ」の用例における移動物と着点との組み合わせ

- a. ヒト・組織が、他人の領域(国/組織/建物など)へ移動する(警察・人の邸内)
- b. ペット以外の動物が人間の領域へ移動する(野良猫・イタチ/家)
- c. 細菌/癌細胞などが細胞/植物に侵入する(細菌・傷口)

- d. 煙/ガス/水蒸気が建物・部屋などへ移動する（煙やガス・室内）
- e. 不愉快な感じが生じる（静寂と冷氣と孤独と死・体）

(134a～b)における移動主体は有生物であるが、(134c～d)の方は無生物である。移動主体・移動物と着点領域との意味関係はさらに、以下のようにまとめられる。

- (135)a. 主語が有生物である場合、移動主体 A が B の所属する場所(C)へ移動し、A が C への移動の許可を得ていない。
- b. 無生物の場合は、A が領域 B に移動し、被害性が生じることが多い。

以上のような現象を＜異質性＞というが、これは「入りこむ」の大きな意味特徴になると考えられる。このような異質性は移動物に対する話者の判断である。即ち、「入る」は移動物が着点への移動を客観的に表現するが、「入りこむ」はその移動だけではなく、さらに、移動物がほかの主体の所属する領域に入るという話者の態度・認識をも表している。発話の主体が着点領域の所有者に自己同一化して、姫野(1999)が提示した＜抵抗感＞が生じると考えられる。このように、「飛びこむ」など、V1 が内部移動を表さない「～こむ」において、後項動詞「こむ」は「内部への移動」を表すが、「入りこむ」の場合は、「内部移動」というより、移動主体・移動物の異質性という話者のネガティブな判断を表す。

以上は「入りこむ」を例として、「～こむ」の異質性について議論したが、さらに上で述べた「異質性」は「入る/入りこむ」に限らない。例えば、「住む/住みこむ」などもそうである。

- (136)a. 豊田佐吉は、喜一郎が出生した年の秋には、豊橋の森家（叔父の重治郎、従兄弟の米治郎）に住み込み、動力織機の研究を続けた。（『均衡』『豊田喜一郎伝』）
- b. 彼氏の家に転がり込んで、2年になります。（『均衡』『Yahoo!知恵袋』）
- c. まるでどこかの民家の土間に、勝手に上がり込んでめしを食うという感じだ。（『均衡』『大衆食堂』）

上記の例のように、「住みこむ」は自分の家以外の家屋に住むことを表す。別に抵抗感、不愉快な感じがなくとも、自分の所属しない場所への移動なら、「住みこむ」が用いられる。「転げこむ/転がりこむ」は他人の家に入って世話になるという意味があり、「他人の家への移動」という点で、「住みこむ」と共通している。また、「上がる」は「履物をぬいで家の中に入る」という意味を表すが、「上りこむ」は「人の家の中などに入って座ってしまう。おかまいなしに、上がる。」という意味までを含意する。さらに、これらの動詞が名詞に転生しても、＜異質性＞の意味が受け継がれる。

- (137)a. 64年慶応義塾大学経済学部を卒業後、大阪の繊維雑貨問屋「北原商店」に入社。
3年間住み込みで働く。(『均衡』『時代がやっと追いついた』)
- b. 民家や商店・事務所に侵入する「上がり込み」が急増している。(『均衡』『犯罪白書』)

上記の例に示されたように、「上り込み」は完全に侵入という意味になる。AがBの領域への移動という意味は複合語の意味の一部になっており、被害性が生じる。さらに考えてみれば、被害性の場合、移動物に対する評価だけではなく、事象の参与者の間の関係に対する評価が語彙化されている例もある。動作主が、不法、或いは強制的な手段で、移動物のある場所に移動させるという認識がある場合、「～こむ」が使われる例が多い。下記の(138)a)と(138)b)は均衡コーパスから収集した「連れる」の例で、(138)a')と(138)b')は「連れこむ」と入れ替えた例である。

- (138)a. 「なんで、助けないの。四年生だって、悪いことをしたら堂々と言っていいの。正彦君を連れてらっしゃい」(『均衡』『子供の言葉はどこに消えた?』)
- a'.*「なんで、助けないの。四年生だって、悪いことをしたら堂々と言っていいの。正彦君を連れこんでらっしゃい」
- b. 保健室まで登校すると、もうちょっとと頑張らせて教室に連れて行きたくなるのが親心であるが、ここで子供との約束を違えて無理に連れて行けば不安が増大する。(『均衡』『教育催眠とその技法』)
- b'. ??保健室まで登校すると、もうちょっとと頑張らせて教室に連れて行きたくなるのが親心であるが、ここで子供との約束を違えて無理に連れ込めば不安が増大する。

上記の例に示されたように、「連れる」は好意を表すことができるが、「連れこむ」の方は好意表現との共起が許されず、下記の例のように、被害を表す例が多い。

- (139)a. 54年4月、元会社役員(43)ら3人は、貿易会社社長(63)を成田市内の山林に連れ込んで、殺害して埋めた(『均衡』『警察白書』)
- b. それで、加津山は、彼女をその別荘に連れ込んで、監禁した。(『均衡』『京都・金沢殺人事件』)

上記の例のように、「連れこむ」と結びつく名詞句は、人を表すものに限られ、被害者の例が多く、また、後続する文における述語動詞は「監禁する/殺す/殴る」などで、犯罪に関わる語彙が多い。このように、「連れこむ」の場合は、後項動詞「～こむ」は被害性を規定していると言える。

さらに考えてみれば、「～こむ」はもともと、「引きずる」、「騙す」、「丸める」などと結

合しやすい。一部の動詞は、「こむ」と結合すると、マイナスの意味しか受け継がれない。例えば、「誘う」は「一緒に行動するようにすすめる。(ボランティア活動に～)」と「好ましくない状況などに引き入れる。誘惑する。(悪の道に～)」と二つの意味項があるが、「こむ」と結合すると、「好ましくない状況などに引き入れる」という意味が受け継がれる。入りこむ、「つれこむ」などのように、異質性、また、侵入・被害という話者の認識がある場合、「～こむ」が多用される。ある事象における参加者の間の関係、及び、移動物と着点領域についての話者の認識は、松田(2004)が提示したイメージスキーマだけではとらえにくいと考えられる。

3.3.6.2. 「異質性」を含意する動詞と敬意表現・命令文との共起度

さらに、「異質性」を含意する動詞は敬意表現などと共起できないが、以下では「入り込む」を例として説明する。「入り込む」が敬意表現・命令文に用いられる例は非常に少ない。これは、上記の異質性に関係すると考えられる。次は、着点がほかの主体に属す場合に、「入る」と「はいりこむ」と、「～くれ」、「～ください」、「～しろ/せよ」という形式との共起度を見る（以下の例はいずれも作例である）。

(140)a. どうぞ、お入りください。

a'. *どうぞ、お入りこみになってください。(お客さんに対して)

b. 入れ！

b'. ?入りこめ！（着点は人の宅など、他人の領域である場合）

「はいる」はニュートラルな表現であるため、敬意表現、命令文、意志・願望表現などと共起するが、「はいりこむ」は非常に制限されている。『均衡』で検索した結果、上記の表現形式の用例数はいずれもゼロである。

まず、敬意表現と共起できないのは、ガ格名詞句とニ格名詞句との異質関係によると考えられる。前で述べたように、移動者が、他人の所属領域に移動する場合、「入りこむ」が多用される。このため、移動行為が期待されていないため、「～てください」などとは共起しない。一方、命令文もそうであり、相手の領域への侵入を認めるわけではないので、仲間に「～に入り込め」と言うことは先ずないであろう。

一方、異質性を含意しない「注ぎこむ」と「踏みこむ」などはコーパスで次のような例がある。

(141)a. 物品購入の問題につきましては、どうかできるだけむだを省いて山につぎ込んでください。(『均衡』『国会会議録』)

b. ぜひ、そこは大臣として踏み込んでいただきたい。(『均衡』『国会会議録』)

c. ぜひこの関連対策の中でこの二分野についてしっかりとはめ込んでいただきたい。

(『均衡』『国会会議録』)

上記のように、異質性を含意しない「注ぎこむ」などは「～てください」などと共起できる。このように、敬意・命令表現との共起度により、同じV1が内部移動を含意する「～こむ」をさらに分けることができる。

3.3.7 「～こむ」の「資格づけ的評価」と「価値づけ的評価」の抽出

形容詞の評価性と複合動詞「～こむ」との接点としては、先ず、《資格付けの評価》のグループにおける量的な特徴を表す特性形容詞が挙げられる。

(142) 量的な特徴を表す特性形容詞と「～こむ」との繋がり

a. 「深部移動」

領域内部への移動の程度 浅い⇔深い 入りこむ

b. 「固定感」

① 領域内部に移動後、留まりの時間 短い⇔長い 座りこむ

② 領域の内部に移動後、定着の程度 弱い⇔強い 植えこむ

c. 「多量性」

移動物の数量 少ない⇔多い 買いこむ、ためこむ

d. 「密集感」

領域の内部における移動物の存在 点在⇔密集/いっぱい 買いこむ、ためこむ

e. 「目的性」

動作主の目的性・意志 弱い⇔強い 教えこむ、走りこむ、座りこむ

一方、「～こむ」の「異質性」は完全に「被害性」などに繋がっており、「悪い」という「価値づけ的評価」になる。さらに、資格づけ的評価を含意する「～こむ」において、《価値づけ的評価》も可能である。「～こむ」、特に左側主要部の「～こむ」の意味構造を以下のように提示できる。

(143) 「～こむ」の意味構造

① 内部移動/状態変化

彼は川に飛び込んだ。

② 価値づけ的評価+内部移動/状態変化

野良猫が庭に入り込んだ。＜価値づけ的評価：マイナス(家に属さない人か動物が移動し、不快感が生じる)+内部移動＞

③ 資格づけ的評価+内部移動/状態変化

「冷えこむ」：＜資格づけ的評価：激しい+状態変化＞

④ 価値づけの評価+資格づけの評価+内部移動/状態変化

「信じこむ」：＜価値づけの評価：マイナス(信じる内容が間違っている)+資格づけの評価：深い+状態変化＞

「座りこむ」：＜価値づけの評価：マイナス((座り込んでなかなか動かないで困っている))+資格づけの評価：留まる時間が長い+姿勢変化＞

上記の例に示されるように、「飛びこむ」のように内部移動か状態変化だけを表し、評価の意味を含意しない例が多く観察できるが、「入りこむ」のように、「価値づけの評価」と「内部移動/状態変化」を含意する例もある。また、「冷えこむ」は「激しく/ぐっと」を含意して、状態変化だけではなく、資格付け的变化も表しうる。さらに、「信じこむ」や「座りこむ」などには、「価値づけの評価」と「資格づけの評価」と「内部移動/状態変化」と三つの意味が複合している。このタイプの「～こむ」は、ほかに「思いこむ」、「染みこむ」などがある。

複合動詞「～こむ」の意味構造は、内部移動・状態変化に、認識・評価の意味を付加することが多い。この認識・評価の意味は、先行研究における多義性に対応しているが、本稿では、主に樋口(2001)が提示した「資格づけ的な評価」と「価値づけ的な評価」という枠組みを使って、「～こむ」の付加的意味を再整理した。結論として、「～こむ」は「着点領域における位置が深い」、「領域内部に留まる時間が長い」、「動作主の目的性が強い」、「領域内部に定着の程度が強い」、「領域の内部に移動物が充満する」、「領域の内部に移動する物の数量が多い」と五つの資格づけ的な評価の意味がある。さらに、「～こむ」に含意される「異質性」が「価値づけ的な評価」で、被害性が生じるという意味で、「悪い」という評価の意味を有する。「～こむ」には、内部移動・状態変化の意味しかない場合もあるが、多くの場合、特に左側主要部の場合、「～こむ」には二タイプの評価の意味が融合する例が多く観察できる。

3.3 節の内容は以下のようにまとめられる。

表 15 「～こむ」の評価的意味について

姫 野 (1999)	本稿の立場		用例	評価的意味	
奥深く入 る感じ	深部移動	着点領域の内部に深 く入る	入りこむ	領域内部への移動の程度 浅い⇔ 深い	資 格 づ け 的 評 価
固定感	固定感	長時間着点領域にと どまる	座りこむ 倒れこむ	領域内部に留まる時間 短い⇔ 長い	
		着点領域に固着する	植えこむ	領域定着の程度 弱い⇔ 強い 植えこむ	
-----	密集感 ²³	着点領域が移動物で いっぱいになる	詰めこむ 立てこむ	領域の状態 点在⇔ 密集	
目 的 性 (人が強 い意志を 持ってこ とを行う 感じ)	目的性	①強い意志を持って 行動する。 ②繰り返して練習し て、理想状態に達成 する。 ③「抗議」などの目 的のために、行動を とることである。	教えこむ 走りこむ 座りこむ	動作主の目的性・意志 弱り⇔ 強い	
-----	多量性	着点領域へ移動する 物の数量	買いこむ、 ためこむ	領域の内部に移動する物 の数量 少ない⇔ 多い	価 値 づ け 的 評 価
抵抗感	異質性	移動物が他人の領域 へ移動し、殆どの場 合、不快感や被害性 が生じる。或いは、 動作主が移動物をあ る場所に移動させて 害を加える	住みこむ 入りこむ 連れこむ 誘いこむ	「被害性」などに繋がっ ており、「悪い」という「価 値づけの評価」になる	

3.3.8 姫野(1997)及び松田(2004)との比較

本稿で議論した「～こむ」の評価的意味は先行研究を踏まえて分析をさらに行ったもの

²³ 3.3.5 節で議論したように、姫野(1997)は密集感を含意する「～こむ」を一つのグループとして扱うが、本稿においては、評価的枠組みを取り、「密集感」は資格付けの評価の一種となる。

である。以下は先ず姫野(1997)の共通点と相違点について議論する。

表 15 に示されるように、姫野(1997)は「～こむ」が「奥深く入る感じ」と「固定感」、「目的性」、「抵抗感」があると議論しているが、本稿においては、「奥深く入る感じ」を「深部移動」として、「抵抗感」を「異質性」として捉えている。また、姫野(1997)はこの四つのニュアンスについて詳しい議論をしていないが、本稿は評価の枠組みを用いて、分析を行った。

これまでの分析により、「深部移動」は物理的移動を表す場合、着点の深いところに移動することであるが、前項動詞が具体的な移動ではなく、状態変化を表わす場合、着点領域が物理的な空間ではなく、V1 で表わされる状態になり、「深部移動」が完全にある状態に入るという意味になる。共起する副詞句を観察すると、前者の場合、「～の奥に/深く」であるが、後者の場合は、「かなり/一層」などとなる。このように、物理的な内部移動が状態・程度の深化に繋がっており、程度を表す副詞の意味「非常に」などが生じる。

また、「固定感」の場合は、「しっかり」タイプと「留まる時間が長い」タイプと二タイプに分けて考察を行った。「しっかり」タイプは前項動詞が「一つく/つける」とも結合できるが、「留まる時間が長い」タイプはできない。「異質性」の場合は、「入る」と「入りこむ」との研究を行い、「異質性」を検証した。結論として、主語が有生物である場合、移動主体 A が B の領域 C へ移動し、A が C への移動の許可を得ていないが、無生物の場合は、A が領域 C に移動し、被害性が生じることが多い。このため、「異質性」は価値づけの評価の<悪い>評価に繋がる。さらに、複合名詞「すみこみ/上がり込み」などにも、「異質性」が含意されている。

「目的性」は、三つの意味があると考えられる。一つ目は姫野(1997)が提示した「強い意志を持って行動する」意味で、二つ目は繰り返して練習して、理想状態に達成する意味である。目標に達成するために十分に練習する、或いは、動作を繰り返す必要があるので、「一こむ」は「繰り返し/十分に」のような副詞の意味をも含意する。三つ目は「座りこむ」のように、「抗議」などの目的のために、行動をとる意味である。

姫野(1999)は密集感を含意する「～こむ」を一つのグループとして扱っていたが、本稿においては「～こむ」の評価的意味の一つとする。「書きこむ/立てこむ/建てこむ」の意味分析により、内部移動表現は移動物の移動に注目するが、密集感がある場合は、内部移動より、場所の内部の変化が注目される。このように、内部移動を表す「一こむ」は現代語の「こむ」に繋がっていることがわかる。

さらに、「多量性」の場合、「買いこむ/ためこむ」などの例があつて、従来の研究ではほとんど議論されていない。

一方、松田(2004)は主に「固定感」と「目的性」について議論を行ったが、本稿の考察ではほかの「深部移動」なども無視できないと考えている。また、外国語と対照する場合、「～こむ」のこの六つの評価的意味は重要なヒントになるが、これについては、第六章で考察を行う。

3.4 評価の対象による「～こむ」の意味体系の再整理

評価の対象により、「～こむ」の意味体系を再整理することができて、中国語との対照研究に役立つと考えられる。以下では先ず、資格づけの評価の意味について議論する。

3.4.1 資格づけの評価の意味について

3.4.1.1 移動体の結果状態への評価

3.3 節の議論によると、「～こむ」の評価の意味は「深部移動」、「固定感」などがあり、「深く/～の奥に/しっかり」などと共起するが、これらの副詞的修飾句は内部移動の結果状態を修飾すると考えられる。

Talmy(1985)は、移動という事象の意義素を、移動、移動体、場所辞、目的地・背景、状態/原因に分けているが、考えてみれば、「入りこむ」のような「深部移動」を含意する場合、後項動詞は、移動体が場所の内部において、どこまで移動したのかに注目する。一方、「固定感が強い」を含意する場合、「こむ」は、移動体が着点領域でどのように存在するかということに注目する。例えば、「入る」と「入りこむ」の作例を以下のように上げられる。

(144) 「入る」と「入り込む」

- a. 彼らは山に深く入って、道がわからなくなった。
- b. 彼らは山に入りこんで、道がわからなくなった。

上記の例のように、「入りこむ」には「深く」が含意されており、文脈全体により、「山の深部にいる」と、移動主体の位置を単純動詞「入る」より詳しく指定している。仁田(2002: 33-41)は主に動詞成分を中心に取出された命題内修飾成分を考察対象としている。それを副詞的表現といい、「結果的副詞」、「様態の副詞」、「程度量の副詞」、「時間関係の副詞」、「頻度の副詞」に分類しているが、結果の副詞については、「赤ん坊のまるまる太った腕」などの例が挙げられ、「まるまる」は結果の副詞であるとしている。仁田(2002)は、動きの結果の局面を取り上げ、動きが実現した結果の主体や対象の状態のありように言及することによって、事態の実現のされ方を限定し、特徴づけたものと規定している。ほかに、「がりがりにやせる」などの例があり、「やせた結果、がりがりになる」という意味である。「入りこむ」の場合は、内部移動の結果、着点の深部に位置すると理解でき、「深く」は結果副詞になると言えるが、同じように強い固定感を表す「しっかり」も、結果副詞のグループに入ると考えられる。また、一部の動詞は内部移動の意味から取り付けの意味に移り変っている。その例として以下に「埋めこむ」を取り上げて説明する。

- (145)a. 双葉の下 2～3 mm くらいまで、茎を土に埋め込んで、上部が倒れこまないようにしましょう。(『均衡』『人気のパンジー』)

中国語訳：把茎埋在土中，至双叶下方 2～3 mm 左右，注意防止上面的部分倾倒。

b. 身体に埋め込んだチップは金融情報以外の諸々の情報をを情報本部に伝えるだろう。（『均衡』『Yahoo!ブログ』）

中国語訳：装在身体里的芯片可将金融信息以外的信息传至信息总部。

(145)a)の方は、茎を土に埋めこんだ結果、「茎がしっかり土に留まって、成長していく」という意味が読み取れるが、例(145)b)の方は、「埋め込む」は取り付けの意味になり、対象物のチップは身体にしっかり留まるというより、身体と完全に一体化する。これは中国語訳の相違にも見られる。「埋め込む」に対応する中国語訳は、(145)a)において、<埋(埋める)>になっているが、(145)b)において、<装(取り付ける)>になっている。このように、「埋めこむ」タイプの動詞は、移動物が着点領域に入ってから、そこに固着するという意味を表すので、「深部移動」と同様に、移動或いは変化の結果状態を補足的に説明していると言える。

「座りこむ」など、長時間前項動詞に表された状態である場所にとどまるという意味を含意するが、「座った結果、そこに長い間留まる」とは言えないので、この「長時間」は結果副詞のグループに入れるのは適当ではない。しかし、考えてみれば、「座る」のような姿勢動詞は瞬間的な状態変化を表すので、それと共に起する「長時間」は、変化結果の持続時間を表す。これに対して、「考えこむ」など、前項動詞が活動を表せる動詞と共に起する場合、動作の進行時間を表す。

(146)a. 彼は長時間考えこんだ。

b. 彼は座りこんで（→長時間座って）、動こうとしない。

上記の例のように、「考えこむ」と共に起する場合、「長時間」は「考える」という動作の進行期間を表すが、「座りこむ」の場合、「座る」という状態変化結果の持続期間を表す。堤(2005)は、前者を動作期間の副詞的表現、後者を結果期間の副詞的表現とする。「座りこむ」タイプは「長い間」という結果期間を含意するので、「入りこむ」などの「深入り感」を含意する複合動詞と同じように、移動体の位置、即ち、移動・変化の結果状態に注目するのである。

前述のように、「～こむ」に含意される「深く/しっかり」の資格付けの評価的意味は、移動物の最終的位置・状態を表す。これらの副詞は仁田(2002)の分類に当てはめると、結果副詞のグループに入る。

3.4.1.2 移動物の数量と着点領域と動作主の意志性への評価

「深部移動」と「固定感」が内部移動の結果状態に注目するのに対して、「多量性」と「密集感」の方は、移動物の数量、或いは、移動物が着点領域に移動後の着点領域の状態に注

目する。以下は、「着こむ」と「詰めこむ」、「立てこむ」の例である。

- (147)a. 寒いと思って、着こんできたのは間違いで、かんじきをはいて雪道を歩くと、汗が出てくる。(『均衡』『十年目の訪問』)
- b. それがこのような植木の根、枝、葉、雑草などを入れるからで、時には別に袋を用意してそれに庭ごみを詰め込み、自分で市の廃棄場にもって行かねばならぬ。(『均衡』『Yahoo!ブログ』)
- c. 店は大分立て込んでいた。(『均衡』『浮橋』)

上記の例(147)は、「衣服をたくさん重ねて着る」という意味で、「一こむ」は対象物の数量を補足的に説明すると理解できる。(147)の「詰めこむ」の場合は対象物の移動と、着点領域の密集感を両方とも表すが、着点が移動物「庭ごみ」でいっぱいになる意味が焦点化される。さらに、(147)の「立てこむ」の方は内部移動の意味が背景化し、着点領域の「火葬場」が焦点化され、そこに人がいっぱいいるという意味を表す。

ほかに、「目的性」があり、これは動作主の意志を評価すると考えられるが、ここでは例を省略する。

3.4.2 価値づけの評価的意味について

まず、「価値づけ評価的意味」についてであるが、本稿において、「～こむ」の価値づけ評価的意味は「異質性」から生じた「悪い」という評価である。この異質性とは二つの意味があり、一つ目は「侵入」という意味で、移動物が自分に属さない着点領域へ移動することで、多くの場合、不快感或いは被害性が生じる。二つ目は「侵害」という意味で、移動主体が移動物に害を加えることで、被害性が生じる。いずれも、普通の事情とは異なる性質を有するので、「異質性」と言う。

考えてみれば、このような「異質性」は「侵入」の場合、発話者が移動物と着点領域とのそれぞれの所属関係を認識したうえで、出した判断であるが、「侵害」の場合、発話者が、動作主が対象物(移動物)をある場所へ移動させてから、加害したという認識・判断を出している。両方とも動詞句が表す事象だけを表すとは言えない。

(148) 「異質性」

- a. 暴徒が庶民の家に入りこんだ。
- a'. *私は自分の部屋に入りこ込んだ。
→ 私は自分の部屋に入った。
- b. 彼は会長をその別荘に連れこんで、監禁した。
- b'. *先生は生徒を教室に連れこんで、授業を行った。
→ 先生は生徒を教室に連れて、授業を行った。

上記の「入りこむ」の例をみると、移動主体が自分が所属しない着点領域へ移動するなら、「入りこむ」が使えるが、「私」が自分の部屋に移動する場合は、「入りこむ」が使えない。また、「連れこむ」の例において、「監禁した」という後続の文があって、加害の意味があるから、「連れこむ」が用いられるが、逆に、先生が学生に授業を行う場合、「連れこむ」を用いるのがおかしくなる。このように、「～こむ」は、事柄全体に対する認識、或いは評価である。これに対して、「深く/しっかり」などの評価的意味は、複合動詞に表された動作を受けた対象物の最終的な位置・状態を表す。

上記の議論により、「～こむ」に含意される資格づけ的评价と価値づけ的评价の意味は以下のようにまとめられる。

表 16 「～こむ」の意味の再整理

評価的意味			用例	評価の対象
資格づけ的评价	深部移動	領域内部への移動の程度 浅い⇔ 深い	入りこむ しみこむ	移動物が着点領域へ移動後の存在状況、即ち、移動の結果状態への評価
	固定感	領域内部に留まる時間 短い⇔ 長い	座りこむ 倒れこむ	
		領域定着の程度 弱い⇔ 強い	植えこむ はめこむ	
	目的性	移動物の数量 少ない⇔ 多い	教えこむ 走りこむ	動作主の意志性
	密集感	着点領域の状況 点在⇔ 密集	詰めこむ 立てこむ	着点領域
	多量性	移動物の数量 少ない⇔ 多い	買いこむ 着こむ	移動物の数量
価値づけ的评价	異質性	「被害性」などに繋がっており、「悪い」という「価値づけ的评价」になる	入りこむ 連れこむ 誘いこむ	事柄全体に対する認識・評価

3.5. 「～こむ」の評価的意味と前項動詞との繋がり

なぜ「～こむ」の評価的意味と前項動詞との繋がりについての考察が必要であるかというと、全ての評価的意味は V1 と V2 との複合により生じたわけではないからである。3.1 節で「抱える」と「抱えこむ」の用例を挙げたが、「抱える」には「自分の負担になるものをもつ。厄介なもの、世話をしなければならないものを自分の身に引き受ける。」という意味がある。一方、「抱えこむ」には、「自分の負担になるものを引き受ける。手に余る多くの物事や厄介なことを、自分の身に受け持つ」という意味がある。このため、この二語は

「負担になる物を引き受ける」という共通的な意味があり、このようなマイナスの評価は「抱えこむ」が「抱える」から受け継いだ可能性がある。このため、前項動詞の評価的意味について考察を行うことにより、「～こむ」の評価的意味がどのように形成されるのかという問題点を解決できると考えられる。

3.5.1 「資格づけ的评价」について

調査の結果、前項動詞が「固定感」を含意する例が多く観察できるが、「深部移動」と「密集感」は1例か2例しかなく、「目的性」と「多量性」はほとんど観察できなかった。まず、「固定感」の場合、「しっかり」を含意する前項動詞が多く、以下はその一つの「植える」の用例である。

(149)a. 山に木を植える。(『大辞泉』)

b. ブラシに毛を植える。(『大辞泉』)

c. 倫理観を植える。(『大辞泉』)

「木を植える」の場合、木がよく成長するために、しっかり植えるのは普通であるが、「毛を植える」の場合、植えたらしっかり存在してほしいという目的性があるので、固定感が否定できない。一方、「倫理観」のような認識・思想を表すヲ格名詞の場合、思想、教義などをしっかり教え込み、根付かせるという意味なので、固定感が強く感じる。「植える」のほかに、「はめる」なども固定感を含意し、「桶にたがを嵌める」などの例がある。

しかし、「長い間」を含意する前項動詞は少なく、「倒れる」しか観察できなかった。

(150)a. 病気になって床につく。「心労で～・れる」

b. 命を奪われる。殺される。死ぬ。「敵弾に～・れる」

(『大辞泉』)

上記の例において、病気で倒れた場合、倒れた状態が相当続くことが想像できる。「敵弾に倒れる」の場合は、「倒れる」は死ぬという意味になり、次への状態変化がないと言える。

このように、「しっかり」タイプの固定感の前項動詞から受け継がれる可能性が高く、「一こむ」との複合により、「しっかり」の意味が焦点になると考えられる。一方、「長い間」タイプは「倒れこむ」の方はV1からの受け継ぎで、「すわりこむ」の方は「一こむ」との複合により、固定感が生じると推測される。

一方、「深部移動」を含意する前項動詞についてであるが、ニ格名詞が抽象的名詞である場合、「深部移動」の意味が生じるが、その例として以下の動詞がある。

(151)a. 話が佳境に入る²⁴ (『大辞泉』)

b. 親切が身に染みる。(『大辞泉』)

「入る」は「ある状態にまで深くはいっていく」という意味があり、「しみる」は心に深く入るという意味がある。物理的深部移動を含意する前項動詞の例が観察できなかったのも、「深部移動」はV1と「-こむ」との複合で獲得した意味であろうと推測される。

次はV1が「密集感」を含意する例であるが、それに該当するのは「詰める」しかない。

(152)a. 料理を重箱に詰める。(『大辞泉』)

b. 衣装を詰めた鞆 (『大辞泉』)

「詰める」自身は「容器などに物を入れていっぱいにする。ぎっしり入れてすきまがないようにする」という意味で、「-こむ」と結合すると、密集感が強調され、「無理矢理に」などの意味が生じる。一方、複合動詞「～こむ」は密集感を含意しないが、V1が内部移動から密集感まで意味拡張が行われるケースがあり、以下は「埋める」の例である。

(153)a. 壺を庭に埋める。(『大辞泉』)

b. 観衆が会場を埋めた。(『大辞泉』)

「埋める」の意味は、「穴などに物を入れ、上に何かをかぶせて見えなくする」という意味で、内部への移動を表すが、「人や物である場所をいっぱいにする」という意味まで表せる。このように、内部移動から着点領域の充満まで表せるのは「～こむ」だけではないので、日本語において内部移動表現が密集感に繋がるのは偶然の現象ではないと言えよう。

一方、「目的性」と「多量性」はV1に含意される用例が観察できないので、V1と「-こむ」との複合により生じたものであると推測される。本稿においては、「目的性」が三つの意味がある。一つ目は強い意志を持って行動する意味であり、これはV1に含意されていない。姫野が提示した用例を使って説明すると、それが明らかになる。

(154)a. 心覚えに品名を書きこむ *手なぐさみに無意味な線を書きこむ

→ 心覚えに品名を書く 手なぐさみに無意味な線を書く

b. びしびし教え込む *中途半ばな気持ちで教えこむ

→ びしびし教える 中途半ばな気持ちで教える

(姫野 1997 : 81(波線と単純動詞の言い換えは筆者による))

上記の例のように、「手なぐさみに」と「中途半ばな気持ちで」のような副詞句があると、

²⁴ この例における「入る」は「いる」で、「はいる」ではない。

目的性がない、或いは弱いので、「書き込む」と「教え込む」が使えないが、単純動詞の「書く」と「教える」が使える。このため、前項動詞には目的性について規定されていないが、「一こむ」との複合により、目的性が規定されるようになると考えられる。

また、「目的性」の二つ目の意味は繰り返して練習して、理想状態に達成する意味であり、三つ目は「座りこむ」のように、「抗議」などの目的のために、行動をとる意味であるが、このような目的の付加は「一こむ」との複合により、実現されたもので、V1 だけでは表現できない。

最後に「買いこむ/着こむ」は「多量性」を含意するが、前項動詞の「買う/着る」には大量を含意していない。このため、「多量性」と「目的性」は V1 と「一こむ」との複合により生じたものであると考えられる。

3.5.2 「価値づけの評価」について

前述のように、「～こむ」に含意される「価値づけの評価」は異質性と被害性に繋がっており、＜悪い＞というマイナスの評価である。用例を観察すると、「住みこむ/転げこむ」に含意される異質性、即ち、移動主体が他人に属する領域への移動という認識は、V1 には含意されていないが、望ましくないものが自分の所有領域に移動して不快感が生じる例がある。

(155)a. 「抱える」：自分の負担になるものをもつ。厄介なもの、世話をしなければならないものを自分の身に引き受ける。

「多くの負債を一・えて倒産する」「妻子を一・えて路頭に迷う」)

b. 「背負う」：負担になることや重い責任のあることを引き受ける。しょう。「やっかいな問題を一・わされる」「一家の生活を一・って立つ」

(『大辞泉』)

一方、移動主体が望ましくない場所或いは状況に入って被害性が生じる場合は、以下の例に示されるように、一部の前項動詞はすでにそれを含意している。

(156)a. 「誘う」：好ましくない状況などに引き入れる。誘惑する。

「悪の道に一・う」

b. 「嵌める」：計略にかける。いっぱいくわせる。

「罠(わな)に一・める」

c. 「だます」：うそを言って、本当でないことを本当であると思い込ませる。あざむく。たぶらかす。

「人を一・して金を取る」「まんまと一・される」

(『大辞泉』)

上記の 3 つの動詞はいずれも加害の意味があつて、被害性が生じるが、以下の 3 例のように、このようなマイナスの意味は「ーこむ」と複合して残っている。

- (157)a. 壇ノ浦で安徳を波の下に都があると偽って、無理心中に誘い込むが、自らは生き残ってしまう。(『均衡』『平家物語』)
- b. 無論、寝首をかくといっても、文字どおりに相手の寝間に押しいつてという訳ではなくて、山崎を罫にはめこみ、息の根をとめてやるということである。(『均衡』『新選組風雲録』)
- c. 「(前略)みんな、あんなコマーシャルにだまし込まれてしまうばかりだ」(『均衡』『日本の父へ再び』)

上記の例のように、「誘いこむ/はめこむ/騙しこむ」はいずれも人間を好ましくない状況に入れるという加害の意味があり、結果として被害性が生じるわけである。ほかに、「嵌まる/嵌まりこむ」なども同様に、「敵の術に嵌まる/悪循環に嵌まりこむ」などの例がある。

上記の議論のように、前項動詞がマイナスの評価を含意する例が観察できる。「ーこむ」と結合すると、このようなマイナスの評価が受け継がれる可能性が高い。しかし、前項動詞が移動の様態・手段を表すのに、複合により被害性が生じる複合動詞もある。辞書を調べたところ、「蹴こむ/躍りこむ」がある。「蹴こむ」は「蹴って中へ入れる」と「商売で損をする」と二つの意味があり、「躍りこむ」は「勢いよく入りこむ」と「強盗に入る」と二つの意味があるが、『均衡』には用例が観察できなかったので、この 2 語を特別な例として扱う。

上記の議論によると、「資格づけ的评价」の方は、前項動詞が「固定感」を含意する例が多く観察できる。「しっかり」タイプの固定感は前項動詞から受け継がれる可能性が高く、「ーこむ」との複合により、「しっかり」の意味が焦点になると考えられる。一方、「長い間」タイプの「倒れこむ」の方は V1 からの受け継ぎで、「すわりこむ」の方は「ーこむ」との複合により、固定感が生じると推測される。「深部移動」と「密集感」は 1 例か 2 例しかなく、「目的性」と「多量性」はほとんど観察できなかったので、「ーこむ」との複合で生じたものであると推測できる。

「価値づけ的评价」の方は、被害性を含意する前項動詞の例が見受けられるので、前項動詞の意味が「～こむ」のマイナスの意味に繋がっていると考えられる。

3.6. まとめ

姫野(1997)は「～こむ」が「奥深く入る感じ」と「固定感」と「目的性」と「抵抗感」の四つのニュアンスがあると議論しているが、松田(2004)は「～こむ」を分類する上で、主に「～こむ」の固定感について議論を行った。このように、先行研究においては、「～こむ」

の意味の記述は一致していない点がある。また、両氏は「固定感」などがどのように生じるのかについて議論していない。本稿では、「～こむ」の副詞的意味について、主に形容詞の評価的意味に関する枠組みを用いて、「～こむ」の意味体系を評価のタイプと評価の対象により整理した上で、前項動詞との意味上の繋がりを考察した。考察の内容は以下の表のようにまとめられる。

表 17 「～こむ」の副詞的意味の体系

副詞的意味			評 価 の 対 象	V1 との繋がり	用例
資 格 づ け 的 評 価	固 定 感	領域定着の程度 弱い⇔強い	移動物 が着点 領域へ 移動後 の存在 状況、即 ち、移動 の結果 状態へ の評価	「しっかり」を含意する V1 が多く、前項動詞から 受け継がれる可能性が高 く、「ーこむ」との複合に より、「しっかり」の意味 が焦点化される。	植えこむ はめこむ はまりこむ 覚えこむ 刻みこむ 綴じこむ
		領域内部に留まる時 間 短い⇔長い		「倒れる」は「長い間」を 含意する。	座りこむ 倒れこむ
	深 部 移動	領域内部への移動の 程度 浅い⇔深い		ニ格が抽象名詞の場合、深 部移動を含意する例が 2 例あるが、物理的な深部移 動を表す例が観察できな かった。	入りこむ しみこむ 銜えこむ 切りこむ
	密 集 感	着点領域の状況 点在⇔密集	着 点 領 域	V1 が密集感を含意するの は「詰める」しかない。	詰めこむ 立てこむ
	目 的 性	移動物の数量 少ない⇔多い	動作主 の意志 性	V1 が「目的性」と「多量 性」を含意する例はほとん ど観察できない。	教えこむ 走りこむ
	多 量 性	移動物の数量 少ない⇔多い	移 動 物 の数量		買いこむ 着こむ
価 値 づ け 的 評 価	異 質 性	「被害性」などに繋 がっており、「悪い」 という「価値づける 評価」になる	事柄全 体に対 する認 識・評価	被害性を含意する V1 の例 が多く見受けられるので、 V1 の意味が「～こむ」の マイナスの意味に繋がっ ていると言える。しかし、 「連れこむ」のような、V2 との複合により被害性が 生じる例もある。	入りこむ 抱えこむ 背負いこむ 連れこむ 誘いこむ 嵌めこむ はまりこむ 騙しこむ

すでに 3.1 節で述べたが、姫野(1997)は「～こむ」には「奥深く入る感じ」と「固定感」、
「目的性」、「抵抗感」があると議論しているのに対して、本稿においては、「奥深く入る感

じ」を「深部移動」として、「抵抗感」を「異質性」として捉えている。また、「固定感」を二分類、「目的性」を三分類して議論を行った。「異質性」については、「被害性」との繋がりについて詳しく議論した。

前項動詞が「固定感」を含意する例が多く観察できる。「しっかり」タイプの固定感の前項動詞から受け継がれる可能性が高く、「ーこむ」との複合により、「しっかり」の意味が焦点になると考えられる。一方、「長い間」タイプは「倒れこむ」の方は V1 からの受け継ぎで、「すわりこむ」の方は「ーこむ」との複合により、固定感が生じると推測される。「深部移動」と「密集感」は 1 例か 2 例しかなく、「目的性」と「多量性」はほとんど観察できなかったもので、「ーこむ」との複合で生じたものであると推測できる。

また、姫野(1999)は密集感を含意する「～こむ」を一つのグループとして扱っていたが、本稿においては「～こむ」の評価的意味の一つとする。「書き込む/立て込む/建て込む」の意味分析により、内部移動表現は移動物の移動に注目するが、密集感がある場合は、内部移動より場所の内部の変化のほうが注目される。このように、内部移動を表す「ーこむ」は現代語の「こむ」に繋がっていることがわかる。

さらに、「多量性」の場合、「買い込む/ため込む」などの例があつて、従来の研究ではほとんど議論されていない。

評価の対象により「～こむ」を再整理したが、表に示されるように、「～こむ」は動作主の目的性・意志性、移動物の数量のほかに、移動の結果状態についても評価している。この移動の結果状態とは、移動物が移動後、着点領域における位置及び固着程度である。このように、「～こむ」の意味は移動の過程だけではなく、移動の結果状態まで表現できる。

上記のほかに、「～こむ」の副詞的意味と V1 との繋がりについても考察した。考察により、「固定感」と「異質性」は V1 から受け継がれた可能性が高いが、「深部移動」と「密集感」、「多量性」、「目的性」は V2 との複合により獲得したと推測できる。特に、「多量性」と「目的性」を含意する V1 の用例は観察できなかったもので、後項動詞「ーこむ」は「多量性」と「目的性」を表すと言える。

上記の考察により、「～こむ」の意味体系を再整理できて、「～こむ」に入る意味要素が明らかになった。前項動詞との繋がりについての考察は不十分でありながら、これらの意味がどのように生じるのかという問題点に関して、ある程度解釈できたと考えられる。また、この研究は日中対照研究にヒントを与える。「～こむ」は中国語母語話者にとって困難であるが、その原因の一つは、中国語における内部移動表現だけでは、「固定感」と「異質性」などを表すのは難しいからであろう。中国語では、「深部移動」は複合動詞で表現可能であるが、「多量性」は副詞的表現が必要である。このように、「～こむ」の副詞的意味は中国語でどのような表現になるか、また、どの意味要素が表現できないのかについての考察を行う必要がある。

第二部 「～こむ」に対応する中国語表現について

第四章 「～こむ」に対応する中国語表現の全体像

4.1 中国語との対照研究の必要性

従来の研究では日本語だけを考察対象として、「～こむ」の意味を研究していた。そこで、本稿では中国語との対照研究の必要性については以下のように考える。

日本語における内部移動概念の特徴は外国語との対照研究によりさらに明らかになる。すでに議論したように、中国語表現と対照すれば、「入りこむ」と「植えこむ/刻みこむ」などとは性質が異なり、別々に考察する必要がある。しかし、従来の研究においてこれらの複合動詞はほぼ同様に扱われており、日本語における内部移動概念の特徴は見えなくなる。一方、下方向への姿勢変化を表す動詞は内部移動を基本義とする「一こむ」と結合できるが、外国語では下方向への移動を表す“down”と＜～下＞で表す。即ち、日本語では内部移動表現と下方向への移動表現は融合しているが、英語と中国語では分かれている。このような区別は情緒の低落の表現などにも反映されている。このように、外国語との対照により、日本語における内部移動概念の特徴が浮き彫りになり、「～こむ」の意味も一層明確になる。無論、日本語学習者にとっても大きなヒントとなる。

一方、外国語との対照により、学習者にとって、「～こむ」が習得困難である原因を明らかにすることが可能になる。先ず、「～こむ」の中国語表現は方向補語＜～進＞のほか、＜～上/下＞などもあるが、これらの表現はどのような意味領域を有するのか、さらに日本語とどのような相違点と共通点があるのかなどの問題点が残っている。次に、「～こむ」の副詞的意味は最も複雑な意味構造で、中国語ではどのように表現されるのか、その表現形式の共通点と相違点をまとめた上で、根本的な理由を追及しなければならない。この研究は中国語を母語とする日本語学習者だけではなく、日本語を母語とする中国語学習者にも有益である。また、複合動詞と方向補語の翻訳法にも役立つ。

また、以上の議論により、五章と六章における研究テーマが明らかになる。五章においては、中国語の諸表現と「～こむ」との対照研究を行い、その共通点と相違点との研究により、日本語と中国語の内部移動表現の特徴が明確になる。六章では「～こむ」の副詞的意味が中国語でどのように表現されるのか、また、副詞的意味がどの程度単語に融合できるのかという問題についても考察を行う。

4.2 データ収集

本稿では中国北京日本学研究センターで作成された『中日対訳コーパス』（以下は『中日』と呼ぶ）における日本語の文学作品での「～こむ」の用例を収集した。その結果、「～こむ」の異なり語数は 96 語、用例は 851 例抽出することができた。「仕こむ/取りこむ/見こむ」は語彙化しており、考察の対象から外し、以下の表に入れなかった。

表 18『中日』における「～こむ」の調査結果

NO.	「～こむ」	データ数	NO.	「～こむ」	データ数	NO.	「～こむ」	データ数
1	飲みこむ	49	33	減りこむ	7	65	滑りこむ	2
2	思いこむ	46	34	着こむ	7	66	駆けこむ	2
3	入りこむ	40	35	運びこむ	6	67	降りこむ	2
4	覗きこむ	38	36	信じこむ	6	68	惚れこむ	2
5	乗りこむ	35	37	迷いこむ	6	69	住みこむ	2
6	飛びこむ	34	38	割りこむ	5	70	談じこむ	2
7	吸いこむ	32	39	刈りこむ	5	71	舞いこむ	2
8	考えこむ	31	40	仕舞いこむ	5	72	払いこむ	2
9	突っこむ	29	41	積みこむ	5	73	抱きこむ	2
10	引っこむ	22	42	潜りこむ	5	74	躍りこむ	2
11	放りこむ	22	43	追いこむ	5	75	めかしこむ	1
12	押しこむ	21	44	包みこむ	5	76	丸めこむ	1
13	座りこむ	21	45	教えこむ	4	77	極めこむ	1
14	吹きこむ	19	46	逃げこむ	4	78	攻めこむ	1
15	溶けこむ	18	47	紛れこむ	4	79	済ましこむ	1
16	射し込む	17	48	黙りこむ	4	80	散りこむ	1
17	詰めこむ	16	49	老いこむ	4	81	手繰りこむ	1
18	流れこむ	16	50	挟みこむ	3	82	唱えこむ	1
19	打ちこむ	15	51	屈みこむ	3	83	上がりこむ	1
20	投げこむ	13	52	畳みこむ	3	84	織りこむ	1
21	差しこむ	13	53	食いこむ	3	85	折りこむ	1
22	落ちこむ	12	54	洗いこむ	3	86	折れこむ	1
23	持ちこむ	12	55	担ぎこむ	3	87	搔きこむ	1
24	注ぎこむ	12	56	彫りこむ	3	88	怒鳴りこむ	1
25	踏みこむ	11	57	倒れこむ	3	89	捻じこむ	1
26	流しこむ	11	58	忍びこむ	3	90	這いこむ	1
27	話しこむ	11	59	背負い込む	3	91	泊まりこむ	1
28	巻きこむ	9	60	頼みこむ	3	92	聞きこむ	1
29	抱えこむ	9	61	連れこむ	3	93	彷徨いこむ	1
30	書きこむ	8	62	嵌まりこむ	3	総 計		835
31	寝こむ	8	63	切りこむ	3			
32	しみこむ	12	64	のめりこむ	2			

一章で提示した分類基準(表 6 を参照)により、「～こむ」の用例は以下のように整理できる。

(158)a. A タイプ

飛びこむ 突っこむ 引っこむ 放りこむ 押しこむ 吹きこむ 射しこむ
流れこむ 打ちこむ 投げこむ 落ちこむ 持ちこむ 踏みこむ 流しこむ
減りこむ 運びこむ 迷いこむ 割りこむ 追いこむ 逃げこむ 畳みこむ
担ぎこむ 忍びこむ 連れこむ のめりこむ 滑りこむ 駆けこむ 降りこむ
切りこむ 舞いこむ 躍りこむ 丸めこむ 攻めこむ 散りこむ 手繰りこむ
織りこむ 折りこむ 搔きこむ 怒鳴りこむ 捻じこむ 這いこむ 彷徨いこむ

b. B タイプ

飲みこむ 入りこむ 覗きこむ 乗りこむ 吸いこむ 坐りこむ 溶けこむ
詰めこむ 注ぎこむ 差しこむ 巻きこむ 抱えこむ 書きこむ しみこむ
着こむ 刈りこむ 仕舞いこむ 積みこむ 潜りこむ 包みこむ 教えこむ
紛れこむ 挟みこむ 屈みこむ 食いこむ 彫りこむ 倒れこむ 背負いこむ
嵌まりこむ 払いこむ 抱きこむ 上がりこむ 折れこむ 泊まりこむ
聞きこむ

c. C タイプ

思いこむ 考えこむ 話しこむ 寝こむ 信じこむ 黙りこむ 老いこむ
惚れこむ 談じこむ 極めこむ 済ましこむ 唱えこむ

d. D タイプ

洗いこむ 頼みこむ めかしこむ

(158)に示されるように、V1 が内部移動を含意していない A タイプが最も多く、42 語あり、次に V1 が内部移動を含意する B タイプが 35 語ある。状態変化を表す C タイプが 12 語見つかった。反復行為を表す D タイプは最も少なく、3 語しかなかった。また、これらの複合動詞は内部移動表現<～進>だけではなく、ほかの表現にも表される。

4.3 「～こむ」に対応する中国語表現の全体像

内部移動を表す「～こむ」に対応する中国語は方向補語をとるものが多く、複合語の形をとるものは極めて少ない。それに加えて、空間名詞<里 li/中 zhong(中へ)>をとることが多い。抽象的な内部移動を表す「～こむ」は複合動詞の形のほかに、補語と副詞修飾語をとることもある。

まとめると、「～こむ」に対応する中国語表現は具体的な内部移動を表す場合は(159)のようになるが、抽象的な内部移動の場合は(161)のようになる。

- (159)a. <V 1 + <～進 jin/入 ru(入る) (+<里 li/中 zhong(中へ)) >
 b. <V 1 + <到 dao(に着く)/在 zai(ある) > + <里 li/中 zhong(中へ) >
 c. <V 1 + <上 shang(上がる)/下 xia(降りる) >
 d. <向 xiang/往 wang/朝 chao(に向かう) > + <里 li(中へ) > + V >
 e. <V 1 + <在 zai(ある)/有(有する)・着(存在する) >

(159)a～c)までは方向補語であるが、(159)d～e)は方向補語ではない。本稿では、主に方向補語を考察対象とするため、前者が考察の対象となる。その一方で、方向補語以外の表現も必要になる。以下の例のように、V1 が内部移動を含意するかどうかにかかわらず、中国語では方向補語と結合する必要がある。

- (160)a. そう言うと、女は、窓ぎわから砂を一つかみ、手許の食器のなかに放りこんで、まぶすようにくるとまわし、実演して見せてくれるのだ。(『中日』『砂の女』)
 訳文：说着，女人到窗边去抓了一把沙子，扔进手边的食器里，“唰”地把沙子兜了一圈，实际操作给男人看。(《中日》《砂女》)
 b. 妙なもので、水を掻きまわしている竿の方の浮子が、ぐぐつと水中に吸いこまれていた。(『中日』『黒い雨』)
 訳文：庄吉扯起钓竿，钓上来一条很大的鲫鱼，钩被鱼吞进喉咙里面去了。(《中日》《黒雨》)

上記の例における「放りこむ」は V1 が内部移動を含意しておらず、「吸いこむ」は含意しているという相違があるが、中国語表現では両者とも<V 1 + 進>で表現される。すでに議論したように、「老いこむ」のような左側主要部の場合、後項動詞「－こむ」は副詞的意味を表すが、このように副詞的な意味を表す「－こむ」は、中国語では以下の表現に対応する。

- (161)a. 複合動詞 老いこむ 老朽/衰老
 b. 語の形をとらない場合
 動補構造 話しこむ：说得津津有味
 副詞修飾語+動詞 信じ込む：一心以为/总以为

(161)a)の「老いこむ」は松田(2004)などの研究では抽象的な領域への移動として捉えられているが、中国語では内部移動表現ではなく、複合動詞<老朽/衰老>を用いて表される。(161)における<津津有味>とは、「興味が尽きないさま」という意味であり、<一心>は「ひたすらに」、<总>とは、「ずっと、常に」という意味を表す。

上記の中国語表現から下記のような問題点があることに気づく。

- ① 「～こむ」に対応する方向補語は<進/到/上/下>となるが、それぞれの意味領域はどのようなになっているのか。
- ② 「～こむ」の副詞的意味はどのように表現されるのか。

問題①の考察により、日本語における内部移動の概念は<着点への移動→存在→発生・所有>という広い範囲を有しているが、中国語における内部移動の概念は<着点への移動>に限られていることがわかる。方向補語<～進>は内部移動だけを表すため、「存在・固着」を表す表現が必要となり、<～上>と<～在/有>という形式で表現される。一方、日本語では内部移動と下方向への移動表現が融合しているが、中国語では、その区別があり、<～下>という形式が必要となる。この点に関しては、五章で議論を展開する。

問題②を考察することで、日本語では「～こむ」は意味拡張し、副詞的意味を表すが、中国語では、その副詞的意味を様態補語などの形で表現することがわかる。すでに三章で考察したように、日本語では副詞的意味成分が単純動詞にも融合されているが、中国語ではその状況は異なる。三章で議論した評価的枠組みを利用して、それぞれの評価的意味について、六章で考察を行う。

一方、4.2 節で述べたように、『中日』における「～こむ」の用例を収集したが、データが少ないため、『均衡』における用例も観察しながら、研究を進めていく。

第五章 「～こむ」と方向補語との対照研究

5.1 「～こむ」と＜～進＞について

5.1.1 「～こむ」と＜～進＞の共通点

方向補語＜～進＞について、劉(1998 : 203-207)の議論は以下のようにまとめられる。

(162)① 外部から内部への移動を表し、立脚点は外部、内部の両者に定め得る。＜～進＞の前にくる動詞は下記のようなものである。

- a. 身体や物体それ自体の運動を表す動詞 <走, 闯, 钻, 飞>
- b. 体の動きを表す動詞<伸(手), 探(头), 迈(脚)>
- c. 物体の位置変化を引き起こす動作行為を表す動詞<搬, 塞, 抱, 叫>
- d. 比喩的用法。「买, 收」類の動詞は、「进」が所有、占有と関係し、外部から内部への変化を表す。或いは、その動作に効果があることを表し、「听, 读, 看(书), 念(书)」類に続く

② <凹陷(へこむ)>を表す

(劉 1998 : 203-207 (日本語訳は筆者による))

上記の議論のように、＜～進＞は内部移動を表す方向補語である。共起できる空間名詞は＜里＞である。＜～進＞は主に内部移動を表す方向補語であると言え、その基本的な用法は＜動詞+進+場所名詞+空間名詞(＜里 li/下 xia>など)>であるが、＜～進＞の後に場所名詞が来ない場合は、方向補語＜来/去＞をつけることが多い。また、空間名詞がない例も多い。その具体的な用例は下記のようなものがある。

(163)a. 「鱸、けっこう良かったですよ。」と僕は言ってみたが誰も返事をしなかった。まるで深い堅穴に小石を投げ込んだみたいだった。(『中日』『ノルウェイの森』)

訳文: “鲈鱼真够味道。”我开口道。但谁也没搭腔, 如同小石子掉进了无底洞。(《中日》《挪威的森林》)

b. 曾根はベッドから降りると、リュックサックをベッドの下へ押し込んだ。(『中日』『あした来る人』)

訳文: 曾根从床上下来, 把背囊塞进床底。(《中日》《情系明天》)

c. 自分共が今時分飛び込んだって、乱暴者だと云って途中で遮られる。(『中日』『坊ちゃん』)

訳文: 如果咱们现在闯进去, 就会有人说我们是来闹事的, 中途会把我们拦住。(《中日》《哥儿》)

語彙概念構造を利用して、＜～進＞の意味を下記のように表すことができる。

(164)＜～進＞：[Event BECOME [y BE AT-INSIDE-of z]]

＜～進＞と「～こむ」の基本的な意味は内部移動を表すため、それに対応する中国語表現として＜～進＞が多用されると考えられる。V1 が内部移動を含意しない「～こむ」に対応する＜～進＞は 103 文もあり、例文の 33%を占めている。V1 が内部移動を含意しない「～こむ」に対応する＜～進＞は 57 文あり、30%ほどである。すでに上記の用例に示されるように、＜～進＞は典型的な内部移動を表す「～こむ」にしか対応しない。詳しく言えば、＜～進＞は、前項動詞が移動の様態、手段、付随状況を表し、後項動詞「～こむ」が内部移動を表す「～こむ」に対応するのである。

5.1.2 「～こむ」と＜～進＞との相違点

前節の議論では、後項動詞が内部移動を表し、前項動詞が移動の様態、手段・付随状況を表す場合、「～こむ」と＜～進＞は対応することが多いと議論した。この場合、後項動詞は内部移動を表し、複合動詞の主要部になる。例を観察すると、一つの「～こむ」が複数の中国語表現に対応することが多い。例えば、「飛び込む」の場合、前項動詞が＜飞/跑/跳＞などで表現される。

一方、「～こむ」は前項動詞が主要部になる例が多くある。この場合、中国語では、前項動詞しか表現できないケースが多い。また、副詞修飾語を用いて表現する用例も観察できる。さらに、着点が表面性を有する場合、＜～進＞で表現できなくなる。次の 3 節において、上記のような「～こむ」と＜～進＞との相違点について考察を行う。

5.1.2.1 右側主要部の「～こむ」と＜～進＞

前項動詞が移動の様態か手段を表す場合、後項動詞「～こむ」が内部移動を表し、複合動詞の主要部になり、＜～進＞で表現することが多いが、両者の意味領域のずれが観察できて、以下では、先ず「飛びこむ」を例にして、中国語における移動様態の多様化について議論する。「飛びこむ」は『均衡』において 2023 例もあり、『中日』において 34 例あり、前項動詞が移動様態である「～こむ」において、用例数が最も多い複合動詞である。

(165)a. 女子高生が泣きながら駅事務室に飛び込んできました。(『均衡』『鉄道員ホントの話！？』)

訳文：一个女高中生哭着跑进了车站办公室。

b. 観戦していた男性の一人がやおら水に飛び込んだ。(『均衡』『Yahoo!ブログ』)

訳文：观看比赛的一位男观众激动地跳进了水里。

c. マッコールは階段を一気に駆け昇ると、事務所に飛び込んだ。(『均衡』『青の殺人』)

訳文：麦库尔一口气跃上台阶，冲进了办公室。

d. 炎の中を走り抜け、修道女たちの腕の中に飛び込んだ。（『均衡』『神の子羊』）

訳文：冲出火焰，扑进了修女们的怀抱。

前項動詞「飛ぶ」は元々飛行を表すが、上記の例に示されるように、「一こむ」と結合すると速いスピードで移動するという意味になる。前後の文脈に合わせて、＜跑：走って入る＞、＜跳：跳ぶ＞、＜冲：勢いよく移動する＞、＜扑：飛びかかる＞で表現する。また、「飛び込む」は物理的な移動のほかに、抽象的な領域への移動も表現できるが、＜～進＞で表現しない例が多い。

(166)a. 自分がどんな危険の中へ飛び込んでゆくか、それは私にもわかっています。（『均衡』『Yahoo!ブログ』）

訳文：我明白自己将会遇到什么样的危险。

b. とにかく映画界に飛び込んでみよう。（『均衡』『ペ・ヨンジュン百科事典』）

訳文：总之想在电影界闯闯看。

c. ハリーの耳にこんな言葉が飛び込んできた。（『均衡』『ハリー・ポッターと賢者の石』）

訳文：哈利听到了这样的话。

d. 突然こんなニュースが飛び込んできた。（『均衡』『Yahoo!ブログ』）

訳文：突然传来了这样的消息。

上記の例において、「危険の中へ飛び込む」の場合は、着点が「危険」となり、抽象的な領域になっている。「映画界に飛び込む」も同様に、積極的に事業に進んで入りこむという意味である。また、「耳に言葉が飛び込む」の場合は、五感の知覚を表し、ほかに、「顔が目に入る」などの例がある。「ニュースが飛び込む」の場合は、情報の所有を表し、着点が個人の認知領域である。中国語訳をみると、いずれも＜～進＞以外の表現を使っている。

さらに、前項動詞の「飛ぶ」が移動の様態ではなく、「突然」などの意味を表す例が多い。

(167)a. 病院に飛び込んだ。（『均衡』『クロワッサン』）

訳文：赶紧去了医院。

b. 彼女は警察に何回飛びこんだかわからない。（『均衡』『どくとのマンボウ医局記』）

訳文：她也不知找了多少回警察。

c. 山田は塾へくるとちゅう、地下鉄の電車にとびこんだ。（『均衡』『コンピュータ室の怪談』）

訳文：山田在去补习班的途中卧轨自杀了。

- d. クマがたくさんいるクマの牧場に飛び込んで自殺した人がいました。(『均衡』『Yahoo!知恵袋』)

訳文：有人特意去有很多熊的牧场自杀。

「病院に飛び込む」の場合は、予約なしでいきなり病院へ行き診察してもらうという意味である。このような動詞が「出産」のような動名詞と結合しても、「突然」の意味が受け継がれる。「飛び込み出産」の場合は、妊婦がいきなり病院に飛びこんで分娩することを指す。「警察に飛び込む」も同じで、「突然入る」と解釈できる。ほかには、「財布を落として交番に飛び込む」などの例がある。さらに、「電車に飛び込む」と「クマの牧場に飛び込む」の例においては、「飛び込む」は「進行する電車やクマのいる牧場危険な場所に移動する」と「自殺する」と、二つの意味がある。この場合、「飛び込む」は着点の性質(危険なところ)と動作主の目的を規定しており、その後に「自殺/死ぬ」のような動詞しか来ないという制限がある。このような「飛びこむ」は<～進>では表現できず、文脈全体により表現するしかない。

上記の議論のように、「飛びこむ」に対応する中国語は様態動詞の多様化などの現象が観察できるが、このような現象は「飛びこむ」に限らず、ほかの動詞にも見られる。例えば、「投げこむ」の例として以下のようなものがある。

- (168)a. 緑は水たまりの中に煙草を投げこんだ。(『中日』『ノルウェイの森』)

訳文：绿子把烟扔进水洼。(《中日》《挪威的森林》)

- b. 私は突然立って帯を締め直して、袂の中へ先生の手紙を投げ込んだ。(『中日』『こころ』)

訳文：我陡然站起身来整一整衣带，把先生的信放进袖筒，然后出了后门，走到外边。(《中日》《心》(2))

- c. まるで深い堅穴に小石を投げ込んだみたいだった。(『中日』『ノルウェイの森』)

訳文：如同小石子掉进了无底洞。(《中日》《挪威的森林》)

- d. 女が廊下から大声に島村の名を呼んで、ぱたりと投げ込まれたように彼の部屋へ入って来た。(『中日』『雪国』)

訳文：女子从走廊上大声呼喊着岛村的名字，吧哒一声栽进他的房间里。(《中日》《雪国》)

上記のように、「投げこむ」に対応する中国語の表現は<扔进/放进/掉进/栽进>になっている。さらに、以下の作例のように日本語で様態動詞と内部移動表現と共起しない例がある。

(169)a. 小李走进了房间。

訳文：李さんは部屋に*歩き込んだ/入った。

b. 小鸟飞进了屋子。

訳文：小鳥は部屋に*飛び込んだ/入った。

c. 老鼠是从窗外爬进来的。

訳文：ネズミが窓から*這い込んだ/入った。

まず、＜走进＞の例をみると、日本語では内部移動の意味で「歩きこむ²⁵」が成立しない。逆に、様態動詞「歩く」ではなく、内部移動を表す「入る」を使うと自然になる。＜飞进＞と＜爬进＞の場合は、複合動詞「飛びこむ/這いこむ」は成立するが、上記の文では用いられず、様態動詞を使用すると非文になる。このように、様態動詞は内部移動を表す後項動詞と複合しても大きな制限を受けている。これに対して、中国語の方は制限がないとは言えないが、日本語より使用頻度が高く、使用範囲も広い。このような相違点は対照により明らかになるが、日本語だけの考察では見えなくなる。松田(2004)は日本語学習者に「～こむ」の用例を作ってもらい、母語話者に許容度を判断してもらって、許容度が低い理由を以下のように提示している。

²⁵ 金(2010)によると、「歩き込む」は後項動詞が「繰り返し」を表す場合、朝日新聞で用いられる用例がある。が、内部移動を表す場合、「歩き込む」は言えないと多くの母語話者が判断している。

表 19 松田(2004)が提示した低受容度文と判定した理由(A タイプと B タイプ)

	V1	V2	低受容度文と判断した理由
I 型	○	○	理由 i) 移動先が分からない。推測できない。 例 1: * 懐かしい歌が FM から <u>流れこん</u> できた。(→部屋の中に)
		×	理由 ii) 「内部への移動」という意味のない文脈で「～こむ」をつけている。 例 2: * (通行人) 二階からそんなものを <u>投げこま</u> ないでください。 危ないじゃないですか。(→投げないで, 投げ捨てないで)
			理由 iii) 内部に入ったものが「そこに留まらない」文脈で「～こむ」をつけている。 例 3: * 紙以外のものをトイレに <u>流しこま</u> ないでください。 (→流さないで)
			理由 iv) 「しっかり, 奥深く」などの強調ニュアンスのない文脈, つまり「動作・行為そのもの」に関心がある文脈で「～こむ」をつけている。 例 4: * カッコの中に適当な言葉を <u>埋めこ</u> んでください。 (→埋めて)
			理由 v) 目的を示さずに「～こむ」をつけたり, 目的の不要な文脈で「～こむ」をつけている。 例 5-1: * 今晚は友達のアパートに <u>泊まりこ</u> みます。 (→泊まります) 例 5-2: * どの家だって 10 年も <u>住みこ</u> んだら, ものは山ほど増える。 (→住んだら)
			理由 vi) 他の後項動詞 (V2) と混同している。 例 6: * ベンチャー企業の仕事に <u>取りこ</u> んで, もう 5 年。そろそろ成果の出る頃だ。(→取り組んで)
II 型	×	○	理由 vii) 他の前項動詞 (V1) と混同している。 例 7: * 犬を犬小屋に <u>駆けこ</u> みます。 (→追いこみます)
		×	理由 viii) 全く別の語と混同している。 例 8: * 友達と一緒に <u>行こうと呼びこ</u> まれた。 (→誘われた)

(松田 2004 : 97)

上記の表のように、松田は八つの理由を挙げているが、(169)で挙げた「飛びこむ/駆けこむ/這いこむ」が使用できないのはどの理由にも当たらない。主語名詞が「鳥」の場合、その移動様態は「飛ぶ」に決まっているので、それを説明する必要はないから、「鳥が鳥籠に飛びこんだ」は言えない場合が多いという母語話者もいるが、まだ研究が必要であり、

「MANNER+こむ」の使用制限を今後の課題とする。

5.1.2.2 左側主要部の「～こむ」と＜～進＞

「入りこむ」、「入れこむ」のような、前項動詞がすでに着点の内部へという経路関係を包入する複合動詞は移動後の状態に注目し、「深く/しっかり」を含意するのが可能である。このような動詞を＜～進＞で表現できるが、＜～進＞は内部への移動の動作過程だけに注目するので、原文の意味の一部しか表せず、副詞成分が必要になり、或いは「～こむ」に対応しなくなることは予測できる。

(170)V1 に内部へという経路位置関係が包入される場合

- a. 粉をバターに入れ込むようにして混ぜ合わせます。(『均衡』『お菓子作り入門』)
訳文：充分搅拌，要让面粉完全融进黄油。
- b. 二世帯分離型 ひとつの建物の中にふたつの住宅を入れ込んだパターン(『均衡』『私、親の介護はできそうもありません。』)
訳文：两户分离型 即一个建筑物中设有两个住宅的类型。
- c. 彼らは山に入り込んで、方向がわからなくなった。(作例)
訳文：他们走进了大山深处，迷失了方向。

上記の例において、「粉をバターに入れ込む」は粉が徹底的にバターに入るという意味があるが、中国語では＜副詞(完全)+様態を表す動詞(融)+方向補語(進)>になっている。即ち、中国語の方は副詞句と様態動詞が必要になる。一方、「住宅を建物の中に入れ込む」の場合は、内部移動より、「～の中」で設置する意味が強いので、＜～進＞ではなく、＜～有＞で表現する。さらに、文脈全体から判断すると、上記の例における「山に入り込む」は山の奥に入ってしまうという意味があるが、中国語の方は＜様態を表す動詞(走)+方向補語(進)+場所名詞+深部>になっている。即ち、＜深部＞という表現がなくなると、内部への移動だけを表し、「入る」と同義で、「入りこむ」の意味を完全に伝えることができない。

一方、V1 が作成動詞の場合、＜～進＞と「～こむ」は着点の性質において相違がある。詳しく言えば、方向補語＜～進＞は着点が内部移動の内部空間を強く要求しているので、「～こむ」は着点が内部空間を要求しない用例には対応できなくなる。

(171)着点が内部空間を要求しない「～こむ」

- a. まず、(岩に)矢印を刻み込んだ。(『均衡』『ダブ(エ)ストン街道』)
訳文：首先，在岩石上刻上箭头/*把箭头刻进岩石。
- b. ベース部分のお掃除が終わったら今度はサドルトップ(革)にオイルを塗り込み、完了です。(『均衡』『Yahoo!ブログ』)

訳文：基体部分清扫完毕后，在皮革部分涂上油/*把油涂进皮革即可。

- c. その金杯には君の犬たちの名を彫り込むことになっている。(『均衡』『ダンとアン』)

訳文：依照规定，将在金杯上刻上你们爱犬的名字/*把你们爱犬的名字刻进皮革。

上記の例のように、動詞が「刻みこむ」、「塗りこむ」と「彫りこむ」の場合、着点が岩/革/金杯の表面である場合、中国語では、＜～上＞表現になっており、＜～進＞では表現できなくなる。これは＜～進＞と「～こむ」との大きな違いである。

さらに、「～こむ」は「信じる/眠る/老ける」など心理・生理の状態変化を表す動詞と結合できる。中国語の＜～進＞はこのような動詞と共起する例はあまり観察できない。

5.1.2.3 内部空間における移動の最終的な位置の指定機能について

「～こむ」は内部空間における移動の最終的な位置を表す名詞句と直接結びつく用例が観察できるが、＜～進＞はそのような名詞句と直接組合わさるのはほぼ観察できない。このため、「～こむ」は内部空間における移動の最終的な位置を指定できるが、＜～進＞はできないと考えられる。下記の「降りこむ」の例を見ると、日本語と中国語の差が明らかになる。

- (172)私はまた安田と残された。話がなかった。テントを平らに張っただけの安田の寢床には、雨が降り込み、居心地がよくなかった。(『中日』『野火』)

訳文：又只剩下我和安田，我们两个谁也不说话，安田的帐篷是平顶的，床上落了雨水，坐在那里很不舒服。(《中日》《野火》)

これに対応する中国語の文は＜～進＞を入れることもできる。

- (173)訳文：又只剩下我和安田，我们两个谁也不说话，安田的帐篷是平顶的，雨水飘了进来(飘进了帐篷)，落到了床上，坐在那里很不舒服。

＜雨水飘了进来，落到了床上＞とは、「雨が(テントに)降りこみ、寢床の上に落ちた」という意味である。即ち、「降りこむ」はテントへの内部移動と寢床への到着と、二つの事象を表すが、中国語では(172)のように、内部移動表現を省略し、最後の移動先のみを表すことしかできず、(173)のように、二つの文で表さなければならない。両方とも自然な中国語であるが、(172)で＜～進＞が使えないのは、最後の移動先としての＜寢床＞に関係がある。(172)と(173)に示されるように、「雨が寢床の表面に落ちた」ため、空間名詞の＜上＞が使われているからである。この＜上＞は「表面に到着する」という意味であり、＜～進＞と共起する空間名詞は＜里＞であるので、下記のような直訳は非文になる

(174)*訳文：又只剩下我和安田，我们两个谁也不说话，安田的帐篷是平顶的，雨水落进了帐篷的床上，坐在那里很不舒服。

このような現象は偶然によるものではなく、中国語でどのような方向補語を使うかは最終的な移動先に大いに関係している。たとえば、「乗りこむ」にも次のような使い方があ

(175)男はためらいも見せず、駅前のバスの、一番奥の座席に乗り込んだ。（『中日』『砂の女』）

中国語訳：那男人浑然不觉，径自上了车站前的公共汽车，在最靠里边的位子上坐了下来。（《中日》《砂女》）

<上了车站前的公共汽车，在最靠里边的位子上坐了下来>は、「駅前のバスに乗りこみ、一番奥の座席に座った」という意味であるが、このように中国語では二文に分けて表現されており、前の文では方向動詞<上>、後の文では「動作動詞<坐>と方向補語<下来>を使っている。しかし、「～こむ」にはこのような違いは現れていない。

5.1.3 「～こむ」と<～進>との対照研究のまとめ

上記3節の議論をまとめると、以下のようになる。

- ① 「～こむ」と<～進>の基本的意味は内部移動を表す。<～進>は内部移動を表し、V1は移動の様態・手段・付随状況を表すことが多く、空間名詞<里(なか)>と共起することは多い。このため、<～進>は、「～こむ」に対応しやすい。しかし、「～こむ」は心理・生理の状態変化を表す動詞とも結びつくが、<～進>はこのような動詞と共起する例はあまり観察できない。
- ② V1が移動の様態、手段、付随状況を表す場合、中国語における移動様態が多様化している。「飛びこむ」の場合は、V1の「飛ぶ」を<跑：走って入る>、<跳：跳ぶ>、<冲：勢いよく移動する>、<扑：飛びかかる>で表現する。また、日本語では、「*歩きこむ」のように、様態動詞と「～こむ」と共起しない例がある。さらに、様態動詞は内部移動を表す後項動詞と複合しても大きな制限を受けている。これに対して、中国語の方は制限がないとは言えないが、日本語より使用頻度が高く、使用範囲も広い。
- ③ 左側主要部の「～こむ」は多くあるが、「入りこむ」と「入れこむ」のような、前項動詞がすでに着点の内部へという経路関係を包入する複合動詞は移動後の状態に注目し、「深く/しっかり」を含意するのが可能である。このような動詞を<～進>で表現できるが、<～進>は内部への移動の動作過程だけに注目するので、原文の意味の一部しか表せず、副詞的修飾成分が必要になり、或いは「～こむ」に対応できなくなる。作成動

詞などは「～こむ」と結合する例が多いが、＜～進＞の代わりにほかの方向補語で表現される。これは、「～こむ」に内部移動と移動先の表面への到着と二つの意味があるが、着点名詞句が表面を表す場合、「～こむ」を＜～進＞では表現できないからである。

- ④ 「(テントの中の)安田の寝床に雨が降り込み」のように、「～こむ」は内部空間における移動の最終的な位置を表す名詞句と直接結びつく用例もあるが、＜～進＞はそのような名詞句と直接組合わせるのは難しい。

5.2 「～こむ」と＜～上＞について

＜～上＞で表現する「～こむ」はほぼ左側主要部であり、以下のような例が挙げられる。

- (176)a. 停車場はすぐ知れた。切符も訳なく買った。乗り込んで見るとマッチ箱の様な汽車だ。(『中日』『坊ちゃん』)

訳文:我很快找到了火车站,顺利地买到了车票。坐上去一看,火车跟火柴盒一样!(《中日》《哥儿》(3))

- b. 私はポケットから、錆びついた鉛筆削りのナイフをとり出し、忍び寄って、その美しい短剣の黒い鞘の裏側に、二三条のみにくい切り傷を彫り込んだ。(『中日』『金閣寺』)

訳文:我迅速从口袋里掏出一把上锈的铅笔刀,悄悄地走近短剑,在它美丽的黑鞘里侧,刻上两三道深深的伤痕。(《中日》《金阁寺》)

上記の例に示されるように、「汽車に乗りこむ」は場所への移動を表し、高い方向への移動を表すが、「鞘に切り傷を彫りこむ」は「彫る」という動作を行うことにより、「切り傷」が「鞘」の表面に残るという結果状態を表す。即ち、「～こむ」と＜～上＞が対応する場合、上の方向への移動と結果的意味と二つの場合に分けられる。刘(1998)によると、方向補語＜～上＞は方向と結果的意味、状态的意味、特殊な意味と四つのタイプがあるが、それは以下のようにまとめられる。

- (177)方向補語＜～上＞の方向的意味と結果的意味

a. 方向的意味

- ① 低いところから高いところへの移動
飘上天空、推上吉普车、交上申请报告
- ② 目標に近づく
挤上前、跟上那个人、骑上马

b. 結果的意味

- ③ 接触、付着
关上门、在表里填上数字、盖上被子、捆上行李、信封贴上邮票、穿上衣服

写上名字

- ④ 予期した目的を実現する

喝上水、交上一个长远的朋友、考上上海中学、

- ⑤ 達成する。うまく完成する。

一句话都答不上、叫不上名儿

c. 状态的意味

- ⑥ 新しい動作或いは新しい状態を始まる。

d. 特別な用法

- ⑦ 一定な数に達する。話し言葉で使われる。

干上两年、见上一面、睡上几天

- ⑧ 動作を表す動詞の後ろに用いられ、連動文の前半に現れ、その後の動詞が主要動作を表す

两个人推上自行车，并排着出了厂门口。

(刘 1998 : 81-107)

刘(1998)の議論及び「～こむ」に対応する<～上>の用例を考えると、少なくとも<～上>と「～こむ」の意味領域が以下のような共通点がある。

(178)<～上>と「～こむ」の共通点

- a. 場所への移動を表す場合、一部の用例において、両表現が対応するようになっている（「車に乗りこむ」→<坐上车>）。
- b. <接触>義
- c. <固着>義
- d. 達成まで意味拡張が行われている。

<～上>は高い方向への移動を表すのに対して、「～こむ」は内部への移動を表すが、「馬に乗りこむ」、「車に乗りこむ」などの場合は、両表現が対応するようになる。しかし、よく考えてみれば、<～上>は「乗りこむ」だけではなくて、その前項動詞の「乗る」にも対応している。「馬に乗る」と「馬に乗りこむ」とは両方とも、<骑上马>で表現できる。接触、付着を表す場合もそうである。「鞘に傷を刻む」と「鞘に傷を刻みこむ」は同じ表現<在剑鞘上刻上伤痕>で表現する。しかし、達成感を表す場合、前項動詞だけでは表現できず、日本語では複合動詞の形で、中国語では補語の形で表現する。このため、場所への移動と、接触・付着を表す場合、「～こむ」の前項動詞の性質で、「～こむ」と<～上>が対応するようになっているが、達成感を表す場合、前項動詞の性質ではなく、両表現の意味拡張により、同じ傾向になっていると推測される。以下では、「～こむ」と<～上>との対照研究を行う。

5.2.1 移動を表す<～上>と「～こむ」

前述のように、「～こむ」は<内部移動→存在→固着>という連続体をなしている。内部移動の意味が強い場合、着点が内部空間を要求するが、存在、或いは固着の意味が強い場合、着点が内部空間を要求しなくなるか、着点を表す二格が喪失する傾向が見られる。これに対して、方向を表す場合、<～上>の中核的な意味は物体への近づき、或いは、高い方向への移動を表す。しかし、一部の<～上>は内部移動表現の「入る/乗る/～こむ」に対応する。《CCL 語料库检索系统》(以下は CCL)では、以下の例を収集できた。

(179)<～上>の方向的意味

- a. 卫毅带着二十多个侦察员一口气跑上山顶。(《CCL》《保卫延安》)

訳文：衛毅は二十数人の斥候を連れて、一気に山頂に走って着いた/*走りこんだ。

- b. 不一会，车驶上了高速公路。(《CCL》《东京红灯区的上海女孩》)

訳文：しばらくして、車は高速道路に入った/入り込んだ。

- c. 屠夫吃惊地张大了嘴巴，赶紧也跳上了车。(《CCL》《故事会 2005》)

訳文：肉屋がびっくりして、口を丸くして、車に乗りこんだ。

上記の例に示されるように、「山頂」など高い方向への移動だけを表す場合、内部移動表現の「入る」と「走りこむ」は使えないが、場所名詞が「道路」或いは乗り物を表す「車」を表す場合、「入る」などで表現できる。これは中国語と日本語における空間認識の相違として捉えられる。車は閉鎖された内部空間であるが、中国語の方は<上>と<里>と両方とも共起できる。既に諸先行研究で議論されているように、中国語では、三次元的な内部空間より、物体の表面性が際立つ傾向が強い。乗り物以外の例も多くあり、以下はその一例である。

(180)仪式在大厅上举行。

The ceremony was held in the hall.

(趙 1999 : 48)

英語では、“hall”は三次元的な空間としてとらえられ、空間名詞“in”と共起するが、中国語では平面としてとらえられ、<上>と共起できる。無論、<大厅里>とも言えるが、<里>の場合は、<大厅>の内部空間の性質を表わすと言える。このように、表面への移動として捉える場合は、<～進>は使いにくく、<～上>は使われうるが、内部空間への移動として捉える場合は、<～進>は使われると考えられる。

(181)a. 表面への移動 <跳上车：車に飛び込む>

b. 内部空間への移動 <走进车厢：車体に入る>

一方、中国語においては、着点が乗り物の場合、高い方向への移動として理解できる。方(2004)は、中国語における空間を表す名詞について、<凹面名詞>と<凸面名詞>という概念を提示した。方(2004)の議論によると、<凹面名詞>とは動作主にとって位置が低いところを表す名詞であり、<凸面名詞>とは動作主にとって位置が高いところを表す名詞である。即ち、<凹面名詞>と<凸面名詞>は、動作主を参照点として、位置を判断する上でできた認識を表している。後者は<～上>と結合できるものが多く、以下のような例が挙げられている。

(182)<凸面名詞>

“台、床(ベッド)、马、车、飞机(飛行機)”など。これらの“移動主体の立地点より高い位置にあるもの”という共通点を持つ名詞を“凸面名詞”と名付ける。

(方 2004 : 7)

車の場合は、動作主の位置は車より低いところにいるので、「下から高い方向への移動」即ち「高低の方向」という認識が優位になり、「車の外から内への移動」即ち「内外の方向」が副次的な位置になると考えられる。「飛行機に乗る/乗り込む」を例にすると、階段を上って、機内に入ると二つのプロセスがあるが、内外方向への移動がその一部になっている。このように、「高低の方向」が「内外の方向」より、優位であるという現象は、偶然ではない。コーパスから以下のような例が観察できた。

(183)跑上冰窖似的楼梯间/女生宿舍/五楼的实验室

訳文：氷室のような階段室/女子学生の寮/五階の実験室に入った

ほかには、<跑上碉堡/我写字楼/汤敬谦律师楼/码头/防御工事/最后的观海亭/城里>、<找上门>、<走上正轨>などがある。

上記の議論のように、日本語の内部移動表現と方向補語<～上>と重なり合う部分があるが、場所名詞が乗り物と道路を表す場合に限られている。日本語の方は道路と乗り物が内部空間を有しているとしているが、中国語の方は道路を表面的なものとして、乗り物を表面性のあるものと、内部空間を有するものとしている。これは<凹面名詞>と<凸面名詞>という認識にも関係がある。

5.2.2 接触・付着を表す<～上>と「～こむ」

接触を表す<～上>と「～こむ」との前項動詞は少なくとも、下記の三タイプがある。まず、着装を表す<着こむ>タイプの動詞は、服装やアクセサリを体につけるような動

作を表すものである。次に、「抱く/抱える/背負う」などは、物・人が体に接近し、体の表面に接触することを意味するが、中国語の方は<～上>で表現するのに対して、日本語では「～入れる-こむ」と結合する。最後に、「包みこむ」タイプの動詞は、物を紙や布などの中に入れてすっかり覆うという動作を表す動詞である。

これらの動詞は中国語の立場から見れば、接触・付着を表すが、日本語の立場から見れば、「囲む」を表し、内部移動表現に入る。

姫野(1997)は内部移動を<閉じた空間への移動>、<固体の中への移動>、<流動体の中への移動>、<隙間のある集合体または組織体の中への移動>、<動く取り囲み体への移動>、<自己の内部への移動>と<その他>に分けているが、<動く取り囲み体への移動>について、前項動詞の種類によって、取り囲み体の性質や囲み方の形態なども様々であると議論している。

- (184)a. 体の一部で囲む：握りこむ 抱えこむ 抱きこむ くわえこむ 頬張りこむ
 b. 二つの側面で囲む：挟みこむ 綴じこむ
 c. 水平面と平面的なものの間で囲む：覆いこむ 敷きこむ
 d. 囲み体自身の内部にいれこんで囲む：巻きこむ 丸めこむ 包みこむ
 e. 人体を衣服等で囲む：着こむ 着せこむ 履きこむ かぶりこむ

(姫野 1997 : 66)

(184)に示されるように、姫野は「着こむ」などを内部移動表現として捉えられる。これは中国語における「接触・付着」という捉え方とは異なる。以下では、先ず着装動詞について議論する。

5.2.2.1 <着こむ>タイプ

着装動詞を表す「～こむ」はコーパスでは「着る」しか収集できなかったが、姫野などの研究では「着せこむ/はきこむ/かぶりこむ」などがあがっている。以下は「着込む」と<穿上>の例である。

(185)着装動詞

- a. (莫斯科市民)不得不穿上/*穿进厚厚的衣服御寒。(《CCL》《新华社 2004 年新闻稿》)
 訳文：(モスクワの市民たちは)寒さのため、服を着/着込まなければならなかった。
 b. 外出時はダウンジャケットを着込まないといけない。(『均衡』『シニアのための国際協力入門』)
 訳文：外出时必须穿上羽绒服。

上記の例のように、中国語では<穿：着る>は<～進>とは共起しない。<穿上衣服>：

服を着る>を<把衣服穿在身上：衣服を体の上に着る>に言い換えられるので、中国語では、「服が身体の表面に接触する」と理解されていると言えよう。このため、<穿上>を[MOVE ONTO]と解釈できる。

これに対して、日本語の方は二つの捉え方がある。一つ目、服が外部空間を作成し、体の中にいる、即ち、「人が衣服で作られた空間の中にいる」という捉え方である。この場合を[MOVE INTO]で表示できる。一方、「着る/着こむ」は、「服を身に着ける」とも解釈され、その着点は当然体の表面であるので、「体の表面に移動する」とも理解できる。このように考えると、中国語と同じように [MOVE ONTO]と解釈できる。

さらに、「着こむ」は「衣服をたくさん重ねて着る/衣服をきちんと着る」という意味もあり、後項動詞「-こむ」は内部移動の意味がなく、副詞的意味を有すると理解されているが、<穿上>はこのような意味がない。

5.2.2.2 <包みこむ>タイプ

「包みこむ」タイプの動詞は、「包みこむ/くるみこむ/覆いこむ/巻きこむ」があり、中国語では<包/裹/卷上>で表現され、<～进>では表現できない。以下のような用例が挙げられる。

(186)a. 真っ白なお餅に粒あんが包み込まれ、上からきな粉が掛けられてる。(『均衡』『京都いと、お菓子。』)

訳文：在雪白的年糕里包上小豆馅，上面撒上黄豆粉。

b. 鹦鹉笼子外裹上厚厚防风布。(《CCL》《新华社 2004 年新闻稿》)

訳文：オウムの籠を厚い風よけ布で包み込む。

c. 用芭蕉叶或竹子壳包上糯米饭，在歌墟上互赠，不分亲疏宛如一家。(《CCL》《1994 年报刊精选》)

訳文：芭蕉の葉や竹の殻で、もちこめを包み込んで、親しさにかかわらず、「歌墟」でお互いに送りあって、まるで家族のようだ。

姫野が議論したように、「包みこむ」タイプの動詞は囲み体自身の内部にいれこんで囲むという意味を表し、[MOVE INTO]の意味の意味となるが、中国語の方は上記の例(186)b)のように、「物が物体の表面に移動する」と、例(186)c)のように「移動後、物が作られた空間に位置する」との二つの捉え方がある。これは空間辞の挿入により明らかになる。

(187)a. 把防风布裹在鹦鹉笼子上

訳文：?厚い風よけ布をオウムの籠の上に包む

b. 把鹦鹉笼子裹在防风布里。

訳文：オウムの籠を厚い風よけ布に包む。

c. 用防风布裹鸚鵡笼子

訳文：厚い風よけ布でオウムの籠を包む

上記のように、中国語の＜把+防风布+WRAP+在+鸚鵡笼子+上＞を「包みこむ」で表現するのは難しい。

5.2.2.3 <抱えこむ>タイプ

「抱えこむ/背負いこむ」の場合、対象物が動作主の身体の方へ移動される場合、中国語では、＜～上＞を使う傾向が強い。

(188)a. 小学生们兴高采烈地背上/*背进书包，戴上小黄帽上学去了。（《CCL》《人民日报（1993年2月）》）

訳文：小学生達はうれしそうな顔をして、鞆を背負って/背負いこんで、黄色い帽子をかぶって学校へ行った。

b. 周拉奴考虑侯七要忙着大田的活计，就抱上/*抱进桂兰的婴儿陪她住进了医院。

（《CCL》《94年报刊精选》）

訳文：周拉奴は侯七が大田の仕事で忙しいことを考慮して、桂蘭の赤ちゃんを抱えこんで入院するのを付き添った。

c. 重い荷物を背負い込んで、出かける。（『大辞泉』）

訳文：背上沉重的行李外出/*把沉重的行李背进背上外出。

d. 大きな荷物を抱え込む。（『大辞泉』）

訳文：抱上巨大的行李/*把巨大的行李抱进怀里。

上記の用例における「～上」は、対象物が身体に近づいて接触するという意味を表し、いずれも＜～進＞と互換できないが、単純動詞の「背負う/抱く」で、或いは、これらの単純動詞と「～こむ」と複合した形で表現できる。「抱く」は「～こむ」だけでなく、「～入れる」とも結合する。空間辞を考えると、中国語では、いずれも＜上＞と結合し、＜背上：背中の上に背負う＞と＜抱在身上：身体の上に抱く＞が自然である。日本語の方は「背中の上に背負う」より「背中に背負う」の方が自然であり、「身体の上に抱く」は不自然で、「懷に抱きいれる」が自然である。このため、中国語の方は「身体の表面へ移動」という認識が強いと言えらる。

さらに、「背負いこむ/抱きこむ/抱えこむ」は、「借金/問題」のようなマイナスのイメージのあるヲ格名詞句と結合し、マイナスな評価的意味を有するが、中国語の＜～上＞表現は＜背上：背負いこむ＞だけがこのような評価的意味を持っている。

(189)a. 背上债务/黒鍋/思想包袱

訳文：借金/無実の罪/精神上的の負担を背負いこむ

b. 君のほうは、いったいどんな悩みを抱え込んでいるんだ？（『均衡』『ロマンスへの誘い』）

訳文：你究竟有什么烦恼？

c. そのため、DDB は負債を背負い込むことになった。（『均衡』『スーパーアドマン』）

訳文：DDB 因此負債。

以上で議論したように、接触を表す<～上>と「～こむ」と共起する前項動詞は少なくとも、着装を表す「着る」と、「抱く」タイプと、「包む」タイプの動詞がある。中国語の方は、内部空間を表す<中/里>と共起する用例もあるが、日本語より、表面を表す<上>と共起する傾向が強いので、「物体の表面への移動」という認識が強いと言える。これは以下のようにまとめられる。

表 20 接触を表す<～上>と「～こむ」

前項動詞	中国語<～上>	日本語「～こむ」
「着る」・<穿>	[MOVE ONTO]	[MOVE ONTO] [MOVE INTO]
「包む」・<包>	[MOVE ONTO]/ [MOVE INTO]	[MOVE INTO]
「抱える」・<抱>	[MOVE ONTO]/ [MOVE INTO]	[MOVE INTO]

上記のように、接触を表す場合、日本語の方は[INTO]という捉え方が多いのに対して、中国語の方は[ONTO]の理解が一般的である。

5.2.3 固着を表す<～上>と「～こむ」

<～上>は移動から接触、付着を表すことができる。これは「～こむ」の意味に非常に近いのである。前述のように、「～こむ」は<内部移動→存在→固着>という意味上の連続体をなしているが、<～上>も同じ傾向を示している。<～上>で表現できる動詞は、少なくとも、「書きこむ/彫りこむ」のような作成動詞、「植えこむ/嵌めこむ」のような固着を表す動詞、ほかには内部移動から装着を表す「入れこむ」タイプの動詞がある。

(190)a. 内部移動から装着まで拡張される「～こむ」

在气球里装上推进器

訳文：气球に推進機を入れる/入れ込む。

b. 固着を表す動詞

在院子里种上树。

訳文：庭に木を植えた/植え込んだ。

c. 作成動詞

在紙上写上答案。

訳文：紙に答えを書いた/書き込んだ。

上記の例に示されるように、＜～上＞表現は存在・固着を表す場合、「～こむ」に対応するし、その前項動詞にも対応する。このため、結果的意味を表す場合、＜～上＞と「～こむ」と対応できるのは、その前項動詞に関係していると言える。前項動詞が固着まで表し、＜～上＞で表現されるなら、複合動詞も＜～上＞で表現される。このように、＜～上＞と「～こむ」が対応できるのは、「～こむ」が固着を表す前項動詞と結合できるからであると言える。

上記の「入れ込む」の用例は＜～進＞でも表現可能であるが、＜～進＞は固着の意味がなくて、内部移動だけを表す。固着の意味がある場合、或いは焦点化される場合、＜～上＞を用いられうる。

次に、「植え込む」のような前項動詞自身が装着の意味を含意する複合動詞について論じる。このような動詞の場合は、＜～進＞表現が成り立たない例文が多く観察できる。

(191)a. 池の形ができたなら、その斜面に植物を植えこむ。(『均衡』『ドゥーパ!』)

訳文：池子の形状出来之后，在斜面上种上/*种进植物。

b. 床の一部に琉球畳を嵌め込んだり、… (『均衡』『ドゥーパ!』)

訳文：在地板上安上/*安进琉球榻榻米，…

c. グランド部のネジを締め込んだでもないのに…(『均衡』『Yahoo!知恵袋』)

訳文：底部的螺丝还没有拧上去/*拧进去，但是…

上記の例のように、「植えこむ」と「嵌めこむ」、「締めこむ」などは内部移動より、装着の意味が強い。中国語で表現すると、＜～進＞では表現できず、＜～上＞となる。内部移動の意味が弱くなり、固着の意味が強くなると、＜～上＞の使用頻度が高くなる。

また、作成動詞の場合、＜～上＞の使用頻度が高くて、以下のような例が観察できる。

(192)a. 一位名叫苏珊娜的外国代表还要求姚悦华为她在钱包上绣上自己的名字。(《CCL》《新华社 2004 年新闻稿》)

訳文：訳文：スサンナという外国からの代表者は、財布に名前を刺繍してもらいたいと姚悦華さんに求めた。

b. 这些字迹经验证是后来才刻上去的。(《CCL》《新华社 2004 年新闻稿》)

訳文：検証によると、これらの文字は後で刻み込まれたものである。

c. 私はポケットから、錆びついた鉛筆削りのナイフをとり出し、忍び寄って、その美しい短剣の黒い鞘の裏側に、二三条のみにくい切り傷を彫り込んだ。(『中日』『金

閣寺』)

訳文：我迅速从口袋里掏出一把上锈的铅笔刀，悄悄地走近短剑，在它美丽的黑鞘里侧，刻上两三道深深的伤痕。(《中日》《金阁寺》)

d. カードにボールペンで、サマンサの名前を書き込んだ。(『均衡』『新宿流氓』)

訳文：在卡片用圆珠笔写上了萨曼塔的名字。

前項動詞が「刻む/書く」のような作成動詞である場合、「～こむ」だけではなく、「～入れる」との結合が可能である。例えば、「彫り入れる/書き入れる」などがある。さらに、「～の中に刻みを入れる」のような言い方も自然である。日本語では結果物の内部移動として捉えられるが、中国語では結果物が表面に付着すると理解されているようである。このような内部と表面についての認識上の相違は、以下のような例にも裏づけられる。

(193) There's a crack in the bowl.

日本語訳： 皿(の中/*上)にクラックが入っている。

中国語訳： 盘子上有个裂痕。

上記の例のように、日本語の方は英語に近く、「クラック」のような結果物の存在を表す場合、その位置が「皿の中」と認識しているが、中国語の方は「皿の上/表面」と認識している。結果物の存在位置についての認識上の相違により、日本語では作成動詞が内部移動表現「～こむ/入れる」と結合するので、中国語では<～上>と結合したのではないかと考えられる。

5.2.4 「達成」を表わす<～上>と「～こむ」

<～上>と「～こむ」は両方とも「達成」を表せる。まず、「～こむ」について、以下のような例を挙げて説明する。

(194)a. ここ二か月は一週間に二百四十キロ走り込んできたので自信はあった。(『均衡』『神戸新聞』)

b. とにかく歌詞の代わりにドレミで暗唱できるまで歌い込んでください。(『均衡』『やさしい楽譜の読み方』)

c. (木を)刈り込んで丸く仕上げるときれいです。(『均衡』『ガーデニングの<裏ワザ>大事典』)

d. あまり着る機会がないドレスでめかし込んで、大人の社交場へ繰り出して。(『均衡』『Hanako』)

e. それぞれの代表曲をじっくり聞き込むことです。(『均衡』『Yahoo!知恵袋』)

上記の例を見ると、「走りこむ」と「歌いこむ」は同じタイプで、繰り返して練習することにより、あるレベルに達するという意味である。「走りこむ」の用例は、「試合のため、一週間二百四十キロ走ってきた」という意味があり、「歌いこむ」の用例では、「歌詞の代わりにドレミで暗唱できるまで」という目標を表す文が現れている。

ほかに、「刈りこむ」と「めかしこむ」、「聞きこむ」の三語があるが、「刈りこむ」は「草木の枝葉や頭髮を刈って形を整える」という意味であり、「形を整える」という目標に達成するという意味がある。さらに、「刈りこむ」は以下のような用例もある。

(195) 刈り込んだ無駄のない文章。(『大辞泉』)

(195)における「刈り込む」は「文章を推敲して不要な部分を削る」という意味であり、「よい状態にするため」という目標があると言える。

一方、「めかしこむ」と「聞きこむ」は、自分が満足できるまで化粧する、或いは、聞くという意味なので、達成の意味があると言える。「めかしこむ」を英語で説明すると、“gussy up”、“especially to dress up attractively”になる。これは前置詞“up”の＜向上＞義に対応するようになる。“up”は＜垂直上昇＞義だけではなく、＜向上＞義まで表現できるが、Tyler(2003)は以下のような用例を挙げている。

(196)a. The bird flew up the chimney. (鳥は煙突の上の方へ飛んで行った)

b. Dave and Kirsten decided to get dressed up and go to a nice restaurant. (デイヴとカーステンは盛装して立派なレストランへ行くことにした。)

(タイラー2005:168、170)

Tyler(2003)の議論によると、向上や改善の含意が生じる文脈で“up”が使われることにより、“up”は＜向上＞義を発達させた。＜めかしこむ＞と“up”と対応するのは、内部移動を表す「～こむ」が＜目標に達成するためにレベルを向上する＞義を含意するからであろう。

「～こむ」が＜目標達成・レベル向上＞という意味を含意するのに対して、＜～上＞は＜目的の達成・願望の実現＞を表す。刈(1998)は以下の用例を挙げている。

(197)a. 我早就想见见他，今天可见上了。

訳文：ずっと前から彼に会いたくて、今日はやっと会えた。

b. 她要看着两个弟弟都挣上钱，再死也就放心了。

訳文：彼女は二人の弟がお金を稼げるのを見ることができれば、死んでも安心できる。

c. 拼一拼，念下去，混上吃商品粮才是长远大计。

訳文：頑張って勉強して、公務員になるのは長期的な計画だ。

上記の例を見ればわかるように、＜～上＞は前からずっと叶わない目的・願望を実現するという意味を表す。＜見上＞は、「会いたい」という願望の実現、＜挣上钱＞は「お金を稼げない状態から稼ぐ状態になる」を表すのに対して、＜混上吃商品粮＞は公務員になり、都市戸籍を持ち、商品食糧を食べられるようになるという意味を表す。＜見不上：会えない→見上：会える＞、＜挣不上钱：お金を稼げない→挣上钱：お金を稼げる＞、＜吃不上商品粮：商品食糧を食べられない(都市戸籍がない)→混上吃商品粮：商品食糧を食べられる(都市戸籍を持つ)＞と、前後の状態を比べてみると、いずれも＜向上・改善＞の意味がある。この点において、「～こむ」と＜～上＞は＜目標達成・レベル向上＞という共通的な意味領域を有すると言える。

5.2.5 ＜～上＞と「～こむ」とのほかの共通点

ほかに、「～こむ」を＜～上＞で表現する用例が観察できる。例えば、以下の例が挙げられる。

(198)a. 余計なものが写りこんでしまいます。(『均衡』『Yahoo!ブログ』)

訳文：连多余的东西也照上了。

b. とりわけ、この写真は、人物の顔まで写し込んでいますよね。(『均衡』『しゃくなげの里殺人事件』)

訳文：甚至这张照片连人的脸都照上了。

c. そのなかにぐらぐらと煮えたぎっている湯か、または油を注ぎこむのだ。(『均衡』『あまりに残酷な拷問の世界』)

訳文：里面再加上沸水或者油。

あるものを写真の中に撮る場合は、＜照上＞を用いて表現する。また、＜～上＞は加えるという意味があるので、＜加上＞はよく使われる。ほかに、「倒上酒：酒を注ぐ/加上油：ガソリンを入れる」などの言い方がある。また、「～こむ」は物理的移動、接触・固着のような状態変化、目標の達成のほかに、「惚れ込む」のように気持ち・注意力の移動を表すこともできるが、この場合も＜～上＞が使われる。

(199)a. バレンシアの郊外に住むあるスペイン人の女の子にすっかり惚れこんでしまった。(『均衡』『総領事館』)

訳文：他彻底迷上/*迷进了一个住在巴伦西亚郊外的西班牙女子。

b. 僕は音楽にはまり込んでいるのです。(『均衡』『モーツァル』)

訳文：我迷上/*迷进音乐了。

「惚れ込む」は深く好意を抱くようになるという意味を表し、「はまり込む」は注意力が有る物・人に集中する意味を表す。中国語で表現すると、＜迷上/喜欢上＞となるが、＜迷进/喜欢进＞とは言えない。このように＜～上＞表現は、ほかに＜爱上/看上＞などがあり、以下のような例が挙げられる。

(200)a. (他)爱上了电焊这一行。

訳文：(彼)は電気溶接を愛するようになった/はまり込んだ。

b. 从那天起他也就真的迷上她了。

訳文：あの日から、彼は本当に彼女に惚れこんだ。

c. 他看上了一件衣服。

訳文：彼はある服が気に入った。

(刘 1998 : 99)

上記の例のように、中国語では、気持ち、集中力の移動を＜～上＞で表現するが、日本語では「～こむ」と慣用句「気に入る」で表現する。無論、すべて心理を表す＜～上＞表現が日本語の内部移動表現に対応するわけではない。例えば、上記の例における＜爱上＞は「愛するようになる」でも表現できる。しかし、上記の議論によると、少なくとも、心理を表す場合、中国語では、＜～进＞より＜～上＞が多用されるが、日本語では、「～こむ」、「入る」のような内部移動表現が用いられるのは事実である。これは中国語と日本語の相違点の一つであると考えられる。

5.2.6 <～上>と「～こむ」との対照研究のまとめ

上記四節では、＜～上>と「～こむ」との対照研究を、方向義、結果義、達成義、心理表現と四つの面から行った。その結論は以下のようにまとめられる。

まず、内部移動を表す場合、乗り物への移動を表す「～こむ」は中国語では＜～上＞で表現されることが多い。また、姫野(1999)が議論した「囲む」タイプの「～こむ」は「着こむ」と「包みこむ」、「背負いこむ」などがあるが、移動物が身体などの表面を包むことにより、移動物が取り囲み体を形成する意味を表す。日本語では内部移動表現になるが、中国語では表面への移動として捉える場合、＜～上＞で表現し、内部移動として捉える場合は＜V 在～里＞で表す。

一方、「植えこむ」など、前項動詞が固着を含意する場合、ほぼ＜～上＞で表現する。逆に＜～进＞を用いると、不自然な表現になる。しかし、「～こむ」の「しつかり」という副詞的意味を強調するが、＜～上＞はこのような意味がない。さらに、「～こむ」は＜目標達成・レベル向上＞という意味を含意するのに対して、＜～上＞は＜目的の達成・願望の実現＞を表し、両方とも達成を表現できる。

上記の議論のように、＜～こむ＞は内部移動から固着まで表せるが、＜～進＞は内部移動しか表さず、＜～上＞は上方向への移動から固着・達成まで表現できる。

5.3 「～こむ」と＜～下＞について

刘(1998 : 81-106)によると、方向補語＜～下＞は高いところから低いところへの移動、または目下の目標から退くことを表わす。また、結果補語として、ある総体(一次的なもの)からその一部(二次的なもの)が脱漏することなどを表わすことができる。

「～こむ」は下方向への移動と下方向への姿勢変化、作成、獲得を表す場合、＜～下＞で表現できる。例えば、以下のような例が挙げられる。

(201)a. 私の裸の足は冷い水を感じ、脛まで漬った。次の足は草の根の束に載った。それから二尺ほど落ち込み、そしてはつきり泥が始った。(『中日』『野火』)

訳文 : 深深的草丛之中, 传来一阵水声。我的裸露的双脚感到了冰凉的水, 水没过小腿。我另一只脚踏在一丛草根上, 然后又陷下去/陷进去大约两尺。很显然, 我已走入沼地了。(《中日》《野火》)

b. 僕は女子学生が屈みこむままに任かせ、女子学生はハンカチーフに胃液を少し吐いた。(『中日』『死者の奢り』)

訳文 : 我听凭女学生弯下/*弯进身子, 女学生在手绢上吐了一点胃液。(《中日》《死者的奢华》)

上記の(201)a)における「泥に落ち込む」は泥の内部への移動である同時に、下方向への移動であるが、中国語では＜陷下去＞と＜陷进去＞と二つの言い方が成立する。一方、(201)b)は姿勢動詞の例であり、内向移動を表すが、＜弯下＞は自然であり、＜弯进＞は成立しない。このように、上記の複合動詞はいずれも内部移動を表すが、中国語では、方向補語＜～下＞だけを用いる場合と、＜～進＞と＜～下＞と両方とも用いられる場合がある。

「泥に落ち込む」は典型的な下方向への移動とすれば、「かがみこむ」のような姿勢動詞は日本語では内部移動、中国語では内部移動として捉えられない。以下では先ず「下方向への移動」を表す「～こむ」と＜～下＞について議論する。

5.3.1 下方向への移動

「海」などが着点になる場合、移動物或いは移動主体がその内部へ移動するが、元の位置より低いため、下方向への移動としても捉えられる。以下内部移動を表す「～こむ」を、下方向への移動を表す＜～下＞で表現する例である。

(202)a. 原文 : やがて湯に入れと云うから、ざぶりと飛び込んで、すぐ上がった。(『中日』)

『坊ちゃん』)

訳文：不一会儿来招呼洗澡，我扑通跳下去/跳进澡池，很快就上来了。(《中日》《哥儿》(1)(2))

b. 連中も、いまさら顔出しもならず、道具だけをほうり込んで、そのまま逃げだしてしまったのだろう。(『中日』『砂の女』)

訳文：那些家伙们到现在也不敢露面，只把工具扔下来/扔进洞里便溜走了。(《中日》《砂女》)

c. 次の足は草の根の束に載った。それから二尺ほど落ち込み、そしてはっきり泥が始った。(『中日』『野火』)

訳文：我另一只脚踏在一丛草根上，然后又陷下去/陷进去大约两尺。很显然，我已走入沼地了。(《中日》《野火》)

上記の例における「～こむ」は二つの移動方向があると考えられる。一つは移動主体が出発点より低い方向への移動で、もう一つは着点の内部への移動である。「飛びこむ」の例は、出発点が着点「湯」より位置が高い場合、成立するので、下方向への移動を表すと理解できる。一方、下への移動だけではなく、「湯の中に入る」という内部移動も成立する。「放りこむ」と「落ちこむ」も同様で、下方向への移動と「穴/泥沼」の内部への移動を表現する。このため、上記の例は<～進>でも表現できる。

一方、「海/穴」などは<凹面名詞>とも呼ばれる。

(203)<凹面名詞>

“田、井、海、地、壕沟、地洞”など。これらの“移動主体の立地点より低い位置にあるもの”という共通点を持つ名詞を“凹面名詞”と名付ける。(田、畑は中国語では立地点より低い所にある場所と意識されている)

(方 2004 : 7)

これらの名詞が着点となる場合、<～下>と結びつきやすいが、上記の例のように、日本語では内部移動表現「～こむ」で表現する。

5.3.2 姿勢動詞

日本語においては、下方向への姿勢変化は「～こむ」と結びつくが、中国語においては方向補語<～下>と共起する。このタイプの「～こむ」は「倒れこむ/座りこむ/かがみこむ/屈めこむ/へたりこむ」がある。

(204) a. エアトンは力つきたようにまた倒れ込んだ。(『均衡』『神秘の島』)

訳文：爱尔兰顿似乎已经力竭，再一次倒下了。

b. 私は子どもの隣にすわりこんで子どもに気持ちを集中させた。(『均衡』『魂の絆』)

訳文：我在孩子身边坐了下来，让他集中精神。

c. 僕は女子学生が屈みこむままに任かせ、女子学生はハンカチーフに胃液を少し吐いた。(『中日』『死者の奢り』)

訳文：我听凭女学生弯下身子，女学生在手绢上吐了一点胃液。(《中日》《死者的奢华》)

上記の例のように、中国語では下への姿勢変化を下方向への移動として捉える。しかし、姿勢動詞の場合、＜～下＞は着点名詞句と直接結びつかない。後に着点名詞句がくる場合、＜～在＞が用いられるが、これについて後節で議論する。さらに「～こむ」は下方向への姿勢変化だけではなく、値段などの減少をも表現できるが、中国語の場合は＜V+下来＞より＜下降/衰落＞が使われる。

(205)a. 売り上げが落ちこむ。

訳文：销售额下降。

b. 経済が落ちこむ。

訳文：经济衰落。

また、「～こむ」と＜～下＞は両方とも動的状態から静的状態への変化を表すが、「～こむ」は情緒の低落を表し、マイナスの評価を含み、＜～下＞はマイナスの評価を含意しない。

(206)a. 彼は落ちこんできた。

訳文：他情绪消沉→*低下来了。

b. 学生们静下来听老师说话。

訳文：生徒たちは静かになって先生の話を聞く。

「落ちこむ/しょげこむ」などは情緒の低落を表し、マイナス評価になるが、＜～下＞はそのような評価的意味がなく、ニュートラルな表現である。

5.3.3 作成動詞

＜～下＞で表現できる、作成を表す「～こむ」は「書き込む/描き込む/彫り込む/刻みこむ」がある。刘(1998)は、「書く」タイプの動詞は方向補語＜～下＞と共起すると議論している。また、「書く」などが「～こむ」のV1になる場合、＜～下＞で表現する例が観察できる。

(207)a. 記事の下に〔コメント〕という文字列が表示され、クリックすると第三者がコメン

トを書き込むことができます。(『均衡』『ココログでつくるかんたんブログ&ホームページ』)

訳文：在文章下面有个“评价”的文字列，点击后，第三方就可以写下自己的意见。

b. どんな小さな雑草の花でも描きこんでしまおう。(『均衡』『原田泰治と行く花を見る旅』)

訳文：不管是多么细小的杂草的花朵，我都会把它画下来。

c. 幹に自分の名を刻みこむ…。(『均衡』『菜の花さくら』)

訳文：在树干上刻下自己的名字。

一方、下記の例のように、述語の前に、「文字/電話番号」などの場合は、＜～下＞と「～こむ」はお互いに表現可能であるが、作品を表す名詞の場合、＜写下＞は「創作」の意味になるため、「～こむ」では表現できなくなる。

(208)a. 他当场拿过了我的笔记本，写下手机和家里的电话号码。(CCL《新华社 2004 年新闻稿》)

訳文：彼はその場私のノートを手を持ち、携帯と家の電話番号を書き込んだ。

b. 不少网友写下了发自内心的留言。(CCL《新华社 2004 年新闻稿》)

訳文：多くのネット友は心からの一言を書き込んだ。

c. 这是我在监狱里偶然写下的一点东西。(刘 1998:145)

訳文：これは私が監獄で偶然に書いた/*書き込んだものである。

d. 在他生命就要结束的日子里，他写下了这样的诗句。(『CCL』《沙鸥在严冬离去》)

訳文：命が終わりに近づいたごろ、彼はこのような詩句を書いた/*書き込んだ。

上記の例のように、ヲ格名詞が具体的なデータや文字を表す場合、＜写下＞と「書きこむ」は両方とも表現可能であるのに対して、作品などの場合、＜写下＞が成立するが、「書きこむ」は成立しにくくなる。また、刘(1998)の議論によると、＜～上＞の場合は「書く/描く」により、結果物の文字などを紙や木の表面に付着させるが、＜～下＞の場合は書いて後世に残す意味が強い。

5.3.4 「獲得」を表す動詞

＜～下＞は「獲得」を表す動詞とも共起するので、「買いこむ/貯めこむ/覚えこむ」を表現できる

(209)a. 五十万円もする印刷機も買い込んだ。(『均衡』『國破れてマッカーサー』)

訳文：连 50 万日元的的打印机都买下了。

b. 名古屋企業も同様に、バブル期に儲けた金は土地投機に回さず、コツコツと貯め込

んでいました。(『均衡』『現代』)

訳文：名古屋の企業也一样，把经济泡沫时期赚的钱没有用在土地投机上，而是老实实在存了下来。

c. 州名のスペルを万次郎はすべて覚えこむ。(『均衡』『椿と花水木』)

訳文：万次郎把州名の拼写都背下来了。

上記の例における「買いこむ」と「貯めこむ」は財産などの所有を表すが、「覚えこむ」は知識の所有と理解できる。＜买：買う＞の場合は、＜下＞を省略できるが、＜存：貯める＞の場合は、＜下来＞のほかに、＜起来＞も用いられる。しかし、＜背：覚える＞は＜下来＞としか共起しない。

5.3.5 その他

その他に、中国語では＜～下＞で表現される「～こむ」は、少なくとも以下のような例が挙げられる。

(210)a. お咲さんは、つばきを飲み込むようにしてうなずいて帰って行った。(『中日』『斜陽』)

訳文：阿笑象是硬把唾沫咽下去/?咽进去那样点了点头便回去了。(《中日》《斜阳》)

b. 宮は野島を見て気まりわるそうに笑って引込んだ。(『中日』『友情』)

訳文：大宮看着野岛，不好意思地笑着退下来。(《中日》《友情》)

c. 約八ヵ月間勤めた産業組合を退職させてもらい、弁護士宅に住み込みました。(『均衡』『生きることば』)

訳文：在同业公会任职8个月之后离职，在律师家里住下了。

d. 資金を工面して開業しても、莫大な借金を抱え込むことになる。(『均衡』『週刊現代』)

訳文：即便筹到资金开业，也会欠下了一笔巨债。

上記の例に示されるように、「のみこむ」は体の内部への移動を表すが、＜咽下去＞はよく使われ、＜咽进去＞は自然表現ではない。また、「引っこむ」は「表立つ場からしりぞいて、人目に立たない所に移る」という意味を表すが、＜～下＞は現在の目標から退くという意味があるので、＜退下＞は「ひっこむ」を表す例がある。また、＜～下＞は動的状態から静的状態への変化を表し、＜停：留まる/留：留める/住：住む＞などと共起できるが、「住みこむ」の場合は＜住下＞で表現できる。さらに、借金の場合は、＜欠下債＞という言い方も使われる。

5.3.6<～下>と「～こむ」との対照研究のまとめ

上記の議論によると、下方向への移動及び下方向への姿勢変化、作成、獲得を表す場合、「～こむ」を<～下>で表現できる。しかし、「～こむ」は量や値段の減少まで表現できるが、中国語では、量や値段の減少を表すには、方向補語<～下>より複合動詞<下降/衰退>など複合動詞の形で表現する。また、「～こむ」と<～下>は両方とも動的状態から静的状態への変化を表すが、「～こむ」は情緒の低落を表し、マイナス評価があり、<～下>はそのような評価的意味がなく、ニュートラルである。作成動詞の場合、「～こむ」と共起するヲ格名詞がデータや文字などであるが、<～下>は<作品>などとも共起する。

ほかに、「飲みこむ/引っこむ/住みこむ/(借金を)抱えこむ」も<～下>で表現可能である。

5.4 「～こむ」と<V+到>について

「～こむ」に対応する方向補語のうち、数量からみると、<～進>に次いで多いのは<～到 dao>であり、51 例ある。丸尾（2005:67-77）によると、「“V+到+L”形式は動作主体或いは対象がその動作（V）を通して、ある場所（L）に到達することを表す」と述べられている。また、V 1 が<走 zou, 跑 pao, 飞 fei, 流 liu, 逃 tao>など、主体の移動時の様態を表すものであるとき、<V1+到+L>は「V1 という動作を経た結果、L に到達したこと」を表すという。即ち、<～到 dao>は方向性を含意せず、着点を付加する働きをする。また、空間名詞<里 li (～のなか)/上 shang (～の上)/底下 dixia (～の下)>と共起する。

<～到 dao>の基本的な用法は<動詞+到+場所名詞+空間名詞(<里 li/下 xia>など)>である。また、<～進>などと互換できる。下記の「抛りこむ」には、<扔到大海里>は<扔进大海里/扔下大海>と言い換え可能である。また、「飛びこむ」には、<跳进了车厢>は<跳到了车上/跳上了车>と言い換えることができる。

(211)この辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込んでしまった。(『中日』『坊ちゃん』)

訳文：这张委任书在我回东京时，揉成一团扔到大海里/扔进大海里→扔下大海了。(《中日》《哥儿》(1)(3))

ところが、下記のような文は<～進>と言い換えることができず、<～進>と<～到 dao>の違いを示している。

表 21 <～進>と互換できない<～到 dao>

分類	語 彙 項目	日本語	中国語	『中日』	<～進>
移動 先が <～ 進> と共 起し ない	入 り こむ	仲人があるというわけではなし、ただ、喜助が一人暮らしをしているところに、玉枝が飄然と荷物をもって <u>入りこん</u> できたというにすぎない。	他俩没有中间介绍人，无非是玉枝带着行李一下子 <u>飞到过着独身生活的喜助身边</u> 而已。	『越前竹人形』《越前竹偶》	* 飞 进 ～身边
	持 ち こむ a	僕の見るところでは、彼は、いかなる難題を <u>持ち込ま</u> れても、断るということはないと思うんです。	依我看，即使 <u>天大的难题放到他面前</u> ，他也不至于拒绝。	『あした来る人』《情系明天》	* 放 进 ～面前
	持 ち こむ b	ボクらは、それをプールサイドに <u>持ち込み</u> 、「彫刻」を始めた。	第二天我们就把它 <u>抬到游泳池边</u> ，开始“雕刻”。	『五体不満足』《五体不满足》	* 抬 进 游泳池边
	射 し こむ	窓の外には、真赤に熟した柿の実に夕日があたって、その光は自在鍵の竹筒にまで <u>射しこん</u> で来るかと思われた。	窗外，夕阳洒在熟透了的红柿子上，光线一直 <u>照射到</u> 吊钩的竹筒上。	『雪国』《雪国》(1)	* 照 进 吊钩的竹筒上
	落 ち こむ	1974 年の第一次石油危機の時は、経済成長率はマイナス 0.2%に <u>落ち込んだ</u> が、物価は石油価格の急上昇により、逆にね上がった。	1974 年第一次石油危机的时候，经济增长率曾 <u>跌到</u> 负 0.2%，但物价由于石油价格的急升也高涨起来。	『日本経済の飛躍的な発展』《日本经济的腾飞》	* 跌 进 负 0.2%
V が <～ 進> と共 起し ない	引 っ こむ a	それと云うのが、田舎へ <u>引っ込</u> むか、断然東京に踏み止まるか、その決心がつきませんか、私は未だに下宿住まいをするのでもなく、ガランとした大森の家に独りで寝泊りをしていたのです。	尽管如此，到底是 <u>回到</u> 乡下去，还是坚决留在东京，却下不了决心。因此，至今我还没有找地方寄宿，而是一个人住在空空荡荡的大森的房子里。	『痴人の愛』《痴人之爱》	* 回 进 乡下
	打 ち こむ a	以後、心身ともに仕事に <u>打ち込</u> むことができるようになった。	从那以后，无论身心我都毫不迟疑地 <u>投入</u> 到工作中去。	『心の危機管理術』《顺应自然的生存哲学》	* 投 入 进～中

	打 ち こ む b	受験を前にして勉強に <u>打ち込</u> <u>めない</u> 学生は、人はみんな楽々 と勉強しているのに、オレはど うしてこんなに勉強するのが 苦しいのだろうと悩む。	在升学考试之前，没有 全身心地 <u>投入到</u> 应考学 习中去的学生想：别人 都不是那么很费劲地在 学习，而我学习为什么 那么苦啊！	『心の危機 管理術』《顺 应自然的生 存哲学》	* 投 入 进～中
	持 ち こ む c	古川の持っている田圃の井戸 を埋めて尻を <u>持ち込まれた</u> 事 もある。	还有一次，我把古川田 里的水井填了，惹得人 家直 <u>闹到家里</u> 。	『坊 ち ゃ ん』《哥儿》 (1)	* 闹 进 家里
文脈 に適 切で はな い	聞 き こ む	その噂でも師匠さんは <u>聞き込</u> <u>んだ</u> のでしょう。	艺术家大概 <u>听到了</u> 这个 传闻吧。	『斜陽』《斜 陽》	* 听 进

上記の例で、＜～到 dao＞が＜～进＞に言い換えられない理由としては以下のように考えられる。前半の例は、移動先に関係する。

「入りこむ」の例は、直訳で表すことは困難なため、意識をしている。それに対応する中国語の表現は＜飞到过着独身生活的喜助身边（「一人暮らしをしている喜助のそばに飛んでくる」）＞となり、＜～身边（「～のそば」）＞は中国語では、内部空間と見なせず、＜～进＞と連用できない。「持ちこむ a」は＜放到他面前（「彼の前に持ってくる」）＞という表現になっているが、＜～面前（「～の前に」）＞も＜～进＞と連用できない。「持ちこむ b」の用例では、移動先は「プールサイド」であり、その意味としては、「水泳プールの周囲にある、休息をとったりするためのスペース」であるが、中国語では、＜游泳池边（水泳プールの周囲）＞になっている。＜～边（～の周囲）＞は内部的空間を表わす空間名詞＜里 li / 中 zhong＞と共起しないため、内部空間のイメージが弱いと考えられる。このため、＜在 zai＞と＜到 dao＞としか共起しない。

「射しこむ」の例をみると、光が竹筒に射しているという意味であるが、着点は竹筒の内部ではなく、その表面になるので、＜～到＞は＜～进＞と言い換えられない。また、「マイナス 0.2% に落ち込んだ」という表現では、移動先はある抽象的な空間における一点になり、方向補語＜～到＞はこの一点に到着する意味を表わす。＜～进＞は空間の内部への移動を表わすが、この内部のどこかに着くという部分は表わせないのである。これは 6.1 で挙げた「降りこむ」、「乗りこむ」と同様である。

方向補語＜～到＞は到着を表わし、その移動先は内部空間を要求しない。が、＜～进＞は空間の内部的性質を要求しているので、上記の文であげた、＜～身边（「～のそば」）＞、

<～面前(「～の前に」)>、<游泳池边(水泳プールの周囲)>などと共起しない。或いは、中国語ではこの三つの移動先は内部空間とは考えられないとも言えよう。「マイナス0.2%に落ち込んだ」はある内部空間のおける一点であるが、<～進>は空間の内部への移動しか表わせず、この内部における到着点と共起しない。これは、方向補語<～到>と<～進>の相違点であるが、日本語と中国語では内部空間の見方が異なっていることをも反映している。「マイナス 0.2%に落ち込んだ」のような例文は日本語と中国語における空間表現の違いとみられる。

しかし、後半の例文は V が<～進>と共起しないからであると考えている。<回：戻る>の場合は、すでに移動方向が決まっているので、<～進>を付け加えることができない。<投入>の場合は、CCL では<投入到>は 800 以上収集できるが、<投入>と<进去>としか共起せず、24 例あった。また、<闹>の場合、<闹到>は成立するが、<闹进>は自然度が落ちて、CCL では観察できなかった。一方、<听到>は「聞きつける/聞いて知る」という意味で、<听进>は意見を聞いて受け入れるという意味である。上記で挙げた「聞きこむ」の例においては「噂を聞いて情報を知る」という意味なので、<听到>は適切である。

さらに、下記の例のように、<～到>は後ろに場所名詞句が必要になる。また、到達だけを表し、量的表現と共起しない。

(212) a. 泥に落ち込んだ。

訳文：陷进/陷到泥里。

b. 落ち込んでしまった。

訳文：陷进去了/*陷到了。

c. 二尺ほど落ち込んだ。

訳文：陷进去大约两尺/*陷到两尺

5.5 「～こむ」と<V+在+L>について

前述のように、日本語の複合動詞「～こむ」の基本義は内部移動を表し、中国語の方向補語<～進/到/上/下>に対応する例が多いが、一部の「～こむ」は、以下のように、<V+在+L>に対応し、さらに、<V+在+L>表現を<～進>のような方向補語に言い換えることはできない、或いは、言い換えができて、不自然な表現となる。

(213) a. 買ったものの金額をノートに書き込んでるだけだ。 (『均衡』『Yahoo!ブログ』)

訳文：只是把买东西的金额写在/*写进病笔记本上。

b. 三百人の青年たちが息を殺し、ほとんど物音も立てず、机にかがみ込んで、必死に答案を書いていた。 (『中日』『青春の蹉跎』)

訳文：三百个青年都屏柱呼吸，一点声音也不出，趴在/*趴进/*趴下桌上拚命地写答

案。（《中日》《青春的蹉跎》）

データの観察により、＜V+在+L＞形式に表れて、ほかの方向補語と言い換えられないのは、上記の例における「書き込む」のような作成動詞と「かがみこむ」のような姿勢動詞である。

一方、朱徳熙(1990)などの議論によると、＜在＞表現は＜在+L+V＞と＜V+在+L＞と二つの形式がある。姿勢動詞と作成動詞はこの両形式に表れうるが、本稿では＜V+在+L＞形式だけを扱い、＜在+L+ V＞を扱わないのは以下の理由による。

5.2 と 5.3 節で方向補語＜V 上＞と＜V 下＞を考察してきたが、作成動詞と姿勢動詞の場合、＜在+L+ V 上/下＞表現になる。

(214)a. 在标签上写上/写下名字。

訳文：ラベルに名前を書きこむ。

b. 在沙发上坐下来。

訳文：ソファに座りこむ。

上記のように、＜在+L+ V＞形式は＜V 上/下＞と重なり合う例が多く観察できる。このため、5.5 節では＜V+在+L＞形式だけを考察する。以下は先ず姿勢動詞について考察を行う。

5.5.1 姿勢動詞

姿勢動詞が V1 になる場合、＜V+在+L＞に対応する例が多いが、よく例を観察すると、表面を表す空間名詞＜上(shang)＞と共起することが多い。これは「～こむ」と＜～進＞の相違点である。方向補語＜進＞と共起する空間名詞は＜里(li)/中(zhong)＞であるが、「～こむ」に対応する＜V+在+L＞は＜里(li)/中(zhong)＞と＜上(shang)＞の両方である。姿勢動詞の場合、＜上(shang)＞の例が圧倒的に多い。また、下記の例のように、＜上(shang)＞と共起する＜在+L＞表現を＜進＞に言い換えることができない。『均衡』から取った例の中国語訳は筆者が翻訳したものである。

(215) a. 州波はそのままベッドに倒れ込み、ゆっくりと目を閉じた。（『均衡』『傷』）

訳文：州波就那样倒在床上/*倒进床上/*倒进床里，慢慢地闭上了眼睛。

b. 三百人の青年たちが息を殺し、ほとんど物音も立てず、机にかがみ込んで、必死に答案を書いていた。（『中日』『青春の蹉跎』）

訳文：三百个青年都屏柱呼吸，一点声音也不出，趴在/*趴进桌上拚命地写答案。（《中日》《青春的蹉跎》）

c. 涼子は床に力なく座り込んだ。（『均衡』『三毛猫ホームズの世紀末』）

訳文：涼子无力地坐进了地板上/*坐进了地板上/*坐到了地板里面。

上記の例に示されるように、「ベッドに倒れ込む/机にかがみこむ/床にすわりこむ」は何れも動作がその表面に到着することを表すので、中国語では、<V+在+L+上(shang)>表現となっており、<V+进+L+里(li)/中(zhong)>表現であらわされることはない。即ち、中国語の<～进>は、内部空間を要求するが、日本語の「～こむ」は内部空間だけではなく、物体の表面を表す場所句とも共起する。

語彙概念構造では、対象(y)が場所(z)に存在するという意味概念は[y BE AT z]と表示されるが、このATは位置を抽象化した概念である。日本語ではATは「に」に対応するが、「に」は一般的な位置表現であり、位置の在り方を詳しく表わすには、「～の上/中/下/前/後ろ/周り」などの空間名詞を着けて表現する必要がある。英語でも空間名詞が使われるが、これの前置詞はATの補足説明として、SURFACE(表面)、INSIDE(内部)、ROUND(周囲)といった空間概念を伴うものである。

- (216)a. on=AT-SURFACE-of (Xの表面に)
b. in=AT-INSIDE-of X (Xの内部に)
c. around=AT-AROUND-of X (Xの周囲に)

日本語では、二格と共起する「～こむ」は空間名詞と共起する例が少ないが、“on/in/around”という空間概念と全て共起できる。

- (217)a. 涼子は床に力なく座り込んだ。(『均衡』『三毛猫ホームズの世紀末』)(“on”)
b. 「鱸、けっこうまかったですよ。」と僕は言ってみたが誰も返事をしなかった。まるで深い堅穴に小石を投げ込んだみたいだった。(『中日』『ノルウェイの森』)(“in”)
c. ボクらは、それをプールサイドに持ち込み、「彫刻」を始めた。(『中日』『五体不満足』)(“around”)

一方、中国語における<V+在+L>はSURFACE(表面)、INSIDE(内部)、ROUND(周囲)といった空間概念と、いずれも共起できる。<把字写在黑板上(“on”)>、<把鱼养在池子里(“in”)>が言える。

空間認識の立場から考えると、日本語の「～に V1+こむ」は中国語の<V+在+L>表現に近く、両方ともATに対応している。

さらに、姫野(1999: 67)は「かがみこむ/屈めこむ/しゃがみこむ/落ちこむ/沈みこむ」などが「主体あるいは対象の一部が基底部に向かって沈下する」という意味を表すと説明している。本稿においては「内向移動」とする。が、中国語では、「かがみこむ/屈めこむ/しゃがみこむ」などを内部移動とは理解しにくい。一方、このような姿勢動詞の場合、明

確な着点が文に現れないことが多く、自分自身のテリトリーが下がっていくと理解できるが、姿勢動詞「立つ」が「～こむ」と結合できないのは、テリトリーが下がっていくという意味を表さないからであろうと推測できる。

「～こむ」の基本義が内部移動を表すが、内部移動の意味が薄れ、「場所にとどまる」などの意味が生じる。このような「～こむ」は中国語の<V+在+L>だけでは、「～こむ」の意味を完全に表現できない場合がある。

(218)座りこむ

- a. 涼子は床に力なく座り込んだ。(『均衡』『三毛猫ホームズの世紀末』)

訳文：涼子无力地坐在了地板上。

- b. その間もずっと博士は床に座り込んで、動けず、両手はルートを抱いた形のまま硬直していた。(『均衡』『博士の愛した数式』)

訳文：那期间，博士坐在地板上一动不动，双手抱着……

- c. 駅前の広場には、大勢の人達がたむろして座り込んでいる。(『均衡』『中国ひとり旅』)

訳文：许多人在车站前的广场上静坐(示威)。

- d. 午前十一時に座り込みを開始し、午後六時の総括集会終了まで、断固たる抗議の意志を示しました。(『均衡』『国会会議録』)

訳文：从上午 11 点开始静坐，到下午六点总集会结束为止，……

上記の(218a)は瞬間的状态変化を表し、「床に座り込む」と「坐在地板上」の意味はほぼ同じである。しかし、(218b)における「座り込む」は「ずっと/動けず」と共起し、「座る」と比べると、状態の継続が長く続くというニュアンスを伴うが、中国語の<V+在+L>表現はこのような「座る」と「座り込む」の相違点を表すことができない。本稿では、このような「長い間の状態継続というニュアンス」を時間性とする。

さらに、(218c)を見ると、「座り込む」は時間性ではなく、姫野(1999)が提示した目的性をも有する。即ち、この例における「座り込む」は単純な状態変化だけではなく、何か目的に達成するために、長い間座って動かないという意味を含意する。中国語の表現では、<坐>だけで「座り込む」を表すことができず、<静坐>、或いは、<静坐示威>で表現する。(218d)における名詞「座り込み」は、完全に状態の継続を表し、内部移動の意味がないと言える。また、以下のような例を見ると、「座りこむ」は内部移動の意味を表すことができないと分かる。

(219)坐进去一点²⁶。

もうちょっと、中へ移動して、座ってください。

²⁶ 荒川(2006:8)で提示した<坐进来>の用例を参考した。

→*もうちょっと、中へ座り込んでください。

上記の例を見ればわかるように、＜坐＞は＜进去＞と共起し、内部へ移動してから座るという意味を表すが、「座りこむ」はこのような意味を表せない。ほかに、「倒れこむ、かがみこむ」なども同じように状態の継続を表すが、内部移動の意味を表さない。

「すわりこむ」だけではなく、「たおれこむ」なども時間性を有するが、コーパスから、以下のような例が収集できた。

(220)a. 足元に倒れ込んだ国広を抱きかかえ、ケイは必死に叫んだ。(『均衡』『雪の積む里』)

訳文：抱着倒在身边的国广，凯歇斯底里地喊着……

b. たちまち、麻酔の薬効があらわれ、哀れなスージーは、ドタリと再びその場に長々と倒れ込んだ。(『均衡』『犬猫先生推理旅行記』)

訳文：很快，麻药奏效，绝望的苏西再次昏倒在地。

c. 胸を斬られた入鹿は、中庭の土の上に音を立てて倒れ込んだ。(『均衡』『炎の女帝持統天皇』)

訳文：被刺中的入鹿倒在中庭的土地上。

d. 「かわいい」母の口をついて出てきた言葉は、そこに居合わせた人々の予期に反するものだった。泣き出し、取り乱してしまうかもしれない。気色を失い、倒れ込んでしまうかもしれない。(『中日』『五体不満足』)

訳文：“我的可爱的乖乖。”这是母亲见到我以后，说的第一句话。完全与人们预想的的不同，原来担心母亲见到无手无足的儿子，会痛哭，会精神失常，会失去知觉。(《中日》《五体不満足》)

上記の例のように、「たおれこむ」は意識を失い、ある場所に倒れてから立ち上がらないという意味を含意するが、中国語の＜V+在+L＞表現では、状態の継続だけを表す。立ち上がることができないという意味を表すには、文脈に依存するか、(219)b)のように、動詞が＜昏(意識を失う)＞と結合して表現する必要がある。

また、コーパスから、「座りこむ」、「たおれこむ」、「しゃがみこむ」、「かがみこむ」をそれぞれ、175 例、53 例、65 例、46 例収集できたが、否定表現と共起する例は観察できなかった。即ち、これらの姿勢動詞が「-こむ」と結合すると、現実で起こった出来事を描写する。

5.5.2 作成動詞

「書く、刻む、彫る」などの作成動詞の場合、内部移動というより結果物が物体の表面への付着を表すと言える。これらの動詞は付着を表す「-つける」とも結合できる。

表面への付着という意味から、中国語の＜進＞ではなく、＜V+在+L＞で表現できると考えられる。作成を表す「～こむ」に対応する＜V+在+L＞は主に以下のような構文で成立する。

(221)a. 送信が始まると、受信機もカタカタと音をたてて、紙テープにモールス信号を 刻み込んでいった。（『均衡』『富の福音』）

訳文：开始发送信号之后，收报机嗒嗒作响，把莫尔斯信号刻在纸带上。

b. カルテに書き込まれたアルファベットの続け文字には、ぞくぞくする秘密めいた美しさがあった。（『均衡』『妊娠カレンダー』）

訳文：……写在病历卡上的一长串的字母充满了神秘的美感。

(221)a)の場合は、＜把+目的語+V+在+L＞という形式になり、(221)b)は連体修飾語の例である。＜把+目的語+V+在+L＞の場合は、＜V 上/下＞に言い換えられるが、連体修飾語の場合は、存在を表すので、＜V 上/下＞という形式では表現できない。

(222)a. 开始发送信号之后，收报机嗒嗒作响，把莫尔斯信号刻在纸带上/在纸带上刻下莫尔斯信号/在纸带上刻上莫尔斯信号。

b. 写在/*写上/写下病历卡上的一长串的字母充满了神秘的美感。

連体修飾語の場合、＜V+在+L＞形式でしか表現できない例がほかにも多く観察できる。

(223)a. 新聞に折り込まれたチラシ

訳文：夹在报纸里的小广告

b. 壁にはめ込まれたモニター

訳文：安在墙上的监视器

c. 壁に埋め込まれたテレビ

訳文：装在墙上的电视

上記の例に示されるように、「存在場所+動詞受け身形+存在物」の場合は、＜V+在+L+上/里＞で表現可能である。

5.6 ＜V+有/着＞と「～こむ」

作成、固着を表す「～こむ」は受身文になると、中国語では＜V+有/着＞表現になる。以下では先ず作成動詞の例を挙げる。

(224)a. 石の門の上に、金文字でほそく、HOTEL SWITZERLANDと彫り込ま

れていた。(『中日』『斜陽』)

訳文:石门上刻有/着一排纤细的金色文字:HO-T E L S W I T Z E R L A N D。(《中日》《斜陽》)

b. 背に張られたラベルにはタイトルが書き込まれていた。(『均衡』『らせん』)

訳文:貼在背上的标签上写有/着题目。

c. その墓には大正何年かという比較的新しい日付が刻み込まれており、サザエの母ではないかと推測される。(『均衡』『Yahoo!知恵袋』)

訳文:墓碑上刻有较新的日期,大概是大正某年,推测应该是早佐江的母亲。

以下は固着を表す「～こむ」の例である。

(225)a. 靴底には黒っぽい革が張られ、はき口に装飾用の茶色の毛皮が縫いこまれている。

(『均衡』『愛をつないで』)

訳文:鞋底贴有偏黑色的皮革,鞋口缝有装饰用的茶色毛皮。

b. 塀の上にはガラスの破片が植え込まれていた。(『均衡』『銃を持つ男』)

訳文:牆上装有/着玻璃碎片。

c. モニターが壁に嵌め込まれている。(作例)

訳文:牆上装有/着监视器。

また、一部の移動を表す動詞も受け身文の場合は、<V+有/着>表現で表されうる。

(226)そのほかにたくさんの器械類が積み込まれている。(『均衡』『強奪箱根駅伝』)

訳文:另外还装有许多器械。

5.7 まとめ

上記 6 節の内容を以下の表に纏められる。

表 22 「～こむ」と方向補語及び<V 在/有/着>表現との対照研究

日 本 語	中国語	共通点	相違点
「 ～ こ む」	<～進>	内部移動を表す	<p>① 「～こむ」と結合する様態動詞は限られている。さらに、様態動詞は内部移動を表す後項動詞と複合しても大きな制限を受けている。これに対して、中国語の方は制限がないとは言えないが、日本語より使用頻度が高く、使用範囲も広い。</p> <p>② 「～こむ」は「入りこむ」、「入れこむ」のような、前項動詞がすでに着点の内部へという経路関係を包入する複合動詞は移動後の状態に注目し、「深く/しっかり」を含意しうるが、<～進>はこのような意味拡張がおこなわれていない。</p> <p>③ 「(テントの中の)安田の寝床に雨が降り込み」のように、「～こむ」は内部空間における移動の最終的な位置を表す名詞句と直接結びつく用例もあるが、<～進>はこのような名詞句と直接組合わさるのは難しい。</p> <p>④ V1 が心理・生理の状態変化を表す「～こむ」も多くあるが、<～進>はこのような動詞と共起する例はあまり観察できない。</p>
	<～上>	移動	中国語には<凸面名詞>が着点になる場合、中国語では<～進>の代わりに、<～上>で表現するが、日本語では内部移動表現で表される。
		接触・付着	「着こむ」、「包みこむ」、「背負いこむ」などは、移動物が身体などの表面を包むことにより、移動物が取り囲み体を形成する意味を表し、日本語では内部移動表現になるが、中国語では表面への移動として捉える傾向が強い。
		固着	「植えこむ」など、前項動詞が固着を含意する場合、ほぼ<～上>で表現する。逆に<～進>を用いると、不自然な表現になる。しかし、「～こむ」の「しっかり」という副詞的意味を強調するが、<～上>はこのような意味がない。
		達成	「～こむ」は<目標達成・レベル向上>という意味を含意するのに対して、<～上>は<目的の達成・願望の実現>を表す。

<～下>	下方向への移動	中国語では“田、井、海、地、壕沟、地洞”のようなく凹面名詞>が着点になる場合、<～下>を用いる傾向が強い。日本語では内部移動表現になる。
	姿勢変化	「～こむ」は量や値段の減少まで表現できるが、中国語では、量や値段の減少を表すには、<～下>より、複合動詞<下降/衰退>など複合動詞の形で表現する。
	作成	「～こむ」と共起するヲ格名詞がデータや文字などであるが、<～下>は<作品>などとも共起する。
	獲得・所有	「買いこむ(买下)」、「貯めこむ(存下)」、「覚えこむ(背下来)」
<～到>	移動	「～こむ」は主に内部移動を表すが、着点の内部空間を強く要求しない例も観察できる。<～到>は着点の空間性を要求しない。また「～こむ」は量的表現と共起するが、<～到>は共起しない。
<V 在 L>	姿勢変化	「～こむ」は時間性を獲得するが、<V 在 L>はこのような時間性を有しない。
	作成を表す場合、中国語の表現は<把+目的語+V+在+L>という形式になる。また、「～こむ」は連体修飾語になる場合、<V+在+L+的>形式で表現される。	
<V 有/着>	作成、固着を表す「～こむ」は受身文になると、中国語では<V+有/着>表現になりうる。	

第六章 「～こむ」の副詞的意味と中国語表現との対照研究

三章で議論したように、「～こむ」は副詞的意味を含意する。しかし、これらの副詞的意味は中国語で表現すると、複合動詞レベルだけではなくて、副詞句などの表現形式もある。さらに、副詞句で表現することができない例も多くある。

(227)a. 箱に本を詰めこんだ。

訳文：箱子里装满了书。

b. 本を買いこむ

訳文：大量买书。

c. 病気ではないのに、自分は病気だと信じこんだ。

訳文：明明没病，但他坚信自己有病。

上記の例において、「詰めこむ」の場合は、密集感があり、中国語では＜装满＞になり、前項動詞＜装：入れる＞は内部への使役移動を表し、後項動詞＜满：いっぱい＞は結果補語で、着点領域、「箱」の状態を表現する。また、「買いこむ」は多量性を含意し、中国語表現では＜大量＞が用いられる。「信じこむ」には、二つの評価的意味がある。一つ目は、「かなり深く信じる」という意味であるが、＜坚：しっかり＞はこの資格付的意味を表す。二つ目は「根拠のないことを信じる」という意味でマイナスの評価意味があるが、＜坚信＞だけでは表現できず、前後の文脈により理解することができる。

上記のように、日本語では後項動詞の意味拡張により、副詞的意味を表現できるが、中国語では、副詞句などの表現も必要になり、さらに表現できない例が多くある。以下の考察では、中国語における「～こむ」の副詞的意味の表現形式と、「～こむ」のV1に対応する中国語の評価的意味について考察を行う。

6.1 資格付けの評価について

6.1.1 深部移動

第三章で議論したように、「沈みこむ」などは深部移動を表し、「～の深部に/深く」のような副詞句と共起する例が観察できるが、「～の浅いところに/浅く」のような副詞句と共起する例は見つからなかった。しかし、中国語では深部移動の文脈を選ぶ機能を有する「～こむ」にあたる表現はほぼないと言える。姫野(1999)が議論したように、「～こむ」は「深く」などと共起できるが、「浅く」などとは共起しにくい。これを深部移動の文脈を選ぶ機能とする。

(228)a. また、低温であるため、密度の大きな海水になって海洋の深部に沈み込み、赤道方

向に向かう。(『均衡』『高等学校地学Ⅰ』)

由于低温，密度大的海水向赤道方向沉于海洋深部。

b. ビーチコーミングを重ねていくと、海に浮いている物や、浅い(海底)に沈んでいる物がよく打ち上がり、深いところにある物は打ち上がらないという真実もわかります。(『均衡』『ビーチコーミング学』)

对冲到海边的漂流物进行数次观察后，发现了这样的事实，即海洋中的飘浮物以及沉于浅层海底的物体易被冲上岸，而位于深层海底的物体不会如此。

上記のように、中国語では、「沈む」と「沈みこむ」は同じ動詞<沉>で表現される。このため、深部移動の文脈を選ぶ機能を有する「～こむ」にあたる表現がないので、中国語母語話者は「～こむ」を使用する際、文脈についての判断が必要になる。一方、文脈に副詞句が出る場合は、中国語でそのまま表現すればよいが、副詞句に頼らず、複合動詞自身で深部移動を表す場合は、複合動詞や副詞句で表現する。

(229)a. おれが椽鼻で清の手紙をひらつかせながら、考え込んでいると、しきりの襖をあけて、萩野の御婆さんが晩めしを持ってきた。(『中日』『坊ちゃん』)

訳文：我坐在廊子上，让阿清的信随风飘扬着，陷入了沉思。这时，萩野老婆婆拉开紧闭的隔扇，端着晚饭进来了。(《中日》《哥儿(1)》)

b. それまでの私はといえば、吃りであることを無視されることは、それがそのまま、私という存在を抹殺されることだ、と奇妙に信じ込んでいたのだから。(『中日』『金閣寺』)

訳文：而过去我却一直抱一种奇怪的想法，深信我与口吃是不可分的，故而无视我的口吃，就等于抹杀了我的存在。(《中日》《金阁寺》)

c. 私は次々に起こった重大事件にすっかり疲れ果て、眠りこんでしまった。(『均衡』『ダラ』)

訳文：连着发生了几件大事，我疲惫不堪，沉沉睡去。

上記の例において、「考えこむ」と「信じこむ」は深く考える、深く信じるという意味であるが、対応する中国語は<偏正式複合動詞>の<沉思>、<深信>になっている。<偏正式複合動詞>とは、前後の要素の間に副詞修飾語と動詞主要部という関係がある。<沉>は<深>と同様の意味で、「深く」を表す。一方、「眠りこむ」は深い睡眠状態に入るという意味で、中国語表現は<沉沉睡去>になるが、<沉沉>は副詞句で、「ぐっすり」という意味である。深部移動は<深/沉+V>の形式で表現されることが多く、ほかに、「問題の核心に踏みこむ：深入问题的核心」などの例がある。

一方、修飾語<深/沉>を伴わない例もある。以下は「冷えこむ」の例である。

(230)a. 翌朝冷え込んだため、辺りは霜で真っ白だ。(『均衡』『奥利根・谷川連峰の沢』)

訳文：第二天早上气温骤降，下了霜，遍地雪白。

b. 九月に入るとすぐに秋風が吹き始め、夜は布団がほしくなるほど冷えこむこともあった。(『均衡』『夢のかたみ』)

訳文：一到九月，秋风乍起，夜里颇冷，有时甚至想要盖被子。

c. 今の京都は、昼はぼちぼち暖かいけど、朝晩はかなり冷え込できます。(『均衡』『Yahoo!知恵袋』)

訳文：现在的京都，白天渐暖，不过早晚还是很冷。

「冷えこむ」は激しく冷えるという意味である。上記の(232a)の「冷えこむ」に対応する中国語の表現は<气温骤降：气温がぐっと下がる>になっており、<骤>は「～こむ」の副詞的意味「激しく」を表す。(232b)において、副詞<颇>が程度副詞「かなり/とても」に相当する。(232c)では、「かなり」が「冷えこむ」と共起するが、中国語表現では<很冷>だけで表現される。さらに、「話しこむ」と「老いこむ」の場合は以下のような表現になる。

(231)a. 曾根と三門けい子の二人は、周囲のことなどには全く無関心な風に、席にすわって話し込んでいた。(『中日』『あした来る人』)

訳文：而曾根和三门敬子两人仍在座位上说得津津有味，全然不把周围的变化放在眼里。(《中日》《情系明天》)

b. ああ、人間も我輩のように老込んで了っては駄目だねえ。(『中日』『破戒』)

訳文：唉，人到了我这种老朽之年，就不中用啦！”(《中日》《破戒》)

「話しこむ」は<～得津津有味>が付加されるが、「老いこむ」の場合は複合動詞<老朽>で表され、いずれも内部移動表現から離れている。上記の内容をまとめると、「深部移動」に対応する中国語の表現形式は三つある。一つ目は<深/沉+V>の<偏正式複合動詞>で、二つ目は<沉沉>、<骤/很/颇>などをつけて表す手段がある。ほかには<V 得津津有味>などがある。

6.1.2 固定感

固定感を「しっかり固着する」タイプと「長い間留まるタイプ」に分けたが、先ず、例文の観察により、「しっかり」タイプの方は中国語では表現しにくいことがわかる。松田(2008)は「うえこむ」について、以下の例を挙げている。

(232)a. *花壇が整地されるまでの間、チューリップを鉢に植え込んだ

(→花壇が整地されるまでの間、チューリップを鉢に植えておいた)

訳文：在整理花坛期间，把郁金香种在了花盆里。

b. *この松の木は私の祖父が植えこんだものです。

(→この松の木は私の祖父が植えたものです。)

訳文：这棵松树是祖父栽的。

(松田 2004 : 177、中国語訳は筆者による)

松田(2004)の研究によると、「植えこむ」は「所定の場所にしっかりきちんと植えこむ」という意味があり、すぐ掘り出されないように植えることである。このため、上記の用例は非文になる。しかし、中国語に訳すと、「植える」と「植えこむ」は同じ表現になり、＜種/栽＞で表現される。「植えこむ」は「しっかり」を含意する特定な文脈に用いられるが、中国語の＜種/栽＞は「植える」に対応し、文脈的制限をほとんど受けない。また、＜種/栽＞は「～こむ」に含意される「しっかり」の意味を表す副詞句と共に起する例がほぼ観察できない。

(233)a. 池の形ができたなら、斜面に植物を植えこむ。(『均衡』『ドゥーパ!』)

訳文：池子の形状出来之后，在斜面上种上/*很牢固地种上植物。

b. あごの骨に穴を開けてネジを植え込む。(『均衡』『歯科技工士が書いた入れ歯至急相談室』)

訳文：在颌骨上开个洞装上/*很结实地上装螺丝。

c. ということを日本人の老若男女すべての目的意識に植え込んでいくということ、……。 (『均衡』『国会会議録』)

訳文：这样的想法早已根植于日本人的意识之中，不论男女老少。

「植えこむ」は、前項動詞には意図的にしっかり植える、或いは、植えた結果、対象物がしっかり留まるという意味があり、後項動詞は「しっかり」を強調すると考えている。しかし、中国語表現の＜種上/装上＞は前項動詞「植える」に相当し、「しっかり」を強調する意味がない。また、「しっかり」を表す＜结实/牢固＞と共に起しにくい。

しかし、移動先は鉢や田圃ではなく、人間の脳や意識になる場合は、表現可能になる。(235c)に示されるように、「植えこむ」を＜根植＞で表現すると、＜根＞は根付くという意味で、しっかりのニュアンスを表現できる。「しっかり」の意味を中国語で表現しにくいのは「うえこむ」だけでなく、「はめこむ」などにも見られる。

(234)窓にガラスをはめ込む。

訳文：在窗户上装上/*很牢固地上装玻璃。

上記の例において、「はめこむ」は＜装上/装着＞で表現されているが、これらの表現に

はく堅固/牢固：しっかり>を挿入するのは難しい。「ガラスをはめこむ」場合、ガラスをしっかりと、きっちりはめいれるという意図性が強いが、中国語ではこの「しっかりと」という意図性を伝えるのは難しい。「しっかりと」の意味は、以下のような文では表しうる。

(235)a. 这个宝石镶得很牢固，不会掉下来。

訳文：この宝石はしっかりと嵌め込まれているから、落ちることはない。

b. 他把这个宝石镶得很牢固。

訳文：彼はこの宝石をしっかりと嵌め込んだ。

上記の例の考察により、中国語では、「～こむ」に含意される「しっかりと」の意味を表現するのは難しい。たとえ表現できるとしても、<根植>のような複合動詞や特定の文型である動補構造で表現することとなる。

「長い間留まる」を含意する「～こむ」を中国語で表現すると、副詞句との共起により、表現可能であるが、表現できない例もある。

(236)a. 坐りこんでいる人たちは殆ど怪我人ばかりだが、渡る気力がなくて捨鉢気分になっているように見えた。（『中日』『黒い雨』）

訳文：坐着不走的几乎全是受伤者。（《中日》《黒雨》）

b. 私は五年前に、肺病という事になって、寝込んだ事があつたけれども、あれは、わがまま病だったという事を私は知っている。（『中日』『斜陽』）

訳文：五年前我生过肺病，长期卧床，但我知道那只是一种富贵病。（《中日》《斜陽》）

c. 鄭美姫は気絶してベッドに倒れこんだ。（『均衡』『暴力租界』）

訳文：郑美姬失去了意识倒在了床上。

先ず、「座りこむ」の例であるが、怪我のため、長時間座って動けないという意味があり、中国語の表現は<坐：すわる>と<不走：行かない>からなっており、<不走：行かない>はその場にいてなかなか行かないという意味で、「～こむ」に含意される時間性を表せると言える。「寝こむ」に対応する中国語表現には<长期：長い間>がある。しかし、「倒れこむ」の例をみると、気絶して倒れたため、しばらく倒れた状態を維持すると想像できるが、中国語ではこのような意味を表現することができず、<倒：倒れる>で表すだけである。

上記の議論をまとめると、「しっかりと」タイプの「～こむ」を中国語で表現するのは難しい。「長い間」タイプは<长期：長い間>などとの共起で表現可能であるが、表現できない例もある。

6.1.3 多量性

「～こむ」の多量性を中国語では表現できる例とできない例がある。「買いこむ」、「きこむ」などは表現できる例である。

(237)a. 金製品を買い込む。(『講談社日中辞典』)

訳文：大量购进黄金制品。

b. 寒くて着込んでます。(作例)

訳文：很冷，所以穿得很厚。

「買いこむ」を表現するには、＜大量＞が用いられる。また、「着こむ」を表すには＜穿得很厚＞という表現が用いられる。以上の例では複合動詞自身が多量性を表す名詞句や副詞句が出ていないので、中国語に訳すと、副詞や補語の形で多量性を表し、学習者にはわかりやすい。しかし、以下の「繰りこむ」のように、V2が多量性を規定しながら、多量性を表す成分も文の中に出てくる。

一方、多量性を中国語で表現できない例もある。次は「背負いこむ」の例であるが、

(238)返済能力の2倍もの借金を背負い込ませて、ローン返済不能事故が多発し、……(『均衡』『3年後・5年後のビジネスチャンス』)

訳文：背负着偿还能力两倍以上贷款，结果无力偿还，此类事件频发。

「背負いこむ」は「たくさん背負う」という意味で、移動物の多量性を含意する。共起する名詞句「返済能力の2倍もの借金」は、借金の量が多いという意味がある。しかし、中国語にはこのような移動物の量を表わす意味成分が移動動詞に融合する例は観察できず、＜背負：背負う＞は「～こむ」の前項動詞に相当する。

6.1.4 目的性

三章で議論したように、目的性は三つの意味があると考えられる。一つ目は強い意志を持って行動するという意味であり、姫野(1999)では以下の用例があがっている。

(239)a. 心覚えに品名を書きこむ *手なぐさみに無意味な線を書きこむ

把品名写下来以免忘记 随手画一些无意义的线条

b. びしびし教え込む *中途半ばな気持ちで教え込む

严格教导 心不在焉地教

(姫野 1997 : 81(波線と訳文は筆者による))

姫野の議論によると、「～こむ」の方は人が強い意志を持ってことを行うという感じを伴

い、いたずら半分のいい加減な気持ち行うという意味では用いられない場合がでてくる。しかし、中国語では、「～こむ」の意志性を表現することはほぼできない。＜写/画＞と＜教导/教＞は「書きこむ」と「教えこむ」の前項動詞の意味を表し、複合動詞全体に対応する表現はないと言える。

二つ目は繰り返して練習して、理想的な状態に達成する意味である。目標に達成するために十分に練習する、或いは、動作を繰り返す必要があるので、「～こむ」は「繰り返し/十分に」のような副詞的意味をも含意する。

(240)a. とにかく、歌詞の代わりにドレミで暗唱できるまで歌いこんでください。(『均衡』『やさしい楽譜の読み方』)

訳文：总之，要用乐谱而不是歌词反复唱到记住为止。

b. それで朝、持久力強化のために走り込み、瞬発力強化のためにダッシュを取り入れました。(『均衡』『月刊剣道日本』)

訳文：因此，每天早上，为了强化持久力反复跑，为了强化爆发力加上了冲刺练习。

c. 生地を丹念に練り込むことでコシを出し、また熟成時間を設けて風味を高めているそうだ。(『均衡』『dancyu』)

訳文：据说，充分揉面，面才会有劲，再通过醒面来增加味道。

d. あえてお答えするなら、それぞれの代表曲をじっくり聴き込むことです。(『均衡』『Yahoo!知恵袋』)

訳文：如果硬要我回答的话，就是要反复听他们的代表曲目。

「走りこむ」と「歌いこむ」の例において、「暗唱できるまで」と「持久力強化のために」という目標は後項動詞「～こむ」に指定された内容であるが、この指定機能を有する中国語の表現はないと言える。また、目標達成のために、＜繰り返して練習する＞の意味があるが、中国語では＜反复：繰り返し＞で表す。一方、「練りこむ」と「聴きこむ」は「満足できるまで」、また「理解できるまで」という意味があるが、中国語ではこのような目標を表現できず、文脈全体の判断で理解するしかない。また、「練りこむ」と「聴きこむ」は「十分～をする」を含意するが、＜充分揉面/反复听＞で表現される。

三つ目は「座りこむ」のように、「抗議」などの目的のために、行動をするという意味である。「座りこむ」は中国語で＜静坐＞で表す。

以上の内容をまとめると、「～こむ」は目的性を含意するが、中国語では目的を指定するという機能を有する表現はないと言える。一方、「はしりこむ」などは理想の状態に達成するために、繰り返して練習する意味があるが、中国語では繰り返しの意味を＜反复/十分＞で表す。「すわりこむ」は、「抗議のため」のような目的性を含意するが、複合動詞＜静坐＞で表す。

6.1.5 密集感

密集感は着点領域に注目するが、下記の例に示されるように、主に二種類の表現形式がある。

(241)a. スケジュールを詰め込んで安心する。(『中日』『心の危機管理術』)

訳文：不把日程排得满满的，心里总感到不安。(《中日》《顺应自然的生存哲学》)

b. 克平は背をアルさんに押されて、むりやりに詰め込まれた格好だった。(『中日』『あした来る人』)

訳文：克平被乙醇推着脊梁，好不容易挤了上去。(《中日》《情系明天》)

c. 三沢は大型タクシーを拾って来ると、杏子だけを助手席に乗せ、他の四人を客席に詰め込み、最後に自分もそこに割り込んだ。(『中日』『あした来る人』)

訳文：三泽叫来一辆大型出租车，让杏子坐上助手席，又把其他四人塞进后座，最后自己也挤了进来。(《中日》《情系明天》)

「詰めこむ」を表現するには、様態補語<得满满的>と<擠+方向補語(上去/进来)>と二つの形式がある。動詞<擠/塞>は着点領域が移動物でぎっしり詰まるという意味があり、以下のような例がある。

(242)a. 三个人在一张床上挤着睡。(『白水社中国語辞典』)

訳文：3人は1つのベッドに詰めて寝る。

b. 车厢里挤得走不过去。(『白水社中国語辞典』)

訳文：車両の中にはこみあっていて通り抜けができない。

c. 洞里塞着不少泥。(『白水社中国語辞典』)

訳文：穴には多くの泥を詰め込んである。

上記の例を見ると、<擠>は着点領域の密集感を含意すると言える。例((242)a)の場合は、三人がベッドに移動し、ベッドは込み合うという意味を表している。例((242)b)は<车厢>という空間の状況だけを描写し、移動の意味がない。動詞<塞>も着点領域には移動物が密集するという意味があり、「ぎっしり詰めこむ」に相当する。また、上記二形式のほかに、以下の例のように、四字熟語などで表す例もある。

(243)a. 川のこちらの、駅側の方は、川岸に人家がたて込んでいて、それに妨げられて見ることができない。(『中日』『あした来る人』)

訳文：而河这边的车站一侧，沿岸人家鳞次栉比，挡住了视线。(《中日》《情系明天》)

b. 店は大分立て込んでいた。(『均衡』『浮橋』)

訳文：店里颇为拥挤。

6.2 価値づけ的評価について

「～こむ」の価値づけ的評価は、「悪い」という評価が現れる場合が多い。先ず、移動主体か他者に所属する領域への移動を表わす例を挙げる。

(244)a. 彼の家に転がりこむ。

訳文：去他家住。.

b. 泥棒が家に入りこむ。

訳文：家里进小偷了。

「転がりこむ」は他人の家に入り、世話になるという意味である。「住みこむ」と「上りこむ」も同様で、他人の家への内部移動を表す。一方、「入りこむ」の例では、移動主体か他者に所属する領域への移動だけではなく、泥棒の侵入で、被害性が生じるという意味もある。しかし、中国語の＜住＞と＜进＞は領域を指定する機能はない。

(245)a. *自分の家に転がり込む。

訳文：回自己家住。.

b. *私は家に入りこむ。

訳文：我进自己家了。

上記の例のように、自分に所属する領域に移動する場合、「転がりこむ」と「入りこむ」では表現にくい。しかし、中国語の方はこのような制限がなく、自然に成立する。

一方、「入りこむ」のほかに、被害性を含意する「～こむ」はある。

(246)a. 被害者を山に連れ込んで、殺害した。

訳文：将受害人带到山里杀害。

a'. ?子供を教室に連れ込んで、授業を受けさせた。

訳文：带孩子去教室上课。

b. 子供を悪の道に誘い込む。

訳文：引诱孩子走上邪路。

b'. ?佐藤さんをクラブ活動に誘い込む。

訳文：邀请佐藤参加俱乐部活动。

「連れこむ」に後続する文脈は常に加害を表し、「監禁する/殺害する」のような動詞が用いられる。逆に、「授業を受けさせる」のような被害性のない文がくると、不自然な表現になる。しかし、中国語の＜带＞はこのような意味がないため、文が成立するかどうかは、

被害性に関係ない。「誘いこむ」は「連れこむ」と同様に、二格名詞は「悪の道」や「無理心中」なら成立するが、「クラブ活動」になると、成立しにくくなる。しかし、被害性の場合は、＜引誘：誘惑する＞で表し、被害性のない場合は＜邀请＞で表す。このように、マイナスの意味を含意する複合動詞で、「～こむ」の加害性を表現しうる。＜引誘：誘惑する＞のほかに、以下のような例が挙げられる。

(247) 「～こむ」の加害性を表現する中国語の複合動詞

- ＜はめこむ：哄骗，使～中圈套＞、＜まるめこむ：欺骗，耍弄＞
- ＜ひきずりこむ：非法占有他人财物＞、＜だましこむ：欺骗＞
- ＜落としこむ：使～中圈套、使～犯罪＞、＜釣りこむ：骗入、引入＞
- ＜誑しこむ：欺骗＞、

一方、心理動詞の場合、「信じこむ」と「思いこむ」は根拠のないことを信じるという意味があるので、＜悪い＞評価になるが、中国語では＜误认为＞で表現することができる。

(248)a. ある目、なにかをきっかけ、として突然期待に沿えなくなると自覚すると、もうかわいがってもらえないと信じ込み、爆発してしまうのです。（『中日』『ひとりっ子の上手な育て方』）

訳文：这样的孩子假如某天，由于某事突然意识到自己的行动无法满足大人的期待时，就会误认为从今以后再也得不到母亲的疼爱，从而使长期受抑制的心理爆发出来。（《中日》《独生子女优育法》）

b. それよりも興味ふかい点は、マドンナの絵姿を掲げておくと、人がこの派の神さまは女性であると思いこむので、キリストの像にとりかえたなどという条である。（『中日』『マッテオ・リッチ伝』）

訳文：而更加引人注目的是这样一条记述：担心人们看到玛丽亚的画像时，会误认为这一派的神是女性，则换成基督像。（《中日》《利玛窦传》）

ほかに、＜盲目：盲目＞と＜相信＞との組み合わせで表現する例もある。

6.3 「～こむ」と結びつく単純動詞の副詞的意味について

三章で議論したように、「～こむ」の前項動詞の一部が「固定感」、「深部移動」、「密集感」を含意する。この中に、「固定感」を含意する例が多いが、「深部移動」と「密集感」は1例か2例しかない。例を観察すると、中国語の単純動詞も固定感を含意しうるが、「深部移動」と「密集感」の場合は、副詞的修飾成分が必要になる。以下はしっかりタイプの「固定感」の例である。

- (249)a. 植树：木を植える
 b. 植毛：毛を植える
 c. 植皮：皮膚を移植する。
 d. 植发：植毛する。

上記の例のように、＜植树＞の場合、木がよく成長するために、しっかり植えるのは普通であるが、＜植毛＞の場合、植えたらしっかり存在してほしいという目的性がある。さらに、＜植皮＞は、けが・やけどなどで欠損・変形した部分の皮膚に、健康な皮膚を移植するという意味で、＜植发＞は髪を植えて、根付かせるという意味なので、固定感が強く感じる。＜植：植える＞のほかに、＜安/装/上：設置する、取り付ける＞も固定感を含意する。

- (250)a. 把表装在墙上。＝壁に時計を取り付ける。
 b. 往窗户上装玻璃。＝窓にガラスをはめこむ。
 c. 上螺丝。＝ねじをつける。

＜安/装/上：設置する、取り付ける＞は装着を表すので、固定感を含意し、「つける/～つける/～こむ」で表現される。また、日本語の方は「長い間」を含意する前項動詞は少なく、「倒れる」しか観察できなかったが、中国語＜倒：倒れる＞もほぼ同じ意味を有する。

- (251)a. 病気で倒れる。
 訳文：病倒了。
 b. 戦場に倒れる。
 訳文：倒在战场上。

上記の例において、「病気で倒れる：病倒」は病気で床につくと意味意味で、倒れた状態が相当続くことが想像できる。「戦場に倒れる」の場合は、「倒れる」は死ぬという意味になり、次への状態変化がないと言える。この 2 例は中国語で表現すると、＜倒：倒れる＞で表される。

上記は固定感を含意する動詞の例であるが、中国語訳を観察すると、日本語とほぼ対応している。一方、「深部移動」と「密集感」の例であるが、中国語では副詞的修飾成分が必要になる。

- (252)a. 親切が心にしみる。 （＝(151)b） （『大辞泉』）
 訳文：（她的）善意深深地留在我心里。
 b. 衣装を詰めた鞆 （＝(152) b)

訳文：装满衣服的包。（『大辞泉』）

「しみる」は心に深く入るという意味がある。中国語では＜深深地：深く＞が必要になる。「詰める」は「密集感」を含意するが、中国語では、＜装：入れる＞と＜满：満ちる＞という組み合わせで表現する。しかし、6.1 節で議論したように、動詞＜挤/塞＞は着点領域が移動物でぎっしり詰まるという意味があり、以下のような例がある。

(253)a. 三个人在一张床上挤着睡。（『白水社中国語辞典』）

訳文：3 人は 1 つのベッドに詰めて寝る。

b. 洞里塞着不少泥。（『白水社中国語辞典』）

訳文：穴には多くの泥を詰め込んである。

上記の例に示されるように、＜挤/塞＞は着点領域の密集感を含意する。例(253)a) の場合は、3 人がベッドに移動し、ベッドは込み合うという意味である s。例(253)b) は着点領域には移動物が密集するという意味があり、「ぎっしり詰めこむ」に相当する。

一方、「～こむ」の前項動詞「かかえる」、「背負う」などがマイナスの評価を含意するが、これらの動詞を表現する中国語を観察すると、＜背：背負う＞だけが評価的意味を含意すると言える。

(254)a. 哥哥背弟弟。＝兄が弟を背負う。

b. 背包袱。＝重荷を背負う

上記の例のように、＜背：背負う＞は二つの意味があり、一つは背中に背負う、かけるという意味で、もう一つは、責任・借金をしよこむという意味である。

6.4 まとめ

上記三節の内容を以下の表のようにまとめられる。

表 23 「～こむ」の評価的意味の中国語表現

「～こむ」の評価的意味		中国語の表現		
		表現形式	用例	表現不可能
資格付的评价	深部移動	複合動詞<沉/深+V> <程度副詞+動詞/形容詞> <V得～>	考えこむ：沉思 冷えこむ：很冷 話しこむ：说得津津有味	「*～の浅部に沈みこむ/*整地の間、チューリップを鉢に植えこむ /*手慰みに線を書きこむ/*泥棒が家に入りこむ /*被害者を山林に連れ込んで殺害する」のように、「V+こむ」は深部移動と固定感と目的性と異質性・被害性を含意する文脈を指定するが、この文脈指定機能を有する「～こむ」にあたる中国語の表現はほぼないと言える。
	固定感	<しっかり>	-----	
		<長い間>	<時間副詞+V> <V+着+補足説明>	
	目的性	目的性の指定	-----	
		目的の達成	<充分/反复+V>	
		目的の付加	座り込む：静坐	
	多量性	<大量+V> <V得～>	買い込む：大量购买 着込む：穿得很厚	
	密集感	<V得～>或いは<V+満> <挤/塞> ほか（四字熟語など）	スケジュールを詰め込む：把日程排得满满的 他の四人を客席に詰め込む：把其他四人塞进后座 立て込む：拥挤不堪	
価値付け的评价：異質性		<欺騙/使～中圈套> <誤/盲目+V>	<まるめこむ/だましこむ/丸めこむ：欺騙，耍弄> 信じこむ：误以为	

上記の表に示されるように、「～こむ」の評価的意味は中国語では複合動詞、動補構造<V得～>、また時間・量・程度を表す副詞句との共起で表現される。また、中国語では、深部移動と固定感と目的性と異質性・被害性を含意する文脈の指定機能を有する表現が観察できなかった。例えば、「連れこむ」は被害性を含意し、「殺害する」など加害を表す文脈が後続するが、中国語では、このような文脈を指定する表現は見当たらない。一方、「～こむ」の前項動詞の一部が評価的意味を含意するが、これらのV1に対応する中国語の表現は

以下のようなものである。

表 24 評価的意味を含意する「～こむ」の V1 の中国語表現

評価的意味を含意する「～こむ」のV1				中国語の表現	
資格付け的評価	固定感	<しっかり>	「植える」及び装着を表す動詞	<植>及び<安/装/上>など取り付けを表す動詞	木を植える：植樹 ガラスを嵌める：装玻璃
		<長い間>	「倒れる」	<倒>	病倒
	深部移動(抽象的な移動の場合のみ)		しみる	<深深+V>	親切が心にしみる：(她的)善意深深留在了我心里
	密集感		詰める	<V+満> 動詞<挤/塞>も着点の密集感を含意する	衣装を詰める：装满衣服
価値付け的评价：異質性			<抱える/背負うタイプ> <誘う/嵌める>タイプ	<背>	背包袱：重荷を背負う

上記の表のように、日本語の方は単純動詞が固定感と異質性を表す単純動詞が多く観察できるが、深部移動と密集感を表す例が少ない。中国語での表現を見ると、固定感を含意する動詞が多くあるが、ほかの評価的を含意する動詞が少ない。

第七章 結論

7.1 「～こむ」における内部移動の意味概念について

7.1.1 内部移動から存在・固着までの意味連続体

『日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して、「～こむ」の用例を収集した結果、異なり語数 226 語、64361 例を収集できた。「～こむ」と結びつく前項動詞を観察すると、「～こむ」は「飛ぶ/打つ」移動の様態・手段²⁷を表す動詞のほかに、「入る」のような経路位置関係を包入する動詞と、「はめる/貼る」のような付帯変化を表す動詞とも結合できる。「はめる」タイプの動詞と結びつくと、「～こむ」は着点の内部空間を要求しなくなる。さらに、作成動詞は内部移動の意味がないが、「～こむ」とも結合できる。作成と付帯変化を表す「～こむ」の共通点といえば、着点領域への付着と、着点領域の内部空間を要求しないことである。このように、「～こむ」は＜内部移動→存在→固着＞という連続体をなし、以下のような例が挙げられる。

(255)a. 部屋に飛びこむ。＜内部移動＞

b. 鏡を壁にはめこむ。＜移動・存在・付着＞

c. 石に文字を刻みこむ。＜固着＞

「部屋に飛び込む」は、部屋の内部への移動を表し、「部屋」は三次元的な空間であるが、「はめこむ」は付帯変化を表し、「鏡」が移動後、「壁」の表面に存在し、付着する。さらに「刻みこむ」の場合、働きかけの結果として、作成物「文字」が石の表面に存在・固着する。この場合、出発点が存在しないので、移動とは言えない。しかし、付帯変化・作成を表す「～こむ」を中国語で表現すると、内部移動表現＜～進＞は使えなくなる。

(256)a. 部屋に飛びこむ。

訳文：跑进房间。

b. 鏡を壁にはめこむ。

訳文：把镜子安在/*安进墙上。

c. 石に文字を刻みこむ。

訳文：在石头上刻上/*刻进字。

上記の例のように、内部移動を表す方向補語＜～進＞は付帯変化と作成を表現できない。＜～進＞の代わりに、＜V 在/上＞表現が用いられる。さらに、単純動詞「入る」の用例を観察すれば、＜内部移動→存在→固着＞の連続体は成立することがわかる。

²⁷ 「打つ」は動作動詞であるが、「～こむ」と結合すると、移動の手段と理解できる。

b. <UNCONSCIOUS IS DOWN>

寝こむ、眠りこむ、倒れこむ

c. <SICKNESS AND DEATH ARE DOWN>

老いこむ、老けこむ、倒れこむ、咳きこむ

d. <LESS IS DOWN>

刈りこむ、落ちこむ、割りこむ、冷えこむ

7.1.3 中国語との対照研究

7.1.4.1 <～進>と「～こむ」

「～こむ」と<～進>の基本的意味は内部移動を表す。<～進>は移動の様態・手段・付随状況を表す動詞と結合することが多く、空間名詞<里(なか)>と共起することが多い。このため、<～進>は、前項動詞が移動の様態、手段、付随状況を表し、後項動詞「～こむ」が内部移動を表す「～こむ」に対応しやすい。しかし、「～こむ」は心理・生理の状態変化を表す動詞とも結びつくが、<～進>はこのような動詞と共起する例はあまり観察できない。一方、<～進>と結合できる移動動詞は多様化である。「飛びこむ」を表現するには、<跑進>、<跳進>、<冲进>、<扑進>などがある。また、移動の様態を表す動詞と結合する場合、「～こむ」は意味拡張して抽象的な移動を表現できるが、<～進>はこのような意味を表すことができず、ほかの表現が用いられる。

(260) a. 危険に飛びこむ

訳文：遇到危険

b. 映画界に飛びこむ

訳文：投身电影界

c. 電車に飛びこむ

訳文：卧轨自杀。

上記の例のように、移動先は「危険/映画界」の場合、中国語表現は<遇到/投身>になり、<遇進/投身進>は成立しない。

また、左側主要部の「～こむ」は多くあるが、「入りこむ」と「入れこむ」のような、前項動詞がすでに着点の内部へという経路関係を包入する複合動詞は移動後の状態に注目し、「深く/しっかり」を含意する。このような動詞を<～進>で表現できるが、<～進>は内部への移動の動作過程だけに注目するので、原文の意味の一部しか表せず、副詞成分が必要になり、或いは「～こむ」に対応できなくなる。

「～こむ」より<～進>の意味領域が狭いので、「～こむ」を表現するにはほかの中国語表現が必要になる。

7.1.4.2<～上>と「～こむ」

<～上>は「～こむ」と同じように移動から付着・達成まで表現できるが、<移動/接触/固着>の場合、<～上>は「～こむ」のV1を表現するという言い方は適切であろう。

(261)a. 汽車に乗りこむ<移動>

b. コートを着こむ<接触・付着>

c. 余白に名前を書きこむ<固着>

d. 覚えるまで歌いこむ<達成>

(262)a. 跳上車<移動>

b. 穿上大衣<接触・付着>

c. 写上名字<固着>

d. 挣上钱<達成>

上記の例のように、乗り物への移動の場合、「～こむ」を<～上>で表現できる。この場合、「～こむ」は乗り物の内部空間への移動を表すが、<～上>は内部空間より、その表面への移動を表すと言える。既に議論されているように、中国語では、三次元的な内部空間より、物体の表面性が際立つ傾向が強い。

装着を表す場合、「～こむ」は服が外部空間を作成し、体がその中にある、即ち、「人が衣服で作られた空間の中にいる」という捉え方である。この場合を[MOVE INTO]で表示できる。一方、「着る/着こむ」は、「服を身に着ける」とも解釈され、その着点は体の表面であるので、「体の表面に移動する」とも理解でき、[MOVE ONTO]と解釈できる。これに対して、<穿上>は「服が身体の表面へ移動して付着する」という意味で、[MOVE ONTO]としか解釈できない。

<書きこむ>はある領域の内部における結果物の存在・固着を表すと捉えられるが、<写上>は結果物が表面への付着を表す。また、「歌いこむ」は目標が「覚えるまで」であり、それに達成できるように、歌うという行為を繰り返すという意味を表すが、<挣上>はお金を稼げない状態から稼ぐ状態になるという意味である。この点において、「～こむ」と<～上>は<目標達成・レベル向上>という共通的な意味領域を有すると言える。

「～こむ」と同じ意味拡張のプロセスを有するのは、方向補語<～進>ではなく、<～上>である。中国語を母語とする日本語学習者にとって、「～こむ」の習得が難しいのはこの現象に起因すると考えられるであろう。

7.1.4.3<～下>と「～こむ」

<～下>と「～こむ」は下方向への移動、下方向への姿勢変化、作成、獲得を表す。

(263)a. 海に飛びこむ<下方向への移動>

訳文：跳下海

b. ソファに座りこむ<姿勢変化>

訳文：在沙发上坐下

c. 余白に名前を書きこむ<作成>

訳文：在空白处写下名字

d. 印刷機を買いこむ<獲得>

訳文：买下打印机

「海」は中国語では「移動主体の立地点より低い位置にあるもの」として捉えられているので、下方向への移動として表現するので、<跳下海>は成立する。下方向への姿勢変化は日本語では内部移動になるが、中国語では下方向への移動になる。さらに、<～下>は作成と獲得をも表せるので、「書きこむ」などを表現できる。

7.1.4.4 ほかの中国語表現と「～こむ」

<～进/上/下>のほかに、<～到>と<V 在/有/着>なども「～こむ」を表現できる。<～到>は到達を表し、着点の空間的性質を指定しない。着点が内部空間を有する場合、<～进>と言い換えられる。また、<～到>は後ろに場所名詞句が必要で、量的表現と共起しない。

「～こむ」の V1 が姿勢変化と作成を表す場合、<V 在 L>で表現できる。姿勢変化と作成を表す場合、「～こむ」と<V 在 L>表現は付着を表し、着点の内部空間を要求しないという点で、共通している。また、連体修飾語の場合、<V+在+L>形式でしか表現できない例が多く観察できる。さらに、作成、固着を表す「～こむ」は受身文になると、中国語では<V+有/着>という形式で表現される。

7.2 「～こむ」の副詞的意味について

「～こむ」は内部移動から意味拡張して、「しっかり」、「奥深く」のような副詞的意味を表現できる。このような副詞的意味について、先行研究では最も詳しく議論したのは姫野(1999)である。姫野(1999)によると、「～こむ」には四つのニュアンスがあり、即ち、「深入り感」、「固定感」、「抵抗感」、「目的性」がある。実際のデータを観察することにより、また母語話者と確認した結果、「～こむ」は「多量性」、「密集感」をも含意する。本稿では先行研究を踏まえて、「評価」という枠組みを用いて、「～こむ」の副詞的意味の体系を整理した。また、前項動詞との意味上の繋がりについて考察を行った。

7.2.1 評価性による分類

評価性により、「～こむ」の副詞的意味を資格付けの評価と価値付けの評価に分けられる。

価値づけ的評価は異質性しかないが、資格付け的評価は五つの項目があり、深部移動と固定感、多量性、密集感と目的性である。詳しい内容は以下のようにまとめられる。

7.2.1.1 資格付け的評価

まず、「深部移動」についてであるが、「深部移動」は着点領域の内部に深く移動する、或いは、移動後着点の内部に深い位置に存在するということを意味する。この評価性を表すには、形容詞「深い」が必要であり、「深く+V1+こむ」の形式で表現される。他に、「(着点領域の)奥に」、「深々と V1 こむ」という表現も用いられる。例としては、物理的移動の場合は、「(敵陣に)入りこむ/埋めこむ/吸いこむ/しみこむ」などがあり、抽象的な移動の場合は、「思いこむ/考えこむ/信じこむ/(論文を)読みこむ/眠りこむ」などがある。

次に、「固定感」についてであるが、「固定感」は「しっかり固着するタイプ」と「長い間とどまるタイプ」に分けられる。前者の例としては、「うえこむ/はめこむ/うめこむ/決めこむ」などがあり、後者の例としては「しゃがみこむ/すわりこむ/たおれこむ」などが上げられる。

多量性とは移動物の数量に注目するが、従来の議論ではあまり触れていない。コーパスから、「買いこむ/着こむ/(たくさんの仕事を)抱えこむ/(荷物を)背負いこむ/(お金を)使いこむ/なだれこむ」などが観察できた。

移動領域の状況に注目する場合、密集感が生じる。代表的な例は「立てこむ/建てこむ/詰めこむ」であるが、着点領域があるもので充満されるという意味を含意する。この密集感は現代語の「こむ」の意味に繋がっている。

最後には目的性についてであるが、「～こむ」に含意される「目的性」が三つの意味がある。一つ目は強い意志を持って行動する意味で、二つ目は繰り返して練習して、理想的な状態に達成するという意味である。目標に達成するために十分に練習する、或いは、動作を繰り返す必要があるので、「～こむ」は「繰り返し/十分に」のような副詞的意味をも含意する。三つ目は「座りこむ」のように、「抗議」などの目的のために、行動をとるという意味である。

注意すべきなのは、内部移動から「固着感」と「多量性」まで拡張できるのは日本語に限らず、英語にも見られる。“believe in”において、前置詞“in”は固着を表すが、“wash down”において、前置詞“down”は「十分に」という意味で、動作の多量性を表す。ただ、本稿は主に中国語と対照研究を行うので、英語についての考察は今後の課題とする。

7.2.1.2 価値づけ的評価

「～こむ」に含意される価値づけ的評価は<悪い>という評価である。<悪い>という評価は異質性に関係している。AがBに所属する領域へ移動する場合、異質性が生じる。「住みこむ/転がりこむ」は他人の家に住むという意味を表し、後項動詞「～こむ」は自分の領域ではなく、他人の領域へ移動するという性質を指定する。さらに、異質性から被害性や

不快感が生じる例があり、「(野良)猫が庭に入りこむ/泥棒が教室に入りこむ」などが観察できる。この場合、マイナスの評価が生じて、＜悪い＞という価値づけの評価にあたる。

また、一部の「～こむ」において、後項動詞「ーこむ」は被害性を指定する。代表的な例は「連れこむ」と「巻きこむ」である。「子供を教室に連れて授業を受けさせる」の場合、「子供」には「授業を受けさせる」は被害性がないため、「連れこむ」との言い換えはできないと判断される。データを観察すると、「連れこむ」の後にくる動詞は「殺害/監禁」など犯罪を表すものである。「巻きこむ」と共起する名詞は基本的に「紛争/戦争」などで、マイナスのイメージが強い。また、「～こむ」は加害を表す「騙す」、「丸める」などと結合できる。さらに、一部の動詞は「こむ」と結合すると、マイナスの意味しか受け継がれない。例えば、「誘う」は「一緒に行動するようにすすめる。(ボランティア活動に～)」と「好ましくない状況などに引き入れる。誘惑する。(悪の道に～)」と二つの意味項があるが、「こむ」と結合すると、「好ましくない状況などに引き入れる」という意味が受け継がれる。これらの動詞の意味上の繋がりは以下になる。

(264)a. A がBに所属する領域に移動する。「～こむ」は異質性を表す

住みこむ、転がりこむ、上りこむ

b. A がBに所属する領域に移動し、被害性や不快感が生じる。「～こむ」は異質性と被害性を表す

(野良)猫が庭に入りこむ 泥棒が教室に入りこむ

c. 「～こむ」は被害性を指定する

被害者を山林に連れ込み、殺害する。

*子供を教室に連れ込み、授業を受けさせる

悪の道に誘いこむ

*ボランティア活動に誘いこむ。

「～こむ」は異質性と被害性を含意しているから、敬意表現「～てください」などと共起しない。

7.2.2 評価の対象について

上記の評価を表す六つの項目は評価の対象が異なる。深部移動と固定感では移動物が着点領域へ移動後の存在状況、即ち、移動の結果状態への評価を表すが、目的性は動作主の意志性、多量性は移動物の数量を評価する。また、密集感では着点領域の状況に注目する。

一方、価値づけ的评价は移動物或いは移動主体と着点領域との所属関係、さらに、移動後の結果についての認識を表し、事柄全体に対する認識・評価を表すと言える。

7.2.3 前項動詞との繋がり

調べた結果、前項動詞が「固定感」を含意する例が多く観察できたが、「深部移動」と「密集感」は1例か2例しかなく、「目的性」と「多量性」はほぼ観察できなかった。固定感を含意するV1は「植える/はめる」などがある。

一方、悪いという価値づけ的評価を含意するV1はいくつか観察できる。

(265)a. 「抱える」：自分の負担になるものをもつ。

b. 「背負う」：負担になることや重い責任のあることを引き受ける。

c. 「誘う」：好ましくない状況などに引き入れる。誘惑する。

d. 「嵌める」：計略にかける。いっぱいくわせる。

e. 「だます」：うそを言って、本当でないことを本当であると思い込ませる。

f. 「丸める」：他人を巧みに操る。

上記の例における「抱える/背負う」は望ましくないものが自分の所有領域に移動して不快感が生じる例である。「誘う/嵌める/だます/丸める」はいずれも加害の意味があり、被害性が生じる。

「資格づけ的評価」の方は、前項動詞が「固定感」を含意する例が観察できるため、固定感の前項動詞から受け継がれる可能性が高く、「一こむ」との複合により、「しっかり」の意味が焦点になると考えられる。一方、「深部移動」と「密集感」は1例か2例しかなく、「目的性」と「多量性」はほぼ観察できなかったのも、「一こむ」との複合で生じたものであると推測できる。「価値づけ的評価」の方は、被害性を含意する前項動詞の例が見受けられるので、前項動詞の意味が「一こむ」のマイナスの意味に繋がっていると考えている。

7.2.4 中国語での表現形式

中国語で表現できる資格づけ的評価は深部移動、「長い間とどまる」タイプの固定感、達成を表す目的性、多量性、密集感である。具体的な言語形式は複合動詞<沉/深+V>、<程度副詞+動詞/形容詞>、<V得～>、<時間副詞+V>、<V+着+補足説明>、<充分/反复+V>、<大量+V>、<V+満>がある。異質性の場合、<欺骗/使～中圈套>、<誤/盲目+V>などで表現される。

しかし、「*～の浅部に沈み込む/*整地の間、チューリップを鉢に植え込む/*手慰みに線を書き込む/*泥棒が家に入り込む/*被害者を山林に連れ込んで殺害する」のように、「V+込む」は深部移動と固定感と目的性と異質性・被害性を含意する文脈を指定するが、この文脈指定機能を有する「一こむ」にあたる中国語表現はほぼないと言える。

7.3 結び

本稿は「一こむ」における内部移動の意味概念と副詞句的意味について考察を行った。

この考察により、「～こむ」の意味体系がさらに明確になった。一方、中国語との対照研究を行うことにより、内部移動を表す＜～進＞ではなく、上下方向への移動を表す＜～上/下＞は複合動詞「～こむ」と同じような意味拡張をプロセス有することがわかった。また、「～こむ」は方向補語のほかに、＜V 在/有/着＞という形式を用いて表現される。さらに日本語の「～こむ」における副詞的意味に対応する中国語は、ほんの一部であると言える。この研究は中国語を母語とする日本語学習者に役立つと思われる。

参考文献

【日本語文献】

- 荒川清秀(1980)「中国語の状態動詞」『愛知大学文学論叢』(65): 1-26, 愛知大学文学会.
- 荒川清秀(2006)「“坐进来”と“送回去”—“坐”“站”“躺”+方向補語に見られる三つのタイプ」『中国語の補語』, 1-20, 白帝社.
- アンドレ・タイラー・ビビアン・エバンズ. 木村哲也訳(2005)『英語前置詞の意味論』研究社.
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学: 言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店.
- 市川孝(1976)「副用語」, 『岩波講座日本語 6 文法 I』, 219-258, 岩波書店.
- 王学群(2007)『中国語の“V 着”に関する研究』白帝社.
- 王志英(2012)「中国語の“进”と“～进”の意味と構文形式について」『沖縄大学紀要』(14), 33-43, 沖縄大学人文学部.
- 岡田幸彦(2001)「空間移動を表す動詞の分析—構文特性・アスペクト特性・タクシス特性に基づいて」『日本語科学』(10), 7-33, 国書刊行会.
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎(1996)『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版.
- 影山太郎・由本陽子(1997)『語形成と概念構造』研究社.
- 影山太郎(1999)『形態論と意味』くろしお出版.
- 金光成(2010)「複合動詞の意味拡張とその認知的動機づけ: 「V+こむ」を事例に」『言語科学論集』(16), 25-42, 京都大学総合人間学部基礎科学科情報学講座.
- 工藤浩(1982)「叙法副詞の意味と機能—その記述方法を求めて—」国立国語研究所『研究報告集』(3), 45-92, 秀英出版.
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐる」渡辺実編『副用語の研究』, 176-198, 明治書院.
- 黄春玉(2002)「日本語の結果の副詞文の意味及び構文的特徴—アスペクト的側面から—」『ことばの科学』(15), 105-113, 名古屋大学言語文化研究会.
- 申亜敏(2007)「中国語の結果複合動詞の項構造と語彙概念構造」影山太郎編『レキシコンフォーラムⅢ』, 195-229, ひつじ書房.
- 瀬戸賢一(1995)『空間のレトリック』海鳴社.
- 高橋弥守彦(2000)「“上”+場所語」の日本語訳について」『日中対照研究論集』(2), 72-90, 白帝社.
- 高橋弥守彦(2008)「動詞+“上”と空間詞との関係について」『大東文化大学紀要: 人文科学』(46), 77-94, 大東文化大学.
- 高橋弥守彦(2009)「“下+空間詞”について」『語学教育研究論叢』(26), 1-30, 大東文化大学語学教育研究所.
- 田中茂範・松本曜(1997)『空間と移動の表現』(日英語比較選書 6), 研究社.
- 張志凌(2011)「前項動詞が内部移動を含意する複合動詞「～こむ」の多義性について」

- 『コーパスに基づく言語学教育研究報告』(6), 289-302, 東京外国語大学大学院地域文化研究科グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」.
- 張志凌(2012)「後項動詞「-こむ」の意味について—「入る」と「入りこむ」の考察を中心に」『言語・地域文化研究』(18), 77-89, 東京外国語大学大学院.
- 陳曦(2007)「日本語複合動詞の習得状況と指導への問題提起—中国西安外国語大学における「～あう」、「～こむ」の調査を中心に」『国際開発研究フォーラム』(35), 93-102, 名古屋大学大学院国際開発研究科.
- 堤正典(2005)「ロシア語・日本語の結果期間を表す副詞表現とアスペクト」武内道子編『副詞的表現をめぐって：対照研究』, 47-61, ひつじ書房.
- 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版.
- 寺澤知美(2008)「現代中国語の方位詞“上”と“里”について—空間を表す名詞を中心に」『多元文化』(8), 257-268, 名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻.
- 中根綾子(2005)「動趨式が表す本質的意味—動結式との対照から」『中国語学』(252), 229-246, 日本中国語学会.
- 中根綾子(2008)「移動事態を表す Vx 句と V 到句の意味と形式」『中国語学』(255), 157-176, 日本中国語学会.
- 西原鈴子(1987)「話者の価値判断」, 国立国語研究所『研究報告集』(8), 125-158, 秀英出版.
- 西原鈴子(1991)「第二部 副詞の機能」『副詞の意味と用法』(日本語教育指導参考書 19), 51-80, 国立国語研究所.
- 仁田義雄(1983)「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』(10), 18-29, 明治書院.
- 畠郁(1991)「第一部 副詞論の系譜」『副詞の意味と用法』(日本語教育指導参考書 19), 1-46, 国立国語研究所.
- 樋口文彦(1989)「評価的な文」言語学研究会編『ことばの科学』(3), 181-192, むぎ書房.
- 樋口文彦(2001)「形容詞の評価的な意味」言語学研究会編『ことばの科学』(10), 43-67, むぎ書房.
- 日野資成(2002)「複合動詞「一出す」の分類—統語論的・意味論的方法を使って」『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』(25), 135-147, 角川書店.
- 姫野昌子(1978)「複合動詞「～こむ」及び内部移動を表わす複合動詞類」『日本語学校論集』(5), 47-70, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
- 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.
- 方美麗(2002)「行く先の結びつき—日中対照分析」『外国語教育論文集』(24), 59-69, 筑波大学外国語センター.
- 方美麗(2004)『「移動動詞」と空間表現—統語論的な視点から見た日本語と中国語』白帝社.
- 細川英雄(1993)「形容詞の主観性について：対象内容による形容詞の分類とその位置づけ」, 『早稲田日本語研究』(1), 65-78, 早稲田大学国語学会.
- 松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して』ひつじ

書房.

松本曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』

(114), 37-83, 日本言語学会.

松本曜(2007)「語におけるメタファーの拡張と制約」『認知言語学論考』(6), 49-93, ひつじ書房.

松本曜(2008)「空間移動の言語表現とその類型」『言語(特集 ことばと空間一言語に表れる身体性)』37(7), 36-43, 大修館書店.

松本曜(2009)「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」『語彙の意味と文法』, 175-194, くろしお出版.

丸尾誠(2001)「中国語の移動動詞に関する一考察—着点との関連において」『中国言語文化論叢』(4), 1-22, 東京外国語大学中国言語文化研究会.

丸尾誠(2005)『現代中国語の空間移動表現に関する研究』白帝社.

丸尾誠(2008)「現代中国語に見られる空間認識」『言語』(37(7)), 64-69, 大修館書店.

宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃(2002)『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版.

森田良行(1990)『日本語学と日本語教育』凡人社.

森田良行(2006)『話者の視点が作る日本語』ひつじ書房.

森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院.

森山卓郎・仁田義雄・工藤浩(2000)『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店.

八亀裕美(2003)「形容詞の評価的な意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』(15), 13-40, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

山田孝雄(1936)『日本文法学概論』宝文館.

山梨正明(1995)『認知文法論』ひつじ書房.

米山三明(2009)『意味論から見る英語の構造—移動と状態変化の表現を巡って』開拓社.

刘月華・潘文娛・故韓(1981) 相原茂監訳『現代中国語文法総覧』, 623-638, くろしお出版.

盧濤(2000)『中国語における「空間動詞」の文法化研究—日本語と英語との関連で』白帝社.

渡辺実(1990)「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』(23), 1-16, 上智大学.

渡辺実(2002)『国語意味論』塙書房.

【中国語文献】

北京语言学院语言教学研究所(1992)《现代汉语补语研究资料》北京语言学院出版社.

蔡永强(2010)《汉语方位词及其概念隐喻系统》中国社会科学出版社.

崔希亮(1997)〈汉语空间方位场景与论元的凸显〉《汉语语言学文萃》语法卷, 73-90, 北京语言大学出版社.

方经民(1999)〈现代空间方位参照的认知特点和语义理解〉『現代中国語研究論集』, 237-256, 中国書店.

- 刘国辉(2010)《当代语言学理论与应用研究》中国社会科学出版社.
- 刘月华(1998)《趋向补语通释》, 137-205, 北京语言文化大学出版社.
- 吕叔湘(1980)《现代汉语八百词》商务印书馆.
- 马庆株(1997) <“V”来/去与现代汉语动词的主观范畴>《第五届国际汉语教学讨论会论文选》, 191-199, 北京大学出版社.
- 沈家煊(1995) <“有界”与“无界”>《中国语文》(5), 367-379.
- 汤廷池(1985)《汉语词法句法续集》台湾书局.
- 于康(2006) <“V下”的语义扩展机制与结果义>《日本现代汉语语法研究论文选》, 250-268, 北京语言大学出版社.
- 朱德熙(1982)《语法讲义》商务印书馆.
- 朱德熙(1990)《语法丛稿》, 上海教育出版社.

【英語文献】

- Jane Grimshaw(1990) *Argument structure*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Leonard Talmy(2000) *Toward cognitive semantics volume 1: Concept structuring systems*. Cambridge, Mass: MIT Press
- Lindstromberg Seth(1998), *English prepositions explained*, Amsterdam ; Philadelphia : J. Benjamins.
- David M. Perlmutter and Postal Paul(1984) “The 1-Advancement Exclusiveness Law”, *Studies in Relational Grammar 2*, 81-125, University of Chicago Press.
- Ray Jackendoff (1983) *Semantics and Cognition*. Cambridge, Mass: MIT Press .

辞書類

- 『新明解国語辞典』(第7版)(2012)山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之編, 三省堂.
- 『大辞泉』(増補・新装版)(1998)小学館『大辞泉』編集部編, 小学館.
- 『e プログレッシブ英和中辞典』<<http://dic.yahoo.co.jp/>>.
- 『講談社日中辞典』(2006)相原茂編, 講談社.
- 『日本国語大辞典』(第2版)(ウェブ版)<<http://www.jkn21.com/individualsearch/displaymain>>.
- 『白水社中国語辞典』(2002)伊地智善継編, 白水社.
- 『Weblio 英和・和英辞典』<<http://ejje.weblio.jp/>>.

使用コーパス

- 『中日対訳コーパス (第一版)』(2003)電子版北京日本学研究中心
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(2011)国立国語研究所
- 《CCL 语料库检索系统 (网络版)》北京大学中国语言学研究中心

付録

付録一覧

No.	日本語
①	「～こむ」を表す＜～進＞
②	「～こむ」を表す＜～上＞
③	「～こむ」を表す＜～下＞
④	「～こむ」を表す＜～到＞
⑤	「～こむ」を表す＜～在/着/有＞
⑥	「～こむ」の副詞的意味と中国語表現
⑦	書名の中日対訳リスト

付録① 「～こむ」を表す＜～進＞

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
1	上がりこむ	坊ちゃん	序でだから一杯食って行こうと思って <u>上がり込んだ</u> 。	①心想，顺便吃一碗吧，就 <u>走进去</u> 。③可眼下见到了招牌，就不能过门不入，顺便吃上一顿吧。我 <u>走进</u> 店去，…
2	追いこむ	野火	そういうゲリラの攻撃によって、我々はさらに山奥の杣道へ <u>追い込まれた</u> 。	由于游击队的攻击，我们被 <u>赶进</u> 山里深处的小路上去了。
3	押しこむ	あした来る人	通路に立つと、彼は合外套のボタンを外し、両手でズボンをすり上げながら、はみ出しているワイシャツをズボンの中に <u>押し込み</u> 、それから大きい伸びを一つした。	他站在通道上，解开大衣钮扣，一手提起裤子，另一只手把露出的衬衣底襟 <u>掖进</u> 裤内。而后伸了个长长的懒腰。
4	押しこむ	あした来る人	曾根はベッドから降りると、リュックサックをベッドの下へ <u>押し込んだ</u> 。	曾根从床上下来，把背囊 <u>塞进</u> 床底。
5	押しこむ	痴人の愛	私は海水服の端を掴まんで大きな物を袋の中へ詰めるように、無理にその肩を <u>押し込んで</u> やるのが常でした。	(我)抓起游泳衣的一端，就象把一件大东西塞进袋子似地勉强把她的肩膀 <u>按进</u> 游泳衣里。
6	押しこむ	黒い雨	すると他の一人の乗客が、靴のなかの握飯を爪先のところに <u>押しこむ</u> ため、靴を片方ずつ振ってから下車して行った。	接着，又有另一个乘客，为了把靴子里的饭团子 <u>塞进</u> 脚前掌的深处去，他把两只靴子都晃了晃之后，也下车走了。
7	押しこむ	青春の蹉跎	刑事は何も答えなかった。そして廊下の片方の狭い扉をひらいて、彼を <u>押しこんだ</u> 。	便衣警察什么话也没说，打开走廊上的一扇狭窄的门，把他 <u>推了进去</u> 。
8	押しこむ	死者の奢り	彼らは積出口から、箱をおくり出すように死体をおくり出し、灯のあたらない暗い空間から、逞しい腕が出てそれを支え、トラックの積台の一つに <u>押しこんだ</u> 。	他们从电梯口把尸体像送箱子似的送出来，灯光照不到的黑暗空间里有结实的手腕伸出来接住了尸体， <u>推进</u> 卡车的车厢里。
9	押しこむ	砂の女	すでに半分ほど <u>押しこんで</u> あった手拭を、いったん引出してから、あらためて口にかませ、首の後ろで、固く結んだ。つづけて、用意してあったゲートルで、女の両手を、力いっぱい後ろ手にしばりあげた。	他把仅 <u>塞进</u> 一半的手巾掏了出来又重新塞进去，然后，在女人的后脑勺处打了个结。接着，他用事先准备好的绑腿布，把女人的两手用力反绑到背后：
10	落ちこむ	砂の女	女に背をむけ、 <u>落ち込む</u> ようにあがりがまちに腰をおろして、頭をか	女人背转身去，象 <u>陷进去</u> 似地坐在地板框上，抱着脑袋，不出声地呻吟

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
			かえこんだ。声に出さずに、うめきはじめる。	起来。
11	躍りこむ	坊ちゃん	おれは返事もしないで、いきなり、一番喧嘩の烈しそうな所へ <u>躍り込んだ</u> 。	①我没有吱声，一跃 <u>跑进了</u> 闹得最利害的地方。②俺没说话，便立刻朝着打得最凶的地方，一下子挤了进去。③我来不及回答，立即冲进打得最激烈的地方。
12	躍りこむ	金閣寺	私は漱清のほとりから、金閣の西の板戸、あけはなしたままになっている観音披きの戸口へ <u>躍り込んだ</u> 。	我从漱清亭畔金阁西侧敞开的两扇板门间 <u>跑进去</u> 。
13	織りこむ	こころ	けれどもその思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が <u>織り込まれている</u> らしかった。	①但是，在他这位思想家归纳起来的主义里，仿佛 <u>穿插进了</u> 强烈的事实。
14	折れこむ	こころ	大通りから二丁も深く <u>折れ込んだ</u> 小路は存外静かであった。	①从大街深深 <u>折进</u> 二百米远的巷子里格外清静。②从大街上拐进来，到这里大约有两百米深，所以这小巷分外幽静。
15	掻きこむ	こころ	それから飯を呑み込むように <u>掻き込んで</u> 、私がまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。	①(他)狼吞虎咽地把饭 <u>扒进</u> 嘴里，在我还没有离开饭桌的时候，就回自己的房间去了。
16	駆けこむ	痴人の愛	と云って、花屋敷の角まで来ると、きっとナオミは「左様なら」と云い捨てながら、千束町の横丁の方へバタバタ <u>駆け込んで</u> しまうのでした。	来到花圃的一角时，纳奥米肯定会说声“再见”，便吧嗒吧嗒地 <u>跑进</u> 千束町的小胡同里。
17	切りこむ	坊ちゃん	そんなら君の指を切ってみろと注文したから、何だ指位この通りだと右の手の親指の甲をはすに <u>切り込んだ</u> 。	①“那好办，一个指头算得了什么。”说着刀子早从右手的大拇指指甲斜着 <u>切进去</u> 了。②“这有什么，手指头也不过如此！”说着，俺就向右手的拇指甲斜着削了进去。
18	食いこむ	こころ	初冬の寒さと侘びしさとが、私の身体に <u>食い込む</u> ような感じがしました。	我直觉得这初冬の寒冷和静寂，仿佛要 <u>渗进</u> 我的身体里了。
19	食いこむ	野火	雑囊も濡れて重さを増し、固くしまった釣紐が、襦袢に粘着して、 <u>食い込む</u> ような重さを肩に加えて来た。	挎包一湿更沉了许多，背带变硬了，粘在衬衣上，像 <u>勒进</u> 了肩头一样沉重。
20	食いこむ	砂の女	爪を、ねばつく手のひらに <u>食い込ませ</u> ながら、なおも叫びつづけた。	手指深深 <u>抠进</u> 发粘的手掌，又叫了起来。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
21	差し込む	五体不満足	なるほど、そこに手を <u>差し込んで</u> おけば、マットとボックスが分離されてしまう心配がなくなる。	圆洞的大小正好让我 <u>伸进</u> 胳膊。这样一来，我和“漂浮岛”就不会分离开了。
22	差し込む	青春の蹉跎	それから二枚の唐紙のあいだにかすかな音がして、一万円紙幣が外から一枚ずつ差しこまれた。	接着纸门缝里唏哩嗦咯一阵响，原来一张张一万元的钞票从门缝里 <u>塞了进来</u> 。
23	差し込む	死者の奢り	僕はうなずいてから高い天井の隅の細長い天窓を見上げた。汚れたガラスの向うから、白い光が水っぽく <u>差しこんで</u> いた。	我点了点头，又抬起头看着高高的天棚角落里细长的天窗。白色的光亮如一团水汽从肮脏的玻璃天窗那儿 <u>照进来</u>
24	射し込む	布団	別れた日のように東の窓の雨戸を一枚明けると、光線は流るるように <u>射し込んだ</u> 。	跟芳子走的那天一样，时雄一打开东边一扇雨窗，光线就象流水一样 <u>泻进屋里</u> 。
25	射し込む	破戒	御茶漬後（昼食後）は殊更温暖く、日の光が裏庭の葱畠から南瓜を乾し並べた縁側へ <u>射し込んで</u> 、いかにも長閑な思をさせる	午饭刚罢，天气特别暖和，阳光经过后院的葱地 <u>射进了</u> 晾晒南瓜的廊檐下，使人感到安逸、舒畅。
26	射し込む	破戒	秋の日は銀杏の葉を通して、部屋の内へ <u>射しこんで</u> いた。	秋天的太阳透过银杏树的叶子 <u>射进</u> 屋里的。
27	射し込む	破戒	青白い黄昏時の光は薄明く障子に映って、本堂の正面の方から <u>射しこんだ</u> ので、柱と柱との影は長く畳の上へ引いた。	夕阳的光辉，微映在格子门上，从大殿的正面 <u>直射进来</u> 的阳光，把一根根圆柱的长影投在铺席上。
28	射し込む	破戒	窓の障子は冬の日をうけて、その光が部屋の内へ <u>射しこんで</u> 来たのに、丑松は枕頭を照らされても、まだそれでも起きることが出来なかった。	冬天的阳光透过纸窗， <u>射进</u> 屋子里，照在他的枕头上，他还是起不来。
29	射し込む	雪国	女の耳の凹凸もはっきり形をつくるほど月は明るかった。深く <u>射しこんで</u> 畳が冷たく青むようであった。	①盈盈皓月，深深地 <u>射了进来</u> ，明亮得连驹子耳朵的凹凸线条都清晰地浮现出来。铺席显得冷冰冰的，现出一片青色。②月亮十分明亮，连女人耳朵坑坑洼洼的地方都清晰地照出。亮光深深地 <u>射进来</u> ，铺席冰冷地显出蓝色。③月光朗澈，几乎连她耳朵的轮廓都凹凸分明。一直照进屋内，把席子照得冷森森、青悠悠的。
30	挿し込む	坊ちゃん	石や棒ちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ <u>挿し込んで</u> 、……	①就把石子、木棒，一股脑儿 <u>塞了进去</u> ②当时，俺不晓得这是什么玩意儿，将石块和树棍狠命地塞了进去
31	挿し込む	痴人の愛	表のドアへ誰かが鍵を <u>挿し込み</u> ました。	有人把钥匙 <u>插进</u> 大门里了。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
32	射し込む	越前竹人形	櫛の歯のように生えている竹林にさし込んでいる陽は、苔のはえた地面に、雨のようにそそぐかにみえた。	阳光 <u>射进</u> 像梳齿般耸立的竹林，仿佛雨丝洒向铺着青苔的地面。
33	射し込む	痴人の愛	まだ日の長い暑い時分のことだったので、すっかり障子を明け放してある西側の窓から、夕日がぎらぎらとさし込んでいる	这还是盛夏时节，昼长夜短，西边的窗户开得大大的，夕阳 <u>照射了进来</u> 。
34		越前竹人形	首をかしげていると、喜助は足もとの竹をひろってそのえぐれた穴に <u>さしこみ</u> 、握った手に力を入れて、ぐいっと下方へ押してみせた。	蛟岛正在动脑筋，只见喜助拣起脚下的竹子， <u>插进</u> 那剜成方型的孔穴，握竹子的手一用劲，“咕”地向下一压。
35	射し込む	越前竹人形	玉枝は障子を通して <u>さしこむ</u> 月あかりの中で、じっと喜助のイガ栗頭をみつめていた。	月色越过拉窗 <u>射进来</u> ，玉枝目不旁视地看着喜助那理短发的脑袋沐浴在月光中。
36	射し込む	ノルウェイの森	窓から <u>さしこんで</u> くる月の光は様々な事物の影を長ぐのばし、まるで薄めた墨でも塗ったようにほんのりと淡く壁を染めていた。	窗口 <u>泻进</u> 的明月银辉，把东西的影子拖得长长的，宛如涂了一层淡墨似的隐隐约约印在墙壁上。
37	射し込む	飼育	彼らは始め叫びたてた。そして黙りこみ、威嚇する銃身が明りとりから <u>さしこまれた</u> 。	他们吼叫起来，接着又沉寂下去，把威胁的枪筒从小窗外 <u>伸进来</u> 。
38	射し込む	砂の女	壁の隙間から <u>さしこむ</u> 日差しの位置も、ほぼ正午を告げている。	太阳光从墙壁的缝隙里 <u>射进来</u> ，它那位置也报告说眼下已接近正午。
39	射し込む	砂の女	焦点を合わせるのに、苦労しながら、戸口から <u>さしこむ</u> 淡い光をたよりに、死んだ蠅の脚のような活字に視線をおよがせる。	他费了好些功夫，才把焦距对准，借着门口 <u>射进来的</u> 微弱光线，把视线漂移在死苍蝇脚似的铅字上。
40	射し込む	砂の女	足の結び目は、じゅうぶんに固く、指を <u>さしこむ</u> 余地もない。	脚上打的结十分牢固，连手指都 <u>插不进去</u> 。
41	射し込む	砂の女	思いついて、顔の手拭をむしりとると、開けはなたれた戸口から、ゼラチンを透したような月明りが、淡く涼しげに <u>さしこんで</u> いる。	他忽然想起来，掀开脸上的手巾，从打开的门口 <u>射进</u> 淡淡的、冰凉的月光，象遮着一层透明胶似的。
42	差し込む	砂の女	指を <u>さしこんで</u> 、搔き出した。	他把手指头 <u>伸进去</u> ，硬抠着吐了出来。
43	忍びこむ	金閣寺	<u>忍び込んだ</u> 子供たちがキャッチボールをしていた。	几个偷偷溜 <u>进</u> 校园的孩子正在附近玩投棒球。
44	忍びこむ	野火	「違えねえ。でも今夜は是非医務室へ <u>忍び込んで</u> 、暫く命を延ばすつもりだ」	“没错儿，不过今天晚上我一定 <u>溜进</u> 医务室去，还得多活几天呢。”
45	仕舞いこむ	あした来る	杏子は言う、八千代が卓の上に置いた生地見本を再びケースの中へ	说着，杏子把桌上的面料样品 <u>收进</u> 手提箱。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
		人	<u>しまい込んだ</u> 。	
46	沁みこむ	ころろ	私の哀愁はいつもこの虫の烈しい音と共に、心の底に <u>沁み込む</u> ように感ぜられた。	仿佛我的哀愁总是同这昆虫的噪音一起 <u>渗进</u> 我的心底。
47	しみこむ	黒い雨	「白骨の御文章」は、筆記して心 <u>にしみこんで</u> 来るような美しい和文である。	《白骨之文》是一篇很优美的日本文章，我一边抄写，一边感到文章 <u>渗进了</u> 我的心灵里。
48	しみこむ	死者の奢り	「アルコール液が <u>しみこむ</u> と作業がやりにくくなるからな」	“酒精溶液如果 <u>渗进去</u> 的话活儿就难干了。”
49	吸いこむ	高野聖	唄うたいの太夫、退屈をしたとみえて、顔の前の行燈を <u>吸い込む</u> ような大欠伸をしたから。	那位唱山歌的太夫百无聊赖，大概发闷了，打了个大哈欠，几乎把脸前的座灯都 <u>吸进去了</u> 。
50	吸いこむ	砂の女	夜のあいだに <u>吸い込んだ</u> 湿気を、蒸気にして、再び大気に吐きだす砂……	沙子夜间 <u>吸进</u> 的湿气，蒸发后吐回大气中……
51	吸いこむ	砂の女	羽ばたく暇もなく、ずるずると砂に <u>吸い込まれて</u> いく哀れな鴉の姿が、目に見えるようだった。	在陷阱里甚至连扑楞翅膀的时间都没有，就被沙子 <u>啾溜啾溜地吸了进去</u> 。
52	吸いこむ	雪国	天の河にいっぱい星が一つ一つ見えるばかりでなく、ところどころ光雲の銀砂子も一粒一粒見えるほど澄み渡り、しかも天の河の底なしの深さが視線を <u>吸い込んで</u> 行つた。	②布满银河的繁星那么清澈，不仅一颗一颗的星可以看得见，而这里那里在发光的云彩上的银色砂子，也一粒一粒地浮现出来，而且银河的无底深渊把人的视线都吸引进去了。③是那样澄明清澈，不仅里面的点点繁星一一可辨，就连天光去影间的斑斑银屑，也粒粒分明。但是，银河却深不见底，把人的视线也吸了进去。
53	吸いこむ	五体不満足	世界が回りながら遠ざかっていく、もしくは自分が何かに <u>吸い込まれて</u> いくような感覚で、意識が遠のいていった。	我感觉世界在缓缓旋转，并渐渐离我远去，或者说是一种被什么东西 <u>吸进去</u> 的感觉，总之意识混沌了。
54	吸いこむ	ノルウェイの森	だんだん腐って溶けて最後には緑色のとろとした液体だけになってね、 <u>地底に吸いこまれて</u> いくのそしてあとには服だけが残るの。	渐渐腐烂、融化，最后变成一洼粘糊糊的绿色液体，再被 <u>吸进</u> 地底下去
55	吸いこむ	砂の女	深々と、ゆっくり、胸いっぱい <u>に吸いこむ</u> と、落葉の香りが、血管の隅々にまでしみわたった。	深深地，悠悠地，胸膛里满满地 <u>吸进</u> 了一口落叶之香。渗透到血管的各个角落。

N0.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
56	吸いこむ	砂の女	その中に顔をおしこみ、焼ける額をおしつけて、胸いっぱい、砂のにおいを <u>吸いこんだ</u> 。	他把脸 <u>摺进</u> 洞里，把发烧的额贴上去，胸中吸满了沙子气味。
57	吸いこむ	砂の女	影から流れ出した飛砂の膜が、次々と、また別の影の下に <u>吸いこまれ</u> <u>て</u> いく。	从影子里流出的飞沙之膜，一个接一个地又被 <u>吸进</u> 别的影子去了。
58	滑りこむ	砂の女	しかし、すがすがしい群青の光が、穴のへりから <u>すべり込んで</u> きたとたん、こんどは逆に、あの濡れた海綿のような眠りとの格闘だ。	清清爽爽的道道青光，沿着洞穴的边缘 <u>透进来</u> ，这次，倒过来，自己得同那濡湿海绵般的困倦作斗争。
59	滑りこむ	砂の女	ずるずる、くぼみの中に <u>すべり込む</u> と、そのまま斜面にもたれかかった。	“哧溜”一下 <u>滑进</u> 坑中，他就那样背靠着斜坡。也许因为挡住了风，他忽地感到呼吸顺畅多了。
60	注ぎこむ	日本列島改造論	農業はカネさえ <u>つぎ込めば</u> すぐに生産があがるという性質の作業ではないからである。	这是因为农业不是那种只要资本一 <u>投进去</u> ，生产就会立刻可以上去的产业。
61	突っこむ	痴人の愛	そして熊谷はと云うと、その八の字の間へ首を <u>突っ込んで</u> 、悠々と敷島を吹かしています。	而熊谷却把头 <u>伸进</u> 八字当中，悠然吹着敷島小调。
62	突っこむ	痴人の愛	ナオミが私の鼻の孔へかんじよりを <u>突っ込んで</u> いました。	原来纳奥米把纸捻 <u>伸进</u> 了我的鼻孔中。
63	突っこむ	五体不満足	そして、その穴に手を <u>突っ込め</u> という。	圆洞的大小正好让我 <u>伸进</u> 胳膊
64	突っこむ	五体不満足	しばらくすると、「じゃあ、兄ちゃん。悪いが、俺は行かなくちゃいけない」と言っ、内ポケットに手を <u>突っ込んだ</u> 。	他拍拍我的肩膀，说：“好了，我该走了。”说着，一只手 <u>伸进</u> 外衣里面的口袋里。
65	突っこむ	五体不満足	そう言うと、名刺をボクのポケットに <u>突っ込み</u> 、彼はそのまま行ってしまった。	说完，他把他名片 <u>装进</u> 我的口袋，转身走了。
66	突っこむ	飼育	弟は草のむれた匂いのする毛布に頭を <u>突っこんで</u> 眠っていた。	弟弟把头 <u>钻进</u> 散发着野草气息的毯子里，正在酣睡。
67	突っこむ	飼育	僕は大人たちの腰の間に頭を <u>突っこんで</u> 、書記と部落長の話し合いを聞いた。	我把头从大人的腰间 <u>伸进去</u> ，听书记和村长的对话。
68	突っこむ	飼育	黒人兵は縁に黄色の脂が厚くたまった眼で僕らを見あげ、それから毛の生えた指をじかに熱い鍋へ <u>突っこんで</u> 熱心に食べた。	黑人抬起头，用他那眼角堆满黄色脂肪的眼睛看了看我们之后，便把长满汗毛的手 <u>伸进</u> 滚烫的锅里，狼吞虎咽地吃起来。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
69	突っこむ	飼育	水の中に頭を <u>突っこんで</u> 、喚声と一緒に水を吐きちらしながら立ちあがるまで潜り続けるのだった	然后把头 <u>插进</u> 水里，使水面冒出一片气泡，好久才钻出来。
70	突っこむ	雁の寺	頭陀袋の中へ手をつっ込んだ。まもなく、五十銭銀貨を一枚とりだした。	他手 <u>伸进</u> 行囊，很快拿出一块五十钱的银币。
71	詰めこむ	あした来る人	三沢は大型タクシーを拾って来ると、杏子だけを助手席に乘せ、他の四人を客席に <u>詰め込み</u> 、最後に自分もそこに割り込んだ。	三泽叫来一辆大型出租车，让杏子坐上助手席，又把其他四人塞进后座，最后自己也 <u>挤了进来</u> 。
72	詰めこむ	金閣寺	味覚とは別に、私の胃が叫んでいて、私はひとえに慌しく菓子を口の中へ <u>詰め込めば</u> よかった。	也不管味不味了，胃口在喊叫，我只管顾嘴不顾鼻子赶快给它 <u>塞进</u> 点心就行了。
73	詰めこむ	斜陽	直治の弱味にすかさず附け込み、謂わば蛇のごとく慧く、私はバッグにお化粧品やパンなど <u>詰め込んで</u> 、きわめて自然に、あのひとと逢いに上京する事が出来た。	这就是灵巧象蛇。我说罢把化妆品和面包什么的 <u>塞进</u> 手提包，终于能很自然地上东京去同他见面了。
74	連れこむ	ころろ	彼は私を無理やりにある酒場へ <u>連れ込んだ</u> 。	①他不由分说硬把我 <u>拉进</u> 一家酒馆，②他硬把我拉进一家酒店。
75	連れこむ	ころろ	奥さんは私に対する御礼に何か御馳走すると云って、木原店という寄席のある狭い横丁へ私を <u>連れ込みました</u> 。	①大概夫人为了对我表示谢意，便提议下饭馆， <u>领着我走进</u> 一家叫木原店说书场的窄巷子里。
76	連れこむ	日本戦後名詩百家集	そこに <u>連れ込まれた</u> ものは	凡被 <u>带进</u> 那里的人，
77	溶けこむ	飼育	黒人兵の軀は、作業服めいた草色の上衣とズボンを残して、濃さをました夕闇の中へ溶けこもうとしていた。	黒人除了那身草绿色的衣着外，似乎都要 <u>溶进</u> 愈加浓重的黑暗里去。
78	溶けこむ	砂の女	残った部分は、液化して、女の体に <u>融け込んで</u> しまいそうだった。	剩下的部分液化了，象是全 <u>溶化进</u> 了女人的身体。
79	溶けこむ	飼育	黒人兵が家畜のようにおとなしい、という考えは空気のように子供らも大人たちも含めて、村のあらゆる者たちの肺へしのびこみ <u>融けこんで</u> きているのだった。	黒人给人的像家畜一般驯服的感觉，宛如空气，随着呼吸 <u>溶进</u> 了大人、孩子、以及我们村里所有人的肺腑。
80	怒鳴りこむ	坊ちゃん	古川が真赤になって怒鳴り込んで来た。	①古川涨红脸骂着 <u>闯进来</u> ，②古川就气得满脸通红，嚷了进来。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
81	飛びこむ	あした来る人	声の方が先に <u>飛び込んで</u> 来た感じだった。曾根は立ち上がった。	但在感觉上，似乎声音比人先 <u>飞进来</u> 。曾根站起身。
82	飛びこむ	あした来る人	しかし、それがいつ自分の体 <u>に飛び込んで</u> 来たか、彼女は知らなかった。	。但她并不知这爱情是何时 <u>闯进</u> 自己心头的。
83	飛びこむ	坊ちゃん	威勢よく一番に <u>飛び込んだ</u> 。	②俺抖擞精神，第一个跳进小划子里。
84	飛びこむ	坊ちゃん	古池へ蛙が <u>飛び込んだり</u> する	②让青蛙跳进沉沉的池水里去……③如，还有什么“青蛙跳进古池塘”等等
85	飛びこむ	坊ちゃん	赤シャツはいの一号に上等へ <u>飛び込んだ</u> 。	②“红衬衫”头一个跳进头等车厢。
86	飛びこむ	坊ちゃん	先生、下等の車室の入口へ立って、何だか躊躇の体であったが、おれの顔を見るや否や思い切って、 <u>飛び込んで</u> しまった。	②这位老兄，站在普通车厢的门口，好象有点躊躇的样子，当他一看见俺，便好象下了决心似的跳进了车厢。③他站在二等车厢门口犹豫了一下，但一看到了我，立即就钻进车厢去了。
87	飛びこむ	坊ちゃん	おれは返事もしないで、いきなり、一番喧嘩の烈しそうな所へ <u>躍り込んだ</u> 。	①我没有吱声，一跃 <u>跑进了</u> 闹得最利害的地方。②俺没说话，便立刻朝着打得最凶的地方，一下子挤了进去。③我来不及回答，立即冲进打得最激烈的地方。
88	飛びこむ	坊ちゃん	自分共が今時分 <u>飛び込んだ</u> って、乱暴者だと云って途中で遮られる。	①眼下要是 <u>闯进去</u> ，人家会把咱俩当暴徒拦住。②如果咱们现在闯进去，就会有人说我们是来闹事的，中途会把我们拦住。③这个时候闯进去，人家会把我们当作暴徒在中途把我们拦住。
89	飛びこむ	こころ	次の日私は先生の後につづいて海へ <u>飛び込んだ</u> 。そうして先生と一所の方角に泳いで行った。	下一天，我跟在先生后面 <u>跳进了</u> 大海，同先生一起向远方游去。
90	飛びこむ	こころ	無理に凝としていれば、Kの部屋へ <u>飛び込み</u> たくなるのです。	①勉强待着的话，我会冲进K的房间去的。
91	飛びこむ	斜陽	たちまち四五人の村の人たちが、垣根をこわして、 <u>飛び込んで</u> いらした。	很快就有四、五个村民推倒篱笆 <u>跳进来</u> 。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
92	飛びこむ	斜陽	私が水に <u>飛び込み</u> 、藻に棲む小魚が私の脚にあたり、湖の底に、私の脚の影がくっきりと写っていて、そうしてうごいている、そのさまが前後と何の聯関も無く、ふっと胸に浮んで、消えた。	我 <u>跳进</u> 湖里，水藻中的小鱼碰到我的腿，湖底清晰地映出我两条腿的影子，它们不停地划动着——这些情景前后毫无关联地在我脑海里时而浮现，时而消失。
93	飛びこむ	雪国	島村は黙って後も見ずに温泉へ <u>飛び込んだ</u> 。	①島村默默地头也不回就 <u>跳进</u> 了温泉。②島村一声不响，也不回头看一下，朝温泉里跳进去。③島村一声不响，头也不回，径自跳进温泉。
94	飛びこむ	五体不満足	Tシャツを脱ぎ、ススムがジャボンと水に <u>飛び込む</u> 。	阿进脱下T恤，一头 <u>扎进</u> 游泳池。
95	流しこむ	斜陽	そうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スープを小さなお唇のあいだに <u>滑り込ませた</u> 。	，就这样侧着脸又将一匙子汤轻巧地 <u>倒进</u> 小小的双唇之间。
96	流しこむ	飼育	僕は乳が黒人兵の薔薇色に輝く広大な口腔へ <u>流しこまれるの</u> を見た。	奶汁 <u>流进</u> 黑人薔薇色的阔大口腔。
97	流しこむ	砂の女	ゆっくりと、喉の奥に <u>流しこみ</u> ながら、石を食う獣のことを想像したりする……	从喉咙深处慢慢地 <u>流进来</u> ，他想像着持石头的野兽……
98	流しこむ	砂の女	偶然、吸い上げた水を蒸発させずに、ちょうど桶の中に <u>流しこむ</u> ような関係にあったのだろう。	偶然吸上来的水没有蒸发掉，正好 <u>流进</u> 桶里。
99	流れこむ	あした来る人	窓を開けると、冷え冷えとした秋の夜気が室内へ <u>流れ込んで</u> 来た。	打开窗，秋天那凉冰冰的夜气 <u>涌进</u> 室内。
100	流れこむ	雪国	冷気が部屋へいちどきに <u>流れ込んだ</u> 。	①一股冷空气 <u>飈地卷进</u> 室内。③ 寒气顿时灌进屋内。
101	流れこむ	越前竹人形	湯気をたてた雪どけ水は、水音もたかく川へ <u>流れこんで</u> いた。	那冒着水汽融成的雪水，哗哗作响地 <u>流进</u> 了河川。
102	流れこむ	黒い雨	車内は空で、運転手らしい中年の男が丸帽を阿弥陀にして、笥の水が <u>流れこむ</u> 三石入りの水甕をのぞきこんでいた。	车里没有人，司机模样的中年男子，把圆帽子扣在后脑勺上，正在看着管道里的水 <u>流进</u> 能盛三担水的水缸里。
103	流れこむ	青春の蹉跎	吹雪は頬を打ち、眉をぬらし、襟首につめたく <u>流れこみ</u> 、呼吸は切迫していた。	雪花打在面颊上，眉毛也润湿了，雪水 <u>流进</u> 了脖子，呼吸感到十分急促。
104	流れこむ	砂の女	汗が鼻の先からしたたり、眼に <u>流れこむ</u> 。	汗水顺着鼻梁 <u>流进</u> 了眼睛里。
105	流れこむ	雪国	雪の冷気が <u>流れこんだ</u> 。	①一股冷空气 <u>卷袭进来</u> 。③顿时卷进一股冰雪的寒气

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
106	投げこむ	ノルウェイの森	「鱈、けっこう良かったですよ。」と僕は言ってみたが誰も返事をしなかった。まるで深い堅穴に小石を <u>投げ込んだ</u> みたいだった。	“鲈鱼真够味道。”我开口道。但谁也没搭腔，如同小石子 <u>掉进了</u> 无底洞。
107	投げこむ	雪国	そしてその夜の十時頃だったろうか。女が廊下から大声に島村の名を呼んで、ぱたりと <u>投げ込まれた</u> ように彼の部屋へ入って来た。	①当天夜里十点光景，女子从走廊上大声呼喊着岛村的名字，吧哒一声 <u>栽进</u> 他的房间里。②大概是那天晚上十点钟左右，她从走廊上大声呼唤岛村的名安，啪嗒一声象要倒下来似的钻进他的房间。③那天晚上大概十点钟光景，姑娘在走廊上大声喊岛村的名字，咕呼一声闯进他房里，
108	投げこむ	黒い雨	それを拾って背負袋に納め、庭に出していたものを手当たり次第に泉水に <u>投げこんで</u> 、防空壕にも入れて出入口へ煉瓦塀の欠片を積み重ねた。	随即把它捞起来，装进背包里，又随手把拿到院子里的东西 <u>扔进</u> 泉水里。有的放进防空壕，并在进出口堆上砖瓦片。
109	投げこむ	黒い雨	近づいて見ると、六尺四方ぐらいな穴ぼこに、鉄道の古枕木を入れて燃しながら、運んで来た死体を <u>投げこんで</u> 焼いている。	我走过去一看，原来在一个六尺见方的土坑里，点燃着铁路上的旧枕木，把运来的死尸 <u>扔进去</u> 火化。
110	投げこむ	ノルウェイの森	緑は水たまりの中に煙草を投げこんだ。	绿子把烟 <u>扔进</u> 水洼。
111	投げこむ	青春の蹉跎	その罠に、やみくもに自分を <u>投げこんで</u> みたい思いと同時に、この誘惑から無事にのがれたい気持もあった。	他想毫无顾忌地 <u>跳进去</u> ，又想平安无事地从她的诱惑中解脱出来。
112	投げこむ	飼育	「おい、降りて来い」と父が叫ぶのを聞くと、僕は靴を寝台の下へ <u>投げこみ</u> 階段を駆け上った。	“喂，你下来！”爹在喊。我随手把鞋 <u>抛进</u> 床底，跑下楼梯。
113	逃げこむ	金閣寺	……私たちはこの村に海軍の脱走兵が <u>逃げ込んだ</u> などということは夢にも知らなかった。	……我们做梦也没料到村里会 <u>溜进</u> 海军逃兵。
114	飲みこむ	金閣寺	それは澄明で、寂光に満たされ、下方から、内側から、この地上の世界をすっぽり <u>呑み込んで</u> おり、金閣はその中へ、黒く錆び果てた巨大な金無垢の碇のように沈んでいた。	它是澄明的，一片寂光。它从下方，从深处把地上的人世一古脑 <u>吞了进去</u> ，而金阁则象一个巨大的锈迹斑驳的纯金的锚，沉入它的怀中。
115	飲みこむ	金閣寺	左右に大きく扉をひらいた門は、あらゆる現象を <u>呑み込んで</u> しまっているように見えた。	左右两扇门板大开着，似乎把所有的景象都 <u>吞摄进去</u> 了。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
116	投げこむ	ころろ	私は突然立って帯を締め直して、袂の中へ先生の手紙を投げ込んだ。	②我陡然站起身来整一整衣带，把先生的信放进袖筒
117	飲みこむ	ころろ	それから飯を <u>呑み込む</u> ように掻き込んで、私がまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。	①(他)狼吞虎咽地把饭 <u>扒进</u> 嘴里，在我还没有离开饭桌的时候，就回自己的房间去了。
118	飲みこむ	黒い雨	庄吉さんが竿を立てて引寄せると、咽の奥まで鉤を <u>呑みこんだ</u> 大きな鰯が釣れていた。	庄吉扯起钓竿，钓上来一条很大的鲫鱼，钩被鱼 <u>吞进</u> 喉咙里面去了。
119	飲みこむ	黒い雨	ぐっと <u>呑みこむ</u> と、また布袋から掴みとって口に入れるのだ。	一口咽下去之后，又从布袋里抓一把 <u>放进</u> 嘴里。
120	乗りこむ	あした来る人	そう言って、それに <u>乗り込んだ</u> 。	说着 <u>钻进</u> 车门。
121	乗りこむ	あした来る人	既にホームには電車がついていたので、杏子はすぐそれに <u>乗り込んだ</u> 。	列车已进入月台，杏子马上 <u>跨进</u> 了车厢。
122	乗りこむ	あした来る人	運転手の肩をぼんとたたき、さっさとタクシーのドアを開けて、律子と美代子を <u>乗り込ませた</u> 。	只见他“砰”一声拍下司机肩膀，一把拉开车门，把律子和美代子 <u>塞了进去</u> 。
123	乗りこむ	あした来る人	梶はいったん自動車に <u>乗り込んだ</u> が、また窓を開けて首を出した。	梶 <u>钻进</u> 车后，从车窗探出头说：
124	乗りこむ	あした来る人	そう行先きを言って、克平は自分から先きに <u>乗り込んだ</u> 。	说完目的地，克平自己先 <u>钻了进去</u> 。
125	乗りこむ	坊ちゃん	車へ <u>乗り込んだ</u> おれの顔を昵と見て「もう御別れになるかも知れませんが、随分御機嫌よう」と小さな声で云った	①我 <u>走进</u> 车厢，她凝望着我的面孔低声说：“说不定这次分别再也见不到啦，你要保重啊！”
126	乗りこむ	坊ちゃん	二時間目に白墨を持って控所を出た時には何だか敵地へ <u>乗り込む</u> 様な気がした。	第二堂课， <u>拿着</u> 粉笔走出休息室时，不知怎么的，觉着象是 <u>踏进</u> 敌军阵地一样。
127	乗りこむ	坊ちゃん	待ち合せた連中はぞろぞろ吾れ勝に <u>乗り込む</u> 。	②等车的人都陆陆续续拥进车去。
128	乗りこむ	坊ちゃん	おれはこの時何となく気の毒でたまらなかったから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ <u>乗り込んだ</u> 。	②俺这时总觉得他可怜得很，所以跟在“老秧”君后边钻进了同一车厢。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
129	乗りこむ	金閣寺	ドアがあけられ、女が先に乗り込んだ。	车门打开时，女人先钻了进去。
130	乗りこむ	痴人の愛	ところがいよいよと云う日になって、横須賀行の二等室へ <u>乗り込んだ</u> 時から、私たちは一種の気後れに襲われたのです。	但是等到那一天，当我 <u>走进</u> 开往横须贺的二等车厢时，却产生了一种畏缩的情绪。
131	乗りこむ	あした来る人	八千代はそう言って、自動車に <u>乗りこんだ</u> 。	说着，八千代 <u>钻进</u> 车门。
132	乗りこむ	ノルウェイの森	二人の運転手は少し話をしてからそれぞれのバスに <u>乗りこんだ</u> 。	两个司机交谈没有几句，便 <u>钻进</u> 各自车里。
133	這いこむ	こころ	果して大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底に <u>這い込んで</u> 来た位です。	②‘果真靠得住吗？’——好象连这种疑虑也不知从哪儿爬进脑袋底里来了。
134	入りこむ	坊ちゃん	赤シャツのあとからマドンナとマドンナの御袋が上等へ <u>這入り込んだ</u> 。	②在“红衬衫”后边，紧接着玛利亚和玛利亚的老娘，她们走进了头等车厢。
135	入りこむ	雁の寺	蓋のすきまに金槌がテコになって <u>入り込み</u> 、それを押し込むと慈念の力はギイギイと蓋を押しひらいた。	撬开一条缝后， <u>插进</u> 锤子作为杠杆，他使劲地往上撬，棺材盖嘎吱嘎吱地响，被撬开了。
136	入りこむ	こころ	奥さんと御嬢さんと私の関係がこうなっているところへ、もう一人男が <u>入り込ま</u> なければならない事になりました。	①正当夫人、小姐和我的关系到了这种地步的时候，另一个人注定地 <u>走了进来</u> 。②在太太、小姐和我的关系已经进到这个程度时，有一个男人非参加进来不可。
137	入りこむ	日本列島改造論	ところが、いまは幹線通過道路をはみだした車が生活道路にまで <u>入り込んで</u> 、わがもの顔に走っている。	但目前，公路干线容纳不下的车辆 <u>开进</u> 生活公路，在那里横冲直闯。
138	入りこむ	雁の寺	里子は子供のようにいったが、慈海は馬鹿なことをいえ、といった顔をして部屋に <u>入りこんだ</u> 。	里子象小孩似地说。慈海说别说傻话了，徜徉地 <u>走进</u> 屋里。
139	入りこむ	雁の寺	里子は叫んだ。月の光が高い格子窓から <u>入りこんで</u> 里子の乱れた裾を縞目にてらした。	里子叫喊，月光从高高的格子窗 <u>照射进来</u> ，照见里子那凌乱的衣服下摆皱纹。
140	入りこむ	雁の寺	うすあかりの中で、一番手前に平吉は <u>入りこんだ</u> 。	在微弱光亮中，平吉 <u>钻进</u> 了跟前第一个棉被里。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
141	入りこむ	黒い雨	翼の一部が焼焦げて腐爛の臭気を出していたが、体を斜かいに半分くらい泥土へ <u>滅入りこませ</u> 、七八寸くらいスリップした跡をつけている。	翅膀的一部分烧焦了，发出了腐烂的臭气，身体的一半斜着 <u>陷进了</u> 土里，还滑出一道七、八寸长的痕迹。
142	入りこむ	ノルウェイの森	どこかから中庭に <u>入りこん</u> できた気弱そうな顔つきのやせた茶色い犬が、花壇の花を片端からくくんと嗅きまわっていた。	一匹有气无力的褐毛瘦狗不知从哪里 <u>跑进</u> 院子，团团围着花坛粗声大气逐个嗅着花瓣。
143	入りこむ	砂の女	砂はどんどん <u>入りこん</u> で来てしまいますよ……	沙子会不停地 <u>钻进来</u> ……
144	入りこむ	砂の女	視界がひらけたとたんに、彼は部落の中に <u>入りこん</u> でしまっていた…	就在视野开阔的一刹那，他其实已经 <u>走进</u> 村落里来了……
145	入りこむ	心の危機管理術	ちょうどトンネルの中に <u>入りこみ</u> 出口の明かりしか見えないような状態で、専門的には精神的視野狭窄と呼ばれる。	这种状态恰如 <u>钻进</u> 隧洞，只看到出口处的那点光亮似的，若用术语，则称其为“精神性的视野狭窄”。
146	運びこむ	飼育	大人たちは、黒人兵の死体が腐敗するのを遅らせるために谷間の廃坑へそれを <u>運びこみ</u> 、山犬よけの柵を作っていること。	大人们为了延缓黑人尸体的腐烂，把黑人 <u>送进</u> 了峡谷中一个废弃的矿井。如今正在那里做防野狗的栅栏。
147	挟みこむ	砂の女	ポケットをふくらませては、邪魔になるので、ズボンのバンドには <u>さみ込む</u> ことにした。	口袋胀鼓鼓的，变得好累赘，他把口袋 <u>掖进</u> 腰里。
148	嵌まりこむ	青春の蹉跎	いろいろな感情が無秩序に動いて、必要な行動をはばみ、泥沼には <u>まり込む</u> ことが解っているのに、女はそれを避けようとししない。	心情这么乱，该做的事不去做，眼看就要 <u>掉进</u> 泥坑，可是，她却不想避开这个厄运。
149	引っこむ	黒い雨	家内はその手紙を読むと黙って矢須子に渡し、畳に目を落していたが立って納戸に <u>引込んで</u> しまった。	他老伴看了那封信后，没有说什么就将信交给了矢须子，视线落在铺席上，可接着又站起身来， <u>走进</u> 储藏室去了。
150	吹きこむ	金閣寺	煤煙が容赦なく車内に <u>吹き込み</u> 、そのむうとする煙のために、何度となく父は咳き込んだ。	煤烟无情地 <u>吹进</u> 车厢里，父亲呛得咳嗽不已。
151	吹きこむ	こころ	私はKの頭の何処か一カ所を突き破って、其所から柔らかい空気を <u>吹き込んで</u> やりたい気がしました。	①我真想在K的脑袋上打开一个洞，从这里 <u>吹进</u> 一些和缓的空气。②我恨不得在K头上的哪一处捅个洞，把柔和的空气从那里吹送 <u>进去</u> 。
152	吹きこむ	こころ	事実を蒸溜して拵らえた理論などをKの耳に <u>吹き込む</u> よりも、原の形そのままを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だったで	①所以对我来说，大概还是把事情的本来面目摆在他眼前，要比提炼事实编造理论 <u>吹进</u> 他的耳朵更为有利吧。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
			しょう。	
153	吹きこむ	斜陽	窓から梅の花びらが <u>吹き込んで</u> 来て、お茶碗の中にはいつて濡れた。	梅花瓣不时从窗口随风 <u>飘进来</u> ，落在碗里潮湿了。
154	吹きこむ	痴人の愛	その口の中へ彼女がはッと息を <u>吹き込む</u> 、私がそれをすうッと深く、眼を潰って、おいしそうに胸の底に嚙み下します。	这她哈哈地向我嘴里吹气，我则闭着眼睛，有滋有味地将这气息深深吸入胸膛。
155	吹きこむ	あした来る人	車窓から <u>吹きこんで</u> 来る風が寒かったので、杏子は窓を閉めた。	从车窗 <u>吹进</u> 的风砭人肌肤，杏子关上了车窗。
156	吹きこむ	金閣寺	彼は自分の唇が尺八の歌口に <u>吹きこむ</u> 息の、しばらくの間、中空に成就する美のあとに、自分の内翻足と暗い認識が、前にもましてありありと新鮮に残ることのほうを愛していたのだ。	他所喜欢的是，当把口唇紧贴箫孔 <u>吹进</u> 气息时，在暂短的一瞬，完成了美的创造后，自己的内翻足和灰暗的认识，比以前更加新鲜得历历在目。
157	吹きこむ	青春の蹉跎	鍵をあけてやると、冷たい夜風が <u>吹きこむ</u> 。	一开门， <u>吹进</u> 一阵寒冷的夜风。
158	吹きこむ	飼育	明りとりからは子供らの驚嘆の吐息が霧のように勢よく <u>吹きこんで</u> 来るのだった。	小窗外，孩子们惊异的叹息像雾一样 <u>涌进来</u> 。
159	吹きこむ	飼育	明りとりから荒あらしい霧と、大人たちの声が <u>吹きこんで</u> 来た。	浓雾裹着大人们的声音从小窗外 <u>涌进来</u> 。
160	踏みこむ	坊ちゃん	いっその事角屋へ <u>踏み込んで</u> 現場を取って抑えようと発議したが、	①我提议：“干脆 <u>闯进</u> 角屋，当场拿住他们。”②俺提议说：“这不如干脆闯进角屋，来个当场抓获。”③我建议：“干脆闯进角店去，当场把他抓住整一顿算了。”
161	踏みこむ	こころ	すると彼等は真直に波の中に足を <u>踏み込んだ</u> 。	①他们一直 <u>走进</u> 海里，穿过远处浅滩一带吵吵嚷嚷的人群，走到比较开阔的地方，就一同游开了。我望着他们脑袋渐渐变小，向远方游去。
162	踏みこむ	青春の蹉跎	谷の吹きだまりに <u>踏み込んだら</u> 、出られなくなるに違いない。	如果 <u>滑进</u> 峡谷，就再也出不来了。
163	放りこむ	こころ	その男は耻かしがって色々弁解しましたが、折角の胴着を行李の底へ放り込んで利用しないのです。	②那人羞答答地用种种话来辩解，只好把特意寄来的紧身袄放进箱底，不去穿用。
164	放りこむ	ノルウェイの森	「そして一時間後には海に <u>放り込んで</u> やるから、それまでその格好でたっぷり楽しんで言って船倉に置き去りにされるの」	“一小时后把你们 <u>扔进</u> 大海。在那之前让你们单独呆在船舱里好好受用，海盗说。”

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
165	放りこむ	黒い雨	やがて汽車が徳山に着くと、乗客の一人がその軍人の長靴に握飯を半分ずつ <u>放りこんで</u> 、何くわぬ顔で下車して行った。	。不多久，火车到达德山，有一乘客把饭团掰成两半，分别 <u>塞进</u> 这个军人的长筒靴里，若无其事地下车走了。
166	放りこむ	黒い雨	僕は欄干のところに引返し、荷物を川へ <u>放りこまない</u> でしっかり背負った。	我回到栏杆处，没有把东西 <u>扔进</u> 河里，而是好端端地把它背在身上。
167	放りこむ	黒い雨	兵隊たちは次から次へと戸板やトタン板で死体を運んで来て、顔を背けてほんと穴のなかに <u>放りこむ</u> 。	士兵们用门板或白铁皮把一具具的尸体不断地运来，然后背过脸去，将尸体猛地一下 <u>扔进</u> 坑里。
168	放りこむ	ノルウェイの森	そして『プラウド・メアリ』を吹きつづけながらほうきを納屋に <u>放りこみ</u> 、戸を開めた。	（玲子）随即便继续吹着《骄傲的玛莉》的口哨把扫帚 <u>放进</u> 仓房，关好门。
169	放りこむ	ノルウェイの森	受験者の殆んどは底なし沼に <u>放りこんで</u> やりたいようなゴミだが、まあ中には何人かまともなものもいたなと彼は言った。	他说应试者几乎全是 <u>扔进</u> 无底泥潭也不足惜的废物，不过其中也有几个正路货。
170	放りこむ	ノルウェイの森	僕はそれをすぐに屑かごに <u>放りこんだ</u> 。	我当即将其 <u>扔进</u> 废纸篓。
171	放りこむ	砂の女	そう言うと、女は、窓ぎわから砂を一つかみ、手許の食器のなかに <u>ほうりこんで</u> 、まぶすようにくるとまわし、実演して見せてくれるのだ。	说着，女人到窗边去抓了一把沙子， <u>扔进</u> 手边的食器里，“唰”地把沙子兜了一圈，实际操作给男人看。
172	放りこむ	坊ちゃん	鯉の一匹位義理にだって、かかってくれるだろうと、どぼんと錘と糸を <u>抛り込んで</u> いい加減に指の先であやつっていた。	按道理说，也得来一条松鱼给我钓钓。我卜咚一声把钓丝和铅锤 <u>抛进</u> 海里，用指尖牵住。②一条鯉鱼什么的，也应该给俺上个钩嘛。于是俺把钓线和铅锤噎的一声，扔进了大海，用手指头随随便便地掐着。
173	放りこむ	野火	といいわけしながら、彼はその粒を一つ一つつまんで、口へ <u>抛り込んだ</u> 。	他边道歉，边把苞米一粒一粒撮起来， <u>扔进</u> 嘴里。
174	舞いこむ	痴人の愛	その海豹の活躍ぶりが激しいので、それでなくても布団の半分はみ出している蚊帳の裾がぱっぱとめくれて、蚊が幾匹も <u>舞い込んで</u> 来る。	如今这只海豹闹得天翻地复，弄得蚊帐的四边都翻卷起来，几只蚊子 <u>飞了进来</u> 。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
175	巻きこむ	斜陽	私は気がかりで、直治はまあ、東京で何をしているのだろう、あの小説家の上原さんなんかと一緒に東京中を遊びまわって、東京の吐気の渦に <u>巻き込まれているのに</u> ちがいない、と思えば思うほど、苦しくつらくなり、…	因此我非常担心。直治在东京干些什么呢，准是同那位小说家上原先生等人一起在游逛，被东京那股疯狂的浪潮给 <u>卷进去了</u> 。我越想越感到痛苦和难受…
176	巻きこむ	黒い雨	乳母車に荷物と子供を乗せた婦人。いきなり人波に <u>巻きこまれ</u> 、車を押しつぶされて顛倒し、後に続く人たち二三十人が将棋倒しに倒れて行く。	一个妇女把东西和小孩放在婴孩车上，一下被 <u>卷进</u> 了人群里，车被挤压坏，人倒在上面，后面涌上来二、三十人，一个接一个下去。
177	巻きこむ	斜陽	ヤケクソに <u>巻きこまれて死ぬのは</u> 、いや。いっそ、ひとりで死にたいわい。	被 <u>卷进</u> 这种自暴自弃中去而死，这我不干。那倒不如独自一个人死的好。
178	紛れこむ	あした来る人	それだけ言うと、梶は今度こそ本当に改札口の大混みの中へ <u>まぎれ込んで</u> 行った。	言毕，梶这回真的 <u>混进</u> 人流不见了。
179	紛れこむ	青春の蹉跎	所詮、他人の眼から自分をかくしてしまうことが不可能であるならば、無数の他人の中に自分から <u>まぎれ込んで</u> しまうより、方法はない。	但在无数的他人的眼目中隐藏自己毕竟是不可能的，他除了把自己 <u>混到</u> 人群中去以外，没有别的办法。
180	迷いこむ	金閣寺	雨がひろがり失って、この町の一隅に <u>迷い込んで</u> 、立ちすくんでいと云った風である。	雨也不由自主地失去了广度， <u>孤困在这</u> 街头的一角，并慌得不敢下大了。
181	迷いこむ	青春の蹉跎	昨日の夕方のはげしい吹雪に方角を見失い、谷筋に <u>迷い込んだ</u> ものと思われた。	看来是昨天傍晚在暴风雪中迷失了方向， <u>掉进</u> 了峡谷里来的。
182	迷いこむ	青春の蹉跎	問題の中心を示さないで、脇道のジャングルの中に二人で <u>迷い込んで</u> 行こうとしているような具合だった。	她不把问题说清楚，就象 <u>钻进</u> 原始森林似地令人迷惘。
183	減りこむ	砂の女	雪のようだ、と思ったときにはすでに、脛の半分くらいまで、 <u>めり込んで</u> しまっている。	待他觉得象踩在雪地上一样的时候，脚髁的一半已经 <u>陷进去</u> 了。
184	潜りこむ	あした来る人	昨夜夕食後梶大助と雑談をしたが、それも一時間ほどで、間もなく二階へ上がって、床へ <u>もぐり込んだ</u> ので、眠りにはいった時は十時ごろであ	昨晚饭后同梶大助闲谈了一阵子，差不多有一个小时。尔后不久便爬上二楼， <u>钻进</u> 了被窝。那么入睡时该是十点左右。算起来睡了十一个小时。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
			る。十一時間近く眠った勘定になる。	
185	潜りこむ	砂の女	きめられた巣に落着けないで、口だろうと、耳だろうと、尻の穴だろうと、 <u>もぐり込め</u> そうなところなら、どこでもかまわないと言わんばかりだ。	在被指定的巢里，一点镇静不下来；口也好，耳朵也好，屁眼也好；假如真有能 <u>钻进去</u> 的地方，真是去哪儿都行，他差一点把这话说出口来。
186	潜りこむ	痴人の愛	ソファの下にもぐり込んだり、椅子を引っ繰り覆したり、まだ足りないで梯子段を駆け上っては、例の栈敷のような屋根裏の廊下を、鼠の如くチョコチョコと往ったり来たりするのです。	或是 <u>钻进</u> 沙发底下，再不然就把椅子翻过来。这还不够，还要跑上楼梯，象老鼠那样匆匆地在那个楼座般的阁楼走廊上来回窜
187	潜りこむ	痴人の愛	どしんと熊谷は地響を立てて、着物のまんま真っ先にもぐり込みました。	熊谷呼地在地上跺了一脚，没脱衣服就径自 <u>钻了进去</u> 。
188	潜りこむ	痴人の愛	これは彼女に珍しいことではないので、退屈すれば昼でも夜でも、時間を構わず布団の中へ <u>もぐり込んで</u> 小説を読み、そのままやすやすと寝入ってしまうのが常でしたから、その罪のない寝顔に接しては、私はいよいよ安心するばかりでした。	这对她来说倒也是常事，一旦觉得无聊寂寞时，便不管白天黑夜，什么时候都可以 <u>钻进</u> 被窝里看小说，经常是看着看着便安祥地入睡了。眼前这张天真无邪的熟睡的脸，使我越发安下心来。
189	持ちこむ	あした来る人	「ほかに入れるところがないんだ。小さくてもいきものだから、おおっぱらには電車に <u>持ち込め</u> ないんだ」	“没别的东西装嘛。小是小，毕竟是活物，不能公开 <u>带进</u> 电车内。”接着又说。
190	持ちこむ	こころ	昔でいうと、儒者の家へ切支丹の臭を持ち込むように、私の持つて帰るものは父とも母とも調和しなかった。	①正如俗话说，把天主教的习气 <u>带进</u> 儒家家庭一般，我带回来的变化都是跟父母格格不入的。
191	持ちこむ	百言百話	個人間の場合だったら有無相通じて結構でもあろうが、この牢固たる習慣が公機関に <u>持ち込まれる</u> と支障を来す。	如果是人与人之间，因为相互间有情份，所以勉强还能凑合着使用。但是，如果将这种根深蒂固的习惯 <u>带进</u> 公家机关去，则会造成麻烦。
192	割りこむ	あした来る人	三沢は大型タクシーを拾って来ると、杏子だけを助手席に乗せ、他の四人を客席に詰め込み、最後に自分もそこに <u>割り込んだ</u> 。	三泽叫来一辆大型出租车，让杏子坐上助手席，又把其他四人塞进后座，最后自己也 <u>挤了进来</u> 。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
193	割りこむ	坊ちゃん	学校の生徒は八百人もあるのだから、体操の教師が隊伍を整えて、一組一組の間を少しずつ明けて、それへ職員が一人か二人ずつ監督として <u>割り込む</u> 仕掛けである。	①学校有八百名学生，体操教师整理好队伍，班与班之间稍留空隙， <u>插</u> 进一两名教员带队。②学校的学生足有八百人，由体操教员整理队伍，在班与班之间，稍微隔开一些，安排一两个教员插进去，进行监督。③学校的学生约有八百人，由体育老师整好队，队与队之间，保持一定的间隔，插进去一两个教职员作为监督。
194	割りこむ	斜陽	また、新客がのっそりはいつて来て、上原さんにちょっと会釈しただけで、一座に <u>割り込む</u> 。	一会儿又有新的客人慢腾腾地走进来，只向上原先生轻轻地点点头，就 <u>挤进</u> 那一伙中间去了。
195	割りこむ	痴人の愛	そこへ熊谷がピンク色の洋服を連れて <u>割り込んで</u> 来ました。	这时，熊谷说着话带着“粉红色洋装” <u>插了进来</u> 。

付録② 「～こむ」を表すく～上>

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
1	押しこむ	青春の蹉跎	幌をかけた護送車に、学生たちが次々と <u>押しこまれる</u> 姿を、江藤は黙って見ていた。	江藤默默地看着学生一个一个被 <u>塞上</u> 带篷的护送车。
2	抱えこむ	ノルウェイの森	一度こんなことやったら延々とこれをやりつづけることになるし、そんな秘密も <u>抱えこんだら</u> 私の頭はまたこんがらがるに決まっているんだもの。	一来这种勾当一旦开头往后势必不断持续下去。而如果 <u>背上</u> 这个秘密包袱，我的脑袋笃定又要四分五裂；
3	着こむ	飼育	それから軀を拭わないでシャツを <u>着こむ</u> と、敷石に濡れた足あとを残しながら倉庫の表口の石段に帰り、また長い時間を、両膝を抱きしめてじっとして暮した。	然后连身子也没擦，就 <u>穿上</u> 衬衫，向仓库前的石阶走去。身后的石板上，留下了一串湿漉漉的脚印。在仓库门口，我久久地抱膝呆坐。
4	差し込む	黒い雨	この人たちは石垣の穴に竹ざれや棒を <u>差しこんで</u> 、板や葎やトタンなどをそれに載せて雨露をしのぐ屋根をつくっている。	这些人们，在崖石洞里， <u>插上</u> 断竹和木棒，为了遮挡露水，上面搭起了木板、草席或马口铁，做成房顶。
5	積みこむ	五体不満足	結局、車椅子が積めるサイズワゴンを借り、後部座席を取り外して車椅子を <u>積み込む</u> ことになった。	最后，我们只好租借了一辆能 <u>装上</u> 轮椅的客货两用车。
6	詰めこむ	あした来る人	克平は背をアルさんに押されて、むりやりに <u>詰め込まれた</u> 格好だった。	克平被乙醇推着脊梁，好不容易挤了上去。
7	積みこむ	坊ちゃん	威勢よく一番に飛び込んだ。	③我打起精神最先 <u>跳上</u> 了舢板。
8	怒鳴りこむ	坊ちゃん	古川が真赤になって <u>怒鳴り込んで</u> 来た。	③这时，古川红着脸 <u>吵上</u> 门来了。
9	飛びこむ	坊ちゃん	赤シャツはいの一号に上等へ <u>飛び込んだ</u> 。	③红衬衫第一个 <u>跳上</u> 了头等车厢。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
10	飛びこむ	坊ちゃん	先生、下等の車室の入口へ立って、何だか躊躇の体であったが、おれの顔を見るや否や思い切って、 <u>飛び込んで</u> しまった。	①这位先生站在普通车厢门口犹豫了一下，看到我便果断地 <u>跳上</u> 了车。
11	飛びこむ	痴人の愛	そして訪ねて行ってみると、マッカネルの方じゃ面白い鳥が <u>飛び込んだ</u> と思って「あなた今晚私の家へ泊りませんか」「ええ、泊っても構わないわ」と云うようなことになったんだろう。	到那儿一看，马卡奈尔也把她当作是一只 <u>飞上</u> 家门的有趣的小鸟，说：“今晚你就住在我家吧”，而纳奥米则会说：“好啊，住就住下。”
12	乗りこむ	坊ちゃん	<u>乗り込んで</u> 見るとマッチ箱の様な汽車だ。	② <u>坐上</u> 火车一看，车厢简陋得跟火柴盒差不多！③ <u>坐上去</u> 一看，火车跟火柴盒一样！
13	乗りこむ	坊ちゃん	赤シャツはいの一号に上等へ飛び込んだ。	③不红衬衫第一个 <u>跳上</u> 了头等车厢。
14	乗りこむ	坊ちゃん	おれはこの時何となく気の毒でたまらなかったから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ <u>乗り込んだ</u> 。	①此时，我对他倍感同情，跟在老秧君的后边，也迅速 <u>登上</u> 了普通车厢。
15	乗りこむ	五体不満足	しかし、ボクの場合は、電動車椅子を操作してエレベーターに <u>乗り込み</u> 、行きたい階のボタンを自分で押して、その階で降りるといい一連の動作が、自分ひとりで可能だ。	我认为这种提示对我毫无用处，我可以操纵我的电动轮椅 <u>乘上</u> 电梯，可以任意按下按钮到我想去的楼层。在做这些动作的时候，我从来也没有感觉有什么不方便。
16	乗りこむ	黒い雨	私は鏡のなかの自分の顔を見ながら、能島さんの誘導で闇船に <u>乗りこんで</u> 、もうそのときには黒い雨の夕立が来ていたことを思い出した。	我看着镜子里自己的脸，想起了能岛先生领着我们 <u>乘上</u> 了黑市船，就在那个时候，下起黑色的骤雨来了。
17	乗りこむ	マッテオ・リッチ伝	死んだデ・ペトリスの後任として韶州へ来ているカゾタネオ神父とシナ人修道士に後事を託すと、リッチはマカオ生まれの若者を連れて急いで石侍郎の一行の数多い船の一艘に <u>乗りこんで</u> 北へ向かった。	他把以后的事情委托给作为石方西的后任来到韶州的郭居静神父和一位中国人修道士，带上一个澳门出生的年轻助手，就匆匆地 <u>踏上</u> 石侍郎船队的一艘船向北进发了。
18	吹きこむ	こころ	私は魂の <u>吹き込まれて</u> いない人形を与えられただけで、満足は出来ないのです	②如果仅仅给我一个没有 <u>附上</u> 灵魂的泥人，那是不能使我满足的。”

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
19	踏みこむ	あした来る人	宿の庭へ回って来て、下から、「おじさん」と呼ぶこともあれば、宿の人たちのすきをうかがって、いきなり二階の曾根の部屋へ <u>踏み込んで</u> 来ることもある。	有时候拐到旅店院子里叫一声“伯伯”，也有时候趁店里的人不在之机径直 <u>跑上</u> 二楼曾根的房间。
20	彫りこむ	金閣寺	私はポケットから、錆びついた鉛筆削りのナイフをとり出し、忍び寄って、その美しい短剣の黒い鞘の裏側に、二三条のみにくい切り傷を <u>彫り込んだ</u> 。……	我迅速从口袋里掏出一把上锈的铅笔刀，悄悄地走近短剑，在它美丽的黑鞘里侧， <u>刻上</u> 两三道深深的伤痕。……

付録③ 「～こむ」を表すく～下>

番号	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
1	押しこむ	心の危機管理術	会社へ行くと、次は昼食。これも無理やり <u>押し込む</u> ように食べた。	到了公司后接下来就是午饭，这也是硬将它 <u>塞下去</u> 的。
2	屈みこむ	死者の奢り	僕は女子学生が <u>屈みこむ</u> ままに任せ、女子学生はハンカチーフに胃液を少し吐いた。	我听凭女学生 <u>弯下</u> 身子，女学生在手绢上吐了一点胃液。
3	切りこむ	坊ちゃん	そんなら君の指を切ってみると注文したから、何だ指位この通りだと右の手の親指の甲をはすに <u>切り込んだ</u> 。	③“这算什么，这么个手指头，你瞧这一刀！”说着就朝右手大拇指盖斜着一刀 <u>切了下去</u> 。
4	差し込む	野火	時たま雨があがって、眩しい陽光が木々のあわいから <u>差し込む</u> 時、兵達は林中に坐って裸となり、衣服を干した。	有时雨住云敛，眩目的阳光透过树梢的间隙 <u>洒下来</u> ，士兵们就光着身子坐在树林里晾衣服。
5	座りこむ	黒い雨	やっと涼しい葉蔭に辿りつけたので、僕らは口もきかないで <u>坐りこんだ</u> 。	好不容易走到了凉爽的竹荫下，所以我们谁也没有说话，就一屁股 <u>坐了下来</u> 。
6	座りこむ	黒い雨	空襲警報で兵營の倉庫から持出した毛布を野積にしてあったので、勝手にそれを一枚とってぐったり <u>坐りこんだ</u> 。	好在空袭警报时从兵营拿出来的毯子堆放在外边，我随便拿过一条，疲惫不堪地一屁股 <u>坐了下来</u> 。
7	座りこむ	飼育	黒人兵は、僕の腕を痛みのために痺れるほど強く握りしめたまま、不意に狙撃されるおそれのない壁の隅に入りこみ黙って <u>坐りこんだ</u> 。	黑人紧箍着我那痛楚得失去了知觉的手，躲到枪打不到的角落里默默 <u>坐下</u> 。
8	座りこむ	飼育	書記は義肢をがちがち鳴らして <u>坐りこむ</u> と上衣から黒人兵が彼に献じたパイプを取り出し、彼の煙草をつめた。	任凭书记把假肢弄得吱吱作响。书记也 <u>坐了下来</u> ，从上衣口袋里掏出黑人奉献的烟斗，填上了烟丝。
9	座りこむ	心の危機管理術	ヘナヘナとその場に <u>坐りこみ</u> たいような気分だった。	当时，我浑身感到软绵绵的，真想一屁股 <u>坐下去不动</u> 了。
10	倒れこむ	野火	溝の岸の、エメラルドに光る草から、横ざまに <u>倒れ込んだ</u> 。	跑到沟边，我一下扑进闪着翠绿色光芒的草丛里， <u>横躺下来</u> 。
11	倒れこむ	砂の女	顔に手拭をかけて、仰向けに <u>倒れ込んだ</u> 。	他把手巾扎在脸上，向后仰着 <u>倒了下去</u> 。

12	飛びこむ	坊ちゃん	威勢よく一番に <u>飛び込んだ</u> 。	①我头一个跃身跳下舢板。
13	飛びこむ	坊ちゃん	やがて湯に入れと云うから、ざぶりと <u>飛び込んで</u> 、すぐ上がった。	①不一会儿来招呼洗澡，我扑通跳下去，很快就上来了。
14	流れこむ	砂の女	襟元から <u>流れこんだ</u> 砂が、シャツとズボンの境で、ごろごろ枕のようになる。	从门襟上 <u>流下</u> 的沙子，在衬衫和长裤的分界线上鼓胀起来，成了个枕头的形状。
15	飲みこむ	あした来る人	そんな悪党ではないよと言おうとしたが、克平はその言葉を <u>飲み込んだ</u> 。	克平本想说自己并非那般薄情，话到嘴边，又 <u>咽了下去</u> 。
16	飲みこむ	砂の女	<u>飲み込む</u> はしから、生唾が、あふれ出した	从 <u>吞下</u> 唾沫的嘴里，唾沫又溢了出来。
17	飲みこむ	斜陽	お咲さんは、つばきを <u>飲み込む</u> ようにしてうなずいて帰って行った。	阿笑象是硬把唾沫 <u>咽下去</u> 那样点了点头便回去了。
18	飲みこむ	坊ちゃん	天麩羅を食って団子を <u>呑み込む</u> のも精神的娛樂だ。	②那么吃上一顿对虾面，吞下几个糯米团子，也是精神娱乐呀。
19	飲みこむ	野火	といって塩を受け取ると、すぐ <u>呑み込んで</u> しまった。	他一边说，一边把盐接在手里，一下就 <u>吞了下去</u> 。
20	飲みこむ	黒い雨	梅の核は外に出したとも覚えなない。そんなに無我夢中で食べた筈ではなかったが、見つからない二つは飯と一緒に <u>呑みこんだら</u> しい。	我并没有把梅干核往外扔过，也没有光顾着往下咽。那两个找不到的梅干，可能是和饭一起 <u>吞下去了</u> 。
21	飲みこむ	ノルウェイの森	彼は殆んど表情を変えずにそれを何度も何度も嚙み、そして <u>呑みこんだ</u> 。	他几乎没改变表情地反复咀嚼不止， <u>吞了下去</u> 。
22	飲みこむ	飼育	僕は籠を運びあげる時、そこに食物のかけらが残っていてもしたら、秘密の快樂におののく指でそれをつかみあげ、 <u>呑みこんで</u> しまっただろう。	如果我撤走食盒时，那里面还有些残羹剩饭的话，我一定会用我那快乐得微微颤抖的手指夹进嘴里， <u>吞咽下去</u> ，
23	引っこむ	破戒	獣皮いじりでもして、神妙に <u>引込んで</u> るのが、丁度あの先生などには適當しているんだ	像那位先生之类的人，最好是乖乖地 <u>隐退下去</u> 摆弄摆弄皮子倒是顶合适的。”
24	引っこむ	破戒	そうだ、あの先生も御説の通りに獣皮いじりでもして、神妙にして <u>引込んで</u> いれば好いのだ。	的确，先生最好像胜野兄说的那样，乖乖 <u>隐退下去</u> 摆弄皮子。

25	引っこむ	友情	大宮は野島を見て気まりわるそうに笑って <u>引込んだ</u> 。	大宮看着野岛，不好意思地笑着 <u>退下来</u> 。
26	放りこむ	砂の女	連中も、いまさら顔出しもならず、道具だけを <u>ほうり込んで</u> 、そのまま逃げだしてしまったのだろう。	那些家伙们到现在也不敢露面，只把工具 <u>扔下来</u> 便溜走了。
27	放りこむ	坊ちゃん	鯉の一匹位義理にだって、かかってくれるだろうと、どぼんと <u>錘と糸を抛り込んで</u> いい加減に指の先であやつっていた。	③我总能钓上个把条的吧。于是，我噔的一下把坠子和钓线抛了下去，用手指随随便便地钩着钓线。
28	舞いこむ	心の危機管理術	たしかに「天に与えられたチャンス」という表現もあり、チャンスは本人とまったく関わりないところから <u>舞い込んで</u> くるように見えるかもしれない。	确实也有“天赐良机”的说法，也许看起来机遇是同本人毫不相关的地方 <u>飘落下来</u> 似的。
29	減りこむ	砂の女	砂地の辛さは、足が <u>めりこむ</u> ことより、踏み切るときの、力の無駄にある。	沙地上的艰辛，比起脚 <u>陷下去</u> 更难受，一脚踩上去，白费力气。

付録④ 「～こむ」を表す＜～到＞

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
1	打ちこむ	心の危機管理術	以後、心身ともに仕事に <u>打ち込む</u> ことができるようになった。	从那以后，无论身心我都毫不迟疑地 <u>投入到</u> 工作中去。
2	打ちこむ	心の危機管理術	“受験を前にして勉強に <u>打ち込め</u> ない学生は、人はみんな楽々と勉強しているのに、オレはどうしてこんなに勉強するのが苦しいのだろうと悩む。	在升学考试之前，没有全身心地 <u>投入到</u> 应考学习中去的学生想：别人都不是那么很费劲地在学习，而我学习为什么那么苦啊！他们觉得非常苦恼。
3	打ちこむ	五体不満足	ただ、アメフト部の名誉のために言っておくと、部活にも一生懸命に <u>打ち込み</u> 、勉強にも身を入れて、いい成績を収めている子もいた。	但是，也有同学做到了两不误。为了俱乐部的荣誉，他们全身心地 <u>投入到</u> 俱乐部的一切活动中，同时又不忘学习，每次定期考试都能取得好成绩。
4	押しこむ	斜陽	お母さまがスープを召し上げる時のスプーンみたいに、お箸をお口と直角にして、まるで小鳥に餌をやるような工合いにお口に <u>押し込み</u> 、…(省略)	象母亲喝汤时操匙子那样，让筷子尖端对着嘴，简直象喂小鸟一样地 <u>塞到</u> 嘴里去。
5	押しこむ	斜陽	私はごはんを <u>押し込み</u> 眼が熱くなった。	我硬把饭 <u>塞到</u> 嘴里，眼睛噙着热泪。
6	落ちこむ	日本経済の飛躍的な発展	1974年の第一次石油危機の時は、経済成長率はマイナス0.2%に <u>落ち込んだ</u> が、物価は石油価格の急上昇により、逆にはね上がった	1974年第一次石油危机的时候，经济增长率曾 <u>跌到</u> 负0.2%，但物价由于石油价格的急升也高涨起来。
7	書きこむ	飼育	僕はレンズの厚い近眼鏡をかけた女吏員が毛皮の枚数を <u>書きこむ</u> のを注意ぶかく監視した。	我丝毫不敢懈怠地监视着鼻梁上架着厚厚近视镜片的女职员把皮子的张数 <u>记到</u> 帐簿上。
8	聞きこむ	斜陽	或る宮様のお住居として、新円五十万円でこの家を、どうこうという話があったのも事実ですが、それは立ち消えになり、その噂でも師匠さんは <u>聞き込んだ</u> のでしょう。	确实有个皇族打算住到这里，曾提出用新日币五十万元买这所房子，后来没有下文了。艺术家大概 <u>听到了</u> 这个传闻吧。
9	差し込む	雪国	部屋は掃除したばかりで、少し古びた畳に秋の朝日が深く <u>差しこんで</u> いた。	①房间刚刚打扫过，秋天的朝阳一直 <u>照射到</u> 有点发旧的铺席上。③房间刚打扫过，秋日的晨曦一直照到半新不旧的席子上。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
10	射し込む	金閣寺	目がさめたとき、皆の置き忘れた私のまわりは、小鳥の囀りにみたされ、朝陽がまともに紅葉の下枝深く射し込んでいた。	醒来时四下一望，众人早已弃我而去。小鸟在枝头啼叫，朝阳真情地照射到红叶深枝下。
11	射し込む	雪国	窓の外には、真赤に熟した柿の実に夕日があたって、その光は自在鍵の竹筒にまで射しこんで来るかと思われた。	①窗外，夕阳洒在熟透了的红柿子上，光线一直照射到吊钩的竹筒上。 ②窗外熟得通红的柿子映在夕阳下，柿子的闪光好象要射到炉灶上吊着的竹管子边上了。③窗外，夕阳照在又红又熟的柿子上，光线一直射到悬在地炉上面吊钩的竹筒上。
12	仕舞いこむ	斜陽	「これだけで、あとをごまかしちゃだめですよ。」おかみさんは、封筒の中を見もせず、それを長火鉢の引出しに仕舞い込んで笑いながら言う。	信封里的东西老板娘看也没看，就把它放到长方形火盆的抽屉里，笑着说：“只这么点，余下的都赖掉可不行啊。”
13	浸み込む	青春の蹉跎	しかし彼女の愛は男の心のなかまでは浸み込むことなく、男の体の外側でから廻りしていたのだ。	但她的爱没有渗透到男人的心中，只及于男人肉体的外表。
14	吸いこむ	黒い雨	気分的に云えば、何か押し倒されでもするようでもあり、地に吸いこまれて行くようでもあり、頭がしびれているようでもあった。	从当时的心情来说，既象是被什么推倒了，又象是被吸到地底下去了，反正我的头脑已经麻木了。
15	住みこむ	マッテオ・リッチ 伝	私が彼の宮殿に住みこむよう直接にも間接にも何度も頼まれました。	有好几次，他直接地或间接地向我表示，要我住到他的宫殿里去。
16	座りこむ	斜陽	お母さまは、溜息をついてくたりと椅子に <u>坐り込んで</u> おしまいになって、「そうでしょう？卵を捜しているのですよ。可哀そうに。」と沈んだ声でおっしゃった。	母亲叹了一口气，就精疲力竭地 <u>坐到</u> 椅子上，用沉郁的声调说：“是吗？”它在寻找蛇蛋啊。怪可怜的。”
17	座りこむ	雁の寺	里子は慈念の傍に <u>坐りこんだ</u> 。	里子 <u>坐到</u> 慈念身旁。
18	注ぎこむ	痴人の愛	「仕事の方へみんなお金を <u>注ぎ込ん</u> じまっちゃイヤだわよ、あたしに贅沢をさせるお金を、別にして置いてくれなけりゃ。いい？」	“我可不愿意把所有的钱都 <u>投到</u> 事业上啊，一定要把让我享受的钱另外放好，行不行？”

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
19	注ぎこむ	日本経済の飛躍的な発展	日本人は安くて良い商品をつくるのに成功したのは良かったが、その後は株式と土地の値上がりに期待して、資金をどんどんこの二つに <u>つぎ込んだ</u> 。	日本在生产物美价廉的商品方面获得了成功，这是件大好事。但是，成功后的日本人期待股票和土地涨价，把资金大量地 <u>投入到</u> 股票和土地上。
20	突っこむ	痴人の愛	そうして出来上った品物は、気に入らなければ押入れの奥へ <u>突っ込んだ</u> まままるで着ないし、気に入ったとなると膝が抜けるまで着殺してしまう。	这样做出来的衣服，如果不中她的意，便 <u>仍到</u> 壁柜里根本就不穿。如果中她的意，她便一直穿下去，直到膝盖处破了为止。
21	突っこむ	痴人の愛	その匂とはつまり彼女の肌の臭で、不精な彼女は汚れ物などを洗濯もせずに、丸めて <u>突っ込んで</u> 置くものですから、それが今では風通しの悪い室内に籠ってしまっているのです。	这种气息就是她的体臭。她懒怠洗脏衣物，便把它们卷成一团 <u>塞到</u> 什么地方，现在这气味更充满了这间通风不好的屋子。
22	突っこむ	五体不満足	机の上に並べられた洗面器のなかに顔を <u>突っ込み</u> 、何秒間、耐えられるかを競うゲームなどをした。	各班选手快速跃上桌旁的矮凳，然后把脸 <u>浸到</u> 洗脸盆的水中，谁浸在水中时间最长，谁就获胜。
23	突っこむ	飼育	鍛冶屋がその炭の粉に汚れた掌で、赤く熱した鉄片を掴みあげ水に <u>突っこむ</u> と、黒人兵は悲鳴のような感嘆の声をあげ、子供らはそれをはやしたてた。	当铁匠用他那沾满煤灰的手抓起暗红色的铁片 <u>插到</u> 水里时，黑人总要发出近似于悲鸣的赞叹声，引得孩子们一阵哄笑。
24	包みこむ	五体不満足	今回の手術は、前回とは異なるものだった。背中の筋肉を切り取り、手の先端部分を <u>包み込む</u> ような形で移植をするという。	这次的手术与上一次不同，要先从我的背上取一块肌肉，然后再 <u>包到</u> 残臂的断面上，是肌肉移植手术。
25	積みこむ	痴人の愛	自分でとっとと俵を呼んで <u>積み込みました</u> 。	自己很快叫来了人力车，把行车 <u>堆到</u> 车上。
26	連れこむ	こころ	奥さんは私に対する御礼に何か御馳走すると云って、木原店という寄席のある狭い横丁へ私を <u>連れ込みました</u> 。	②太太说为了谢谢我，要请我吃些东西，把我 <u>帶到</u> 一条有‘木原店’说书场的狭小的横街上。
27	溶けこむ	砂の女	生活の単純な反復のなかに <u>融けこめば</u> 、いつかは彼等の意識から、消えさることも不可能ではないだろう。	如果融化到生活的单纯反复之中，那么，什么时候他也可以从村里人的意识里消失，这并非没有可能。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
28	飛びこむ	坊ちゃん	おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革靴を提げたまま、清や帰ったよと <u>飛び込んだら</u> 、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙をぼたぼたと落した。	①我到东京后没有去找寓所，提着皮包 <u>闯到她那里</u> 去了：“阿清，我回来啦！”“哎呀，哥儿，太好了，这样快就回来啦！”她说，眼汨扑簌扑簌落下来。
29	飛びこむ	友情	野島は黙っていたが、自分で元気をつけて、海に飛び込んだ。	野島默默地打起精神，下到海里。
30	流しこむ	斜陽	スウプをお唇のあいだに <u>流し込む</u> のである。	就这样把汤全 <u>倒到</u> 嘴里去。
31	流しこむ	斜陽	スプウンの尖端からお口に <u>流し込む</u> ようにしていただいたほうが、不思議なくらいにおいしいものだ。	从匙子尖端把汤 <u>倒进</u> 嘴里，这比低着头从匙子边喝，味道要好得恐怕叫人难以相信。
32	流しこむ	斜陽	そんなふざけ切ったリズムでもってはずみをつけて、無理にお酒を喉に <u>流し込んで</u> いる様子であった。	他们象是用这种戏谑的节奏制造气氛，硬把酒 <u>灌到</u> 喉咙里去。
33	流しこむ	黒い雨	大火傷をしてふらふら歩いたり坐りこんだりしている被爆者に口を明けさせて、水をこぼさないように <u>流しこむ</u> 。	让那些被大火烧伤在蹒跚行走或席地而坐的被炸者张开嘴，一点不洒地把水 <u>灌到</u> 嘴里去。
34	流しこむ	黒い雨	そのなかに卵を二つか三つ入れまして、そんなのを口のなかに <u>流しこむ</u> ようにしていました。	再在里面打上两三个鸡蛋，把这种东西 <u>流到</u> 病人的嘴里去。
35	流しこむ	砂の女	しかし、あとは、かまわず、そのまま水と一緒に胃のなかに <u>流しこむ</u> 。	可是后来，他也不管三七二十一，把沙团和水一起 <u>咽到了</u> 胃里。
36	流れこむ	坊ちゃん	線香の烟の様な雲が、透き徹る底の上を静かに伸して行っと思ったら、いつしか底の奥に <u>流れ込んで</u> 、うすくもやを掛けた様になった。	香烟一般的浮云在澄澈的空中缓缓流动，静静地 <u>飘散到</u> 深邃的天际，化成了一缕缕迷离的轻雾。
37	流れこむ	痴人の愛	会食が済み、デザート・コースの挨拶が終り、みんながぞろぞろ食堂から喫煙室へ <u>流れ込んで</u> 、食後のリキウルを飲みながらガヤガヤ雑談を始めた時分、もう帰っても好かろうと思って立ち上ると、	我参加欢送会只不过是照例走走形式敷衍一下，所以待聚餐结束，吃过饭后水果，大家陆续从饭厅 <u>转移到</u> 吸烟室，开始喝着饮料，热热闹闹聊天的时候，我站起身心想，这下好回家了吧。
38	流れこむ	砂の女	汗が眼に <u>流れこむ</u>	汗水 <u>流到</u> 眼里

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
39	投げこむ	坊ちゃん	六尋位じゃ鯛はむずかしいかと、赤シャツは糸を海へ <u>なげ込んだ</u> 。	①“三丈多深是不容易钓鲷鱼的。”红衬衫边说边把钓丝 <u>放到</u> 海里。 ②“红衬衫”一边说着“只有六寻，不太容易钓上鲷鱼来啊”，一边将钓线 <u>抛到</u> 海里。
40	逃げこむ	痴人の愛	「あら」と云いながら、両手で裸体の肩を隠して隣の部屋へ <u>逃げ込んだり</u> 、	她“哎呀”叫一声，用两手捂着赤裸的肩膀 <u>跑到</u> 隔壁房间，
41	逃げこむ	雪国	雉や兎が、人家のなかへ <u>逃げ込んで</u> 来るわ。	①那种时候，野鸡和兔子都 <u>逃到</u> 人家家里哩。③那时，山鸡啦，野兔啦，全逃到人家家里来。
42	捻じこむ	五体不満足	ボクは、「ノー、ノー！」と首を横に振ったが、彼女はボクのポケットにお札を <u>ねじ込む</u> と、そのまま走って行ってしまった。あっという間の出来事だった。	我连连摇头：“NO!NO!”她不由分说，把钱 <u>硬塞到</u> 我的口袋里，回转身匆匆离去。这一切发生在一刹那间，直到她的身影消失在远处的人群里，我还没有回过神来。
43	入りこむ	坊ちゃん	おれは様子が分らないから、博物の教師と漢学の教師の間へ <u>這入り込んだ</u> 。	②俺不懂应该怎么坐，便 <u>钻到</u> 博物教员和汉文教员中间坐下了。③我不了解这些规矩， <u>挤到</u> 博物教员和汉学教员之间。
44	入りこむ	越前竹人形	仲人があるというわけではなし、ただ、喜助が一人暮らしをしているところに、玉枝が飄然と荷物をもって <u>入りこんで</u> きたというにすぎない。	他俩没有中间介绍人，无非是玉枝带着行李一下子 <u>飞到</u> 过着独身生活的喜助身边而已。
45	入りこむ	飼育	黒人兵は、僕の腕を痛みのために痺れるほど強く握りしめたまま、不意に狙撃されるおそれのない壁の隅に <u>入りこみ</u> 黙って坐りこんだ。	黑人紧箍着我那痛楚得失去了知觉的手， <u>躲到</u> 枪打不到的角落里默默坐下。
46	入りこむ	砂の女	このまま行ったら、まっすぐ部落のなかに <u>入りこんで</u> しまう……	这样走下去，要笔直 <u>走到</u> 村落里面去喽……
47	運びこむ	ノルウェイの森	おまけに僕は恋をしていて、その恋はひどくややこしい場所に僕を <u>運びこんで</u> いた。	更何况我正怀着恋情，而那恋情又把我 <u>带到</u> 一处纷纭而微妙的境地。
48	運びこむ	死者の奢り	「あの時計は誰のためだろう。この部屋に <u>運びこまれる</u> 死体のためだとしか考えられないな」	“那个钟是为谁装的呢，看来只能认为是为 <u>搬运到</u> 这个房间里来的尸体而装的啊。”

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
49	運びこむ	死者の奢り	「私たちが、新しい水槽へ <u>運びこんだ</u> り、番号札をつけたりしたのは、すっかり、むだな訳ね」	“我们把他们 <u>搬到</u> 新的水池里，又系上号码，全都是徒劳的了。”
50	引っこむ	高野聖	娘の情で内と一所に膳を並べて食事をさせると、沢庵の切をくわえて隅の方へ <u>引込む</u> いじらしさ。	“姑娘可怜他，叫他和家里人一道吃饭，他就叨一片腌萝卜， <u>缩到</u> 角落里去，真叫人爱怜。”
51	引っこむ	黒い雨	その枝をゆさぶると蓑のなかへ <u>引込んで</u> 、	我把树枝摇了摇，它就 <u>缩到</u> 蓑衣壳里去了。
52	引っこむ	痴人の愛	それと云うのが、田舎へ <u>引込む</u> か、断然東京に踏み止まるか、その決心がつきませんから、私は未だに下宿住まいをするのでもなく、ガランとした大森の家に独りで寝泊りをしていたのです。	尽管如此，到底是 <u>回到</u> 乡下去，还是坚决留在东京，却下不了决心。因此，至今我还没有找地方寄宿，而是一个人住在空空荡荡的大森的房子里。
53	吹きこむ	こころ	事実を蒸溜して拵らえた理論などをKの耳に <u>吹き込む</u> よりも、原の形そのままを彼の眼の前に露出した方が、私にはたしかに利益だったでしょう。	②所以与其把事实蒸馏以后所造成的理论 <u>灌输到</u> K耳朵中去，不如就原来的形状展露在他眼前，对我要有利吧。
54	放りこむ	黒い雨	荷物を川のなかへ <u>放りこんで</u> やろうかと思った。	我曾想把东西 <u>扔到</u> 河里去。
55	放りこむ	ノルウェイの森	みんな洗濯物をどんどんベッドの下に <u>放りこんで</u> おくし、定期的に布団を干す人間なんていないから布団はたつぷりと汗を吸いこんで救いがたい匂いを放っている。	大家全都把要洗的东西 <u>塞到</u> 床下。没有一个人定期晾晒被褥，于是那被褥算是彻底吸足了汗水，释放出不可救药的气味。我现在还感到不可思议：在那般混浊状态中居然没有发生致命的传染病。
56	放りこむ	あした来る人	曾根は、壕詰の酒を、それについて来たガラスの小さいコップにあげて、それをぐびりと、口の中に <u>ほうりこむ</u> ような特徴のある飲み方で飲みだした。	曾根把瓶里的酒倒进送来的小玻璃杯内。“咕嘟”一声，活象要把整个酒杯 <u>吞到</u> 嘴里似地大喝起来，这是他别有风格的饮酒方式。
57	放りこむ	坊ちゃん	この辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ <u>抛り込んで</u> しまった。	①这张委任书在我回东京时，揉成一团 <u>扔到</u> 大海里了。②这张委任状，在俺回东京的时候，让俺把它搓成团， <u>抛到</u> 大海里去了。
58	持ちこむ	あした来る人	「僕の見るところでは、彼は、いかなる難題を持ち込まれても、断るということはないと思うんです。それで今日の地位を勝ちえていますな」	“依我看，即使天大的难题 <u>端到</u> 他面前，他也不至于拒绝。所以才获得了今天的地位。”

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
59	持ちこむ	坊ちゃん	古川の持っている田圃の井戸を埋めて尻を <u>持ち込まれた</u> 事もある。	①还有一次，我把古川田里的水井填了，惹得人家直 <u>闹到</u> 家里。②还有一次，俺将古川家地里的水井管给堵上了，让人家 <u>吵到</u> 俺家里来。
60	持ちこむ	五体不満足	ボクらは、それをプールサイドに <u>持ち込み</u> 、「彫刻」を始めた。	第二天我们就把它 <u>抬到</u> 游泳池边，开始“雕刻”。
61	割りこむ	痴人の愛	さてその中に <u>割り込んで</u> 見ると、私はとにかく、ナオミの身なりがいかにも見すばらしく思えたものでした。	<u>混到</u> 她们的行列中一看，我自己倒无所谓，而纳奥米那身打扮就显得太寒酸了。

付録⑤ 「～こむ」を表すく～在/着/有>

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
1	押しこむ	野火	永松はじっと私を見ていたが、雑嚢から黒い煎餅のようなものを出し、黙って私の口に <u>押し込んだ</u> 。	永松凝视着我。从背包里拿出些黑色的饼干似的東西，默默地 <u>塞</u> 在我嘴里。
2	屈みこむ	青春の蹉跎	三百人の青年たちが息を殺し、ほとんど物音も立てず、机に <u>かがみ込んで</u> 、必死に答案を書いていた。	三百个青年都屏柱呼吸，一点声音也不出， <u>趴在</u> 桌上拚命地写答案
3	差し込む	こころ	手の放せない私は、すぐ封を切る訳に行かないので、一寸それを懷に差し込んだ。	①因为分不开手，不能马上启封，便把它先 <u>揣</u> 在怀里了。②我脱不开手，当然不可能立刻把它拆开，只好暂时 <u>塞</u> 在怀里。
4	差し込む	こころ	洋燈の光がKの机から斜にぼんやりと私の室に <u>差し込みました</u> 。	①一束油灯光从K的桌上朦朧朧地 <u>斜射</u> 在我的房间中。
5	吸いこむ	ノルウェイの森	まるで夕暮の影のようにそれはどんどん長くなる。そしておそらくやがては夕闇の中に <u>吸いこまれて</u> しまうことになるのだろう。	它延长得那样迅速，竟同夕阳下的阴影一般，并将很快 <u>消融</u> 在冥冥夜色之中。
6	座りこむ	こころ	私はKが室へ引き上げたあとを追ひ懸けて、彼の机の傍に <u>坐り込みました</u> 。	①我紧跟在K后回到屋里， <u>坐</u> 在他的桌旁，
7	座りこむ	黒い雨	声を限りに叫んでいる男、悲鳴をあげながら走る女や子供、苦痛を訴える者、道ばたに <u>坐りこんで</u> 、空に向けて差出した両手を無闇に振っている男。	还有竭力嘶叫的男人以及一边尖叫一边走的女人和小孩。有的男人， <u>坐在</u> 路边，两手向空中乱挥。
8	座りこむ	飼育	弟は寝台の上に <u>坐りこんで</u> 、眼を光らせていた。	弟弟 <u>坐在</u> 床上，两眼放着光。
9	座りこむ	日本列島改造論	「青空の下の広い野原に連れ出したが、子供はもじもじするばかりで、ついには青草の上に <u>坐りこんで</u> トランプをはじめたという話もある」	“听说将孩子带到蓝色天空笼罩下的广阔原野，孩子们稀罕得不知如何是好，终于一屁股 <u>坐在</u> 碧绿的草地上打起扑克来了。”
10	注ぎこむ	雁の寺	たしかに里子がきてから、慈海は、二十代のような精力を里子に <u>注ぎこんだ</u> といえたが、…。	话倒是真的。自从里子来了之后，慈海象二十来岁似的，把全付精力 <u>倾注</u> 在里子身上。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
11	畳みこむ	こころ	自分と切り離された他人の事実でなくて、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりする程の事実が、 <u>畳み込まれている</u> らしかった。	①那不是同自己无关的别人的事情，而是他的切身感受，是令人血灼脉息的事实，仿佛 <u>深深藏在他</u> 内心里。
12	畳みこむ	こころ	凡ての疑惑、煩悶、懊悩、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸のなかに <u>畳み込んで</u> いるのではなかろうかと疑ぐり始めたのです。	①他不是把所有的疑虑、苦闷和懊恼都当作孤注一掷的最后手段， <u>掩藏在心里</u> 了么？
13	突っこむ	痴人の愛	せめて彼女を偲ぶよすがに、長い間埃にまみれて <u>突っ込んで</u> あったその帳面を、本箱の底から引き摺り出して順々にページをはぐって見ました。	便从书箱底下抽出那本老早 <u>塞在那里</u> 并沾满灰尘的册子，一页页地翻着看，多少寄托一下对她的思念之情。
14	突っこむ	心の危機管理術	ズボンのポケットに両手を <u>突っ込み</u> 、前屈みの浪人生たちが憂うつな顔で門をくぐるというのが平均的イメージだろう。	他们在一般人眼里是这样的吧——两手 <u>斜插在</u> 裤兜里、身子略向前弓的落榜学生，面带忧郁的神色走进校门。
15	突っこむ	飼育	「樅の林に <u>突っこんで</u> ばらばらだよ」と兎口が眼を光らせて早口にいった。	“ <u>掉在</u> 枞树林里，都成碎片了。” 豁唇儿眼里闪着光。
16	突っこむ	死者の奢り	顔を溶液に <u>突っこんで</u> 背と尻とを空気にさらしている…(省略)	脸 <u>浸在</u> 溶液里而脊背和屁股却露在外面…
17	溶けこむ	黒い雨	ひどい霧だから庭のケンボナシの梢が夜空に <u>溶けこんで</u> いるように見えた。	由于雾大，院子里玄圃梨的树梢看起来好象 <u>融化在</u> 夜空中。
18	投げこむ	こころ	私はそれを十行ばかり書いて已めた。書いた所は寸々に引き裂いて屑籠へ <u>投げ込んだ</u> 。	①拿起笔只写了十来行便放下，把信纸撕成碎片， <u>扔在</u> 纸篓里。
19	投げこむ	こころ	私は突然立って帯を締め直して、袂の中へ先生の手紙を <u>投げ込んだ</u> 。	①蓦地站起身，重新系好腰带，把先生的信 <u>装在</u> 袖子里，
20	寝こむ	破戒	という言葉を残して置いて奥様が出て行った後、丑松は机の側に <u>倒れて</u> 考えていたが、何時の間にかぐっすり寝込んで了った	师母留下这么句话走了。丑松随身 <u>倒在</u> 书桌旁的铺席上，又在想什么，不知不觉就睡熟了。
21	放りこむ	こころ	その男は耻かしがって色々弁解しましたが、折角の胴着を行李の底へ <u>放り込んで</u> 利用しないのです。	①他害羞地作了许多辩解，把特意寄来的小袄 <u>塞在</u> 行李底下不穿了。

NO.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
22	放りこむ	砂の女	女は、しばって、家の中に <u>ほうり込んで</u> ある！助けたけりゃ、早くこの綱をあげろ！	女人嘛，捆起来了， <u>扔在</u> 屋里呢！要救她，就赶快把这绳子拉上去！
23	紛れこむ	黒い雨	僕はそれを駅まで見送った。見受けるところ、人を待つでもなく、切符を買うでもなく、ただ待合室に <u>まぎれ込んで</u> 来ているらしい人がたくさんいた。	我去车站送他们，在车站上看到有很多人，光是 <u>挤在</u> 候车室里，既不等人，也不买票。
24	減りこむ	砂の女	のしかかって、その顔のなかに、かためた拳を、交互に <u>めりこませる</u> 。	女人压上来，坚硬的拳头交替 <u>砸</u> 在男人的脸上。
25	書きこむ	あした来る人	しかし、出発前のスケジュールをぎっしりと <u>書き込んだ</u> 克平の日記帳の中で、一晩だけが空白にされていた。	尽管如此，克平那满满 <u>排列着</u> 出发前日程安排的手册中，还是留出一晚空闲时间。
26	書きこむ	五体不満足	入会した初日。「ハイ、これ」と、英語がビッシリ <u>書き込まれて</u> いる冊子を手渡された。…。	加入俱乐部的第一天，一位高年级同学送给我一本小册子，小册子里密密麻麻 <u>印着</u> 大段大段的英语。
27	書きこむ	死者の奢り	階段を降りきるとコンクリートの廊下が低い天井の下を幾たびも折れて続き、その突きあたりのドアに死体処理室と <u>書きこんだ</u> 黒い木札がつりさげてあった。	走下了台阶，又在天棚低矮的走廊里接连拐了几个弯。走廊尽头的一个门上挂着一块 <u>写着</u> “尸体处理室”的黑色的木牌。
28	書きこむ	死者の奢り	入口のドアとそれに接した壁にある隣室へのドアには内側から木札がかかってい、それには赤い正確な活字体で、立入禁止、禁煙と <u>書きこまれて</u> いた。	挨着入口的门旁侧的一个房间的门里面挂着木牌，上面用红色的端正的字体 <u>写着</u> “禁止入内”、“禁止吸烟”的字样。
29	差し込む	死者の奢り	ドアの鍵穴に大きい鍵を <u>差しこんだ</u> まま、管理人は振りかえって僕と女子学生を検討するようにつめた。	门的暗锁孔上 <u>插着</u> 一把大钥匙，管理人回过头来像是审查我和女学生似的看了看。
30	放りこむ	砂の女	小銭を <u>ほうり込んだ</u> ままの、通勤着のポケット……	兜里 <u>揣着</u> 零钱的上班工作服……
31	彫りこむ	斜陽	石の門の上に、金文字でほそく、HOTELSWITZERLANDと <u>彫り込まれて</u> いた。	石门上 <u>刻有</u> 一排纤细的金色文字：HOTELSWITZERLAND。

付録⑥ 「～こむ」の副詞的意味と中国語表現

No.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
1	老いこむ	こころ	まあ早く云えば <u>老い込んだ</u> のです	①说得早些便是 <u>衰老</u> 了吧。②说得直截了当些，我是在衰老了。
2	老いこむ	こころ	私は先生を <u>老い込んだ</u> とも思わない代りに、偉いとも感心せずに帰った。	①我虽不认为先生 <u>衰老</u> ，可也不赞成他了不起，便起身告辞。②我并不觉得先生已经开始衰老，可也并不佩服先生怎么伟大，回到了住所。
3	老いこむ	破戒	ああ、人間も我輩のように <u>老込んで</u> 了っては駄目だねえ	唉，人到了我这种 <u>老朽</u> 之年，就不中用啦！
4	老いこむ	破戒	いや、我輩なぞが <u>老込む</u> 筈だよ、君等がずんずん進歩するんだもの。	呀，难怪像我这样的人已经 <u>老朽</u> 了，你们是不断地进步
5	思いこむ	坊ちゃん	清はおれを以て将来立身出世して立派なものになると <u>思い込んで</u> いた。	①阿清 <u>一味认定</u> 我将来会成为了不起的大人物。②清婆早就 <u>认定</u> 俺将来一定会大富大贵，成为一个大人物。③阿清婆 <u>一心认定</u> 我将来会飞黄腾达，成为一个了不起的人物。
6	思いこむ	こころ	どんな人があっても私程先生を幸福にできるものはないとまで <u>思い込んで</u> いますわ。	①可是我 <u>深信</u> ，现在只有我能地使先生幸福。②我还深信，任何人不会象我这样地能够使先生幸福。
7	思いこむ	こころ	「…自分が好いと <u>思い込んだら</u> 、中々私のいう事なんか、聞きそうにもなさらないんだからね」	①“… <u>老以为自己</u> 好了。我说的话，他连听也不听哪。”②什么事如果他自己 <u>认定</u> 是好的，我说的话就真个成了耳边风啦。
8	思いこむ	痴人の愛	よしや自信と云う程でなく、単なる己惚れであってもいいから、「自分は賢い」「自分は美人だ」と <u>思い込む</u> ことが、結局その女を美人にさせる。	纵使达不到自信的程度，仅仅是自满也不错， <u>认定</u> “自己聪明”、“自己是美人儿”，结果会使那个女人成为美人的。
9	思いこむ	百言百話	当方から人に何か物を遣る、それも善意でプレゼントするのである以上、相手は素直に喜ぶのが当たり前であろうと、 <u>思い込んで</u> かかるのも無理はあるまい。	当自己给别人东西时，只要是出于善意，总会 <u>理所当然地认为</u> 对方应该很高兴的。

No.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
10	思いこむ	百言百話	何が何だかわからない、自分のことばかり考えている、そして本に書いてあることはみんな自分と関係があると <u>思い込む</u> 、関係妄想の少女たち。	也有什么都不明白，只考虑自己，而且 <u>总以为</u> 书上写的都与自己有关，患有关系妄想症的少女；
11	思いこむ	心の危機管理術	「自分の胃腸は弱い」と <u>思い込んだ</u> 私は三度の食事を二度に減らし、胃腸を守ることに努めた。	我深知自己的肠胃不好，所以尽力将一日三餐减为两餐，以保护好自己的肠胃。
12	思いこむ	心の危機管理術	最も疲れているのも彼らだから、ほんとうは休みたいのだが、休まないことが管理職の一員としてあるべき姿と <u>思い込んで</u> いる。	按理说，他们是公司中最劳累的，是真想休息休息的，但他们 <u>深信</u> ：作为负责管理的一员，理应不休息，这才是管理人员应有的形象。）
13	思いこむ	心の危機管理術	「管理職かくあるべし」と <u>思い込み</u> 、ムリをするわけである。	他们 <u>认定</u> ：“管理人员理应如此”这一信念，因而虽有些力不从心，也还要尽力做好。
14	思いこむ	心の危機管理術	この人は「オレは仕事ができる」と <u>思い込んで</u> いるが、上司や周囲の評価は違っているわけである。	这个人 <u>深信</u> “我在工作上干得不错”，然而上司和周围的人对他的评价与本人相异。
15	思いこむ	心の危機管理術	この人たちの内面をさぐっていくと、自分の目つきが悪くて相手に不快感を与えているのではないか、あるいは、自分の言葉に田舎の訛りがあり、相手にバカにされているのではないか、などと <u>思い込んで</u> いる場合が多い。	若再探究一下这些人的内心世界，我们就会发现他们往往 <u>深信</u> ：自己的眼神有些凶样，是否会对方带来不快？抑或自己话里带有乡下口音，生怕因此遭到对方的嘲笑，等等。
16	思いこむ	心の危機管理術	自分のことは自分が一番よくわかっていると <u>思い込んで</u> いた。	当时，我 <u>深信</u> 自己是最了解自己的。
17	思いこむ	心の危機管理術	自分自身ネクラだと思っている人は、自分の性格を変えることなどできないと <u>思い込んで</u> いる場合が多い。	事实上 <u>自认为</u> 属于本性阴郁、固执的人大多深信自己的性格很难改变。
18	思いこむ	心の危機管理術	自分にはこんなに人に劣る点がある、だから自分はダメなんだ、と <u>思い込む</u> 。	<u>总觉得</u> 自己在这方面远不如别人，便以为自己不行，毫无出息。

No.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
19	思いこむ	心の危機管理術	それはさておき、神経質タイプの性格の人は、なにかと自分の欠点を拡大解釈して悲観したり、心気症から事実でないものを <u>事実と思い込んで</u> 、ひとりで悩み続ける人が多い。	暂且不说这些，值得注意的是：大多具有神经质类型性格的人，或对自己的缺点作种种夸大的解释，从而为之不胜悲观；或由于疑病症所致，将不属实的事情 <u>认定为事实</u> ，独自为之烦恼不已。
20	思いこむ	心の危機管理術	人に会うと顔がひきつって相手に不愉快な印象を与える（と <u>思い込む</u> ）。	他们的症状，如见人便绷着脸，给人以不愉快的感觉（他们认定是这样）；
21	思いこむ	心の危機管理術	本人だけがそのように <u>思い込み</u> 、信じているのである。	只是他们自己才这样认为的，甚至 <u>深信无疑</u> 。
22	思いこむ	ノルウェイの森	まあ当然といえば当然のことだが、僕に恋人ができたものとみんな <u>思いこんでいたのだ</u> 。	说理所当然也属理所当然，大家都 <u>确信</u> 我有个恋人。
23	思いこむ	ノルウェイの森	寮の連中はいつも一人で本を読んでいるので僕が作家になりたがっているんだと <u>思いこんで</u> いるようだったが、僕はべつに作家になんてなりたとは思わなかった。何にもなりたとは思わなかった。	宿舍那伙人见我总是一个人看书，便 <u>认定</u> 我想当作家。其实我并不特别想当作家，什么都不想当。
24	思いこむ	ノルウェイの森	僕はずっと螢というのはそういう鮮かな燃えたつような光を放つものと <u>思いこんでいたのだ</u> 。	于是我 <u>一向以为</u> 萤火虫发出的必然是那种灿然的、燃烧般的光芒。
25	思いこむ	砂の女	どうやら、ほとんどの女が、股一つひらくにしても、メロドラマの額縁の中でなければ、自分の値段を相手に認めさせられないと、 <u>思いこんで</u> いるらしい。	几乎所有女人，即使胯下稍微打开一点，若不是在爱情故事的框子里，自己的价值得不到对方的承认，她就要 <u>想入非非</u> 了。
26	思いこむ	心の危機管理術	昇進昇格組は問題ない。そこから外れた人たち、ことに自分では昇進まちがいなしと <u>思いこんでいた</u> 人が問題である。	得到晋级、升格的这些人自然非常高兴，而问题出在那些没有得到晋级的，特别是 <u>确信</u> 自己定能晋级的人的身上。
27	思いこむ	マッテオ・リッチ 伝	彼らがはじめてインドへ着いた頃は、ヒンズー教寺院の中で崇められている対象は、処女マリヤだと <u>思いこんだ</u> したほどである。	他们刚来到印度时，甚至 <u>深信</u> 印度教寺院中供奉的对象是处女玛丽亚。
28	思いこむ	マッテオ・リッチ 伝	官吏が横暴である。自分たちが習った学問だけが正しいと <u>思いこんで</u> いて忠恕的に排外的である。	官员横暴不驯， <u>自以为是</u> ，思想排外。

No.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
29	思いこむ	マッテオ・リッチ 伝	それよりも興味ふかい点は、マドンナの絵姿を掲げておくと、人がこの派の神さまは女性であると <u>思いこむ</u> ので、キリストの像にとりかえたなどという条である。	而更加引人注目的是这样一条记述：担心人们看到玛丽亚的画像时，会 <u>误认为</u> 这一派的神是女性，则换成基督像。
30	刈りこむ	金閣寺	俺たちが突如として残酷になるのは、たとえばこんなうらかな春の午後、よく <u>刈り込まれた</u> 芝生の上に、木洩れ陽の戯れているのをぼんやり眺めているときのような、そういう瞬間だと思わないかね。	那令人突然残酷起来的，也许正是这样的時候，在这种春和日丽的午后，坐在 <u>修剪齐整的</u> 草坪上，呆呆地望着叶隙间投下的斑斓日影……不正是这种瞬间吗？……
31	刈りこむ	金閣寺	うらかな春の午後も、よく <u>刈り込まれた</u> 芝生もここにはなかった。	这里既没有小阳春的下午，也没有 <u>平剪一新</u> 的草坪。
32	考えこむ	あした来る人	その重厚さは「むつつりや」と解釈され、思慮の深い点は「変に <u>考え込む</u> 人」ぐらいに片づけられそうである。	其老成稳重势必被解释为“不爱吭声”；其深思熟虑也难免被她当成“ <u>死不开窍</u> ”。
33	考えこむ	あした来る人	八千代はちょっとの間、口をつぐんで <u>考え込んで</u> いたが、	八千代 <u>沉吟</u> 片刻。
34	考えこむ	あした来る人	克平はまた言って、なおもじっと <u>考え込んで</u> いた。	克平说完，继续闷头 <u>沉思</u> 。
35	考えこむ	坊ちゃん	帰ってうんと <u>考え込んだ</u> 。	①回来后我便 <u>陷入了沉思</u> 。②回来以后，俺可就 <u>深思</u> 起来了。③回到寓所，我 <u>陷入了沉思</u> 。
36	考えこむ	坊ちゃん	そのうちで手持無沙汰に下を向いて <u>考え込んで</u> るのはうらなり君ばかりである。	①只有老秧君一个人闲着无事可做，一直望着地面 <u>沉思</u> 。②其中，只有“老秧”君一个人在低头寻思，感到不知怎样奉陪才好。③其中，只有冬瓜脸君一个人显得无聊，低着头在 <u>沉思</u> 。
37	考えこむ	破戒	あの時の君の <u>考え込んで</u> いる様子と言ったら——僕は暫時そこに突立って、君の後姿を見送って、何とも言い様の無い心地がしたねえ。	。我看见你心事重重的样子，我一时呆呆地站在那里望着你的背影，心里真有说不出的难受。
38	考えこむ	破戒	僕だっても、美しい思想だとは思いうさ。しかし、君のように、そう <u>考え込んで</u> 了っても困る。	我也认为这种思想很高尚，可是像你这样 <u>入了迷</u> 就麻烦啦。

No.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
39	考えこむ	破戒	一体瀬川君は近頃非常に <u>考え込んで</u> おられるようだが、何が原因でああ憂鬱に成ったんでしょう。	近来瀬川君好像特别 <u>消沉</u> ，究竟是什么原因使他这样忧心忡忡呢？
40	考えこむ	破戒	「私は長く交際って見て、瀬川君が種々に変って来た径路を多少知っていますから、どうしてああ <u>考え込んで</u> いるか、どうしてああ憂鬱に成っているか、それはもうあの君の為ることを見ると、自然と私の胸には感じる事が有るんです」	“我和瀬川兄交往的时间不算短了，多少知道他种种变化的过程，为什么他那样 <u>消沉</u> ？为什么他那样忧郁？我一看他的行动，心里就自然有个谱。”
41	考えこむ	破戒	何故瀬川君はああ <u>考え込んで</u> いるんだろう。	为什么瀬川君那样 <u>消沉</u> 呢？
42	考えこむ	こころ	ことに陛下の御病氣以後父は凝と <u>考え込んで</u> いるように見えた。	①特别是天皇陛下染病以后，父亲仿佛深深地 <u>陷入了沉思</u> 。②尤其是在天皇陛下御体违和以后，父亲呆呆地好象是在 <u>沉思</u> 着什么。
43	考えこむ	こころ	私は状差へ貴方の手紙を差したなり、依然として腕組をして <u>考え込んで</u> いました。	我把你的信收在信夹里。依然抱臂 <u>沉思</u> 。②我把你的信往信插里一插，依然盘着胳膊 <u>沉思</u> 。
44	考えこむ	こころ	私も凝と <u>考え込んで</u> いました。	①我也呆呆地 <u>沉思</u> 起来。② 我也呆呆地深入思考。
45	考えこむ	心の危機管理術	それを <u>考え込む</u> とよけいストレスがひどくなりそうだ。	倘若就此问题 <u>反复思索</u> ，又会使精神紧张的状态变得更加严重。
46	考えこむ	あした来る人	八千代は、便箋にむかったまま、鉛筆を停めて、また暫く <u>考えこんで</u> いた。	八千代面对信箋，停笔 <u>沉思</u> 良久。
47	考えこむ	越前竹人形	喜助はじっと <u>考えこんで</u> いた。	喜助一声不响地 <u>沉思</u> 着。
48	考えこむ	ノルウェイの森	僕は歩き疲れていささかぐったりとしていたし、彼女はテーブルの上に両手を置いてまた何かを <u>考えこんで</u> いた	我走得累了，有点打不起精神；她两手放在桌面上 <u>沉思</u> 什么。
49	考えこむ	ノルウェイの森	彼らは妙に <u>考えこ</u> みながら熱心にボールのやりとりをしていた。	他们一边神情肃然地 <u>冥思苦索</u> 着什么，一边执着地往来击球。
50	考えこむ	ノルウェイの森	緑はしばらくそれについて真剣な顔つきで <u>考えこんで</u> いた。	绿子认真地 <u>沉思</u> 良久。

No.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
51	考えこむ	ノルウェイの森	「上野駅……」と言って緑は <u>考えこんだ</u> 。	“上野车站……” 绿子 <u>沉思</u> 着。
52	考えこむ	飼育	両手に握んだ馬鈴薯を幸福な獣のように満足して食べながら弟は <u>考えこんで</u> いった。「兵隊は樅の木に登ってるのかな。僕は、樅の枝に栗鼠がいるのを見たよ」	弟弟像一头幸福的野兽，两手捧着马铃薯，一面满意地咀嚼，一面 <u>若有所思</u> 地说：“外国兵会不会爬到树上去？我见过松鼠上树。”
53	考えこむ	飼育	土間に立ったまま書記は黙りこんでい、僕らを見無視した部落長は板間にあぐらをかいて考えこんでいるのだ。	书记站在屋里一言不发，村长盘腿坐在里面的房间里，低头 <u>沉思</u> 着，看也不看我们一眼。
54	考えこむ	死者の奢り	管理人は黙りこみ、眼をふせて <u>考えこんで</u> いた。	管理人沉默不语，耷拉着眼皮 <u>思考</u> 着。
55	考えこむ	百言百話	信治郎はしばらく <u>考えこんで</u> いたが、やがて低い声で、自分はこれまでサントリーに命を賭けてきた。	信治郎 <u>沉思</u> 片刻后低声说道，乞今为此，自己把一切都赌在了三得利上，你是想赌在啤酒上了。
56	仕舞いこむ	ノルウェイの森	僕はそんなやるせない気持ちをどこに持っていくことも、どこに <u>しまいこむ</u> こともできなかった。	这种莫可名状的心绪，我既不能将其排遣于外，又不能将其 <u>深藏</u> 于内。
57	食いこむ	こころ	初冬の寒さと侘びしとが、私の身体に <u>食い込む</u> ような感じがしました。	②这时，我感到初冬の寒冷和寂寞好象沁透我的肌体。
58	しみこむ	青春の蹉跎	貧しさが肉にしみこみ、骨にまで <u>しみ込んで</u> いるような気がする。	这贫困似乎已经 <u>渗透</u> 了自己的血肉以至自己的骨髓。
59	しみこむ	青春の蹉跎	貧しさが肉に <u>しみこみ</u> 、骨にまでしみ込んでいるような気がする。	这贫困似乎已经 <u>渗透</u> 了自己的血肉以至自己的骨髓。
60	信じこむ	金閣寺	それまでの私はといえば、吃りであることを無視されることは、それがそのまま、私という存在を抹殺されることだ、と奇妙に <u>信じ込んで</u> いたのだから。	而过去我却一直抱一种奇怪的想法， <u>深信</u> 我与口吃是不可分的，故而无视我的口吃，就等于抹杀了我的存在。
61	信じこむ	砂の女	他人を、黒板の上のチョークの跡のように、きれいに拭い去ってしまえと <u>信じ込んで</u> いる世界……	这是个 <u>自以为</u> 可以把他人象擦掉黑板上的粉笔灰似地抹得不留痕迹的世界……

No.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
62	信じこむ	ひとりっ子の上 手な育て方	ある目、なにかをきっかけ、として突然期待に沿えなくなったと自覚すると、もうかわいがってもらえないと <u>信じ込み</u> 、爆発してしまうのです。	假如某天，由于某事突然意识到自己的行动无法满足大人的期待时，就会 <u>误认为</u> 从今以后再也得不到母亲的疼爱。
63	信じこむ	ひとりっ子の上 手な育て方	子どもは、自分はお母さんのいうようにほんとうにだめだと <u>信じ込ん</u> <u>で</u> 、誇りを失い、おとなを信用しなくなり、積極的になんかにつつかつて、いけない子に育ちます。	孩子则会 <u>误认为</u> 自己就是象母亲所说的那样什么都不行，因而失去信心，不相信大人，变得消极起来。
64	信じこむ	五体不満足	給食の話まで出たのだ。てっきり、入学できるものと <u>信じ込んで</u> いた。	校长已经谈到了入学后能不能吃面包，一般说来，入学的事已 <u>十拿九稳</u> ，
65	座りこむ	こころ	父が凝と <u>坐り込む</u> ようになると、やはり元の方が達者だったのだという気が起った。	②父亲呆呆地坐着不走了，我又觉得他毕竟还是原来那样，比较硬朗。
66	座りこむ	こころ	私はKが室へ引き上げたあとを追い懸けて、彼の机の傍に <u>坐り込み</u> ました。	②K回房间时，我追上了他，在他书桌旁边 <u>坐了很久</u> 。
67	畳みこむ	こころ	凡ての疑惑、煩悶、懊悩、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸のなかに畳み込んでいるのではなかろうかと疑ぐり始めたのです。	②我开始疑心，在他胸中也许深藏着一个把所有疑惑、烦闷、懊悩一次解决的最后手段吧。
68	座りこむ	野火	病院へ帰れ。入れてくんなかったら、幾日でも <u>坐り込む</u> んだよ。	回医院去，他们不收留你，你就在那儿 <u>死缠</u> 几天，
69	座りこむ	野火	いくら「 <u>坐り込ん</u> 」でも病院が食糧を持たない患者を入れてくれるはずはなかった。	其实不论你如何“ <u>死缠</u> ”，医院也不会收留没带口粮的患者。
70	座りこむ	野火	あそこに「 <u>坐り込ん</u> 」でいる人達に会うためである。	只是为了见见在那儿“ <u>死缠</u> ”的其他人。
71	座りこむ	野火	動けない、或いは動こうと欲しない者、つまり「 <u>坐り込ん</u> 」でいる者等は、病院から谷間を少し奥へ入った、林の縁にころがっていた。彼等の数は次第に増えて行った。	不能动或是不想动的人，即所谓“ <u>死缠</u> ”的人，都躺倒在从医院到刚刚进入山谷的树林边。他们的数量正在逐渐增加。

No.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
72	座りこむ	黒い雨	横川鉄橋のたもとのところまで辿りつくつと、二千人あまりの避難者が草の堤に <u>坐りこん</u> でいた。	好不容易才走到了横川铁桥旁边。两千多难民 <u>坐在</u> 长草的堤岸上 <u>不走了</u> 。
73	座りこむ	黒い雨	僕は急に力が抜けて、地面に <u>坐りこん</u> でしまった。	我一屁股 <u>坐在</u> 地上， <u>不走</u> 啦！
74	座りこむ	心の危機管理術	ヘナヘナとその場に <u>坐りこ</u> みたいような気分だった。	当时，我浑身感到软绵绵的，真想一屁股 <u>坐下去不动</u> 了。
75	抱きこむ	破戒	あんな立派なことを言っているにしても、畢竟猪子という人を <u>抱きこん</u> で、道具に使用という腹に相違ないんです。	尽管他说的那么漂亮。实际上可以肯定他是打算 <u>死抱着</u> 猪子当枪使。
76	畳みこむ	こころ	自分と切り離された他人の事実でなくって、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脉が止まったりする程の事実が、 <u>畳み込ま</u> れてるらしかった。	①那不是同自己无关的别人的事情，而是他的切身感受，是令人血灼脉息的事实，仿佛 <u>深深藏</u> 在他内心里。
77	頼みこむ	あした来る人	多少非難の気持を含めて言った。実際にこっちから <u>頼み込</u> んでおいて藤川渡三に悪いと思った。	话里边多少含有责难语气。她觉得对不住藤川雄三，自己 <u>再三拜托</u> 人家。
78	頼みこむ	あした来る人	「強引に <u>頼み込</u> めばすぐにも集まりますが、できるだけは、強要も懇請もしないことにしているんです」	“要是 <u>死乞白赖</u> ，马上就可凑齐。不过还是不那么做的好。”
79	頼みこむ	痴人の愛	などをくどくど <u>頼み込</u> んで、…。	于是我唠唠叨叨地 <u>再三拜托</u> 他们：…。
80	黙りこむ	雪国	女の心はそんなにまで来ているのかと、島村はしばらく <u>黙り込</u> んだ。	①她对自己的感情竟发展到这个了吗？岛村 <u>沉思</u> 了好一阵子。②这个女人的感情已经发展到了这种地步吗？这使岛村暂时默默地沉思了。
81	積みこむ	あした来る人	船には、この地方の人らしい船客がおびたしい荷物と一緒に <u>積み込</u> ま <u>れて</u> いた。	船上， <u>挤满</u> 了本地人模样的乘客以及他们携带的一堆堆货物。
82	詰めこむ	心の危機管理術	スケジュールを <u>詰め込</u> んで安心する。	不把日程 <u>排得满满的</u> ，心里总感到不安。
83	寝こむ	金閣寺	とうとう発熱して私は <u>寝込</u> んだ。	我终于发起烧，整日 <u>昏迷不醒</u> 。

No.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
84	寝こむ	斜陽	私は五年前に、肺病という事になって、 <u>寝込んだ</u> 事があったけれども、あれは、わがまま病だったという事を私は知っている。	五年前我生过肺病， <u>长期卧床</u> ，但我知道那只是一种富贵病。
85	寝こむ	斜陽	私が病気になって <u>寝込んで</u> しまった時も、また、直治が悪い事をした時も、お母さまは、決してこんなお弱い態度をお見せになりはしなかった。	我卧病在床 <u>起不来</u> 的时候，或者直治干了坏事的时候，母亲都没有露出过这种示弱的态度。
86	寝こむ	斜陽	それから、赤ちゃんが死んで生まれて、私は病気になって <u>寝込んで</u> 、もう、山本との間は、それっきりになってしまったのだ。	后来我生了死胎，接着又生病 <u>卧床</u> ，从此我跟山本的关系便完全断绝了。
87	寝こむ	痴人の愛	ナオミは一体、その肌の色が日によって黄色く見えたり白く見えたりするのですが、ぐっすり <u>寝込んで</u> いる時や起きたばかりの時などは、いつも非常に冴えていました。	总的来说，纳奥米的皮肤有时看来发黄，有时看来显白。但是当她 <u>熟睡</u> 时，或是刚刚醒来时，肤色总是非常清亮，变得很洁净
88	覗きこむ	飼育	子供らの塊りの中から、草の茎を歯の間に噛みしめた兎口が僕の方へ駆けあがって来、鹿の足に似た櫓の幹によりかかって僕の顔を <u>覗きこんだ</u> 。	豁唇儿嘴里嚼着草茎，从孩子群里朝我跑过来，他靠在鹿角般的树干上， <u>死死地</u> 盯着我的脸。
89	乗りこむ	激動の百年史	また、アメリカが敵地に <u>乗り込む</u> ようなつもりで、嚴重、酷烈な占領計画を立てて日本に進駐したところが、懸念されたような不穏な状態はまったくおこらなかったのも、同じような日本人の態度のためであった。	此外，美国出于 <u>深入</u> 敌国领土的打算，制订了严厉苛刻的占领计划，然后进驻日本，但并未出现令人担心的骚乱状态。这也是因为日本人承认战败的缘故。
90	話しこむ	あした来る人	メインテーブルでも半分の人たちが立ち上がっていたが、曾根と三門けい子の二人は、周囲のことなどには全く無関心な風に、席にすわって <u>話し込んで</u> いた。	主宾席席上都已有一半人起身了。而曾根和三門敬子两人仍在座位上 <u>说得津津有味</u> ，全然不把周围的变化放在眼里。
91	話しこむ	あした来る人	例の幅のある低音がそう言っている。八千代は応接間にはいったが、父と客が熱心に <u>話し込んで</u> いるので、入口に立ったまま、二人の話の切れるのを待っていた。	梶大助以他那深厚的男低音说道。八千代走进客厅。因父亲和客人正 <u>谈在兴头上</u> ，只好站在门旁，等候两人谈话告一段落。

No.	「～こむ」	出典	日本語	中国語訳
92	話しこむ	こころ	時たま御嬢さん一人で、用があつて私の室へ這入った序に、其所に坐つて <u>話し込む</u> ような場合もその内に出て来ました。	②偶尔小姐独自有事到我房间里来，顺便坐着 <u>谈得入了神</u> 。
93	話しこむ	五体不満足	とても興味深い内容で、しばらく <u>話し込んで</u> いるうちに、すっかりオジサンに対する恐怖は消え去っていた。	他 <u>兴致勃勃地讲</u> ，我认真听。慢慢地，我觉得他那貌似凶悍的外表下有一颗常人的心。我对他的恐怖完全消失了。
94	話しこむ	破戒	夕飯の後、まだ宿直室に <u>話しこんで</u> 、例の愚痴の多い性質から、生先長い二人に笑われているうちに、壁の上の時計は八時打ち、九時打った。	饭饭后，他们又在值班室里 <u>高谈阔论</u> 起来，敬之进那爱发牢骚的性格，使这两个前途远大的年轻人笑声不止。说着说着，墙上的时钟敲过八点，又响了九点。
95	話しこむ	破戒	裏庭に近い方を行けば、是非とも下座敷の側を通らなければならない。其処には文平が <u>話しこんで</u> いるのだ。	如果走靠后院的走廊，就必须经过客厅，可文平正在那里 <u>修谈</u> 。
96	話しこむ	破戒	その日は午後の一時半頃から、自分の用事で学校へ出て来ていて、丁度職員室で <u>話しこんで</u> いる最中、不図丑松のことを耳に入れた。	那天下午一点半左右，他有事来到学校，正好在教员办公室 <u>谈得起劲</u> 的时候，突然听到了丑松公开了出身的事。
97	めかしこむ	痴人の愛	九時頃になった時分、今日は稽古に行く日でもないのに彼女はひどく <u>めかし込んで</u> 出て来ましたが、停車場の方へは行かないで、反対の方へ、足を早めてさっさと歩いて行くのでした。	九点左右时，她 <u>打扮得漂漂亮亮</u> 的出来了，虽说那天并不是上学的日子。她没有去车站，而是匆匆地朝相反的方向走去。

付録⑦ 書名の中日対訳リスト

No.	日本語	中国語	No.	日本語	中国語
1	あした来る人	情系明天	16	砂の女	砂女
2	坊っちゃん	哥儿	17	斜陽	斜阳
3	越前竹人形	越前竹偶	18	痴人の愛	痴人之爱
4	布団	棉被	19	友情	友情
5	雁の寺	雁寺	20	雪国	雪国
6	破戒	破戒	21	日本戦後名詩百家集	日本战后名诗百家集
7	金閣寺	金阁寺	22	百言百話	百言百话
8	こころ	心	23	ひとりっ子の上手な育て方	独生子女优育法
9	高野聖	高野圣僧	24	激動の百年史	激荡的百年史
10	黒い雨	黑雨	25	日本經濟の飛躍的な發展	日本经济的腾飞
11	野火	野火	26	心の危機管理術	顺应自然的生存哲学
12	ノルウェイの森	挪威的森林	27	マッテオ・リッチ伝	利玛窦传
13	青春の蹉跌	青春的蹉跌	28	日本列島改造論	日本列岛改造论
14	飼育	饲养	29	五体不満足	五体不满足
15	死者の奢り	死者的奢华			